

宝島

宝島

スティーブンソン Stevenson Robert Louis

青空文庫

買うのを躊躇する人に

もしも船ふなのり乗調子の船乗物語や、

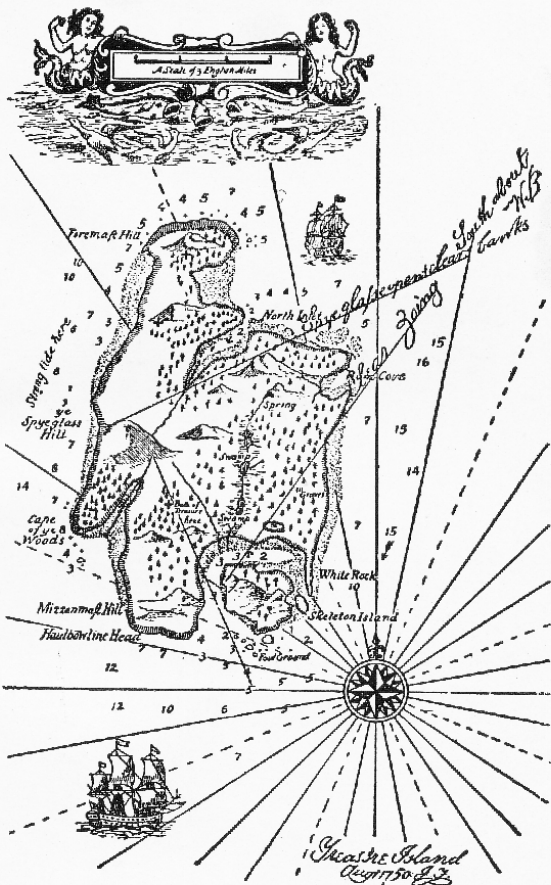
暴風雨あらしや冒険、暑さ寒さが、

もしもスクーナー船や、島々や、

置去り人おきざりや海賊や埋められた黄金おうごんや、

さてはまた昔の風のままに再び語られた

あらゆる古いロマンスが、



Gwen-Gabre I. F. to M. 2. 4. Bones Mast. 8 3/4. Water
 Savannah this twenty July 1754 W. B.

Facsimile of Chart, latitude and
 longitude struck out by J. Hawkins.

私^{わたし}をかつて喜ばせたように、より賢い

今日^{こんにち}の少年たちを喜ばせることが出来るなら、

——それならよろしい、すぐ始め給え！　もしそうでなく、

もし勉強好きな青年たちが、

昔の嗜好を忘れてしまい、

キングストンや、勇者バランタインや、

森と波とのクーパー（註一）を、もはや欲しないなら、

それもまたよろしい！　それなら私と私の海賊どもは、

それらの人や彼等の創造物^{よこたわ}の横る

墳墓の中に仲間入りせんことを！

第一篇 老海賊

第一章 「アドミラル・ベンボー提督屋」へ来た老水夫

大地主のトウリローニーさんや、医師のリヴジー先生や、その他の方々かたがたが、私に、宝島についての顛末を、初めから終りまで、ただまだ掘り出してない宝もあることだから島の方位だけは秘して、すっかり書き留めてくれと言われるので、私は、キリスト紀元一七——年に筆を起し、私の父が「アドミラル・ベンボー提督屋（註二）」という宿屋をやっていて、あのサーベル傷のある日に焦やけた老水

夫が、初めて私たちの家^{うち}に泊りこんだ時まで、溯^{さかのぼ}ることにする。

私は、彼が、船員衣類箱（註三）を後から手押車^{ておしぐるま}で運ばせながら、宿屋の戸口のところへのそりのそりと歩いて来た時のことを、まるで昨日^{きのう}のここのように覚えている。背の高い、巖乗な、どっしりした、栗色の男だった。タールまみれの弁髪がよごれた青い上衣の肩に垂れていた（註四）。手は荒れて傷痕だらけで、黒い挫けた爪をしていた。そしてサーベル傷が片頬にきたなく蒼白くついていた。私はまた覚えている。彼は入江を見し、そうしながらひとりで口笛を吹いていたが、それから突然、その後もたびたび歌ったあの古い船唄を歌い出したのだった。――

「死人箱しびとのはこにやあ十五人――

よいこらさあ、それからラムが一ひと罎びんと！（註五）」

キャプスタンてこ揚錨絞盤の梃てこを

すのに調子を合せて歌つしゃが囀うならしたらしい、

高い、老いぼれたよぼよぼの声だった。それから彼は持っていた

木挺ぼうぎれのような棒片ドアで扉をこつこつと叩き、私の父が出ると、ぶ

つきらばうにラム酒を一杯注文した。それを持ってゆくと、彼は、

酒の品評家のように、ちびりちびりと味いながらゆつくり飲み、

その間も、あたりの断崖を見　　したり店の看板を見上げたりして

いた。

「これあ便利な入江だ。」とようやく彼は言い出した。「この酒

屋も気の利いた処ところにあるな。客は多いかね、大將てえしやう？」

父は、いや、残念ながら客はごく少くてどうも、と彼に言った。

「うむ、そうか、」と彼は言った。「じゃあ己おれにや持つて来いの

泊り場所だ。おいおい、お前めえ、」と手押車を押して来た男に呼び

かけて、「ここへ車をつけて己の箱をおろしてくんねえ。己はし

ばらくここに泊ることにするぜ。」と言いつ続けた。「己ああつさ

りした男でな。ラムと卵ベーコン・アンド・エッグスかけ塩漬豚肉さえあれいいんだ。

そしてあそこのあの岬を通る船を見張つてるのさ。己を何と言つ

たらいいって？ 船長と言つて貰もらえてえ。おお、なるほど、あれ

か、——そうれ。」と彼は三枚か四枚の金貨を闊しきいのところへ投げ

出した。「そいつがすっかりなくなったら、そう言つて来い。」

と司令官のようにいかめに厳しい顔をして言った。

そして、実際、衣服こそ粗末でもものの言い方もぞんざいではあったけれども、彼には平水夫ひらすいふらしいところは少しもなく、平生人をこき使ったりぶん殴ったりし慣れている副船長か船長のよう
に思われた。手押車を押して来た男の話によれば、彼はその日の朝「ロイアル・ジョージジョージ王屋」のところで駆遣馬車（註六）を降り、海岸沿いにどんな宿屋があるかと尋ねて、私の家が多分評判がよく、また一軒離れていると聞かされたのであろう、他のところよりも私の家を滞在処に択んだのだという。そしてこの客人について私たちの知り得たことはそれだけだった。

彼はいつもごく無口むくちな男であつた。昼は一日中、真鍮の望遠鏡

を持って、入江の周りや、または断崖の上をうろついていた。晩はずっと談話室パーラーの隅の炉火のそばに腰掛けて、あまり水を割らない強いラムを飲んでいた。話しかけられても大抵は口を利かなかった。ただ不意におそろしい顔をして見上げ、霧笛のように鼻を鳴らすだけだった。で、私たちも家うちのあたりへ来る人々も間もなく彼を相手にしないようになった。毎日、彼は、ぶらぶら歩きから帰って来ると、だれか船ふなのり乗が街道を通って行かなかったかと尋ねるのが常であつた。初めのうちは、私たちは、彼がこういう質問をするのは自分と同じ仲間がほしいからだと思っていた。が、彼には、彼がそういう連中を避けたがっているのだということがわかりかけて来た。海員が「ベンボー提督屋」に泊ると（折々海

岸伝いにブリストル（註七）へ行く者が泊ることがあったのだ）、彼はカーテンをつけてある入口からその男を覗いて見てから、談話室へ入るのであった。そしてだれでもそういう人のいる時には、彼はいつでも必ず小鼠のようにこっそりしていた。少くとも私だけには、この事柄は不思議ではなかった。というのは、私は幾分彼と懼れを共にする者であつたからである。彼は或る日私を脇へつれて行き、もし「一本脚の船乗を油断なく」見張っていて、見えたらすぐに知らせてくれさえしたら、毎月の一日に四ペンス銀貨を一枚ずつやると約束したのだ。月の一日が　　って来て、私が自分の報酬を請求すると、彼はただ私に向つて鼻を鳴らして、私をじっと睨みつけることが、たびたびあつた。が、その週の終ら

ないうちに必ず考え直して、その四ペンスの銀貨を持って来てくれ、「一本脚の船乗」に気をつけておれという例の命令を繰返した。

その人物がどんなに私の夢を悩ませたかは、言うまでもないくらいである。嵐の夜々、風が家全体を揺り動かし、激浪が入江や断崖に轟きわたる時には、その男がいろいろの姿で、またいろいろの悪魔のような形相をして現れるのであった。時には脚が膝のところ^{もも}で切れており、時には股^{もも}のつけ根から切れていた。また時には、もともとその一本脚しかなくて、それが胴体の真中についているという怪物であることもあった。その男が生垣^{いけがき}や溝を跳び越えてぴよんぴよん跳びながら私を追っかけて来るのは、中で

も一番怖い悪夢であつた。で、結局、私は毎月四ペンスの金^{かね}を貰うためにこんな忌わしい妄想に悩まされて、かなり割が合わない訳だつた。

しかし、私はその一本脚の船乗のことを思うとそんなに脅かされはしたけれども、船長その人には彼を知っている他のだれよりもずっと怖^{こわ}くはなかつた。彼は頭がもたないほどのたくさんのラムを飲む晩もあつたが、そういう時には、時としては、坐りこんで例のいやな古い奇怪な船唄を歌い、だれをも念頭に置かなかつた。が「時には、みんなにぐるりと杯をゆきわたらせて、ぶるぶるしている一座の者すべてに、無理に自分の話を傾聴させたり、自分の歌う後をつけて合唱させたりすることもあつた。「よいこ

らさあ、それからラムが一ひとびん罌びんと」で家が家鳴りやなするのを、私はたびたび聞いたことがある。近所の人々は皆びくびくしながら一所懸命に歌う仲間入りをし、目をつけられないようにと銘々が互に競って大声を出して歌ったのだ。なぜなら、こういう発作の時には彼はこの上なく高飛車に出たからで、みんなに黙れと言つてテーブルを手でぴしやりと打つ。何か尋ねるとかつと癩癩を起したり、時には何も尋ねないからと言つて、一座の者が自分の話を聞いていないのだときめこんで、怒つたりする。そして、自分が眠くなるまで飲んで寢床へよろめきこむまでは、だれ一人も宿屋を立去らせようとしなかったのであつた。

彼の話は中でも最も人々を怖がらせたものであつた。それは実

に恐しい話だった。首絞め^{くびし}や、板歩かせ（註八）や、海上の暴風^{あら}雨^しや、ドウライ・トーテューガズ（註九）や、スペイン海（註一〇）での乱暴な所業やその土地土地などの話だった。彼自身の手で言うところから察すれば、彼はかつて海上を航海した最も邪悪な人間どもの間で過して来た者に相違ない。そして彼がこういう話をする時の言葉遣いは、彼の語った罪悪とほとんど同じくらいに、樸訥な私たちの田舎の人々をぞつとさせたのであった。父は、これでは宿屋も潰^{どな}されてしまうだろう、やたらにいじめつけられ、口を利けば呶^{どな}鳴りつけて黙らされ、震えながら寢床へやらされるのでは、間もなくだれもここへ来なくなるだろうから、といつも言いい言いいしていた。しかし、私は、彼が泊りに来たことは私たちが

のためになったと、ほんとうに信じている。人々もその当時は怖がっていたが、しかし振り返ってみると彼のいたことをむしろ好いていたのだ。それは平穩無事な田舎の生活には素敵な刺激だった。そして、若い人たちの中には、彼のことを「まことの船乗」だとか、「ほんとの老練な水夫」だとか、その他そういうような名で呼び、イギリスが海上で覇をなしたのはああいう類たぐいの人がいたればこそだと言って、彼に敬服するような顔をする連中さえもいたのである。

一方から言えば、実際、彼は私たちの家を潰しそうにも思われた。というのは、彼は幾週も幾週も、そうしてついには幾月も幾月も滞在し続けたので、前の金はみんなとつくに使い尽したのだ

が、それでも父にはどうしてもまた勘定を頂きたいと言ひ張るだけの勇氣が出なかつたのである。もしいつでもそれをちよつと口に出したところで、船長は唸ると言つてもいいくらいに大きく鼻息を鳴らして、可哀そうな父を睨みつけて部屋から追い出してしまふのだつた。そんなのにはねつけられた後に父が両手を揉み絞つて（註一一）いるのを私は見たことがある。そして、そんな苦悩や恐怖の中に日を送つたことがきつと父の不幸な若死^{わかじに}をよほど早めたのに違ひないと思う。

船長は、私たちのところにいた間に、靴下を数足行商人から買った他^{ほか}には、身につけるものを何一つ変えたことがなかつた。帽子の縁^{ふち}の上^{うわぞり}反が一箇処垂れると、彼はその日以来それをぶら下

げておき、風の吹く時などずいぶんうるさいにも拘らず、そのままにしていた。私は彼の上衣の有様も覚えていたが、彼は二階の自分の部屋でそれに綴布つぎをあて、死ぬ前にはそれはまったく綴布だらけだった。彼は手紙を一度も書くこともなければ受取ることもなく、近所の人たち以外にはだれとも口を利いたこともなく、その人たちと口を利くのも大概はラムに酔った時だけだった。例の大きな船員衣類箱は私たちの中のだれ一人も開けてあるのを見た者はかつてなかった。

彼は一度だけ逆さわれたことがあった。それはもう彼の末期に近い頃で、私の父が死病に罹つて病勢がよほど進んでいる時のことだった。リヴジー先生が或る日の午後遅く父を診みに来て、母の出

1

「死人箱にやあ十五人——

よいこらさあ、それからラムが一ひとびん罫と！

残りの奴は酒と悪魔が片かたづ附けた——

よいこらさあ、それからラムが一罫と！」

初め私は「死人箱しびとのほこ」というのは二階の表側の室にある彼のあ

の大きな箱のことだと思っていて、それが私の悪夢の中では例の一本脚の船乗のこととこんがらかっていたものだ。しかしこの時分には私たちは皆とつくにその唄に特別の注意を払わなくなっていた。で、それは、その晩、だれにも珍しくはなかったのだが、リヴジー先生だけには初めてで、先生にはあまりよい感じを

起させなかったのを私は見て取った。というのは、先生はいかに腹を立てた顔でちよつとの間見上げたからで、それから植木屋のテラー爺さんにリユーマチスの新療法についての話を続けた。とかくしているうちに、船長は自分の歌でだんだんと元気づいて来て、とうとう前のテーブルを手でぴしやりと敲いた。黙れ——という意味であることを私たちみんなが知っているやり方だった。みんなの話し声はぴたりと止んだが、リヴジー先生の声だけは別であつた。彼は、はつきりと穩かにしゃべり、言葉の合間合間にパイプをぱつぱつと吸いながら、前の通りに話し続けた。船長はしばらくの間彼を睨みつけ、それからもう一度手でぴしやりと敲いて、さらに強く睨み、とうとうひどい野卑な罵り言葉を吐き出

した。「おい、黙れ、野郎ども！」

「君は私にわたし言っているのかね？」と医師が言つた。そしてその悪党が、また罵り言葉で、そうだと言うと、「私はたつたこと一事君に言つておくことがあるがね、」と医師は答えた。「それは、もし君が相変らずラムを飲み続けていると、この世から間もなくごく下劣なならず者が一人消え失せるだろうということだ！」

老人めの激怒は恐いものだった。彼は跳び立って、水夫用の摺込ナイフをひき出して刃を開き、それを掌にのせて振り動かしながら、医師を壁に突き刺してやると脅しつけた。

医師は身動きさえもしなかった。前の通りに肩越しに振り向いて、同じ調子の声で、彼に話しかけた。室中の者に聞えるように

と幾らか高くはあつたが、しかしまったく落着き払ったしつかりした声だった。――

「そのナイフをすぐさまポケットにしまわぬと、私は名誉にかけてお前をきつと次の巡回裁判で絞首しめくびにしてやるぞ。」

それから二人の間に睨み合いが始まった。が、船長の方が間もなく降参し、武器を収めて、負けた犬のようにぶつぶつ言いながら、再び自分の席に坐った。

「ところでね、」と医師は続けて言った。「私の区にそういう奴がいるとわかつたからには、私はこれからしよっちゅうお前に気をつけているから、そのつもりでいるがいい。私は医者だけじゃない。治安判事もやっているのだ。で、お前に対するちよつとし

た告訴でも握ったが最後、それがただ今夜のような無作法のためであつたにしろ、お前をひつ捕えさせてここから追つ払わせることにしてやるからな。これだけ言っておく。」

それから間もなくリヴジ―先生の馬が戸口のところへ来たので、先生はそれに乗って帰って行つた。が、船長は、その晩も、またそれから後の幾晩も、黙っておとなしくしていたのであつた。

第二章

ブラック・ドッグ
黒 犬 現れて去る

この後遠からず、私たちにとうとう船長を厄介払いしてくれたあの不可思議な出来事の最初の事件が起つたのである。もつとも、

その出来事というのは、だんだんとわかる通り、船長に関することをすっかり厄介払いしたという訳ではないのであるが。その冬はひどく寒くて、永い間^{きび}厳しい霜^おが降り、烈しい風が吹いた。そして、可哀そうな父が春まで持ち越しそうにもないことは、初めからよくわかっていた。父は毎日に衰弱してゆき、母と私とは宿屋のことを何から何まで切り　　していて、ずっととても忙しくて、例の厭な客人には大して構わずにいた。

一月の或る朝、ごく早い頃のことであつた。――刺すような酷寒の朝で、――入江は一面に霜で真白になつており、漣^{さざなみ}は静かに磯の石ころを洗い、太陽はまだ低くて、丘^{いただき}の頂に射し、遠く海の方を照しているだけだつた。船長はいつもより早く起きて、浜を

下って行つた。古びた青色の上衣の広い裾の下に彎刀カトラス（註一三）をぶら下げ、小脇に真鍮の望遠鏡を抱え、帽子を阿弥陀にかぶつていた。私は覚えているが、彼がおおまた大勝に歩いてゆくにつれてその後彼の息が煙のように残っていた。そして彼が大きな岩角を

つた時に私の聞いた最後の音は、怒つたような大きな荒い鼻息で、それはちょうど心ではまだリヴジー先生のことを思っているかのようにだった。

さて、母は二階に父と一緒にいた。私は船長の歸つて来た時の用意に朝食の支度をしていたが、その時談話室パラー ドアの扉が開いて、それまでに私の一度も見たことのない男が入つて来た。蒼白い色の男で、左手の指が二本なかった。彎刀を身につけてはいるけれど

も、あまり強そうには見えなかった。私はいつも船乗なら、一本脚でも二本脚でも、よく気をつけていたのだが、この男には頭を悩ましたのを覚えている。水夫らしくもないが、しかしまたどことなく海臭いところがあつたのだ。

何の御用ですかと尋ねると、彼はラムをくれと言った。しかし、私がそれを取りに室から出かけると、彼はテーブルの上に腰を下して、私にそばへ来いと手招きした。私は手にナプキンを持ったまま立ち止った。

「坊やこつちへ来な。」と彼は言った。「もつとこつちへ来な。」私は一步近づいた。

「この食事は己の仲間^{おれ}のビルのかい？」と彼はちよつと横目をし

て尋ねた。

私は、あんたの仲間のビルという人は知らない、これは家うちに泊っている、私たちが船長と言っている人のだ、と言つてやつた。

「なるほど、」と彼は言つた。「己の仲間のビルのことなら船長と言われもするだろうな。あいつは片頬きりきずに切傷がある。そしてなかなか面おも白しろえとこがあるよ、ことに酔つ払うとだ、ビルの奴はね。まあ証拠として申し上げようかな。その船長という男にや片頬に切傷がある、——そしてお望みとあれば言うが、それゝ右の頬だ。ああ、それ御覧、言いあてたろう。ところで、己の仲間のビルはこの家うちにいるかね？」

私はその人は散歩に出ていると言つた。

「どっちの方だ、坊や？ どっちの方へ行っているんだい？」

で、私が例の岩を指し、あの方から帰って来そうで、もう間もなく帰るだろうと言い、その他二三の問に答えると、その男は言った。「ああ、ビルの奴にや己に逢うなあ飲むのと同じくれえ嬉しいだろうな。」

この言葉を言った時の彼の顔付はちつとも愉快そうではなかった。また、彼が言った通りのことを思っているとしたところで、この男は考え違いをしているのだと思う理由が私にはあった。しかし何も自分の知ったことではない、と私は思った。それにまた、どうしていいかもわからなかった。その他所^{よそ}の男は宿屋の戸口のすぐ内側のところをうろついてばかりいて、鼠を待ち構えている

猫のように岩角の方を窺っていた。一度私は街道へ出てみたが、彼はすぐさま私を呼び戻し、私が彼の氣に入るように速くそれに従わなかったところが、彼の蒼白い顔が非常に怖しく変り、私を跳び上らせたほどの罵り言葉で、入れと命令した。私が戻るや否や彼は半ば御機嫌をとり半ば鼻であしらうような元の態度に返り、私の肩を軽く叩いて、お前はよい子だ、己はほんとにお前が好きなんだ、と言った。「己にも倅がせがれ一人あるがね、」と彼は言った。「お前と瓜二つで、己の自慢の種よ。だが子供に大切なことはしつけだ、坊や、——躰だよ。ところでだ、もしお前がビルと一緒に航海したことがあれあ、二度言われるまでそこに立っているなんてこたあしめえ、——お前はそんなこたあしねえよ。そんなやり方

はビルは決してやらねえ。またあの男と一緒に航海した者だつてもやらねえさ。さて、あれあいかにも仲間のビルだぞ、遠眼鏡とおめがねを抱えてね、おやおや、ほんとにな。坊や、お前と己とはちよいと談話室パーラーへ戻つて、扉ドアの後にいてさ、ビルをちよつとばかりびつくりさせてやろうよ、——うん、確かにそうだ。」

そう言いながら、その男は私と一緒に談話室へ戻り、隅の方で私を彼の背後に立たせ、二人とも開いている扉の蔭に隠れるようにした。諸君も想像されるように、私はひどく不安でびくびくしていたが、その他所の男も確かに怖がつているのを見て取ると、私の恐怖の念はさらに加わつた。彼は彎刀つかの柄にすぐ手をやれるようにしたり、刀身が鞘からいつでも抜けるようにしたりした。

そして私たちがそこに待っている間中、彼は咽喉のどの詰る思いをしているかのように絶えず唾をぐくりぐくりと嚥みこんでいた。

やがて大膽しに船長が入って来て、右も左も見ずに扉を背後にばたんと閉めると、朝食の用意のしてあるところへと室を突っ切つてまっすぐに進んだ。

「ビル。」と他所の男が言ったが、その声は強いて大胆そうに見せかけようとしているように思われた。

船長はぐると後へ向いて私たちと向き合つた。その顔には赭あか味かみがすっかりなくなっていたし、鼻までが蒼かった。幽霊か、悪魔か、それよりももっと怖いものでも見た人間のような顔付であつた。そして、確かに、まったくちよつとの間にひどく老いぼれ

て元気のなくなつた彼を見ると、私は氣の毒に思つた。

「おい、ビル、己を知つてゐるだろ。お前は昔の船友達を知つてゐるな、きつと、ビル。」と他所の男が言つた。

船長は喘ぐような息をした。

「ブラック・ドッグ 黒 犬 だな」と彼は言つた。

「でなくてだれなものか？」と一方は大分落着いて来て返答した。

「まさにその黒犬が昔の船友達のビリーに逢いに來たのさ、『ベ
ブラック・ドッグ ンボー提督屋』へな。ああ、ビル、ビル、お互たげえにずいぶんとい

ろんな目に遭つたものだ、己がこの二本指をなくしてから此
このか方よ。」と不具になつた手を挙げてみせた。

「で、おい、」と船長が言つた。「お前は己をめえ探し出した。己は

ここにゐる。だから、さあ、はつきり言つてくれろ。何の用だ？」
「さすがはお前だ。」と黒犬が言つた。「お前の言う通りだよ、
ビリー。ところで己はこの子供からラムを一杯^{ぺえ}貰えてえんだ。己
あこの子がとても氣に入つたのだ。それから、どうか掛けてくん
ねえ。昔の船友達らしく、ざつくばらんに話すとしようじゃねえ
か。」

私がラムを持つて戻つて来た時には、二人はもう船長の朝食の
食卓の両側に腰を掛けていた。——黒犬の方は扉の近くにいて、
片方の眼を昔の友達に、片方の眼を私の思つたところでは逃げ場
所につけておけるようにと、斜に腰掛けていた。

彼は、私に、あっちへ行つておれ、そして扉を広く開けつ放し

にして行つてくれ、と言いつけた。「鍵かぎ穴あなから覗いたりなんかすると承知しねえぞ、坊や。」と彼は言つた。で、私は二人を残して、帳場へ退いた。

私は耳をすまして聞いてやろうと確かに一心になつてはいたけれども、大分永い間、早口にべらべらしやべる低い声の他ほかには何一つ聞えなかつた。が、とうとう、その声はだんだん高くなり出して来て、船長の一語二語を聞き取ることが出来た。大抵は罵り言葉だつた。

「いやだ、いやだ、いやだ、いやだ。それでおしまいだ！」と船長は一度呶どな鳴つた。そしてまた呶鳴つた。「もしぶらんこ（註一四）になるなら、みんながぶらんこだ、つてえんだ。」

それから突然、凄じく罵り言葉やその他のやかましい物音が起った。――椅子とテーブルとが一度にひっくり返し、続いて刃物の打ち合う音がし、それから苦痛の叫び声がしたかと思うと、次の瞬間には、私は、黒犬が全力で逃げ、船長が猛烈に追っかけてゆくのを見た。二人とも抜き放った彎刀を手にし、黒犬は左の肩からたらたと血を出していた。ちようど戸口のところで、船長はその逃げてゆく男を狙って最後の物凄^{あび}い一撃を浴せかけたが、もし家のベンボー提督の大きな看板で妨げられなかったなら、その一撃は確かにその男を背骨まで切り下したことだろう。今でも看板の下側にその刀痕が残っている。

この一撃が果^{はたしあい}合の終りであつた。一度街道へ出ると、黒犬

は、傷を負っているにも拘らず、一目散に走り逃げ、しばらくのうちに丘の縁の向うへ姿を消してしまった。船長はと言えば、彼は呆然としたように看板を見つめながら突っ立っていた。それから手で眼を何遍もこすり、やっと家の中へ引返して来た。

「ジム、」と彼が言った。「ラムだ。」そしてそう言った時に、少しよろめき、片手を壁にあてて身を支えた。

「怪我しましたか？」と私は叫んだ。

「ラムだ。」と彼は繰返して言った。「己はここから行かなきゃならん。ラムだ！　ラムだ！」

私はラムを取りに走って行つた。しかし、さつきから起つたいろいろのことですっかりあわてていたので、コップを一つ壊した

り樽の注口を駄目にしたりした。そしてまだまごまごしているうちに、談話室で何かがどかりと倒れる音が聞えたので、駆け込んで見ると、船長が床の上に大の字になって寝ていた。それと同時に、叫び声や喧嘩騒ぎに驚いた私の母も私を助けに階下へ駆け降りて来た。私たちは二人がかりで彼の頭を抱え上げた。彼は大層烈しく苦しそうに息をしていた。が、眼は閉じ、顔は気味の悪いほどの色をしていた。

「やれやれ、何てことだろう。」と母が叫んだ。「この家^{うち}にや何^なて情^{なさけ}ないことになったものだろう！ それにお父さんは御病氣だしねえ！」

しばらくの間、私たちは船長の手当をするにはどうしたらいい

かまるでわからなかった。また、彼があのお所の男との格闘で致命傷を受けたものと思ひこんでもいたのだ。私はラムを持って来て、彼の咽喉へ流しこんでやろうとしたことはしたけれども、彼は齒をしつかりと喰いしばっていて、顎は鉄のように固かった。そこへ扉が開いてリヴジー先生が父を診察しに入つて来たので、私たちはほつとした。

「おお、先生、」と私たちは叫んだ。「どうしたらよろしいでしょう？　この人はどこを怪我しているのでしょうか？」

「怪我だと？　馬鹿なことを！」と医師が言つた。「あんた^{がた}方や私と同様ちつとも怪我なんかしていませんよ。この男は中風を起したのだ、私が注意してやった通りにね。さあ、ホーキンスさん

のおかみさん、あなたは早く二階の御主人のところへ行つて下さい。そして、なるべくならこのことは御主人には話さずにな。私の方は、こいつのやくざな^{いのち}命を助けるために一所懸命にやらねばならん。それからジムには^{かなだら}金盥をここへ持つて来て貰おうね。
」

私が金盥を持つて戻つて来た時には、医師はもう船長の袖を切り開いて、大きな逞しい腕をまくりあげていた。その腕には数箇^{いれずみ}処に文身がしてあつた。「幸運あり」というのと、「順風」というのと、「ビリー・ボーンズのお氣に入り」というのが、二の腕にごく巧みにはつきりと彫つてあつた。それから、肩に近いところには、絞首台とそれにぶら下つている男とのスケッチがあり、

なかなか生々いきいきと出来ていると私は思った。

「自分のことの予言だな。」と医師は指でその絵に触りながら言った。「さて、ビリー・ボーンズ君、というのが君の名前ならだが、君の血の色をちよつと拝見するよ。ジム、」と私に向つて、

「君は血を見るのが怖いこわかね？」

「いいえ。」と私は答えた。

「よし、では、」と彼が言った。「金盥を持っていてくれ給え。」
そう言つて彼は刺 針を取つて血管を切り開いた（註一五）。

ずいぶんたくさん血が取られてから、船長はやつと眼を開あけて
ぼんやりとあたりを見 した。最初は医師の顔がわかると、紛れ
もないしかづら顰め面をした。次に私が目に入ると、ほつとした様子だつ

た。しかし突然顔色が変り、起き上ろうとしながら、叫んだ。――

――

「ブラック・ドッグ
黒 犬 はどこだ？」

ブラック・ドッグ

「黒 犬 なんぞはここにはおらんよ、君が自分で背負っている他にはな。（註一六）」と医師が言った。

「君は相変らずラムを飲んでいたものだから、中風を起したんだ、私が君に言つてやった通りに。で、私は、ずいぶん厭ではあつたが、君を墓から頭を先にしてひきずり出してやったのだ。ところで、ボーンズ君――」

「それ俺^{わし}の名じゃねえ。」と彼は遮つた。

「どうだっていいさ。」と医師が答えた。「私の知^{しり}合^{あい}の海賊の

名だよ。簡短でいいから君をそう言うことにするのだ。で、君に言っておかねばならんのはこういうことなのだ。ラムの一杯くらいなら君の命を取ることもあるまい。が、一杯やれば、もう一杯、もう一杯とやることになる。で、私は自分の仮髪かつらを賭けて言うが、もしお前はぴたりと止めてしまわなければ、きつと死ねぞ、——わかったかね？——死んで、聖書に書いてあるあの男みたいに、お前の往くべき処へ行くんだぞ。（註一七）さあ、さあ、力を出すんだ。今度だけは手伝って寝台ベッドまでつれて行ってやるよ。」

私たちは、二人がかりで、ひどく骨折って、やっと彼を二階へひっぱり上げ、寝台へ寝かしてやった。すると彼は、ほとんど気絶しているかのように、頭をぐたりと枕に落した。

「さあ、いいかね。」と医師が言った。「これで私は責任をすませたのだ。——ラムということは君には死ということだぜ。」

そう言うとは彼は、私の腕を取りながら、父を診察しにそこを去った。

「何でもないことさ。」彼は扉を閉めるや否や言った。「あの男をしばらく静かにしておけるだけの血をぬいてやったのだ。あの男は一週間^{がた}はあそこで寝ていなければいけない、——それがあの男にも君方^{がた}にも一番よいことだ。しかしもう一度発作を起せばあの男も往生だよ。」

第三章

黒丸^{くろまる}

ひる
午頃、私は冷い飲物と薬とを持って船長の室へ入って行つた。
彼は、少しばかりずり上つただけで、私たちが室を出て来た時と
ほとんど同じようにして寝ていて、弱つてもおり興奮してもいる
ようだった。

「ジム、」と彼が言つた。「ここじゃあ頼りになるなあお前めえばかり
りよ。で、己だつていつもお前にやよくしてやつたろう。一ひとつき月
でも四ペンス銀貨をやらなかつた月はないしさ。ところで、ねえ、
己は今このようにずいぶ弱つてゐるし、だれも構こつちやくれねえ。
で、ジム、お前己にラムを一杯ぺえ持つて来ておくれ。なあ、くれる
だろ、え？」

「お医者さまが——」と私は言いかけた。

けれども彼は急に、力のない声で、しかし心から、医師の悪口を言い出した。「医者なんて奴あみんな阿呆だ。」と彼は言った。

「それに、あの医者なんか、へん、船乗のことなんぞ何を知ってるんだ？ 己あ、瀝青^{チヤン}みてえに暑くつて、仲間の奴らあ黄熱でば

たばた斃^{たお}れる処^{ところ}にもいたことがあるし、地震で海みてえにぐらぐらしてる御結構な土地にもいたことがある。——そんな処をあの

医者が知っているかい？ ——そして己はラムで命を繋いでいた

んだ、ほんとうによ。己にやあ、ラムは何よりの好物だ、大事^{でえじ}な

女房だ。己は今風^{かざしも}下の海岸に浮いている情ねえ老いぼれ船みて

えなもんだから、そのラムが飲めねえとなれあ、ジム、お前に祟^{たた}

るぞ。それからあの医者 of 阿呆にもな。」と彼はそれからまたしばらくの間悪口を言い続けた。「見てくれ、ジム、己の指はこんなにぶるぶるしているよ。」と口説くような調子で続けた。「じつとさせておけねえのだ。出来ねえんさ。今日はまだ一滴もやらねえんでね。あの医者は馬鹿だよ、ほんとに。もしラムを少しも飲まなければ、ジム、己は酒^{アルコール}精中毒が起るよ。もう少しは起ってるのだ。己にやあその隅に、お前の後^{うしろ}に、プリント親分が見えてるんだ。刷^{すりもの}物みてえに、はつきりと見えてるんだ。もし酒精中毒を起すとなると、己あ荒^{あれ}え渡世をして来た男だ、大騒ぎを起すぜ。あの医者だつて一杯だけなら何でもあるめえつて言つたよ。一杯持つて来れあ一ギニー金貨を一枚やるよ、ジム。」

彼はだんだんと興奮して来たので、父に障りはしないかと私ははらはらした。父はその日はひどく悪くて、安静が必要だったのだ。それに、今船長の言った先生の言葉もあるから大丈夫だろうと思つたし、鼻薬でつろうとするのにはちよつと癪にさわつた。

「あんたのお金なんかちつともほしかあないよ。お父さんにあなたが借りてる分の他^{ほか}にはね。」と私は言つた。「一杯だけ持つて来てあげるが、それだけだよ。」

それを持つて来てやると、彼はひつたくるように掴んで、すっかり飲み干してしまった。

「よしよし、」と彼が言つた。「確かに、幾らかよくなつたよ。ところでな、おい、あの医者ほどのくれえこの寢床ん中に寝てな

きやなんねえって言ってた？」

「どうしても一週間は、って。」と私は言った。

「ひえっ！」と彼は叫んだ。「一週間だと！ そんなこたあ出来ねえ。それまでにやあ奴らは黒丸くろまるを持って来らあ。あのやくざ水夫どもはこの今だって己の風上へ出てうまくやろうとしてうろつき　　ってるんだ。あいつらは自分の分を取っておけねえんで、ひと他人の分をふんだくろうとするんだ。それが船乗らしい振舞ふるめえか？　え、聞きてえもんだ。だが己はつましい人間だ。自分の大事な金は一度も無駄使いもしなければ、なくしもしねえ。も一度奴らに一杯喰べわしてくれよう。奴らなんざあ怖こわかねえ。なあ、己はまた帆を広げて、もう一度奴らを出し抜いてやるぞ。」

こう言いながら、彼は、私が痛くてもう少しで大声を出しかけたほど私の肩をぎゅつと掴んで、脚を重量品のように重そうに動かしながら、ようようのことで寝台ベッドから起き上った。彼の言葉は意味には元気があったけれども、それを言っている声が弱々しいので、その対照が哀れだった。彼は寝台の端に腰を掛けた姿勢をとると、語をちよつと休んだ。

「あの医者にやられた。」と彼は呟いた。「耳鳴りがする。寝かしてくれ。」

私が大して手伝わないうちに彼はまた以前の場所へ倒れ、しばらくは黙ったままだった。

「ジム、」とようやく彼は言い出した。「今日あの水夫を見たら

う？」

「ブラック・ドッグ 黒 犬 かい？」と私は尋ねた。

「ああ！ ブラック・ドッグ 黒 犬 だよ。」と彼は言った。「あいつは悪い

奴だ。が、あいつをけしかけたもつと悪い奴がいるのだ。でな、己がどうにかして逃げられねえで、奴らが己に黒丸をさしつけたらな、いいかね、奴らの狙ってるのは己の古い衣類箱なんだよ。

お前、馬に乗ってな、——乗れるね、乗れるかな？ うむ、よし

よし、じゃあ、馬に乗ってな、行くんだ、——そのう、なあに、

言っちゃまえ！ ——あのいまましい医者 of 阿呆んどこへ行つて、

みんなを——治安判事だの何だのを——呼び集めてくれって話す

んだ。そうすれあ、あの男は『アドミラル・ベンボー ベンボー提督屋』へ押しかけて

来て——奴らをひっ捕えてくれるだろう、——フリントの船員を
そっくりみんな、残ってる奴らみんなをな。己は一等運転士だつ
たんだ、己はな。フリントの一等運転士だったのだ。そしてあの
場所を知ってるのは己一人なんだよ。あの人は、今の己みてえに
死にかけていた時に、サヴァナ（註一八）であれを己にくれたの
だ。だがな、奴らが黒丸を己んところへ持って来るまでは、それと
も、お前がまた黒犬か、一本脚の船乗をだ、ジム、——ことに其^そ
奴^{やつ}だぜ、——其奴らを見るまでは、お前、言いに行くんじやねえ
ぞ。」

「だけど、その黒丸って何ですか、船長さん？」と私は尋ねた。
「それはね、呼出状さ。奴らが持って来たらお前に言つてやるよ。」

だが油断なく見張つてくれ、ジム。そうすりやお前を相棒にして分けてやるからな、きつと。」

彼はそれからしばらく取りとめのないことを言い、その声はだんだん弱つていった。が、私が薬をやると、「船乗で薬を飲みたがるなんて奴あ己だけだ。」と言いながら、子供のようにそれを服^のんでから間もなく、とうとうぐつすりと氣絶したように寝入ってしまったので、私はそこを立去った。もし万事が無事にいつていたなら自分がどうしていたかということ、私にはわからない。恐らくは医師にすべての話をしてしまったことであろう。というのは、私は、船長があゝの打明け話をしたことを後悔して私を殺しはしまいかと思つて、とても怖かつたからである。しかし實際起

ったのは、その晩父がまったく急に亡くな^なったことで、そのために他の事は皆そつちのけになつてしまった。私たちの当然な悲歎、近所の人たちの弔問、葬式の手配、その間にもしなければならぬ宿屋のすべての仕事、などでずっとひどく忙しくて、私は船長のことを思う暇も碌々なく、まして彼を恐しがつてなぞいられなかつたのだ。

彼は翌朝には階下へ降りて来るには来たし、いつもの通りに食事をした。もつとも、食べる方は少ししか食べなかつたが、ラムはいつもよりもたくさん飲んだかも知れない。なぜなら、顔を顰め鼻息を鳴らしながら帳場から自分で勝手に取つて来て飲み、だれ一人もそれを止め^とめようとする者がなかつたのだから。葬式の前

の晩にも彼は相変らず酔つ払つていたが、その喪中の家で、例のいやな古い船唄を彼がのべつに歌っているのを聞くのは、たまらないことだった。だが、彼は弱つてはいたけれども、私たちはみんな彼をひどく怖がつていたし、医師は急に何マイルも離れた患者のところへ行つて、父の死んだ後は家の近くへ一度も来なかつたのだ。私は船長が弱つていと言つたが、實際、彼は力を回復するよりも却つて弱つてゆくように思われた。彼は這うようにして二階を上り下りし、^{パーラー}談話室から帳場へ行ったりまた戻ったりした。時には、壁につかまつて身を支えながら歩いてゆき、^{けわ}嶮しい山を登る人のように苦しくはあはあ息をしながら、鼻を戸口の外へ突き出して海の香を嗅ぐこともあつた。私に特に話しかけるこ

とは別になかった。自分のした内証話はほとんど忘れてしまつていたのだらうと思う。しかし気分は前よりはそわそわして、体からだの弱つてゐることを差引すると前よりは荒つぽくなつた。酔つ払つた時などは、彎カトラス刀を引き抜いて、前のテーブルの上に拔身のまま置いたりするような、ひやひやさせることをした。しかし、そんなような有様ではあつたけれども、前よりは他の人々のことを気になくなくなり、自分だけの考えに耽つて、幾らか氣が変になつてゐるのかと思われた。例えば、一度などは、私たちの非常に驚いたことには、鄙ひなびた恋唄のような、違つた歌を歌い出したりしたものだった。それは、彼がまだ船乗にならない前の若い時分に覺えたものに違いなかつた。

このようにして過ぎていったが、葬式の翌日、霧深い、身を斬るような、霜寒の午後の三時頃、私は戸口のところにしばらく立って、父についての悲しい思いに耽っていた。すると、だれかが街道をのろのろとこつちへやって来るのが見えた。その男は、杖で自分の前をこつこつ叩いているし、眼と鼻との上に大きな緑色の覆いをかけていると、明かに盲めくらであつた。そして年か衰弱のせいのように、せむしこわしになつていて、頭巾ずきん附の大きな古びたぼろぼろの水夫マントを着ているので、実に不ぶ恰かつ好こうな姿に見えた。私は生れてからあんな恐しい様子をした者を見たことがなかった。彼は宿屋から少し離れたところに止ると、声を張り上げて奇妙な単調な調子で、前に向つてだれにともなく言いかけた。

「どなたか御親切な旦那さま、哀れな盲人めくらに教えてやって下さい。私はわがイギリスのために、ジョージ陛下万歳！ 名誉の戦争に出まして、大事な眼をなくした者でございます。——私の今おりますのは、この国のどこでございましょう、何という処でございましょうか？」

「ここは ブラック・ヒル 丘 入江の『アドミラル・ベンボー提督屋』だよ、小父さん。
。」と私が言った。

「声がしましたな、——と彼は言った。——「お若い方かたの声だ。どうか御親切なお若い方、私にお手を貸して、中へ案内して下さいませんか？」

私が手を差し出すと、今まで物言いのやさしかった、その怖い、眼のつぶれた奴は、たちまちその手を万^{まんりき}力のようになつかと掴んだ。私はびっくりしてひっこもうと身を蹴^{もが}いた。が、盲人は腕をぐつとひっぱっただけで私を身近へひきつけた。

「さあ、小僧、俺^{わし}を船長のところへつれて行け。」と彼は言った。「それあとても駄目ですよ。」と私が言った。

「おお、言ったな！」と彼はせせら笑った。「まっすぐにつれて行け。でねえと、この腕をへし折ってくれるぞ。」

そう言いながら、私の腕を振り上げたので、私は思わず叫び声をあげた。

「でも、私^{わたし}の言うのはあんたのためなんですよ。」と私が言った。

「船長さんは以前の船長さんじゃないんだもの。拔身の彎刀カトラースを持って坐っているよ。この間も他ほかの方かたが——」

「さあ、さっさと歩くんだ。」と彼は私の言葉を遮った。私はその盲人の声のような無慈悲な、冷酷な、不愉快な声はかつて聞いたことがなかった。手の痛さよりもその声の方がもっと私をおじけさせた。それですぐ彼の言うことをきいて、まっすぐに歩いて戸口のところから談話室の方へと進んで行つた。その談話室に、あの病気の老海賊がラムに酔つてぼんやりして坐りこんでいるのだ。盲人は私にぴったりとくつついて、鉄のような拳で私を掴み、堪えられないほどの重さで私に凭もたれかかつていた。「まっすぐに奴のところへつれて行って、奴に見えるところまで来たら、『ビル

さん、あんたの友達が来ましたよ。』って呶鳴^{どな}るんだ。もししねえと、こうしてやるぞ。」そう言うのと彼は私の腕をぐいとひっぱり上げたので、私は気が遠くなりそうに思った。あれやこれやで、私はこの盲乞食がすっかり怖くなつたので船長の恐しさを忘れてしまい、談話室の扉^{ドア}を開けると、言いつけられた言葉を震え声で呶鳴^{どな}った。

可哀そうに、船長は眼を上げると、一目でラムの気^けがなくなり、まったく酔いが醒めてしまった。その顔の表情といったら、恐怖というよりもむしろ死病の表情であつた。彼は立ち上ろうとしたが、しかし、それだけの力も体に残っていたとは思えない。「さあ、ビル、そのままですわよ。」と乞食が言った。「眼

は見えなくても、耳は指一本動かしたってわかるんだ。用事は用事さ。お前の右の手を出してくんな。^{めえ}小僧、奴の右手の手頸を掴んで、俺の右手の近くへ持つて来い。」

私たちは二人とも寸分違わず盲人の言う通りにした。と、私は、盲人が杖を持っている手の掌中から、船長の掌の中へ、何かを渡したのを見た。船長は直ちにそれを握った。

「さあこれですんだ。」と盲人が言った。そしてその言葉を口にすると急に私を掴んでいる手を放し、ほんとうとは思えないくらいに見当も違えず素速く、談話室から街道へと跳び出し、私がまだじつと突っ立っていると、彼の杖の音が街道をこつ、こつ、こつ、こつと遠くまで行くのが聞えた。

私か船長かが我に返ったようになるまでにはしばらく間があった。が、とうとう、そしてほとんど同時に、私はまだ掴んでいた船長の手頸を離し、彼の方は手をひっこめて掌の中をぱつと見た。「十時！」と彼は叫んだ。「六時間ある。まだ奴らを出し抜けるぞ。」そして跳び立った。

と同時に、彼はよろめき、咽喉へ手をあて、ちよつとの間ぐらぐらしながら立っていたが、それから、異様な声を立てながら、ぱたりと俯伏に床^{ゆか}へ倒れた。

私は、母を呼びながら、直ちに彼のそばへ駆け寄った。が急いでももう無駄だった。船長は猛烈な卒中にやられて死んでしまっていた。奇妙なことだが、近頃こそ彼を可哀そうに思いかけては

いたけれども、私は確かに彼を好いたことなんぞ決してないのに、彼が死んだのを見るや否や、どつと涙が出て来たのであった。それが私の見た二度目の死で、一度目の死の悲しみが私の心にまだなまなま生々しかったのだ。

第四章 船員衣類箱

私は、もちろん、時を移さず、自分の知っている限りのことを母に話した。多分、ずっと前に話しておくべきであつたのだが。

そして直ちに私たちはむずかしい危険な立場にいることに気がついた。船長の金かね——もし彼が幾らかでも持っているなら——には

確かに私たちに支払うべき分があった。が、船長の船友達、とりわけ私の見た二人の例証たる人間、ブラック・ドッグ 黒 犬 とあの盲乞食と

が、その死んだ男の借金の支払のために自分たちの分捕品を見棄てる気になるということは、ありそうにもなかった。船長の言いつけたようにすぐに馬に乗ってリヴジー先生のところへ駆けつけるとすると、母は独りぼっちになって保護する者がなくなるので、それは思いもよらぬことだった？ 実際、もうあまり永くこの家に居残っていることは、私たちどちらにとつてもとても出来ないように思われた。台所の炉の中で石炭の落ちる音にも、掛時計のかっちかっちいう音にさえも、私たちはびくびくした。私たちの耳には、近づいて来るあしおと 蹠音が四辺に頻りにどかどか聞えるよう

な気がした。談話室パラーの床ゆかに倒れている船長の死体やら、あのいやらしい盲乞食がすぐ近くにうろついていて今にも帰つて来そうなことを思うやらで、私は恐しくて身の毛のよだつ時があつた。何とか速くきめなければならなかつた。そして私たちはとうとう、二人一緒に出かけて隣となりむら村へ行つて助けを求めようという考えが思いついた。言うが早いかり出した。帽子もかぶらないまま、私たちは直ちに、迫つて来る夕闇の霜寒の霧の中へ駆け出した。

その村というのは、次の入江の向側にあつて、こちらから見えないが、何百ヤードも離れていなかった。それに大層心強かつたのは、例の盲人がやって来た方、また恐らく帰つて行つた方

とは、反対の方角にあったことだった。私たちはそう永くは街道にいなかったのだが、それでも時々立ち止つて互に繾^{すが}り合い耳をすました。しかし何も変つた音はしなかった。——ただ、岸に打ち寄せる漣^{さざなみ}の低い音と、森で鴉がかあかあ鳴く声だけだった。

村へ着いたのはもう灯^ひともし頃^{ごろ}だった。そして、家々の戸口や窓から洩れる黄ろい光を見た時の嬉しさを、私は決して忘れることがあるまい。だが、それが、後でわかつたように、私たちがそこで得られた最上の助けだったのだ。という訳は、——人々が自分を恥じたろうと思われるであろうが、——だれ一人として私たちと一緒に「ベンボー提督^{アドミラル・ベンボー}屋」へ引返そうという者がなかったからである。私たちの難儀を話せば話すほど、ますます——男も

女も子供も——皆自分たちの家へすつこむのだった。フリント船長の名は、私には初めてであつたけれども、村ではよく知っている人もあつて、非常に恐れさせる力があつた。それに、「ベンボ——提督屋」の先の方の側で野良^{のら}仕事をしていた人たちの中には、見慣れない男が何人も街道にいるのを見て、それを密輸入者だと思つて逃げ出したことがあるのを、思い出す者もあつたし、また、少くとも一人は、キット入江と言っているところに小さな帆^{ラッガー}船を一艘見たことがあつた。実際、フリント船長の仲間であつた者ならだれであろうと、村の人を死ぬほど怖がらせるに十分であつた。で、結局、別の方角にあるリヴジ—先生のところへなら進んで馬を走らせようという者が幾人もいたけれども、私たちを助け

て宿屋を護ろうとする者は一人もいなかったのである。

臆病はうつると世間では言う。しかしまた、一方、議論は非常に勇気をつけるものである。で、銘々が言うだけのことを言ってしまうと、母は皆に言った。父親のないこの子のものであるお金は損したくない、と母は言い切った。「あなた方がどなたも来て下さらないなら、ジムと私が^{あたし}行きます。」と母が言った。「戻って行きますよ、来た道をね。いやどうも有難うござんした。図^{ずうた}体ばかり大きくて、胆っ玉の小さい方ばかりですね。死んだつていいから、私たちはあの箱を開けて^あみます。すみませんがその囊を貸して下さいな、クロスリーさんのおかみさん。私たちの貰う権利のあるだけのお金を入れて来るんですから。」

もちろん、私は母と一緒に行くと言った。また、もちろん、人々はみんな私たちのことを無鉄砲だと呶鳴^{どな}った。が、それでもなお、一緒に行つてやろうという者は一人もなかった。ただ、私たちが襲われないようにと、弾丸を籠めた一挺のピストルを私に渡してくれ、また帰りに追いかけられた場合の用意に、馬にちゃんと鞍をつけておこうと約束してくれたただだった。一方、一人の若者が、武装した援助の人を探しに、医師の許へ馬を走らせることになった。

私たち二人がその寒い晩この危険な冒険に出かけた時には、私の胸はひどくどきどきと動悸うった。ちょうど満月が昇り始めていて、霧の上の方の縁^{へり}を通して赤くほのかに現れた。このために

私たちはますます急いだ。という訳は、これでは、再び出て来る前に、すっかり昼のように明るくなっていて、家から私たちの出るのが見張っている者どもに見つけられてしまうことは、明かだったからである。私たちは音を立てずに速く生垣に沿うて走って行つた。また、私たちの恐怖の念を増すものは何一つ見もしなければ聞きもしなかった。そしてとうとう「ベンボー提督屋」へ着いて、入口の扉^{ドア}を背後にぴたりと閉めると、まったくほつとした。私がすぐさま^{かんぬき}門をさし、私たちは、船長の死体のある家の中にただ二人きりで、^{くらやみ}暗闇の中でちよつとの間はあはあ喘ぎながら立っていた。それから母が帳場から蠟燭を取つて来て、私たちは互に手を取り合いながら、談話室へ入って行つた。船長は私たち

の出て来た時のまま、仰向になつて、眼を開いて、片腕を伸ばしながら、横つていた。

「鎧戸を下して、ジムや。」と母が小声で言つた。「あいつらが来て外から覗くかも知れないから。それからね、」と、私が鎧戸を下してしまうと、母が言つた。「あれから鍵を取らなきゃならないんだがね。あんなものに触るなんてねえ！」^{さわ}「そう言いながら母はしやくり泣きのようなことをした。

私はすぐさましやがんで膝をついた。船長の手の近くの床の上^{ゆか}に、片面を黒く塗つた、小さな丸い紙片^{かみきれ}があつた。これがあの黒丸であることは疑えなかつた。取り上げて見ると、裏面に、頗る上手な明瞭な手跡で、こういう簡短な文句が書いてあつた。

「今夜十時まで待ってやる。」

「十時までなんだって、お母さん。」と私は言った。ちようどそう言った時、家の古い掛時計が鳴り出した。この不意の音で私たちはぎよつとして跳び上った。けれども、これはよい知らせだった。というのは、まだ六時だったから。

「さあ、ジムや、あの鍵だよ。」と母が言った。

私は彼のポケットを一つ一つ探った。小さな貨幣が二三箇に、指貫ゆびぬきが一つに、糸と大きな縫針、端を噛み切つてある振巻煙草ねじまきたばこが一本と、曲つた柄の附いた大形ナイフと、懷中羅針儀と、それから引火奴箱ほくちばこ、これだけが入っているだけだったので、私は絶望し始めた。

「じや多分頸の周りについてるんだらうよ。」と母が言ってくれた。

厭でたまらないのをこらへて、シャツの頸のところを引き裂くと、果して、タールまみれの紐に鍵が下げてあつたので、私は彼の大形ナイフでその紐を切った。この上首尾に私たちはもう大丈夫だと思い、さっそく二階へ駆け上つて船長が永い間寝泊りしていた小さな室へ入った。そこに例の箱が彼の着いた日以来置いてあるのだ。

その箱は、外から見たところでは他の船乗衣類箱と同じようだった。蓋には「B・」という頭字が烙鉄で烙印してあつた。

永い間手荒く扱われたためか角は幾分ひしやげて壊れていた。

「鍵をおくれ。」と母が言つた。そして、錠は非常に固かつたけれども、瞬く間に母はそれを　して蓋をはね開けた。

煙草とタールとの強い臭いが内部からぷんとして来たが、一番上には、入念にブラシをかけて折り摺んである一着のすこぶる上等な服の他には、何も見えなかつた。この服はまだ一度も着てない、と母は言つた。その下からは、ごつたまぜで、——四分儀、ブリキの小罐が一箇、煙草が数本、ごく立派なピストルが二対、銀の棒が一本、古いスペインの懷中時計が一箇、それにあまり値打のない大抵は外国製の装身具類が幾つか、真鍮で拵えたコンパスが一つ、それから珍しい西インドの貝殻が五つ六つあつた。その時以来、私は、どうして船長が悪業を犯してお尋ね者の放浪生

活を送っている間この貝殻を持ち　　つていたのかと、不審に思うことがたびたびある。

これまでに私たちの見つけた幾らかでも値打のあるものは銀と装身具だけで、これはどちらとも私たちには不向のものだった。その下に古びた船員作業服が一着あった。方々の港口の洲で海水を浴びたために白っぽくなっていた。母はいらいらしてそれをひっぱり出した。すると箱の中にある最後の物が私たちの前に現れた。油布ゆふでくるんだ書類のような包と、触さわると金かねの音のじやらじやらするズツクの囊だった。

「あの悪者たちに私が正直な女だということを見せてやろう。」と母が言った。「私は自分の貰わなきやならない分だけは貰うが、

一文だつて余計にや取らないよ。クロスリーさんのおかみさんの囊を持つていておくれ。」そして母は船長の勘定高をその海員の囊から私の持つてゐる囊の中へと数えて入れ始めた。

それはなかなか永くかかる面倒な仕事だつた。なぜなら、その貨幣はいろいろの国のさまざまの大きさのもので、——ダブルン金貨や、ルイドール金貨や、ギニー金貨や、八銀貨や、その他私の知らないものなどが、みんなめちやくちやに詰め込んであつたのだから。それにまた、ギニー金貨がほとんど一番少く、母に勘定の出来るのはそのギニー金貨だけなのであつた。（註一九）

私たちが半分ばかり数えた時、私は突然母の腕に手をかけた。しいんとした霜寒の空気の中に、私をぎよつとさせた音を聞いた

からである。――^い沍てついた街道をあの盲人の杖がこつ、こつ、こつと叩く音だ。私たちが息を殺して坐っている間に、その音はだんだんだんだんと近づいて来た。やがて杖で宿屋の入口の扉を強く敲いた。それから把手^{とって}を　　す音が聞え、あの盲人めが入ろうとするのであろう、門ががたがたいうのが聞えた。それから永い間、内も外もひっそりしていた。とうとう、また、こつ、こつと杖の音がし始めて、ゆつくりと再び微かになってゆき、ついに聞えなくなつたので、私たちは言うに言われぬくらい喜び、また有難く思った。

「お母さん、みんな持って逃げて行きましようよ。」と私が言つた。きつと、扉に門がさしてあるのが怪しいと思われて、面倒を

惹き起すに違いないと思つたからである。もつとも、その門をさしておいたことを私がどんなに有難く思つたかは、あの恐い盲人に逢つたことの無い人には到底わからないのであるが？

しかし母は、怖がつてはいる癖に、自分の当然受取るべき分より少しでもたくさん取ることを承諾しようとせず、またそれより少いのも頑固に承知しなかつた。まだなかなか七時にもならない、と母は言つた。母は自分の権利を知つていて、それだけを得たいというのだ。そしてなおも私と言ひ争つていた時に、小さな低い^{よびこ}呼子の音が丘の大分離れた処で鳴つた。二人ともそれを聞けば十分だつた。いや、十二分だつた。

「取つた分だけ持つてゆくことにするよ。」と母は跳び上りなが

ら言つた。

「じや僕は勘定を帳消しするためこれを持ってゆこう。」と私は油布の小包を取り上げながら言つた。

次の瞬間には、空の箱のそばに蠟燭を残したまま、私たちは二人とも階下へ手探りして降りていた。その次の瞬間には扉を開けて一散に逃げ出していた。私たちの出たのは一刻も早過ぎるということはなかった。霧はずんずんと霽^はれてゆくところであつた。月はまだどちらの側の高地をもまったくはつきりと照していた。そして谷のちょうど底のところと旅店の戸口の周りだけにまだ薄い霧が破れずにかかつていて、私たちが逃げ出す初めの間だけ身を隠すことが出来たのだ。丘の麓から少ししか行かないところ、

村までの半分道よりずっと手前で、私たちは月光の中に出なければならなかった。それだけではなかった。走っている何人もの燈あ音がもう私たちの耳に聞えて来たのである。その方向を振り返って見ると、灯が一つあちこちと揺れ動き頻りに速くこちらへ進んで来るので、今やって来る者どもの中の一人が角燈を持っていることがわかった。

「ねえ、お前、」と母が急に言った。「このお金を持ってずんずん逃げておくれ。私は気が遠くなりそうだから。」

これではどうしたって私たち二人とももうおしまいだ、と私は思った。どんなに私は近所の人々の臆病を呪ったことだろう。どんなに私は母が正直であってまた慾張りであつたことや、さつき

は無鉄砲でありながら今は心弱くなったことを、咎めたことだろう！ 幸運にも、私たちはちようど小さな橋のところにいた。それで私はよろよろしている母を助けて土手の縁までつれて行くと、果して、母はほつと吐息といきをついて私の肩にぐったりと倒れかけた。私はどうしてそれだけの力が出たのかわからないし、手荒なことをしたのかも知れないが、とにかく、どうにかこうにか母を橋のアーチの下から少し離れた土手の下へ曳きずって行つた。それ以上は動かすことが出来なかった。橋があまり低くてその下は私が這つてゆけるだけだったからである。そういう訳で私たちはそこに止まとどまっていなければならなかったが、——母はほとんど全身が見えるところにいたし、二人とも宿屋から声の聞えるところ

にいたのである。

第五章 盲人の最期

私の好奇心は、或る意味で、私の恐怖の念よりも強かった。なぜなら、私は自分のいた処にじつとしていられなくて、再び土手へ這い上ったからで、そこから、頭を金雀花えにしだの茂みの後に隠して、私の家の前の街道を見渡そうと思ったのである。私がちようどよい場所を占めるか占めないに、敵どもはやつて来始めた。七八人で、ばたばたと調子を乱した足音をさせながら街道を激しく走り、角燈を持った男が数歩先に立っていた。三人の男が互に手を取り

合つて一緒に走っていたが、霧を通してながらも、この三人組の真中の男が例の盲乞食だと私は見て取った。次の瞬間、その男の声で私の思つた通りだということがわかった。

「戸をぶつ壊せ！」と彼が叫んだ。

「よしきた！」と二三人が答えた。そして「アドミラル・ベンボー提督屋」

へどつと突進し、角燈持ちがそれに続いた。それから私には彼等が立ち止つたのが見え、今までとは低い調子で何か言っているのが聞えた。戸口が開いているのを見てびっくりしたのであらう。しかしその静かなのはしばらくしか続かなかつた。盲人が再び命令を下したのである。彼があせつて怒り狂っているかのように、その声はさらに大きく高く響きわたつた。

「入れ、入れ、入れ！」と彼は喚^{わめ}き、皆がぐずぐずしているのを罵った。

四五人の者が直ちに命令に従い、二人がその怖しい乞食と共に街道に残った。しばらく間^まがあつたが、やがて驚きの叫び声がし、それから家の中から喚く声がした。――

「ビルの奴あ死んでるぞ！」

しかし盲人は再び彼等がぐずぐずしているのを口ぎたなく罵った。

「ずるけ野郎ども、二三人で奴^{からだ}の体を調べるんだ。残りの奴らは上へ行つて箱を手に入れろ。」と彼は叫んだ。

彼等の足が私の家の古い階段をがたがたと駆け上る音が私に

聞えた。あれでは家はぐらぐら揺れたに違いない。それからすぐ後に、またびつくりした声が上がった。船長の室の窓がぱたんと開け放され、硝子がちやんと壊れる音がした。そして一人の男が月光の中へ頭と肩とをぐつと出して、その下の街道にいる盲乞食に話しかけた。

「おい、ピュー、」と彼が叫んだ。「先に来た奴らがいるんだ。だれかが箱をすっかり掻き　してあるぜ。」

「あれもあるか？」とピューが呶鳴どなった。

「金かねはあるよ。」

盲人は金なんぞ糞喰らえだと言った。

「フrintの書けえたものがあるか、つてえんだ。」と叫んだ。

「それあここにや見えねえ。」とその男は答えた。

「じゃあ、下にいる野郎ども、ビルの体についてやしねえか？」と盲人が再び叫んだ。

すると、多分船長の体を調べるために階下に残っていた男であろう、別の奴が宿屋の戸口のところへ出て来て、「ビルの体はもうすっかり検査してあらあ。何一つ残っちゃいねえ。」と言った。

「じゃ宿屋の奴らだ、——あの小僧だ。奴の眼をくり抜いてくれりやあよかった！」と盲人のピューが叫んだ。「奴らはたった今ここにいたんだ、——俺が^{へえ}入ろうとした時に戸に門をさしていやがったんだ。おい、みんな、散らばって、奴らを見つけ出せ。」

「^{ちげ}違えねえ、奴らはここに^ひ燈を残してゆきやがった。」と窓のと

ころにいる奴が言った。

「散らばって奴らを見つけ出せい！ 家を探し　　れ！」とピューは杖で街道を敲きながら繰返して言った。

それに続いて、私の古い家中が大騒ぎになった。ずっしりした足があちこちとどやどや歩き　　る。家具がひっくり返される。扉が蹴破られる。あたりの岩までが反響するくらいだった。それから、その連中は一人一人再び街道へ出て来て、家の者たちがどこにも見当たらないと言った。ちょうどこの時、さつき死んだ船長の金を数えていた母と私とを狼狽させたと同じ呼子の音が、もう一度夜気を^{つんざ}壁いてはつきりと聞えたが、この時は二回繰返して鳴った。私は前にはそれを盲人が仲間を襲撃に呼び集める彼のいわば

喇叭らっぱのようなものと思つていたのであつた。が、今度は、それが村の近くの丘辺からの合図で、それを聞いた時の海賊どもの様子から考えて、危険が迫つてゐることを彼等に警告する合図であるということが、わかつた。

「ダークがまた鳴らしたぜ。」と一人が言つた。「二度だぞ！

引揚げなきやなるめえ、兄弟きょうでえ。」

「引揚げるだと、この卑怯者め！」とピューが叫んだ。「ダークは初めつから馬鹿で臆病者なんだ、——あんな野郎にや構うこたあねえ。奴らはすぐ近くにゐるに違えねえんだ。遠くへ行つてゐるはずはねえ。つかめえてゐるも同じだ。散らばつて奴らを捜せ、やくざども！ えい、畜生、俺に眼が見えたらなあ！」と喚いた。

この言葉は幾らか利目^{ききめ}があつたらしい。二人の男がらくた物の間をここかしこと探し始めたが、しかし、私には、本気にやっているのではなくて、始終自分の身の危険に半ば気を配っているように思われた。一方、他の連中は街道にぐずついて立っていた。「この馬鹿野郎どもめ、何万両が手に入ろう^{へえ}つてのに、尻込みしてやがるなんて！ あれを見つけ出しやあ、手前^{てめえ}たちは王様みてえに金持になれるんだ。それがここにあるつてことがわかつてながら、もじもじして突つ立つてやがる。手前たちの中にやビルに面と向えた奴が一人もなかったんだ。それを俺がやったんだぞ、——この盲人^{めくら}がな！ それだのに手前たちのために俺は運をなくしなきやならねえ！ 馬車を乗り せようつてのに這^へえつくば

いの乞食になつて、ラムを貰つて歩かなきゃならねえんだ！ 手前たちにビスケットについている虫だけの勇氣でもありやあ、奴らを掴めえられるんだがなあ。」

「ちえつ、ピュー、己たちあダブルーン金貨を手に入れたんだぞ！」と一人がぶつぶつ言つた。

「奴らがあのいまましい物を隠したんかも知れねえ。」と別の男が言つた。「ジョージ金貨（註二〇）をやるからな、ピュー、ぎやあぎやあいうのはよせよ。」

ぎやあぎやあいうとは当^{あてはま}嵌つた言葉であつた。こういう反対を受けてピューの憤怒はますますひどくなつた。ついにはまつたく逆上してしまつて、右に左に盲滅法彼等に打つてかかり、彼の

杖で一人ならずしたたか殴りつけられる音がした。

彼等の方も、盲の悪漢を罵り返し、ひどい言葉で嚇おどしつけ、彼の杖を掴もんで挽ひぎ取ろうとしたが駄目だった。

この喧嘩けんかで私たちは助かったのだ。こうしてまだ盛んに暴あばれている間に、村の側にある丘の上から別の物音が聞えて来た。――

駆けて来る馬の蹄の音である。それとほとんど同時に、生垣の方からピストルの音がしてぱつと火花を発した。これは明かに危険を知らせる最後の合図であつた。なぜなら、海賊どもは直ちに向を変えて四方八方へ分れて走り出したから。或る者は入江伝ふんいに海の方へゆき、或る者は丘を斜に横切つてゆきなどして、半分とたたないうちに彼等の影も見えなくなり、ピューだけが残された。

彼を見棄てて行つたのは、狼狽のあまりか、それとも彼の悪口や
 ちようちやく
 打擲に意趣返しをするためか、私にはわからない。がとにかく

く彼は後に残つて、狂氣のように街道を行ったり来たりしながら
 こつこつ叩き　　り、仲間の者を手探りしたり呼び立てたりした。
 その挙句に方角を間違え、私の前を通り越して村の方へ数歩走り
 ながら、叫んだ。――

「ジョニー、
 ブラック・ドッグ
 黒　犬　、　ダーク、」その他の名も呼び、

「お前^{めえ}たちは年寄のピューをおいてゆくんじやねえだろうな、兄^き
 ようでえ
 弟、――年寄のピューをな！」

ちようどその時、馬蹄の音が高地の頂上に達したかと思うと、
 四五人の騎者の姿が月光の中に現れ、全速力で坂路を駆け下りて

来た。

これを聞いてピューは方向を間違えていたのに気がつき、きや
つと叫んで向を変え、溝の方へまっすぐに走って、その中へ転ころげ
込んだ。しかし彼はすぐさま再び立ち上って、また駆け出したが、
今度はすっかり顛倒していたので、走って来る一番近い馬の真下
へ突き進んだ。

騎手は彼を救おうとしたが、駄目だった。悲鳴をあげてばった
りとピューは倒れ、その声は夜の空気の中へ高く響きわたった。
四つの蹄は彼を踏みにじり蹴飛ばして通り過ぎた。彼は横倒しに
倒れ、それからぐにやりと俯向になって、それっきり動かなくな
った。

私は跳び立って、馬に乗っている人たちに声をかけた。彼等もこの椿事ちんじにびつくりして、ともかく馬を留めようとしていた。それで彼等が何者か私にはすぐにわかった。皆の後に後おくれてやつて来たのは、村からリヴジー先生の許へ行つた若者であつた。その他の人々は税務署の役人たちで、その若者は途中でこの人たちに会い、氣転を利かして一緒に直ちに引返して来たのだ。例の帆フラッグ船がキット入江に入っているという知らせが監督官のダンスさんの耳に入つたので、彼はその晩私の家の方向へやつて来たのだつた。そのお蔭で母と私とは命拾いをしたのである。

ピューは死んでいた。まったくことぎれていた。母の方は、村まで運んで行つて、冷い水を少しや嗅かぎ塩しお（註二一）や何やをや

ると、間もなく再び正気に返った。怖がったのだがそのために別条はなかった。しかしまだ受取るお金の足りなかったことをこぼし続けていた。一方、監督官は出来るだけ速くキツト入江へ馬を走らせた。けれども彼の部下の人たちは、馬から下りて、それをひっぱったり、時には支えてやったりして、その上絶えず伏兵を恐れながら、峡谷を手探つて下つて行かねばならなかったので、皆が入江へ下り着いた時には、例の帆船がすでに錨を上げて航進し始めていたのは、怪しむに当らないことだった。もつとも、船はまだ入江の中にはいた。監督官はその船に声をかけた。すると中からだれかの声が答えて、月明りのところへ出ないようにしろ、さもないと弾を喰らうぞ、と言った。そして同時に、一発の弾丸

がぴゅうつと飛んで来て彼の腕を掠めた。それから間もなく、帆船は岬を　　つて見えなくなつてしまった。ダンスさんは、彼の言葉で言えば、「水を離れた魚さかなみたいに」そこに突つ立つた。もうこうなつては出来ることはB——へ急いで人をやって税関の監視船に知らせてやることだけだった。「でもそうしたところでまず何にもなるまい。奴らはすっかり逃げてしまつて、もうおしまいだからな。」と彼は言つて、「ただ、私わたしはピュー先生を踏んづけてやったのは愉快だよ。」と言ひ足した。この時までには彼は私の話を聞いて知つていたからである。

私は彼と一緒に「ベンボー提督屋」へ戻つたが、あれほどめちやめちやになつた家は諸君にも想像出来ないくらいである。掛時

計さえも、あいつらが母と私とを乱暴に探し　　つていた間に叩き

落されていた。そして、実際に持つて行かれたものは、船長のあ

の金かねぶくろ囊と、錢箱の中の銀貨が少しとだけではあつたけれども、

私にはすぐに私たちの家うちはもう潰されたということがわかった。

ダンスさんにはこの場の有様が合点がゆかなかった。

「奴らは金を持つて行つたと言うんだね？　ふうん、とすると、

ホーキンス、奴らの探していたのは一体何だい？　もつと金がほ
しかったのかな？」

「いいえ、お金じゃないと思います。」と私は答えた。「実は、

私の胸ポケットに持つている物だと思うのです。実を申しますと、
それを安全なところへ置きたいんですが。」

「なるほどね。いいとも。」と彼は言った。「よければ、私が預つてあげよう。」

「私は、多分、リヴジー先生が——」と私が言いかけた。

「まったくそうだ。」と彼はごく機嫌よく私の言葉を遮った。

「まったくそうだよ、——紳士で治安判事だからね。で、今思いついたんだが、私もあそこへ　　つて、あの人か大地主さんに報告した方がよからう。ピューさんは死んだのだ、何と言ったところだな。と言つて、私はそれを残念に思う訳じゃないが、とにかく彼は死んだんだ。で、世間の人たちはこのことを種にして陛下の税務署の役人を非難するだろう、もし種に出来ればだ。でね、どうだい、ホーキンス。よければ、一緒につれて行つてあげよう。」

私はその言葉に対して心から彼に礼を言った。そして二人は馬の繋いである村へ歩いて戻った。私が自分のつもりを母に話してしまった時分には、一同はもう馬に跨っていた。

「ドツガー、君の馬はいい馬だから、この子を君のうしろ後に乗せてあげ給え。」とダンスさんが言った。

私がドツガーの帶革につかまって馬に乗るや否や、監督官は命令を下し、一行はぽかぽかと早足で街道をリヴジー先生の家へと向った。

第六章 船長の書類

私たちは途中をずっと疾く馬を走らせて、とうとうリヴジー先生の家の戸口の前に停った。家は前面から見ると真暗まっくらだった。

ダンスさんが私に跳び下りて戸を敲いてくれと言ったので、ドツガーのくれた鎧あぶみにぶら下って私は降りた。ほとんどすぐに女中が戸を開いた。

「リヴジー先生はいらっしゃいますか？」と私は尋ねた。

いいえ、と女中は言った。先生は午後帰って来たのだが、お屋敷へ晚餐によばれて行って、今夜は大地主さんと一緒に過している、とのことだった。

「それではそこへ行こう、諸君。」とダンスさんが言った。

今度は、道程みちのりが近かったので、私は馬には乗らずに、ドツガ

ーの 燈あぶみかわ 革 につかまりながら門番小屋附の門まで走って行つた。

そこから、葉が落ちてしまつて、月光に照されている、長い並木路を上つて、屋敷の建物の白い輪廓が大きな古い庭園を両側に見渡している処まで来た。ここでダンスさんは馬から下りて、私と一緒につれてゆき、一言通ずると、家の中へ通された。

下男は私たちを導いてむしろ筵を敷いた廊下を通つてゆき、ついに大きな書斎へと案内した。書棚がぎつしりと列んでいて、その一つ一つの書棚の上には胸像が置いてあつた。そこに、大地主さんとリヴジー先生とが、パイプを手にして、真赤に燃えている炉火の両側に腰掛けていた。

私は大地主さんをそんなに間近に見たことがそれまでに一度も

なかった。彼は六フィート以上もある背の高い人で、それに相応して幅もあり、無骨な豪傑風の顔は、永い間の旅行ですっかり荒れて赤らみ皺がよつていた。眉毛は真黒で、すぐぴりぴり動いた。そのために、怒りっぽいというのではないが、氣短で傲慢といったような顔付に見えた。

「お入りなさい、ダンス君。」と彼はすこぶる嚴かに、また丁寧と言った。

「やあ、今晚は、ダンス。」と医師は頷いて会釈しながら言った。「それから、ジムも、今晚は。どういふ風の吹き　　しでここへやつて来たのかね？」

税務監督官は硬くなつて直立しながら、学課をやるように一部

始終の話をした。すると、二人の紳士がどんなに身を乗り出し、互に顔を見合せ、驚きと興味とのために煙草を吸ふのも忘れていたかは、諸君にお目にかけたかっただくらいであつた。私の母が宿屋へ引返したところまで聞くと、リヴジー先生は腿をぽんと打ち、大地主さんは「えらいぞ！」と叫んで、その途端に持っていた長いパイプを炉の鉄格子にぶつつけて折ってしまった。話のすむ大分前から、トウリローニーさん（というのは、覚えておられるであらうが、大地主さんの名である）は自分の席から立ち上つて、室内を大膽に歩き　　つていたし、医師は、もつとよく聞き取ろうとでもするように、髪粉をつけた仮髪かづらを脱いで腰掛けていて、その短く刈込んだ黒い頭はまったくすこぶる珍妙に見えた。

とうとうダンスさんは話を終った。

「ダンス君、」と大地主さんが言った。「君はなかなか立派な男だ。それから、その腹黒い極悪な不埒者を馬蹄にかけたことは、私は善行だと思ふねえ、君。油虫を踏み潰したようなものだよ。^{わたし}このホーキンズという子も偉い。ホーキンズ、そのベルを鳴らしてくれないか？ ダンス君にビールをあげなくちやならんから。」

「それで、ジム、」と先生が言った。「君は奴らの探していた物を持ってゐるんだね？」

「はい、ここにあります。」と私は言つて、油布の包を彼に渡した。

医師はそれをつくづく眺めながら、開けたくて指をむずむずさ

せていたようだった。が、開けないで、静かに上衣のポケットの中へしまった。

「大地主さん、」と彼は言った。「ダンスはビールを頂戴したら、無論、陛下の御用を勤めに行かねばなりません。しかし、ジム・ホーキンスは私の家^{うち}に泊めるためにここにいさせたいと思いますから、御免を蒙って、冷^{コールド}パイを取りよせて、ジムに夕食を食べさせたいのですが。」

「どうぞ、リヴジー君。」と大地主さんが言った。「ホーキンスは冷^{コールド}パイなんぞよりもっといいものを手に入れたんだ。」

そこで大きな鳩パイが運ばれて側^{サイド}テーブルに載せられ、私は鷹のように空腹だったので、たっぷり食べた。その間にダンスさん

はなおいろいろとお世辞を言われて、やがて引下って行つた。

「ところで、大地主さん。」と医師が言つた。

「ところで、リヴジー君。」と大地主さんが同じ瞬間に言つた。

「一時いちどきにや一人ずつ、一時にや一人ずつ。」とリヴジー先生が

笑つた。「あなたは今のフリントのことを聞いたことがおありで
しような？」

「聞いたことがあるかつて！」と大地主さんが叫んだ。「あるどころじやないさ！ あいつはこの上なしという残忍な海賊だつた。
ブラックピアド

黒髯 (註二二) だつてフリントに比べれあ子供みたいなも

のだつた。スペイン人が彼をべらぼうに恐れておつたので、私は、
実際、時には彼がイギリス人であるのを自慢したこともあつた

らいだよ。私はトゥリニダッド（註二三）の沖であいつの船の中^ト
檣帆^{ツプスル}をこの眼で見たことがあるが、私の乗っていた船の臆病船
長の大馬鹿野郎めが引返したのだ、——引返したんだよ、君、ス
ペイン港（註二四）へな。」

「いや、私も彼のことはイングラントで聞いたことがありますか
ね。」と医師が言った。「しかし要点は、彼は金^{かね}を持っていたら
うか？　ということです。」

「金だつて！」と大地主さんが叫んだ。「君はさっきの話を聞か
なかったのかい？　あの悪党どもの探し　っているのが金でなく
て何だね？　あいつらが金でなくって何をほしがるものかね？
あいつらが碌でなしの命^{いのち}を賭けるのは金でなくって何のためかね

「？」

「それはやがてわかるでしょう。」と医師が答えた。「だがあなたのように滅法に熱してしまつて大声を出されては、私は一言も口を出せませんよ。私の知りたいのはこういうことなんです。このポケットに私の持っているものが、フリントが宝を埋めた場所の何かの手掛りになるとして、その宝は多額のものだろうか？　ということですよ。」

「多額だともさ、君！」と大地主さんは叫んだ。「もし君の今言つたような手掛りがあるとすれば、私はブリストルの波止場で船を一艘艤装して、君やこのホーキンスと一緒につれて行つて、たとい一年かかってもその宝を探し出すつもりだ。それくらいの額

はあるだろうよ。」

「よろしい。」と医師が言った。「それでは、ジムが承知なら、この包を開けてみましょう。」と彼はそれを自分の前のテーブルの上に置いた。包は縫いつけてあったので、医師は自分の器械箱を持ち出して来て、医療鋏で縫目を切らなければならなかった。中には二つの物が入っていた、——一冊の帳簿と、封緘した一枚の紙と。

「まず先に帳簿の方を調べてみよう。」と医師が言った。

彼がそれを開ける時には彼の肩越しに大地主さんも私も二人とも覗きこんでいた。私は、リヴジー先生が親切に手招きしてくれたので、食事をしていた側テーブルを　　って、その詮索の楽しみ

にあずか
に与りに行つていたのである。最初の頁には、ペンを手に持った人が無駄書きか練習にやったような、書き散らした文字があるだけだった。その中の一つは例の文身いれずみの文句と同じ「ビリー・ボーンズ お氣に入り」というのであった。それから、「副船長W・ボーンズ氏」というのと、「ラムもうなくなる」というのと、「パーム礁島（註二五）沖で彼はあいつを貰った」というのがあった。他にも幾つか文句があつたが、大抵は一語のもので読めなかつた。私は、「あいつを貰った」のはだれなのか、またその男の貰つた「あいつ」とは何なのか、不審に思わずにはいられなかつた。大方、背中にナイフでも喰らつたのだろう。

「これあ大して得るところがないな。」とリヴジー先生が言つて、

頁をめくった。

次の十一二頁には、奇妙な記入が一杯にしてあつた。行の一端に日附があり、もう一方の端に金額が書いてあることは、普通の会計簿と同様であるが、しかし、説明の文句の代りに、二つの間にはただ違つた数の十字記号だけが記^してあつた。例えば、一七四五年の六月十二日には、七十ポンドの額が明かにだれかに支払つたことになっているが、その事由の説明としては十字記号が六つ記^してあるばかりであつた。もつとも、「カラカス（註二六）沖」というように場所の名や、または六二度一七分二〇秒、一度二分四〇秒というように単に緯度経度が、書き加えてあるところも少しはあつた。

この記録はかれこれ二十年以上も続いていて、年月がたつにつれて一々の記入高が大きくなつてゆき、終りに、五六度間違つた寄算をした後に総高が出てあつて、「ボーンズの身代」という言葉が書き加えてあつた。

「何のことだか私にはさっぱりわからん。」とりヴジー先生が言つた。

「真昼のように明白だよ。」と大地主さんが大声で言つた。「これはあの腹黒の畜生めの会計簿さ。この十字記号は奴らの沈めた船か掠奪した町の名の代りなんだ。金高はあの無頼漢の貰つた分前だし、それから、曖昧ではいけないと奴さんやつこの思つたところで、何とか幾分はつきりと書き足してあるだろう。それ、『カラ

カス沖』とあるね。これは、その海岸の沖で海賊どもに乗り込まれた不幸な船があつたということなんだよ。可哀そうに、その船に乗っていた人たちはねえ、——とつくの昔に珊瑚になっているだろうよ。（註二七）」

「なるほど！」と医師が言った。「さすがに旅行家は違ったものだ。いや、その通り！　そして、この男の地位が上るにつれて、金高が殖えていますね。」

この帳簿には、その他に、終り近くの白紙のところに記してある二三の場所の方位と、フランスと、イギリスと、スペインの金を共通の価格に換算する表くらいしかなかった。

「^{しまつや}儉約家だ！」と医師が叫んだ。「この男は^{だま}騙されるような人間

じやなかつたですな。」

「ところで今度はもう一つの方だ。」と大地主さんが言った。

紙の方は、封印の代りに指貫ゆびぬきで幾箇処も封緘してあつた。多

分、私が船長のポケットの中にあるのを見つけたあの指貫だろう。医師はその封緘を非常に注意して開けると、ばらりと現れ出たのは、或る島の地図（註二八）で、緯度経度、水深、山や湾や入海の名、それから船をその海岸の安全な碇泊所に入れるに必要らしいあらゆる細目なども書いてあつた。その島は長さ約九マイル、幅五マイルで、肥った竜が立ち上つたといったような形をしていて、陸で囲まれた良港が二つあり、中央部には「遠眼鏡山」スパイグラスと記された山があつた。それより後の日附の書き加えが幾つかあつた

が、とりわけ、赤インクで書いた十字記号が三つあって、「——
その二つは島の北部に、一つは南西部にあり、この後の十字記号
のそばには、同じ赤インクで、船長のたどたどしい筆蹟とはよほ
ど違った」小さな、綺麗な手蹟で、「宝の大部分はここに。」——
——と書いてあった。

裏には、同じ手蹟で、次のようなさらに詳しいことが書いてあ
った。——

「北北東より一ポイント（註二九）北に位して、遠眼鏡の肩、高
い木。

骸骨島東南東微東。

十フィート。

銀の棒は北の隠し場にあり。東高台の傾斜面にて、黒い断巖に面を向けてその十尋南のところに見出すを得。

武器は、北浦の岬の北方、東に位し四分の一ポイント北に寄れる砂丘に容易に見出さる。

J・F。」

これだけだった。が、簡短なものではあり、私には理解の出来ないものではあったけれども、これを見ると大地主さんとリヴジー先生とは大喜びだった。

「リヴジー君、」と大地主さんが言った。「君は厄介な医者商売

なんぞはさつそくやめだね。明日私はブリストルへ立つ。三週間のうち——三週間だぜ！——いや、二週間で——十日でだ、——我々はイギリスでも最上の船とだね、君、それから選り抜きの乗組員を手に入れるのだ。ホーキンスは船室給仕^{ケビンボーイ}になって来るんだ。お前は素敵な船室給仕になるよ、ホーキンス。君は、リヴジ―君、船医だ。私は司令官になる。レッドルースと、ジョイスと、ハンターもつれてゆこう。我々は、順風を受けて、速く航海し、何の苦もなくその場所を見つけ、どうにも出来んほどの——あり余るほどの金を手に入れて、——それからはずっと金が湯水のように使えるようになるんだ。」

「トウリローニーさん、」と医師が言った。「私は御一緒に行き

ますよ。それからジムも行くことは私が請合います。ジムはきつとこの企ての^{ほまれ}誉たる者になるでしょう。ただ、私には気にかかる人が一人だけいます。」

「で、それあだれだい？」と大地主さんが大声で言った。「君、其奴^{そやつ}の名を言い給え！」

「あなたです。」と医師が答えた。「あなたは口を慎めないからです。この紙のことを知っているのは私たちだけじゃありません。あの今晚宿屋を襲った奴らや——確かに大胆な向う見ずの暴れ者たちだが——それから、例の帆^{ラッガー}船に残っていた者どもも、また、恐らくあまり遠くもないところにいるその他の奴らも、みんな、水火を冒してもその金を手に入れようと決心しているんです。私

たちは出帆してしまうまでは一人も離れてはなりません。ジムと私とはそれまでの間くっついていきましょう。あなたはブリストルへ行かれる時にはジョイスとハンターとをつれてお出でなさい。そして、初めからおしまいまで、私たちのだれ一人も、私たちの見つけたものの一言も口にしてはなりません。」

「リヴジー君、」と大地主さんが答えた。「君の言われることはいつも正しい。私は墓のように黙っていますよ。」

第二篇 船の料理番コック

第七章 ブリストルへ行く

海へ出る準備が出来るまでには、大地主さんの想像したよりも永くかかった。また、私たちの最初の計画は一つとして——私をそばに置いておくというリヴジー先生の計画でさえ——思ったように実行されはしなかった。先生は留守の間を預る医者を探しにロンドンへ行かなければならなかった。大地主さんはブリストルで頻りに奔走していた。そして私は、猟場番人のレッドルース爺

さんの監督の下に、ほとんど囚人のようにして、屋敷にずっと住んでいた。だが、海の空想や、見知らぬ島々や冒険などの恍惚となるような予想で、頭は一杯だった。私は例の地図のことを幾時間も打続けて考えた。その地図の細かいところまでみんなよく覚えていたのだ。家事管理人の室の炉火のそばに腰掛けながら、私は、空想の中で、あらゆる方向からその島に近づいて行き、その島の表面を残る隈なく踏査し、^{スパイグレース}遠眼鏡山と言われるあの高い山に千回も攀^よじ登って、その頂上からいろいろに変化する素晴らしい眺望を眺めて楽しんだ。時にはその島は野蛮人で一杯で、それと私たちは闘った。時には危険な獣がたくさんいて、それが私たちを追っかけて来た。しかし、そういうあらゆる空想の中でも、私た

ちが後に實際の冒険で出合つたような奇妙な傷ましい出来事は一つも思い浮ばなかつたのである。

こうして何週間も過ぎていったが、或る日、リヴジー先生に宛てた手紙が一通来た。それには「同氏不在の節はトム・レッドルース又はホーキンズ少年開封の事」と書き添えてあつた。この命令に従つて、私たちは、というよりもむしろ私は——というのは猟場番人は印刷した物の他は^{ほか}うまく読めなかつたからであるが——次のような重大な知らせを読んだ。——

「二七——年三月一日

ブリストル、
オールド・アンカー
古 錨

旅宿にて。

リヴジー君、——小生は貴下が屋敷に居られるか、それともまだロンドンに居られるかわからないので、この手紙を両地へ二通出します。

船は購入して艤装してあります。いつでも出帆出来るように準備して、碇泊している。あれより気持のよいスクーナー船（註三〇）は貴下にも想像出来ないでしょう。——子供でも操縦が出来るかも知れない。——二百トンで、名はヒスパニオーラ号。

この船は小生の旧友ブランドリーの周旋で手に入れたもので、彼は始めから終りまで実によくしてくれています。この感心な男は小生のために一心に働いてくれました。それからまた、ブリストルの人々も、我々の目指している港のことを——というのは宝

のことだが——嗅ぎつけるや否や、だれも彼も非常によく働いてくれたと言つてもよいでしょう。」

「レツドルースさん、」と私は手紙を途中で止めて言つた。「リヴジー先生はこんなことは喜ばれますまいよ。あんなに言つてあつたのに、大地主さんはやつぱりしやべつておしまいになつたんだね。」

「ううん、うちの旦那さまより偉え^{えれ}人があるかな？」と猟場番人は唸るように言つた。「大地主さんがリヴジー先生に遠慮してものが言えねえなんて、そんなべらぼうな話があるもんか。」

そう言われたので私は説明するのは一切やめて、すぐに読み続けた。——

「ブランドリー自身がヒスパニオーラ号を見つけて、非常にうまく掛合つてごく安価で手に入れてくれたのです。ブリストルにはブランドリーをひどく毛嫌いしている連中もいます。彼等は、この正直な男を、金のためには何でもやるとか、ヒスパニオーラ号は彼のものだったのを、馬鹿に高い値で小生に売りつけたのだ、などとまで言います。——実に見え透いた中傷だ。だが、彼等の中の一人だつて、この船の真価を否定する者はありません。

今までのところは一つ故障もありませんでした。もつとも、職工たちは——艀装人や何やらは——じれったいくらいのろろしていた。が、それは時のたつうちにどうにかなった。小生を

悩ませたのは乗組員でした。

小生はちょうど二十人ほしいと思いました、——土人や、海賊や、またはかの憎むべきフランス人に襲われた場合の用意にです。——そして六人だけ見つけるのにさえ非常に苦勞をしました。ところがそのうちに実に素敵な幸運で小生は正に自分の必要とする男にめぐりあつたのです。

小生は波止場に立っていたのですが、その時、ほんのちよつとした偶然の機会で、その男と口を利くようになりました。聞いてみると、以前船乗をやっていた男で、今は居酒屋をやっているが、ブリストル中の船乗をみんな知っている、陸で健康を害したので、もう一度海へ出るために料理番としてのよい口を得たい、という

ことでした。彼の言うところでは、その朝は潮しおの香を嗅ぎにそこへやって来ていたのだそうです。

小生は非常に感動して、——貴下ももし居られたらそうだったでしょう、——そして、ただ気の毒と思う情から、その場で彼を船の料理番に雇い入れました。のっぽのジョン・シルヴァーと彼は呼ばれています。そして脚が一本ありません。しかしこのことは推薦状だと小生は見倣みなしました。彼はかの不朽の名声あるホーク（註三一）の下で国家の為に働いてその片脚をなくしたのだからです。ところが彼には扶助料がついていないんだよ、リヴジー君。今は何という怪けしからん時代だろう！

ところで、君、小生は料理番を一人見つけただけだと思ったの

だが、しかし実は小生の発見したのは全乗組員であつたのです。シルヴァーと小生と二人で数日の中にこの上なしの倔強な老練な水夫の一団を集めたのです。——見た目はよくはないが、その面^つらつき付から察すれば実に性根^{しょうね}のしつかりした奴らです。これならきつと軍艦でも動かせるよ。

のつぽのジョンは小生のすでに雇い入れておいた六七人の中から二人を除けさえました。彼は、彼等が大事な冒険には恐れなければならぬあの海に慣れぬ奴らだということを、直ちに小生に見せてくれました。

小生は、牡牛の如く^{ごと}に食い、丸太の如くに眠つて、素晴しく健康で元気です。しかし、わが老練な水夫君らが揚錨絞盤^{キャプスタン}の周りを

足踏み鳴らして歩き　　る（註三二めを聞くまでは、小生は一刻をも享楽しないでしょう。さあ、海へ！　宝なんぞはどうだっていい！　小生を夢中にさせているのは海の輝きだ。だから、リヴジー君、大急ぎでやって来給え。もし貴下が小生に敬意を持つならば、一時間も無駄にし給うな。

ホーキンス少年は、レッドルースを守護役にして、母親に会いにやって下さい。それから二人とも全速力でブリストルへよこして下さい。

ジョン・トゥリローニー。

追伸。——書き洩したが、ブランドリーは航海長に素晴らしい男を見つけられました。——頑固な男なのは残念だが、しかし他

のあらゆる点では宝のような人物だよ。ブランドリーで思い出したから序に書いておくが、彼はもし我々が八月末までに帰って来ない場合には伴ともぶね船を後からよこすことになっている。それから、のつぽのジョン・シルヴァーは副船長にすこぶる有能な男を発見した。アローという名の男だ。また、呼子を吹いて号令する正式の水夫長ボースンもいるよ、リヴジー君。だから、ヒスパニオーラ号では万事軍艦式にやります。

書くのを忘れていたが、シルヴァーは財産家です。小生は彼がまだ一度も借越したことの無い銀行通帳を持っているのを知っています。彼は細君を残して宿屋の方をやらせるそうだ。そしてその細君というのは黒人なんだから、貴下や小生の如ごとき永年の独身

者は、彼がまた海へ出ようとするのは、健康のためと同じく細君のためだと推量しても、もつともな次第だ。

J・T。

再追伸。——ホーキンスは母親の許で一晩泊つてもよろしい。

J・T。
」

この手紙がどんなに私を興奮させたかは諸君も御想像出来るであらう。私は嬉しくて我を忘れるくらいであつた。そしてもし私がだれかを軽蔑したことがあるとするなら、それはトム・レッドルース爺さんだつた。彼はただぶつぶつ言ったり泣言を並べたりするだけだつた。猟場番人の下働はだれでも喜んでレッドルース

と地位を代えたらう。がそれは大地主さんの意向ではなかった。そして大地主さんの意向は彼等みんなの間では法律のようなものであったのだ。レッドルース爺さんの他にはぶつぶつ不平を言う者さえだれ一人もいなかったらう。

その翌朝、爺さんと私とは徒歩で「アドミラル・ベンボー提督屋」へ向つ

た。行つてみると母は丈夫で元気だった。永い間あれほどの苦労の種だった船長は、もう悪しき者虐遇あしひたげを息める処や（註三三）へ行つてしまった。大地主さんは、何もかも修繕させ、食堂などや看板も塗り換えさせ、家具も幾つか買い足してくれた。——とりわけ、帳場には母のために美しい臂掛椅子が一脚買つてあった。それからまた、私が出かけて行っている間母に手不足がないよう

にと、小僧として子供を一人見つけて来ておいてもあつた。

この子供を見ると、私は初めて自分の立場がわかつた。その瞬間までは私は目前の冒険のことばかり考えて、後に残してゆく家^{うち}のことはちつとも考えていなかった。それが、今、この不器用などこかの子供を見て、これが母のそばに私の代りになつてここにいるのかと思うと、初めて涙がこみ上げて来た。私はその子供に苦勞させたかも知れない。というのは、彼はその仕事には新米で、私は何回となく機会のある度に彼を直してやつたり叱つたりしたし、そういう機会をつかまえることにかけては私は迂濶な方ではなかつたから。

その夜が過ぎて、次の日、昼食の後に、レッドルースと私とは

再び徒歩で街道へ出た。私は、何と、生れて以来住み慣れた入江と、懐しい「ベンボー提督」——彼は塗り換えられていたので、もうさほど懐しくはなかったが——とに、さよならを言つた。最後に私の心に思い浮んだものの一つは、縁反帽ふちぞりぼうをかぶつて、頬にサーベル傷をつけ、真鍮の古い望遠鏡を抱えて、たびたび浜辺を大膽に歩いていたあの船長のことであつた。間もなく私たちは角を曲つたので、私の家は見えなくなつた。

たそがれ黄昏頃、灌木の生い茂つた荒地にある「ロイアル・ジョージジョージ王屋」の

ところで、私たちは駅逋馬車に乗り込んだ。私はレッドルースとでつぷり太つた老紳士との間に挟み込まれた。そして、馬車は疾く動いていたし夜気は冷かつたにも拘らず、私は最初からよほど

うとうとしていて、やがて、宿駅から宿駅へと丘を上り谷を下りながら、ぐつぐつと丸太のように眠ったに違いない。というのは、横腹を^{ひじ}肱でつかれてようやく目を覚し、眼を開けて^あ見ると、馬車は或る都会の街路の大きな建物の前に止っていて、夜はもうとつくに明けていたからである。

「どこですか？」と私は尋ねた。

「ブリストルさ。」とトムが言った。「降りるんだよ。」

トゥリローニーさんは、スクーター船での作業を監督するため、波止場のずっと下手にある宿屋に泊っていた。で、そこまで私たちは歩いて行かねばならなかったが、その途は埠頭に沿うていて、小ささまざまの、いろいろの艀装の、あらゆる国々の船が

無数にいるそばを通つてゆくので、私の嬉しきは非常なものだつた。或る船では、水夫たちが歌いながら作業をしていた。また或る船では、檣や帆桁などの、私の頭上高いところに、蜘蛛の巣ほどに細く見える索にぶら下つている人たちがいた。私は生れてからずっと海浜に育つて来たのではあるが、それまでは海の近くにいたことが一度もなかったような気がした。タールや潮しおの香も何か物珍しいものだった。私は、いずれも遠く大洋を渡つて来た、実に珍奇な船首像を見た。また、耳に環を嵌はめ、頬髯をくるくるとちぢらせ、タールまみれの弁髪を下げて、肩で風を切りながら、不ぶ恰かつ好こうな水夫歩きをやっている、老練な水夫たちをたくさん見た。たといそれだけの人数の王様や大僧正を見たに似たところで、

私はそれ以上に喜びはしなかったろう。

そして私自身も航海に出ようとしているのだ。呼子を吹いて号令する水夫長や、弁髪を垂れて船唄を歌う海員たちと一緒に、スクーナー船に乗って航海に出ようとしているのだ。まだ知らない島へ向けて、埋められた宝を捜しに、航海に出ようとしているのだ！

私がおもこういう喜ばしい夢想到に耽っている間に、私たちは不意に或る大きな宿屋の前へ出て、大地主のトゥリローニーさんに出会った。大地主さんは、丈夫な青い服を着用して、すっかり船の士官のように着飾り、顔をにこにこさせながら、水夫の歩き方を素敵にうまく真似て、戸口から出て来るところだった。

「やあ、やって来たな。」と彼は叫んだ。「先生も昨夜ロンドンから来られたよ。万歳！これで船の乗組員がすっかり揃ったぞ！」

「おお、そうですか。」と私は叫んだ。「でいつ出帆するんですか？」

「出帆か！」と彼は言った。「うむ、明日^{あす}出帆するんだ！」

第八章 「遠眼鏡屋」^{スパイグラス}の店で

私が朝食をすませると、大地主さんが「遠眼鏡屋」^{スパイグラス}の店のジョーン・シルヴァーに宛てた手紙を一通私に渡して、波止場に沿うて、

大きな真鍮の望遠鏡を看板にした小さな居酒屋をよく気をつけて行けば、訳なくそこが見つかる、と言ってくれた。私は、船や水夫をもっと見られる機会が出来たのに大喜びで、出かけてゆき、ちようど波止場が今が一番忙しい時だったので、人や車や荷物がひどく込合っている間を拾い歩きし、やがてその居酒屋を見つけた。

それはなかなか立派な小ぢんまりした酒場だった。看板は近頃塗り換えたもので、窓には瀟洒な赤いカーテンが掛っており、床ゆかには綺麗に砂が撒いてあった。両側に街路があり、どちら側にも開け放した扉ドアがあつたので、その天井の低い大きな室は、煙草の煙が濛々としていたのに、かなりよく見通された。

客は大部分船乗だった。そしてずいぶん大きな声でしゃべり合っているの、私は、入ってゆくのが怖いこわような気がして、戸口でためらっていた。

そうしてぐずぐずしている時に、一人の男が脇の室から出て来たが、私は一目でそれがのっぽのジョンに違いないと思った。左の脚がほとんど股のつけ根のところから切れており、左の腋の下に梶杖かぜづえ（註三四）を持っていて、それを驚くべく器用に扱い、それをあてて鳥のようにぴよんぴよん跳び　　っていた。大麿たけが高くて厳乗な男で、顔はハムのように大きく、——不器量で蒼白いが、利口そうでにこにこしていた。実際、非常に機嫌がよいらしく、口笛を吹きながらテーブルの間を動き　　りひいき鼠兎の客人た

ちには愛想のいい言葉をかけたり、その肩をぽんと叩いたりしていた。

さて、実を言うと、私は、大地主のトゥリローニーさんの手紙にのつぽのジョンのことを書いてあるのを見た実に最初の時から、その男こそ私が「アドミラル・ベンボー提督屋」で永い間見張っていたあの

一本脚の水夫ではあるまいかと、心の中で恐れを抱いていたのであった。しかし今目前にいる男を一目見ただけで十分だった。私は船長や、ブラック・ドッグ黒犬や、盲人のピューを見ていたので、海賊

がどんなようなものかということは知っているつもりだった。――海賊とは、私の考えによれば、このさっぱりした快活な気質の亭主とはまるで違った人間なのだ。

私は直ちに勇氣を出して、^{しきい}鬨を跨ぎ、その男が棹杖に凭れながら一人の客と話している処へ、まっすぐに歩いて行つた。

「シルヴァーさんですね？」と私は尋ねて、手紙を差し出した。

「そうですよ。」と彼が言つた。「いかにも、それがわっしの名でさあ。してあんたはだれですかね？」それから大地主さんの手紙を見ると、彼は何かぎよつとしたように私には思われた。

「おお！」と彼は、手を差し出しながら、大層大きな声をして言つた。「なるほど。君はわっしたちの今度の船室給仕だね。やあ、初めて。」

そして彼は私の手を大きな掌の中にしっかりと握つた。

ちようどその時、ずっと向うの方にいた客の一人が、急に立ち

上つて、扉の方に進んだ。その扉は彼のじきそばにあったので、彼はすぐに街路へ出てしまった。しかしそのあわただしい様子が私の注意を惹き、私は一目でそれがだれだかわかった。それは、「ベンボー提督屋」へ最初にやって来た、指の二本ない、あの蒼白い顔をした男だった。

「おお、あいつを止めて！ あれは ブラック・ドッグ 黒犬だ！」と私は叫んだ。

「だれだろうと構やしねえが、しかし奴あ勘定を払ってねえんだ。おい、ハリー、走ってって奴を掴めえてくれ。」とシルヴァーが叫んだ。

するとその扉の一番近くにいた中うちの一人が跳び立って、後を追

っかけて行つた。

「よしんば奴がホーク大将にしる勘定は払わせてやる。」とシルヴァーが吠^{どな}鳴つた。それから私の手を放して、——「奴がだれだと言いなすつたかね？」と尋ねた。「黒、^{ブラック}何だったかね？」

「犬^{ドッグ}ですよ。」と私は言つた。「トウリローニーさんはあの海賊どものことを話しませんでしたか？ あいつはあの中の一人でしたよ。」

「そうかい？」とシルヴァーが叫んだ。「わっしの店にそんな奴が！ ベン、お前^{めえ}走つてつてハリーに加勢^{めえ}してくれ。あの馬鹿どもの一人だったのか、奴が？ モーガン、奴と飲んでたのはお前だったな？ ここまでやって来い。」

モーガンと呼ばれた男——年寄の、白髪の、マホガニー色の顔をした水夫——は、かみたばこ 嚙煙草をもぐもぐやりながら、大分おずおずして出て来た。

「ところで、モーガン、」とのつぽのジョンはすこぶるいかめ 厳しく言つた。「お前はあブラックの黒——ブラック・ドッグ 黒 犬 を前に一度も見たことがねえな、え、そうだろ？」

「ねえんですよ。」とモーガンは言つて、お辞儀をした。

「お前は奴の名前なまえを知らなかったんだな、そうだろ？」

「そうですよ。」

「よし、トム・モーガン、そいつあお前のためにや結構なこつた！」と亭主は大声で言つた。

「もしあんなような奴とつきあつてたんなら、二度と己の家へ足おれうちを入れさすんじゃないやなかつたぞ。そいつあ間違えまちげつこなしだ。で、奴あお前に何と言つてたい？」

「おいらはほんとに知らねえんですよ。」とモーガンは答えた。

「お前の肩の上にのつかつてるのは、そりやあ頭か、それとも三み孔滑車つめせみ（註三五）か？」とのつぽのジョンは呶鳴どなりつけた。「ほ

んとに知らねえんですだと、ほんとに！ 多分お前はだれと話してたのかほんとに知らねえっていうんだろ、多分な？ おい、こら、あいつは何のことをしやべつてたんだ、——航海こうけえのことか、船長せんちょうのことか、船のことか？ さつさと言つてみる！ 何の話だつた？」

「船底潜らせふなぞこもぐ（註三六）のことを話してたんでさ。」とモーガンが答えた。

「船底潜らせだと？てえそう 大層お似合なこったよ。違えねえや。ちげ 元んとこへ戻れ、トムの間拔野郎め。まぬけ」

そして、モーガンが彼の席へよろめき帰ると、シルヴァーは私に内証話のような囁き声で言つたが、それは非常に諂へつらうような調子に私には思えた。――

「あれあとでも正直者なんだよ、あのトム・モーガンはね。ただ頓馬とんまなだけでね。ところで、」と彼は声高に再びしゃべり続けて、

「待てよ、――ブラック・ドッグ 黒犬と？ いいや、己あそんな名前は知らねえ。知らねえとも。だが、どうやら見たような気が――そう

だ、見たことがある、あの野郎を。あいつはよくここへ盲乞食と一緒に来たぞ。うん、よく来たよ。」

「そうですよ、間違いありません。」と私は言った。「僕はその盲人めくらも知っています。ピューという名前でしたよ。」

「そうだった！」とシルヴァーは今はまったく興奮して叫んだ。

「うん、ピューだ！ 確かにそういう名前だった。ああ、あいつはぺてん師らしかったな、まったく！ とにかく、もしあの黒犬をつかめえれば、トゥリローニー船長せんちよに、いいお知らせが出来る訳だぞ！ ベンはなかなか走る男だ。水夫にやあベンくれえよく走る男はあんまりいねえ。あの男なら訳なく奴に追いつくだろう、きつとな！ 奴は船底潜らせのことを話してたと？ この己

が奴に船底潜らせをやってやるぞ！」

彼は、こういう文句を吐き出すように言っている間、始終、柶杖で店をあちこちとぴよんぴよん歩き　　りながら、手でテーブル

を叩いたり、中央刑事裁判所（註三七）の裁判官やボー街（註三

八）の警吏でも得心させそうなくらいの興奮した様子を見せたりしていた。「遠眼鏡屋」で黒犬を見てから私の例の疑念はすつか

り再び呼び覚まされていたので、私はその料理番をよく気をつけて

注視していた。しかし、彼は私などにわかるには余りに心が深く、

余りに悟り早く、余りに利口だった。そして、さっきの二人の男

が息を切らして戻って来て、追っかけて行つた奴を人込みの中で

見失ってしまったと言って、まるで泥棒などのように呶鳴りつけ

られている頃には、私はのつぽのジョン・シルヴァーの潔白なことを請合つてもいいくらいの気持になつていたのであつた。

「ねえ、ホーキンス、」と彼は言つた。「俺^{わし}のような人間にもこんな情ねえ辛^{つれ}えことがあるんだ。わしなあ、そうじゃねえかい？

トゥリローニー船長がねえ、——あの方^{かた}はどう思いなさるかな

あ？ いめいめしいあん畜生めが、俺^{うち}の家に坐りこんで、俺んと

このラムを飲んでやがったなんて！ そこへ君がやつて来て、そ

いつをはつきり言つてくれたのだ。それなのに俺は、このいまい

ましい眼の前で、みすみす奴を逃がしちまつたんだ！ で、ホー

キンス、君は船長さんと一緒に俺を公平に判断しておくれ。君は

子供だ。子供じゃあるが、ペンキみてえにはしっこい。それは君

が初めて入つて来た時に俺にやあちゃんとわかつてるんだ。で、
こういう訳だよ。こんな古棒ぼうぎれ片についてぴよつこぴよこ歩いて
る俺に、何が出来るかね？ 俺も丈夫な船長だった時なら、すぐ
に訳なく奴に追つついて、さつそくひつ捕えてくれるんだ。そう
ともよ。だがこれじゃあ——」

と言いかけて、突然、言葉を切り、そして、何かを思い出した
ように口をあんどぐり開けた。

「勘定を！」と彼は喚いた。「ラムが三杯だ！ えい、こん畜生、
勘定のことを忘れちまうなんて！」

そして、腰掛にどかんと腰を落して、彼は涙が頬を流れ落ちる
まで笑いこけた。私もそれにひきこまれずにはいられなかった。

そして私たちは一緒に笑い続けたので、酒場中が鳴り響いた。

「やれやれ、己も何てやくざな老いぼれ水夫になったものだろう！」と彼はようやく頬を拭いながら言った。「君と俺とは仲よくしような、ホーキンス。これじゃ俺もきつと船のボーイ並なみに扱われるだろうからねえ。だが、さあ、出かける用意をし給え。こうしちやいらねえ。義務は義務だ、なあ君。俺も自分の古ぼけた縁反帽をかぶって、君と一緒にトゥリローニ船長んとこへ行って、この事件を報告するでしょう。なぜって、いいかい、これあ大事件なんだからね、ホーキンス君。そして、君だって俺だって、信用っていったようなものでは、これはどうもすまさんこれとだからね。君だってそう思うだろう。利口じゃなかったな、――

―俺たち二人とも利口じゃなかったさ。だが、畜生！ あの勘定を取り損うなんてうめえ洒落だったよ。」

そして彼は再び笑い始めた。余り心から笑うので、私は彼のようにその洒落はわかりはしなかったけれども、また彼と一緒に笑って笑い興ぜずにはいられなかった。

埠頭に沿うて二人がしばらくの道を歩いてゆく間も、彼は実に面白い連^{つれ}になってくれた。途にあるいろいろの船について、その艤装や、トン数や、国籍などを言ってくれたり、やっている作業を――これは荷卸ししているのだとか、あれは船荷を積み込んでいるところだとか、あれは出帆しようとしているのだとか――説明してくれたりした。また時々、船や水夫などのちよつとした

逸話を話してくれたり、海語を私がすっかり覚えこんでしまうまで繰返して言ってくれたりした。私はこれは実にいい船友達が出来たものだと思い始めた。

宿屋に着くと、大地主さんとリヴジー先生とは一緒に着席していて、スクーナー船を検査に行く前に、祝杯にクオート（註三九）のビールを飲み終えたところであつた。

のつぽのジョンは、例の話を、初めから終りまで、非常に熱心に、またまったくありのままに話した。「そういうわけでした。ね、そうだったね、ホーキンス？」と彼は時々言い、私はその度にまったくその通りだと言うことが出来た。

二人の紳士は黒犬が逃げたのを残念がった。が私たち皆はどう

も致し方がないということに意見が一致した。そして、お愛想を言われてから、のつぽのジョンは梶杖を取り上げて出て行つた。

「今日の午後四時までに全員乗船だぜ。」と大地主さんが彼の後から嘸鳴^{どな}つた。

「はいはい。」と料理番は廊下で叫んだ。

「いや、大地主さん、」とリヴジー先生が言つた。「私は概してあんたの発見されたものにはあまり信を措きませんが、これだけは言えますな？ ジョン・シルヴァーは氣に入りましたよ。」

「あの男はまったく頼もしい奴さ。」と大地主さんが断言した。

「ところで、ジムも一緒に船へ来てでもいいでしょうな？」と先生が言い足した。

「無論いいとも。」と大地主さんが言った。「帽子をお持ち、ホーキンズ。船を見にゆくんだ。」

第九章 火薬と武器

ヒスパニオーラ号は少し沖に碇泊していたので、私たちはたくさん他の船の船首像の下を通ったり船尾を　　ったりしてゆき、それらの船の錨索が、時には私たちの舟の竜骨キールの下で軋り、時には私たちの頭上で揺れ動いた。しかし、とうとうヒスパニオーラ号に横附けになり、上ってゆくと、副船長のアローさんが出迎えて挨拶した。日に焦やけた老海員で、耳に耳環をつけ、眇すがめだった。

この人と大地主さんとはごく親しくて仲がよかったが、トウリロ―ニーさんと船長との間は同じようにいつていないことに私は間もなく気づいた。

船長は鋭敏らしい人であつた。船の中のことには何もかも腹が立っているような様子で、間もなくその理由を私たちに話すことになつた。私たちが船室ケビンの中へ下りてゆくかゆかぬに、一人の水夫が後からついて来たのである。

「スモレット船長がお話申したいとのことと。」と彼が言つた。

「私はいつでも船長の命令の通りにする。お通ししろ。」と大地主さんが言つた。

船長は、その使者のすぐ後にいたので、直ちに入つて来て、扉ドア

を背後に閉め^した。

「で、スモレット船長、どうい^うお話ですか？　万事うまくい^っていてほしいものだが。万事きちんと整頓して航海にさしつか^えないようになつていますか？」

「は、」と船長が言つた。「たとい御立腹を蒙つても、はつきり申し上げた方がよいと思ひます。私^{わたし}はこの航海を好みません。船員を好みません。それから副船長を好みません。これが手つ取り早いところ^すです。」

「多分、君はこの船も好ま^んの^だらう^うね？」と大地主さんが尋ねた。大層怒つてゐるのが私にはわかつた。

「まだ^{ため}験してみないので、それは何とも申し上げられません。」

と船長は言った。「結構な船のようです。それ以上は言えませんか？」

「恐らく、君は君の雇主も好まんのかも知れんね？」と大地主さんが言った。

しかしここでリヴジー先生が口を入れた。

「ちよつと待つて下さい、」と彼は言った。「ちよつと待つて下さい。そういうような質問は感情を害するばかりで何にもなりやせん。船長は言い過ぎているか、あるいは言い足りないのです。で、私は船長の言葉について説明を求めなければなりません。あなたはこの航海を好まないと言われますね。で、それはなぜですか？」

「私は、いわゆる封緘命令（註四〇）で、その方のためにかた
が命ぜられる処へこの船をやるのに雇われたのです。」と船長が
言つた。「そこまでは結構です。しかし私には今わかつたのです
が、平水夫たちが一人残らず私の知っている以上のことを知つて
おります。これは公平じゃないと私は思います。公平だと思ひ
ですか？」

「いや、思いませんな。」とリヴジー先生が言つた。

「次にです。」と船長が言つた。「私は我々が宝を探しに行くの
だということを聞いております——それも、いいですが、私自身
の部下から聞いたんですよ。ところで、宝というものはなかなか
気をつけねばならないものです。私は宝探しの航海はどうしても

好みません。しかも、それが秘密の航海で、その上（トウリローニーさん、失礼ですが）その秘密が鸚鵡おうむにまで話してあるのでは、ますます好みません。」

「シルヴァーの鸚鵡にかね？」と大地主さんが尋ねた。

「まあものの譬えがです。」と船長が言った。「べらべらしやべつである、という意味です。どうもあなた方はお二人とも御自分のしようとしておられることがおわかりでないと思いますが、私の考えを申し上げます、——生きるか死ぬるか、際きわどい仕事ですよ。」

「それはまったく明かなことです。そして多分その通りでしょう。」とリヴジー先生が答えた。「私たちはその危険を冒している。

が、私たちはあなたの思っておられるほどに物識らずではありません。次に、あなたは乗組員を好まないと言われますね。あれらはよい水夫じゃありませんか？」

「私は好まないのです。」とスモレット船長は答えた。「その段になれば、私は自分の部下は自分で選ぶべきだったと思います。」

「多分そうあるべきだったでしょう。」と医師が答えた。「私の

友人は、多分、乗組員を選ぶ時にはあなたにも一緒に来て頂くべきであつたでしょう。しかし、あなたを軽んじたようなことがよしあつたにしても、それは何気なくやつたことで、故意ではありません。それから、あなたはアロー君も好まないのですね？」

「好みません。あれはよい海員だとは信じます。が、乗組員と狎な

れなれ

々し過ぎるので、よい高等船員とは申されません。副船長というものは交際を避けておるべきです、——平水夫と酒を飲んだりなぞすべきじゃありません！」

「あの男が酒を飲むというのかね？」と大地主さんが大声で言つた。

「いいえ。ただ親しみ過ぎるといっただけで。」と船長が答えた。

「なるほど。で、船長、結局のところは？」と医師が尋ねた。

「あなたの希望されることを言つて下さい。」

「さよう。あなた方は飽くまでこの航海をおやりになる決心ですか？」

「断然。」と大地主さんが答えた。

「よろしい。」と船長が言った。「それなら、私が自分の証明出
来ないことを言っていたのをこれまで我慢して聞いて頂いたので
すから、もう少し言うのを聞いて下さい。彼等は火薬と武器とを
前部船艙に入れています。ところで、この船室ケビンの下によい場所が
あります。なぜそこへ入れないのですか？——これが第一の点。
それから、あなた方は四人の従者をつれてお出ですが、その中
には前の方で寝ることになっている人もあるそうです？　なぜこ
の船室のそばの棚バス寢床に寝させないのですか？——これが第二
の点。」

「まだあるのかな？」とトゥリローニーさんが尋ねた。

「もう一つです。」と船長が言った。「もう秘密が洩され過ぎて

います。」

「非常に洩され過ぎていますな。」と医師が相槌を打った。

「私が自分の耳で聞いたことを申し上げましょう。」とスモレッツト船長が続けて言った。「あなた方は或る島の地図を持っておられるそうです。その地図には宝のある処を示すのに十字記号がついているそうです。そしてその島の在る処は——」と言つてその緯度と経度とを正確に挙げた。

「私はそれを言ったことは決してない、だれ一人にも！」と大地主さんが叫んだ。

「でも船員は知っております。」と船長が返答した。

「リヴジー君、それは君かホーキンスかに違いない。」と大地主

さんが叫んだ。

「だれが言ったかということは大したことじゃありません。」と医師が答えた。そして私にはわかったが、医師も船長もどちらともトウリローニーさんの抗弁には大して顧慮しなかった。実際のところ、私だってそうだった。大地主さんは実に口に締りのないおしゃべり屋だったから。だが、この場合には私はほんとうに彼の言った通りだろうと思うし、まただれも島の位置まで言った者はなかったのだと思う。

「ところで」と船長が続けて言った。「私はどなたがその地図を持っておられるかは存じません。しかし、それは私やアロー君にだって秘密にしておいて頂きたいと、私は主張します。でなければ

ば私は辞職させて頂きたいと思ひます。」

「なるほど。」と医師が言つた。「あなたは私たちに、その事を秘密にしておいて、それから、ここに私の友人の従者たちを置き、船内のすべての武器と火薬とを備えて、船尾の部分を守備所にして貰いたい、と言われるのですね。つまり、あなたは暴動を氣遣つておられるのですね。」

「もしもし、」とスモレット船長が言つた。「別に氣を悪くするつもりではありませんが、言うべきことを私に教えられる権利はお持ちにならなはずです。もし船長にそんなことが言えるだけの根拠があれば、まったく航海などする理由はない訳でしょう。アロー君のことを言えば、あれはまったく正直な男だと私は信じて

います。船員たちの或る者もそうです。いや、みんな案外正直者かも知れません。しかし、私はこの船の安全とこの船に乗っている人一人残らずの生命について責任があります。どうも、私の考えるところでは、万事が十分よくいっていないようです。それであなた方に確実な予防手段を執って頂きたいというのです。でなければ私に職を罷めさせて下さい。これだけです。」

「スモレット船長、」と医師は微笑しながら言い始めた。「大山鳴動して鼠一匹という寓話を聞かれたことがありますか？ 失礼ですが、あなたはその寓話を思い出させます。あなたがここへ入って来られた時には、私は自分の仮髪かつらを賭けて言うが、それ以上のことを心に思っておられたのでしょうか。」

「先生、」と船長が言った。「あなたは賢い方かたです。私がここへ来ました時には、解職させて頂くつもりでした。トゥリローニさんが一言ことでもお聞きになろうとは思いませんでしたから。」

「いかにも聞きはしなかったろうさ。」と大地主さんが叫んだ。

「リヴジー君がここにいなかったら、私は君を叩き出してでいたろうよ。が実際は、このように君の言うことを聞いてやったのだ。で、まあ、君の望む通りにするでしょう。しかし、君のことはよく思わんよ。」

「それは御随意です。」と船長が言った。「私は自分の義務は果してお目にかけます。」

そう言うとき彼は立去った。

「トウリローニーさん、」と医師が言った。「案に相違して、あなたはこの船に二人も正直な人間を乗せましたね、——あの人とジョン・シルヴァーと。」

「シルヴァーはそう言いたければ言ってもいいさ。」と大地主さんが叫んだ。「が、あの我慢の出来んいかさま師のことなら、私は断言するが、あの男の振舞は男らしくない、海員らしくない、全然イギリス人らしくない、と思うよ。」

「まあ、今にわかるでしょう。」と医師が言った。

私たちが甲板へ出て来た時には、水夫たちはもう、よいこら、よいこらと掛声をしながら、武器と火薬とを運び出しにかかつていて、船長とアローさんがそばに立って監督していた。

今度の配置はまったく私の氣に入った。スクーナー船全部が検査された。中部船艙の後の部分であつたところに、六箇の棚寢床バスが船尾に拵えてあつた。そしてその一組の船室は左舷の側にある円材（註四一）の出ている廊下で厨室と前甲板下水夫部屋フオークスルとに続いているだけだつた。初めは、船長と、アローさんと、ハンターと、ジョイスと、医師と、大地主さんがこの六つの棚寢床を占めることにきまっていたのであつた。ところが今度は、レッドルースと私とがその中の二つに入ることになり、アローさんと船長とが甲板の船室昇降口室コムパニオンで寝ることになった。そこは両側とも拡張ラウインドハウスされていて、最上後甲板下船室と言つてもいいくらいであつた。もちろん、やはり天井はごく低かつた。が二つの吊床ハンモックを吊つるす

だけの余地はあった。そして副船長でさえこの配置には喜んでい
たようだった？ 多分、彼でさえ乗組員には疑いを抱いていたの
であろう。だがこれはただ推量である。というのは、後にわかる
ように、私たちは永くは彼の世話にならなかつたのだから。

私たちが皆一所懸命に働いて、火薬と棚寢床とを移していると、
その時、船員の最後の一二人と、のつぽのジョンとが、はしけ艇でやつ
て来た。

コック料理番は猿のようにうまくふなばた舷側を上つて来て、やっているこ
とを見るや否や、「おや、兄きようでえ弟！ これあ何だい？」と言っ
た。

「火薬の場所を変えてるんだよ、ジャック。」と一人が答えた。

「やれやれ、何てこった。」とのつぽのジョンが叫んだ。「そんなことをしていちやあ、きつと明日あすの朝の潮時しおどきをはずしちまうぜ！」

「俺わしの命令さ！」と船長がぶつきらぼうに言った。「お前は下へ行くがいい。みんなが夕食を待っているだろう。」

「はいはい。」と料理番は答えた。そして前髪に手を触れる敬礼をして、すぐ厨室の方へ姿を消した。

「あれはよい男ですね、船長」と医師が言った。

「そうかも知れませんか。」とスモレット船長は答えて、「おい、それはゆつくりやれ、ゆつくり。」と火薬を運んでいる連中に向かって続けてしゃべった。それから突然、私たちが船の中央部に運

んで来た旋回砲、真鍮の九ポンド砲を私が調べているのを目に留めると、——「こら、その給仕^{ボーイ}、そこにいちやいかん！ 料理番^{コック}のところへ行つて何か手伝いをしろ。」と呶鳴^{どな}つた。

それで私は急いで駆けてゆくと、彼がずいぶん大きな声で医師にこう言うのが聞えた。——

「私にはこの船で氣に入つた者は一人も出来すまいよ。」

確かに、私は大地主さんとまったく同感で、船長を心の底から憎んだ。

第十章 航海

その夜は一晩中、私たちはいろいろの物をその各の場所にしま
いこむのに大混雑し、またブランドリーさんやその他の大地主さ
んの知人たちが、大地主さんの平安な航海と無事の帰航とを祈り
に、小舟何艘にも一杯乗ってやって来た。「アドミラル・ベンボー
は私にその半分の仕事があつた晩も一晩だつてなかつた。そして、
明^{あけがた}方少し前に、水夫長^{ボースン}が呼子を鳴らして、船員^{キャプスタン}が揚錨絞盤^{てこ}の梃
に就^つき始めた時分には、私はへとへとに疲れていた。その二倍も
疲れていたにしても、私は甲板を去りはしなかつたろう。それほ
どすべてが私には物新しくて興味があつたのだ、——簡短な号令
も、呼子の鋭い音^ねも、船の角燈のちらちらする光の中をそれぞれ
自分の場所へ駆けてゆく人々も。

「さあ、肉焼バーベキューき台、歌を一つやれよ。」と一人の声が叫んだ。

「あの昔のをな。」と別の声が叫んだ。

「よしきた、兄弟。」と柶杖もたに凭もたれてそばに立っていたのつぽのジョンが言つて、すぐに節ふしも文句も私のよく知っているあの唄をやり出した。――

「死しびとの人箱はこにやあ十五人――」

すると全部の水夫が合コーラス唱をやつた。――

「よいこらさあ、それからラムが一ひと罈びんと！」

そしてその「さあ！」のところで艇ていを威勢よく　　した。

こんな気の立った瞬間にさえ、その唄は私の心をたちまちにして懐しい「ベンボー提督屋」へつれ帰らせた。そして私にはあの船長の声その合唱の中で歌っているのが聞えるような気がした。しかし、やがて錨がまっすぐに上げられた。やがてそれは水をぽたぽた滴らせながら船首のところにぶら下った。やがて帆が風を十分に孕み出し、陸や船が両側で飛ぶように動き出した。そして、私が一時間ばかりの眠りを貪ろうとして横になることが出来る前に、ヒスパニオーラ号はもう宝の島をさして航海を始めていたのである。

私はその航海のことを詳細に物語ろうとは思わない。航海はか

なり順調にうまくいった。船はよい船であることがわかったし、船員たちは腕利きの水夫だったし、船長は自分の任務を十分に了解していた。しかし、私たちが宝島まで来ないうちに、知っておいて貰わなければならぬ二三の事件が起った。

第一に、アローさんが船長の氣遣つていたより以上に、厄介な人間になった。水夫たちには少しも睨みが利かず、部下の者は彼に対して勝手なことをした。しかし、悪いのは決してそれだけではなかった。航海に出てから一二日たつと、彼は、眼をとろんとさせ、頬を赤くし、口を吃^{ども}らせ、その他の酔っている徴候も示しながら、甲板へ出て来出したのである。幾度も彼は恥をかい下へ行けと命ぜられた。時には自分で転^{ころ}んで怪我^{けが}をしたり、時には

一日中あの船室^{コムパニヨン}昇降口室の片側にある自分の小さい寢床の中に横になつていたり、そうかと思うと、時には、一二日の間はほとんど素面^{しらふ}でいて自分の仕事を少くとも普通にやっていることもあった。

一方、彼がどこで酒を手に入れるのか、私たちにはどうしてもわからなかった。それは船での謎だった。私たちはずいぶん彼に注意していたけれども、少しもそれを解くことが出来なかった。そして、面と向つて彼に尋ねれば、酔っている時には彼はただ笑っているばかりだったし、素面の時には、水の他^{ほか}は何もついで飲んだことがないと真面目^{まじめ}くさつて否定するのだった。

彼は副船長として役に立たず、水夫たちに悪い感化を及ぼすば

かりではなく、この分では間もなく自分の身をも滅ぼすことになるに違いないということは明白だった。そういう訳だったから、逆浪の立っている或る暗い晩、彼がまったく姿を消して二度と出て来なかった時には、だれも大して驚きもせず、さほど気の毒がりもしなかった。

「海へ落ちたんだな！」と船長が言った。「いや、これであの男に足^{あしかせ}械をかける手数が省けたようなものですよ。」

しかし副船長がいなくなったものだから、もちろん、水夫たちの一人を昇進させることが必要となった。水夫長のジョーブ・ア^{もと}ンダスンが船中では一番適任だったので、水夫長という名称は旧通りであつたけれども、幾分か副船長の役を勤めることになった。

トウリローニーさんは航海をしたことがあつて、その知識のために大層役に立つた。^{なぎ}風の時にはたびたび自分で当直勤務^{ウオッチ}をやることがあつたからである。また、舵手^{コクスン}のイズレール・ハンスは注意深い、狡猾な、老練な、経験のある海員で、まさかの時にはほとんど何でも任す^{まか}ことが出来る男だつた。

彼はのつぽのジョン・シルヴァーの腹心の友であつて、彼の名を挙げると、私は自然、皆が肉焼き台^{バーベキユー}（註四二）と呼んでいる、私たちの船の料理番^{コック}のことを話す順序になつて来る。

船の中では、彼は、両手とも出来るだけ自由に使えるようにと、柁杖を頸の周りにかけた一本の締索^{しめなわ}にぶら下げていた。彼が隔壁に柁杖の足を突っぱつて、それで身を支え、船の揺れ動くまま

に任せながら、陸上にいて安全な人のように料理をやり続けているのを見るのは、なかなか面白かった。天候の非常に荒れた日に彼が甲板を横切つてゆく有様は、なお一層奇妙だった。彼は一本か二本の索を用意して一番幅の広い場所を突つ切る時にはそれを頼りにした。——その索のことをのっぽのジョンの耳環と皆は言つていたが。そして、或る時は杵杖を使い、また或る時はそれ为例の締索で脇に曳きずつて、他の人の歩くのと同じくらいに速く、一つの場所から他の場所へと動いてゆくのであった。それでも、以前に彼と一緒に航海したことのある人々の中には、彼がそんな有様になつたのを見るのは可哀そうだと言う者もいた。

「あの男は並なみの人じゃねえんだよ、あの肉焼バーベキューき台はな。」と舵手

が私に言った。「若^{わけ}え時にや良^ええ教育を受けたんで、その気になれあ書物みてえにちゃんと立派にしやべれるんだ。それから強^つえぞ、——獅子^{ライオン}だつてのつぽのジョンのそばあたりにもよれやしねえんだぜ！ 己は、あの男が四人の者と取っ組み合つて、其奴^{そいつ}らの頭を叩き合したのを見たことがある。——あの男の方は素手^{すで}でよ。」

水夫たちは皆彼を尊重し、彼に服従さえした。彼は一人一人に對しての口の利き方を心得ていたし、だれにも何か特別の世話を焼いてやった。私にはずっと変わらず親切で、私が厨房へ行くといつも喜んでくれた。そこは彼が始終新しいピンのように綺麗にしておいた。皿なども磨き立てて掛けてあり、彼の鸚鵡^{おうむ}が一隅にあ

る鳥籠の中にいた。

「来給え、ホーキンス、」と彼はよく言つた。「来てジョンと話をしておくれ。だれよりも君が来てくれるのが嬉しいよ、坊や。

まあ腰を掛けて変つた話でも聞いてくれ給え。これがフリント船せまんちよ

長だ、——己はこの鸚鵡をあの名高なだけえ海賊の名を取つてフリント

船長つて言つてゐるんだよ、——このフリント船長がな、今度のこうけえ航海はうまくゆくつて予言しているぜ。そうじゃなかったかね、

船長？」

すると鸚鵡は「八銀貨！ 八銀貨！ 八銀貨！」と非常に速いの
に言い続け、息が切れはしまいかと思われるまで、またはジョンがハンケチを鳥籠の上に投げかけるまで、それを止やめない。

「ところで、この鳥はね、」とジョンは言う。「多分二百歳ぐらいだろうよ、ホーキンス。——鸚鵡つて奴は大概てえげえいつまでも生きてるものなんだ。で、だれでもこいつよりももつとたくさん悪い事を見て来たものがあれあ、それは悪魔だけに違えねえさ。この鳥はイングラントと一緒に船にいたこともあるんだ。あの大海賊のイングラント船長（註四三）とね。こいつはマダガスカルにもいたことがあるし、マラバーにも、スリナムにも、プロヴィデンスにも、ポートベロー（註四四）にもいたことがある。あの銀貨や銀塊を積んだ難破船の引揚げの時にもいたんだ。そこでこいつは『八銀貨』を覚えてんだから、不思議はない訳さ。その八銀貨が三十五万枚もあつたんだぜ、ホーキンス！ こいつはまた

ゴア（註四五）の港の外でインド太守の船に乗込みのあつた時にもいたんだよ。でも、こうして見てみると、まるで赤ん坊みてえに思えるだろう。だがお前は火薬の臭いにおを嗅いだことがあるんだ、——そうだろ、船長？」

「針路転換用意。」と鸚鵡おうむは金切声を立てる。

「ああ、利口な奴だ、こいつは。」と料理番は言つて、ポケットから角砂糖を出して鸚鵡にやる。それから、その鳥は横木をつついて、信じられないほど口ぎたない言葉を吐き続ける。「ほら、ねえ、君、」とジョンが言い足す。「朱に交れば赤くなる、つて奴さ。己のこの無邪気な鳥が、可哀そうに、こんなひどい言葉を使うんだからね。無論、何にも知らずにだよ。言わば牧師さんの

前だつてこれと同じことを言うんだらうからねえ。」そして、牧師さんと言うところで、彼はいつものしかつめらしいやり方で前髪に手を触れるので、私はこんなよい男はまたとあるまいと思つたものだつた。

とかくしているうちにも、大地主さんとスモレット船長とはやはりよそよそしい間柄であつた。大地主さんはそのことを少しも意に介しなかつた。彼は船長を軽蔑した。船長の方は、話しかけられた時の他は決して口を利かなかつたし、その話しかけられた時でも、つつけんどんで、ぶつきらぼうで、そつけ素気なく、一言も無駄口を利かなかつた。一度言いこめられた時に、彼は、船員について自分は思い違いをしていたようだ、中には自分の希望通り

に敏捷な者もいるし、みんながかなりよくやっている、と白状した。船に関しては、彼はそれがまったく気に入っていた。「この船はほとんど風上に間切^{まぎ}つても進めますな。女房にだつてこれほど言うことをきかせる訳にはゆきません。まいよ。しかし、」と彼は言い足すのだった。「まあ、我々が帰国していないのが残念です。私はこの航海を好みません。」

大地主さんは、それを聞くと、ぷいと顔を背けて、頤を突き出しながら（註四六）、甲板をあちこちと歩き　　つた。

「もうちつとでも失敬なことを言うと、俺^{わし}の癩癩玉も破裂するぞ。」と彼はよく言つた。

私たちは幾度か暴風に遭つたが、それはただヒスパニオーラ号

の優良な性質を証拠立てただけであつた。船の中の者は皆十分に満足しているようだった。そうでなければ、よくよくの氣むずかし屋だったに違いない。というのは、私の信ずるところでは、ノアの方舟はこぶね此方これほど甘やかされた船員は決してなかつたのだから。ちよつとした口実があつても、強い水割りグロツグラムが振舞われたりした。また、何でもない日に、例えば、大地主さんがだれかの誕生日だということを聞いたというような日には、プディングが出た。それから、林檎の樽が一ついつでも中部甲板に蓋を開けたまま置いてあつて、だれでも好きな者が勝手に食べられるようになった。

「こんなことからよいことが起つたというのは、まだ聞いたこと

がない。」と船長はリヴジー先生に言った。「水夫を甘やかすのは、彼等を悪魔にする。私はそう信じています。」

しかし、これからわかるように、よいことがその林檎樽から確かに起つたのである。というのは、もしその林檎樽がなかったなら、私たちは何の警告も受けることがなかったろうし、一人残らず叛逆の手にかかつて殺されてしまったかも知れないのだから。

それは次のような次第であつた。

私たちは、目指している島——私はもつとはつきり書くことは許されていない——の風上に出るために、これまでは貿易風について赤道の方へ走っていたが、今度は赤道から離れてその島へ向つて走り、昼夜油断なく見張りをしていた。最も多くに見積つて

も、私たちの往航の最後の日に当る頃のことであつた。その夜のうちか、遅くとも翌日の正午前には、宝島が見えるはずであつた。私たちは南南西に進んでいて、正横にむらのない風を受け、浪は静かだつた。ヒスパニオーラ号は絶えず一様に横揺れし、時々船首の第一斜檣ボースブリットを水に突つ込んでぱつと飛沫しぶきをあげた。上も下もすべての帆が風を孕んでいた。だれも彼も大元氣だつた。もう私たちの冒険の最初の部分の終りにごく近かつたからである。

さて、日没のすぐ後、私は自分の仕事をすっかりすませて、自分の棚寢床バースへ行く途中、ふと林檎を食べたいと思つた。私は甲板へ走り上つた。当直の者は皆前部にいて島を見張つていた。舵輪を握っている男は帆の前縁を見ながら、ゆつくりとひとりで口笛

を吹き続けていた。そしてその口笛の音が、船首や舷側げんそくにあたる浪のしゅうしゅうという音を除けば、聞える唯一の音であつた。

私は体からだぐるみ林檎樽の中へ入り込んだ。すると林檎がほとんど残っていないのがわかつた。が、そこで暗がりの中に坐っていると、波の音やら船の動揺やらで、つい寝込んだか、それとも眠りかけようとしていたか、その時、だれか重い男がすぐ近くにどしんと腰を下した。その男が肩を樽にもたせかけると樽がぐらぐらと揺れたので、私がもう少しのことと跳び上ろうとした時、その男がしゃべり始めた。それはシルヴァーの声だった。そして、私は一ダースの言葉も聞かないうちに、どんなことがあつても出てゆくどころではなく、極度の恐怖と好奇心とで、ぶるぶる震えな

がらも耳を傾けて、そこに蹲った。というのは、その一ダースの言葉から、私は船中にいるすべての正直な人たちの生命が自分一人に懸っていることを知ったからである。

第十一章 林檎樽の中で聞いた話

「いいや、己じゃねえ。」とシルヴァーが言った。「フリントがせんちょ船長だったんだ。己は、こんな木の脚をついてるんで、クオーター按針マスタ手だったよ。己が脚をなくした時の片舷かたがわからの一斉射撃で、ピューの奴めも眼玉をなくしたのさ。己の脚を切ってくれたのは上手な外科医だった、——大学なんかもみんなすまして、——

——ラテン語もどっさり知ってたし、その他何でも知っていてね。
だが、その男も犬みてえに縊^{くび}り殺されて、他の奴らと同じに天日^{てんぴ}
に曝されたぜ、コーソー要塞（註四七）でよ。あれはロバーツ

（註四八）の手下だった、あれはな。あれも船の名を変えたんで
起ったことさ、—— ロイアル・フォーチュン 大 幸 運 号とか何とかね。だから、

船に名をつけたら、そのままにしておくことだな。イングラント
がインドの太守を虜^{とりこ}にしてから、己たちみんなを無事にマラバー
から乗せて戻ったカサンドラ号だってそうだったし、赤い血を見
て暴れ狂って手当り次第の船をやっつけ、金貨で今にも沈みそう
になった、フリントの船の海^{ウオルラス}象号だってそうだったよ。」

「ああ！」と別の声が叫んだが、それは船中で一番若い水夫の声

で、明かに感歎しきつた声だった。「あの人は仲間の華^{はな}だったんだね、あのフリントって人は！」

「デーヴィス（註四九）も偉い奴だったそうだ、みんなの話じゃあな。」とシルヴァーが言った。「己は一度もあの人と一緒に船に乗ったことはねえ。初めはイングランドの船に乗り、それからフリントの船に乗った、というのが己の経歴だ。そして今じゃあ、言わば自前^{じまえ}になったって訳さ。己はイングランドの時には九百ポンド貯^ため、フリントのところでは二千ポンド貯めた。これあ平水夫にしちやあ悪かあねえだろ。——みんなちゃんと銀行に預けてあるよ。肝腎なのは稼ぐことじゃねえ、貯めることだ。こいつあ違えねえとこだぜ。イングランドの手下の奴らあ今みんなどこに

いる？ わからねえ。フリントの手下は？ それあ、大抵はこの船にいて、プディングを貰つて喜んでやがるが、——その前めえにや乞食をしていた奴もある。眼をなくしたピューの奴などは、恥しくもなく、国会の議員さまみてえに一年に千二百ポンドも使つたものだ。奴は今どこにいる？ そうさ、もう死んじやつて、あの世にいらあ。だがその前二年つてものは、馬鹿めが！ あいつは饑かつえていやがつたんだよ。奴は乞食をする、盗みはやる、人殺しをやる、おまけに飢うえじに死と来るんだからなあ！」

「じゃあ、金かねだつて大して役に立たない訳ですね、つまり。」

とその若い水夫は言つた。

「馬鹿にやあ大てえして役に立たねえとも、違えねえさ、——金だつ

て何だつて。」とシルヴァーが大声で言った。「だが、なあ、おい。お前は若え^{めえ}。若えが、ペンキみてえにはしっこい。それはお前をちよつと見た時から己にやあちゃんとわかつてるんだ。だから己はお前を一人前の男と同じに話をするんだぜ。」

この憎むべき老いぼれの悪漢が、私に使つたのとそっくり同じ言葉のおべつかを、他の人間に言っているのを聞いた時の私の氣持がどんなだったかは、諸君も想像出来るであらう。私は、もし出来さえしたら、樽越しに彼を突き殺してやつたろうと思う。その間に、彼は、窃^{ぬす}み聞きされているとは少しも思わずに、しやべり続けた。

「分限紳士^{ぶんげんしんし}つてなあこういうものなんだ。奴らは荒仕事をやる

し、ぶらんこ往生覚悟の仕事をするが、けあいどり 闘鶏 みてえに贅沢に

飲み食いする。そして一航海やって来ればだ、そうさなあ、ポケ

ットにや何百ファージングの代りに何百ポンドと入へえってる。（註

五〇）ところで、大てえげえ概の奴らはそれをラムや大尽遊びに使つち

まつて、またぞろシャツ一枚で海へ出かけるといふ訳さ。だが己

のやり口はそうじゃねえ。己はそれをそっくりためておく。こつ

ちに少し、あつちに少しという風にして、どこにもあんまりたん

とはおかねえ。嫌疑がかかるからな。己あ五十だぜ、いいかね。

今度の航海から帰けえりせえすりや、真まじめ面目な紳士の暮しを始めるん

だ。まだずいぶん早はええ、つてお前は言うだろう。ああ、だが己は

今までだって安楽に暮して来たのだ。してえと思うことでやらな

かったことは何一つなかったし、いつも柔かな寢床に寝てうめえものばかり食つてたんだ。海に出てゐる時だけあ別だがね。その己が初めはどうだったかね？ お前と同じに、平水夫さ！」

「なるほど、」と一方の男が言つた。「だが他の金はみんなもうなくなつた訳ですね？ これから後はあんただつてブリストルへは顔が出せねえでしょう。」

「じゃあ」己の金がどこにおいてあると思うかね？」とシルヴァーは嘲笑^{あざわら}うように尋ねた。

「ブリストルにさ、銀行だの何だのにな。」と相手の男が言つた。「この船が錨を揚げた時にやあそうだったのさ。」と料理番^{コック}は言つた。「だが今時分は己の女房がそいつをすっかり握つてゐるのだ。」

そして『遠眼鏡屋』は借地権も暖簾のれんも道具一式もすっかり売り払って、かかあ嬬はどんは己と逢うためにそこを出ているよ。己はお前を信用してるから、どこで逢うことにしているのか言つてやつてもいいが、そうすると仲間の奴らが嫉むだろうからな。」

「で、あんたはおかみさんを信用出来るのかい？」と一方の男が尋ねた。

「分限紳士つて者は、」と料理番が答えた。「普通は仲間同志じやあんまり信用しねえものだ。そしてそれをもつともなんだ、確かにな。だが、己にやあまた己の流儀があるのさ。だれかが仲間の者を裏切るなんてこたあ、——己を知っているだれかのことだが、——このジョンのいる同じ場所じや起りっこねえんだ。ピュ

ーを恐れてる奴もいた。またフリントを恐れてる奴もいた。がそのフリントはまたフリントで己を恐れていた。恐れてはいたが、また己のことを自慢にもしていた。あいつらはこの上なしの乱暴な船乗だった、フリントの船員はな。悪魔だってあいつらと一緒に海へ行くのは尻込みしたろうよ。ところでだ、ほんとのところ、己は法螺吹きじゃねえし、お前の見る通り己は仲間を仲よくさせているが、己が按針手だった時にやあ、フリントの手下の海賊どももおとなしいことったら、小羊と言ったって追っつかねえくれえだったぜ。ああ、お前だってこのジョンと一緒にの船にいりやあひとりでにわかるよ。」

「いや、実はね、」と若者が答えた。「ジョン、あんたと今の話

をするまでは、あつしは今度の仕事は大して気が進まなかったん
で。だがもうわかった。握手しましょう。」

「お前は強え男だ。おまけにはしっこい。」とシルヴァーは、樽
ががたがた揺れるくらい心をこめて握手しながら、答えた。「そ
れに分限紳士としちやあ己の見たことのねえくれえ男前がいいし
な。」

この時分には、彼等の遣っている言葉の意味が私にはわかりか
けていた。「分限紳士」というのは明かに普通の海賊のことに違
いなく、（註五一）私の窃^{ぬす}み聞きしたこの小場面は、実直な船員
の一人が墮落させられる最後の一幕だったのだ。——恐らくそれ
は船中に残っている最後の実直な者であったのだろう。しかし、

この点では私は間もなく安堵させられる話を聞いたのだ。シルヴァーがちよつと口笛を吹くと、もう一人の男がぶらぶら歩いて来て二人のそばに坐つた。

「デイツクは話がついたよ。」とシルヴァーが言つた。

「おお、デイツクが話がつくつてこたあ己あ知つてたよ。」と舵コ手クスンのイズレール・ハンズの声が答えた。「この男は馬鹿じゃね

えからな、このデイツクは。」それから彼は嚙煙草をぐにやぐにややつて唾をぺつと吐いた。「だが、おい、」と続けて言つた。

「己の聞かして貰もれえてえのはこういうことさ、肉焼バーベキューき台てえ。一体、

いつまで己たちはうろうろ舟みてえにぐずぐずしてるんだね？

己あもうスモレット船長せんちよにやうんざりしてる。奴なげは永えこと己

をこき使いやがつたよ、畜生！ 己ああの船室^{ケビン}へ入りてえんだ、

そうさ。奴らの漬^{ピックル}物だの葡萄酒だの何だのがほしいんだ。」

「イズレール、」とシルヴァーが言った。「お前の頭は大して役に立たねえぞ、相変らずな。だがお前は聞くことだけは出来そう
だ。何しろでつけえ耳をしているからな。ところで、己の言うこと
とはこうだ。お前は水夫部屋に寝てるんだ、せつせと働くんだ、
丁寧な口を利くんだ、酔っ払わずにいるんだ、己が命令するまで
はだ。その通りにしてるんだぞ、小僧。」

「うむ、いやだなんて己は言やしねえ。言ったけえ？」と舵手は
ぶつぶつ言った。「己の言うのは、いつだ？ ってえんだ。それ
が己の言ってることなんだ。」

「いつだと！　こん畜生！」とシルヴァーが叫んだ。「よし、では、聞かして貰えてえんなら、いつだか言つてやろう。己がこれならやれると思う最後のぎりぎりの時、それがその時なんだ。スモレット船長という立派な海員けえいんがいて、この有難ありがてえ船を己たちのために動かしてくれる。あの大地主と医者いしやの奴が地図やなんぞを持っていてくれる。——それがどこにあるのか己にはわからねえじゃねえか？　お前たちだつてわからねえだろ。そこでだ、己は、あの大地主と医者いしやとに金かねをめつけ出させて、それを船に積み込む手伝いをさせてやろう、つてつもりなんだ。それからがこっちのやる番だよ。もしお前たち大馬鹿野郎どもがみんなが頼りになるなら、己は、スモレット船長にまた船を半分途まで戻させ

て、それからやつつけるのだ。」

「なあに、ここに乗つてゐる己たちだつてみんな海員だ、と己は思うんだがな。」と若者のデイツクが言つた。

「己たちだつてみんな平水夫だ、つて言う間違えだろうよ。」とシルヴァーがつつけんどんに言つた。「なるほど己たちは一つの針路に船を進めることは出来るが、しかしだれがその針路をきめるんだい？ お前さん方みんながたびたびしくじるのは、そこなんだ。もし己の思う通りにするとすりやあ、己はスモレット船長に少くも貿易風の中まで船を戻させる。そうすりや、いまいい見込違いもなければ、一日にちよつぴりの水だけ飲んでなければならんような目にも遭わずにすむだろう。だが手前たちがどん

な質^{たち}の連中か己は知ってる。現なまを船に積み込み次第^{しでえ}、己は島で奴らをやつつけねばなるめえ。情ねえやり方さ。しかし手前たちは酔っ払うまでは決して仕合せになれねえって連中なんだ。えい、糞いまいましい、手前たちのような手合と一緒に船に乗ってるのはつくづく厭^{いや}んなっちゃうぜ！」

「止めろよ、のっぽのジョン。」とイズレールが叫んだ。「だれがお前^{めえ}に逆^さつたい？」

「うむ、己がこれまでにどれほどたくさんの立派な船が舷^{ふなばた}側に攻め寄せられたのを見て来たとお前は思う？ それから、どれほどたくさんの元気な若え奴らが仕置波止場（註五二）で天日に曝されたのを見たと思う？」とシルヴァーが叫んだ。「そりやあみ

んな、ただ急ぎに急いだからなんだぜ。わかったか？ 己は海のことならちったあ心得てるんだ、己はな。もし手前たちが今のまににして、うまくやってきせえすれあ、馬車に乗って歩く身分になれるのだ、そうともよ。だが手前たちや駄目さ！ 己はお前たちを知ってる。お前たちは明日にでもラムを一口飲んで、縊り殺されることになるだろうよ。」

「お前が牧師みてえな男だつてこたあだれだつて知ってるよ、ジョン。だが、他ほかにもお前と同じくれえ帆も捲けれあ舵も取れる者だつてゐるぜ。」とイズレールが言つた。「奴らはちつとは遊びも好きだった、そうとも。とにかく、奴らはそんなに世間離れがしてねえで、どいつもみんな陽気に大尽遊びをやったものさ。」

「そうかね？」とシルヴァーが言った。「なるほど。で、その連中は今はどこにいる？ ピューはそんな風な奴だったが、乞食になつて死んじまつた。フリントもそうだったが、サヴァナでラムで命をなくした。ああ、あの連中は立派な船乗だった、ほんとにな！ ただ、今はどこにいる？」

「しかしねえ、」とディックが尋ねた。「奴らを攻撃して、それから奴らをどう始末するんですね、とにかく？」

「うん、お前はさすがだ！」と料理番は感謝したように叫んだ。

「それが己が仕事と言つてることだよ。ところで、お前は思う？ 島流しみてえに奴らを島に残して来るかね？ それならイングランドのやり方だろう。それとも豚^{ぶたにく}肉みてえに奴らを叩つ

切るかね？ それならフリントかビリー・ボーンズのやり方だろうな。」

「ビリーはそれにやお誂え向きの男だったな。」とイスレールが言った。「『死人は咬みつかず』^{しびと}って奴さん^{やつこ}はよく言つてたつけところで、今じや自分で死んでござるので、咬みつくかつかねえかつてことはちゃんと何もかも御存知の訳だ。もし今までに荒っぽい船員があゝの世へ行つたことがあるとすりや、それあビリーだな。」

「お前の言う通りだ。」とシルヴァーが言つた。「荒つぽくてめちゃな奴だった。だが、いいかね。己は穩かな人間だ、——まるで紳士だ、つてお前たちも言うだろう。しかし今度は大事な場合^{でえじ}

だ。やることはやらにやらんよ、きようでえ兄弟。己は投票する、――

――殺しちゃう方へだ。己が国会にいて、馬車に乗って歩いている時に、あの船室ケビンにいる口やかましい奴どもにや一人だつて帰つて来て貰えたかねえ、お祈りの式に出て来た悪魔みてえに思いがけなくな。己の言うのは待てということだ。しかし時機が来たら、やつつけるのだ！」

「ジョン、お前は偉えら者だ！」と舵手が叫んだ。

「見てからそう言うがいいさ、イズレール。」とシルヴァーは言つた。「たった一つ己に望みがある、――トウリローニーが望みだ。己はこの手であの間拔野郎の首を胴体から振じ切つてやるのだ。ディック！」と彼は急に言葉を止めて言い足した。「お前、

いい子だから、ちよつと跳び上つて、己に林檎を一つ取つてくれ。
咽^{のど}を湿^{しめ}すんだから。」

その時の私の恐怖は想像出来るであらう！ その力さえあつたなら私は跳び出て逃げ出したことだろう。けれども私の手足も心も同様に私をためらはせた。デイツクが立ち上りかけるのが聞えた。それからだれかが彼を止めたようだった。そしてハンスの大声に言う声が聞えた。――

「おお、止^よせ止せ！ その樽の中のものなんかしゃぶるなよ、ジヨン。ラムを一杯^{ぺえ}やろうじやねえか。」

「デイツク、」とシルヴァーが言った。「お前を信用するよ。樽の上に計量器がある、いいかい。それ、鍵だ。小皿に一杯入れて

持つて来てくれ。」

私はびくびくしてはいたけれども、アローさんが身を滅ぼすようになった強い酒を手に入れたのも、こんな風にしてだったに違いない、と思わずにはいられなかった。

デイクはほんのしばらくの間行っていたが、彼のいない間イズレールは料理番にずっと囁き続けていた。私の聞き取れたのはほんの一二語に過ぎなかったけれども、それでも私は重大な消息を知った。というのは、他にも同じような意味のきれぎれの文句の他に、こういう文句全体が聞えたからである。「あいつらはもう一人もこつちへつくめえよ。」とすると、船中にはまだ忠実な船員もいる訳であった。

ディックが戻って来ると、三人は順々に小皿を取って飲んだ。

——一人は「運がいいように。」と言って飲み、もう一人は「フリントのために祝杯を。」と言って飲み、シルヴァーは歌のような調子で「己たちのために祝杯を挙げる。しっかりとやるんだ。そうすりゃ獲物はどっさり、御馳走もどっさりだ。」と言って飲んだ。

ちょうどその時、樽の中にいる私に何だか明るい光がぱつと射して来た。見上げると、月が昇っていて、後ミズンマスト、檣フォースルの頂を銀色に、前檣帆の前縁に白く輝いているのだった。そして、それとほとんど同時に、見張りの者の声が「陸が見えるぞう！」と叫んだ。

第十二章 戦争会議

甲板をどこかと走る足音がした。人々が船室や水夫部屋から駆け上つて来るのが聞えた。それで、私はたちまちに樽の外へひらりと出て、前檣帆フオースルの後に隠れ、船尾の方へくると向を変えて、広い甲板のところへ出て来ると、ちょうど折よく、風上船首へと走つてゆくハンターとリヴジー先生と一緒にになった。

そこには船員がすでにみんな集つていた。帯のようになっていた霧が月の出とほとんど同時に霽はれていた。船から遙か南西に當つて、二つの低い山が二マイルばかり離れて立っているのが見え、

その中の一つの背後に第三のもっと高い山が聳えていて、その山嶺はまだ霧に包まれていた。三つとも尖っていて円錐形をなしていた。

これだけを私はほとんど夢心地で見た。というのは、一二分前のあのぞつとするほどの恐しさから、私はまだ恢復していなかったからである。その時スモレット船長が命令を下す声が聞えた。ヒスパニオーラ号は二ポイントだけ風の吹いて来る方角の方へ向けられ、今度はちょうど島の東側を島に触れずに通り過ぎるような針路で進んで行った。

「さて、みんな、」と船長は、すべての帆が帆脚索で十分に張られた時に、言った。「君たちの中でだれか以前に前のあの島を見

た者があるかね？」

「わつしが見ました。」とシルヴァーが言った。「わつしは或る貿易船に料理番コックをしてました時に、あそこへ水を取りに行つたことがござえます。」

「碇泊所は南側で、小島の蔭だと思ふが？」と船長が尋ねた。

「はあ、そうです。骸スケリトン骨島でえじつてその島を皆は申しております。

もとは海賊どもの大事な処でえじでして、わつしらの船にいた一人の水夫が奴らのつけていた名前をみんな知つてました。北の方にある

あの山を奴らは前フオーマスト檣山フオーマストと言つております。三つの山が南の方

へ一列に並んでますな、——前檣山メインマストと、大檣山ミズンマストと、後檣

山という風に。けれど、大檣山を——あの雲のかかったでつけえ

奴ですが——奴らは普通は遠眼鏡山^{スパイグラス}つて言っておりますよ。奴ら

が船を掃除するのに碇泊していた間、あの山に見張りを置いたという訳でね。失礼ながら、奴らが自分らの船を掃除したのは、あそこなんですから。」

「ここに海図があるがね。」とスモレット船長が言った。「それがあの場所かどうか見てくれ。」

その海図を手にした時、のつぽのジョンの眼はきらりと輝いた。しかし、紙が新しいので、私には彼が失望しなければならぬことがわかった。それは私たちがビリー・ボーンズの衣類箱の中で見つけたあの地図ではなくて、正確な写しで、すべてが——地名も高度も水深も——すっかり書いてあったが、ただあの赤い十字記

号と書込みの備考とだけがなかった。シルヴァーの苦悩はひどかつたに違いないが、彼にはそれを隠すだけの意力があつた。

「そうですよ、」と彼は言つた。「これは確かにあの場所で。なかなかうまく描^けえてありますねえ。だれが描えたんですかなあ？

海賊なんて奴あとても物識らずで描けめえとあつしは思います
がな。はあ、ここにありますよ、『キッド船長（註五三）碇泊所』
とね、——あつしの船友達もそう言つてました。南の岸に沿うて
強い潮が流れていて、それから西の岸を北の方へずうつと上つて
おります。なるほどね、」と彼は言つた。「船を風上に向けて島
の風上へおやりになつたのは、ようござえましたな。ともかく、
船を入れて手入れをなさろうつておつもりなら、この辺にやここ

よりよい処はござえせんよ。」

「有難う。」とスモレット船長が言った。「また後で力を貸して貰うことがあるだろう。行つてよろしい。」

私はジョンが島について自分の知っていることをいかにも冷静に公言したのには驚いた。そして、彼が私の方へ近づいて来るのを見た時にはどきどきしたことを白状する。無論、私が林檎樽で彼の話を窃^{ぬす}み聞きしたことは彼は知らなかったのだが、それでも、この時分には、私は彼の残忍さと二枚舌と勢力とには非常に怖しくなっていたので、彼が私の腕に手をかけた時にはほとんど身震いを隠せないくらいであつた。――

「ああ、ここは面白^{おもしろ}え処^{ところ}だぜ、この島はな、――若^わえ者が上陸

するにやほんとに面白え処だ。」と彼は言った。「水浴びも出来る、木にも登れる、山羊も狩れるぞ。それに、自分でも山羊みえにあの山のとっぺんへも行けるんだ。うむ、己だって若返^{わかげえ}つて来る。自分の木の脚を忘れちまいそうだよ。若くつて、足指が十本揃つてゐるってこたあ、楽しいことさ。違えねえぜ。君がちよいと探検にでも行つてみてえと思つたら、ちよつとジョン爺^{じい}に言つて来いよ。持つてく弁当を^{こせ}拵えてやるからな。」

そう言つて私の肩を実に親しそうにぽんと叩くと、彼はぴよつこぴよつこ歩き出して、下へ行つた。

スモレット船長と、大地主さんと、リヴジー先生とは、後甲板で一緒に話していた。私はその人たちに自分の聞いた話を知らせ

たくてたまらなかつたけれども、おおつぴらにその人たちの中へ割り込む訳にもゆかなかつた。それで何かもつともらしい口実を見つけ出そうと頭の中であれこれと思索している間に、リヴジー先生が私をそばへ呼びつけた。彼は自分のパイプを下に置いて来たのであるが、非常な煙草好きなので、私にそれを取りにやらせるつもりだったのだ。けれども、私は人に洩れ聞きされずに話せるくらいに彼に近づくや否や、すぐに言い出した。――「先生、お話があります。船長さんと大地主さんとを船室^{ケビン}へつれて降りて下さい。それから何かにかこつけて私を呼んで下さい。私は恐しいことを聞いたんです。」

医師はちよつと顔色を変えたが、次の瞬間には自分の心を制し

た。

「有難う、ジム。」と彼は大層大きな声で言い、「それだけ聞けばよかったのだ。」と私に何か尋ねたかのようにした。

そう言うとは彼はくるりと後へ向いてまた他の二人の仲間に加わった。三人はしばらく一緒に話していた。そして、だれ一人もぎよつとしもせず、声を高めもせず、驚いたような声さえ立てなかったけれども、リヴジー先生が私の頼みを伝えたことは十分明かだった。というのは、私の聞いた次のことは船長がジョーブ・ア ندラスンに命令を下したことで、全員が呼子で甲板に召集されたからである。

「諸君、」とスモレット船長が言った。「私は諸君に一言言いた^{こと}

いことがある。向うに見えるあの島が我々の目当にして来た場所だ。トゥリローニーさんは、我々みんなの知っている通り、大層気前のよい方である^{かた}ので、今しがた私に一二言お尋ねになり、私が船中の各員上下ともその義務を尽し、これ以上は望まれないくらいであるとお答が出来たところが、トゥリローニーさんと私と先生とは船室へ降りて諸君の健康と幸運とを祝して杯を挙げることにになり、諸君にも酒を振舞って私たちの健康と幸運とを祝して飲んで貰うことになった。これについて私の思うところを言うことにすると、誠に結構なことであると思う。それで諸君も私と同様に思われるならば、そうして下すった紳士のために万歳を唱えて貰いたい。」

万歳の声が続いて起った。——それは当然のことだった。けれども、それがいかにも盛んに心から熱誠に響きわたったので、私はこの同じ人々が私たちの血を流そうと企たくらんでいるのだなどとはほとんど信じられぬくらいであつた。

「もう一つスモレット船長せんちよのために万歳だ。」とのつぽのジョンが、初めの万歳が鎮まつた時に、叫んだ。

するとそれもまた威勢よく唱えられた。

それが終ると三人の紳士は下へ降りて行つたが、程なく、ジム・ホーキンスは船室に用があるという伝言があつた。

行つて見ると、三人ともテーブルの周りに着席していて、スペインの葡萄酒が一ひとびん罎と乾葡萄酒とが前に載せてあり、医師は仮髪

を膝の上に置いて、絶えず煙草を吹かしていたが、それが先生の
昂奮しているしるしだということは私は知っていた。暖かい晩だ
つたので、船尾の窓は開けてあつて、海に残っている船跡ふなあとに月
光がきらきらと輝いているのが見えた。

「さあ、ホーキンズ、」と大地主さんが言った。「何か言うこと
があるそうだね。すっかり話しておくれ。」

私は命ぜられた通りにし、シルヴァーの会話の一部始終を出来
るだけ簡短に話した。それを話し終えるまではだれも口を出さな
かったし、また三人の中の一人も身動きさえせず、初めから終り
まで私の顔にじつと眼を注いでいたのであつた。

「ジム、お掛け。」とリヴジー先生が言った。

そして彼等は私をテーブルに向つてそばに掛けさせて、私に葡萄酒を一杯注いでくれ、乾葡萄酒を手にいっぱい入れてくれて、それから三人とも代る代る、銘々会釈をしながら、私の幸運と勇気とのために、私の健康を祝して乾杯してくれた。

「さて、船長、」と大地主さんが言つた。「君の言つた通りだつた。私は間違つていた。私は自分の馬鹿であることを認めて、君の命令を待ちます。」

「馬鹿なのは私も同じです。」と船長は答えた。「暴動をやるつもりで船員が前にその前兆を示さなかつたということは聞いたことがありません。いやしくもそれを見抜く眼のある人ならわかりますし、それに応じて手段を執ります。しかし、この船員には、」

と彼は言い足した。「私はまんまと一杯喰わされました。」

「船長、」と医師が言った。「失礼ですが、そこがシルヴァーです。実に素敵な男ですな。」

「帆桁ほげたの端に吊り下げてやったら素敵に似合いましたよな。」と

船長が答えた。「しかしこれは無駄話です。こんなことを言っているのも仕方ありません。私は三つ四つ考えていることがあります。すが、トゥリローニーさんのお許しを得て、申してみましよう。」

「君は船長です。話されるのは当然ですよ。」とトゥリローニーさんが鷹揚に言った。

「第一にです。」とスモレットさんは始めた。「我々はやり続けねばなりません。引返すことが出来ないからです。もし私が針路

を転ずる命令を下そうものなら、彼等は直ちに謀叛を起しましう。第二に、我々には時間がまだあります、——少くとも、あの宝を見つけるまでは。第三に、忠実な船員もいます。ところで、早かれ晩かれ^{おそ}打合いを始めなければならんですが、私の提議しますのは、いわゆる機会の前髪を捉えて、或る日彼等が少しも延期していない時に撃つてかかるということです。トゥリローニさん、あなたのお家の召使^{うち}たちは信用出来ると思いますか？」

「私自身と同様です。」と大地主さんが断言した。

「あの三人に、」と船長は数えた。「私たちで七人になりますな、このホーキンスも入れて。ところで、実直な船員の方は？」

「恐らくトゥリローニー君の選ばれた者でしょう。シルヴァーに

出会われない前に、自分で見つけられた連中ですな。」と医師が言つた。

「いいや、」と大地主さんが答えた。「ハNZは私の選んだ中の一人だったからねえ。」

「私もハNZは信用出来るものと思つていました。」と船長が言い添えた。

「そしてあいつらがみんなイギリス人だとはな！」と大地主さんは^{どな}呶鳴り出した。「私はこの船をぶち壊してしまいたい氣になるよ。」

「そこで、皆さん、」と船長が言つた。「私の申し得る最善のことはこれだけです。どうか、じつとしていて、油断なく警戒して

いなければなりません。それは男にはつらいことだということはわかっています。撃つてかかる方がよっぽど愉快ではありません。う。だが味方の者がわかるまでは何とも致し方がありません。じつとしていて、風の出るのを待つ、これが私の意見です。」

「このジムは、」と先生が言った。「だれよりも我々の役に立つてくれますよ。皆もこの子には気を許していますし、それにジムは気のつく子ですから。」

「ホーキンズ、私はお前を非常に信用しているよ。」と大地主さんが言い添えた。こう言われると私はかなり絶望しかけた。まるで頼りない心細い気がしたからだ。しかし、不思議に引続いて起った出来事で、実際、私のために皆が救われることになったので

ある。とかくするうちに、私たちは思うままに話し合ったが、私たちの信賴出来るとわかつている者は二十六人の中に僅か七人であつた。そしてこの七人の中で一人は子供だから、私たちの側の大人は向側の十九人に対して六人の訳だつた。

第三篇 私の海岸の冒険

第十三章 どうして海岸の冒険を始めたか

翌朝私が甲板へ出て見た時には、島の様子はすっかり変つていた。風はその時はまったく風いでいたけれども、船は夜の間によりど進行していて、今は、低い東海岸の南東半マイルばかりのところ動かずにいた。灰色の森林が島の表面の大部分を蔽うていた。その様な色合は、低地にある黄ろい砂地の縞と、他の樹々より高く立っている——或るものは一本で、或るものは群をなし

て——たくさんの松柏類の高い樹木とで、破られてはいた。が、全体としての色調は変化がなくてくすんでいた。例の山々は裸岩の尖峯をなして植物帯の上にくつきりと聳え立っていた。どの山も奇妙な^{かつこう}恰好をしていたが、三四百フィートあつて島では一番高い^{スパイグラス}遠眼鏡山は、やはり形も一番奇妙で、ほとんどの方面からも垂直に聳え立っていて、それから頂上のところ突然切り取られたようになっていたので、彫像を載せる台のようだった。

ヒスパニオーラ号は大洋のうねりで排水孔が水の下へ入るほど横揺れしていた。帆の下桁は^{せみ}滑車を強くひっぱり、舵はあちこちへばたんばたんと音を立て、船全体はぎいぎい軋ったり、唸るような音を立てたり、跳び上ったりして、工場のようなだった。私は

後支索にしっかりと縋^{すが}りついていなければならなかったが、何もかも私や眼の前で眩暈^{めまい}するほどぐるぐる　　つていた。というのは、船足がついている時は私はなかなか船に酔わなかったのだが、こうじつとしていて鑢^{びん}のようになんかこころさせられるのでは、胸がむかむかせずにはいられなかったからで、とりわけ、朝の、空腹の時ではそうだった。

多分そのためであつたろうが、——多分、灰色の憂鬱な森林や、荒涼たる岩石の尖峯や、嶮^{けわ}しい磯に白波を立てて轟きわたっているのが見えも聞えもする寄波^{よせなみ}など、そういう島の光景のためであつたろうが、——とにかく、太陽は赫々^{あかあか}と焼くが如く^{ごと}に輝いていたし、海辺^{うみべ}の鳥は私たちの周り中で魚を漁^{あさ}って啼き叫んでい

たし、永く航海をして来た後に上陸出来ることはだれだつて嬉しかろうと思われるだろうが、私の心はすっかり滅入っていた。そして、前方をそうして最初に眺めた時から、宝島のことなど思ふさえも厭になった。

退屈な朝仕事を私たちはやらなければならなかった。少しでも風の吹きそうな気配けはいもないので、ボートを下して水夫を乗り込ませ、船を曳ひきなわ索で曳いて、島の角を　り、狭い水路を上つて骸スケリトン

骨　島の蔭の碇泊所まで三四マイル行かねばならなかったのだ。私はそのボートの中の一艘に自ら進んで乗り組んだ。もちろん、何の用事もなかったのであるが。暑気はひどくて、水夫たちは仕事に猛烈に不平を鳴らした。アundasンは私の乗っていたボート

を指揮していたが、乗員を取締るところか、一番ひどくぶつぶつ言つた。

「ふん、こんなことは永えなげこつちやねえんだ。」と彼は罵り言葉と共に言うのだった。

これはずいぶん悪い徴候だなと私は思った。というのは、その日までは船員は任務を活潑に喜んでやって来たのだからである。が、島が見えるともう訓練の綱が弛かじとりんでしまったのだ。

入って行く間中、のつぽのジョンは舵手かじとりのそばに立って船の操舵を指揮していた。彼はその水路を自分の掌のように知っていた。そして、舷側ふなばたにいて測鉛で水深を測っている男がどこでも海図に記しるしてあるよりも水が深いと言つたけれども、ジョンは一度も

躊躇しなかった。

「退潮^{ひきしお}で底がぐうつと洗い流されてるんだよ。」と彼は言った。

「で、この水路はまあ言わば鋤で掘り出されてるようなものなのさ。」

私たちはちょうど海図に錨の記してある処に投錨した。一方は本島、もう一方は骸骨島で、どちらの岸からも三分の一マイルばかりのところだった。海底は綺麗な砂であった。錨を投げ込むと、鳥の群^{むれ}がぱつと飛び立って森の上をぐるぐる　りながら啼き叫んだ。けれども一分とたたないうちに再び舞い降りて、すべてがもう一度ひっそりとした。

その場所はまったく陸で囲まれており、森で埋ったようになっ

ていて、樹木はちょうど高潮線（註五四）のところまでも生い茂り、海岸は大抵平坦で、山々の頂は、ここに一つ、彼処に一つと、円形劇場のようになって遠くにぐるりと立っていた。二つの小川が、というよりもむしろ二つの沼が、この池と言つてもいいところへ注いでいて、海岸のその部分のあたりにある簇葉むらばは一種の毒々しい輝きを持っていた。船からは、小屋や柵壁はちつとも見えなかった。それらは樹木の間にすっかり埋つていたからだ。それで、もし船室昇降口室コムパニオンにあの海図このかたがなかったなら、私たちは、その島が海中から生じてから此方このかたそこにかつて碇泊した最初の者であると思つたかも知れなかった。

そよとの風もなかったし、また、半マイルも彼方に、外洋の磯

に打ち寄せ岩石に激して、どどうつと響いている寄波の他^{ほか}には、何の物音もしなかった。その碇泊所一面には一種特別の澱んだ臭いが漂うていた、——水に浸った木の葉や腐った木の幹の臭いが。私は、医師が、悪い卵を口にした人のように、頻りに鼻でくくん嗅いでいるのを認めた。

「実のことは知らないが、しかしここに熱病があることは私はこの^{かつら}仮髪を賭けるよ。」と先生は言った。

水夫たちの挙動はボートの中では驚くべきものであったとするなら、彼等が船へ帰つて来た時にはそれはほんとうに険悪なものとなつて来た。彼等は甲板のあちこちに寝ころんで^{どな}呶鳴りながら話し合っていた。ほんのちよつとした命令が出されたところが、

脹れつ面^{ふくつら}をし、不承不承にぞんざいにそれをやった。実直な船員までがかぶれたに違いない。船中には他の者を匡正してやる者が一人もいなかったからである。暴動が雷雲のように私たちの上に覆いかかっていることは明かだった。

そして、この危険を看て取った者は、私たち船室^{ケビン}の連中ばかりではなかった。のつぽのジョンはあつちの群からこつちの群へと熱心に歩き　　って、頻りに忠告をしていた。手本としてはだれもそれ以上は示せないくらいであつた。彼はまったくいつにもないほどいそいそとしていて慇懃だった。だれに対してもにこにこしていた。何か言いつけられると、ジョンは、この上もなく快活に「はいはい！」と言いながら、直ちに自分の杖をあてた。そし

て、他に何もすることのない時には、他の者の不平を隠そうとでもするように、次から次へと唄を歌い続けた。

その陰鬱な午後のあらゆる陰鬱な事柄の中でも、のつぽのジョンのこの一目瞭然たる心遣いは最も気味悪く思われた。

私たちは船室で会議を開いた。

「さて、」と船長が言った。「もし私が構わずにもう一度命令を出そうものなら、全船の者がたちまちにどっと私たちを襲つて来るでしょう。御覧の通り、こういったような有様です。私に乱暴な返事をしましたでしょう？　ところで、私何か言い返せば、たちまち槍が飛んで来るでしょうし、何も言わなければ、シルヴァーはこれには何か訳があるのだと悟るでしょう。そうなれば万

事休すです。そこで、頼りになる人間がたった一人だけおられます。
」

「で、それはだれです？」と大地主さんが尋ねた。

「シルヴァーです。」と船長が答えた。「あいつはあなた方や私と同様に一所懸命に揉み消そうとしています。これはちよつとした不平です。あいつは機会さえあれば間もなく奴らを説いてそれを止めさせましょうよ。で、私の提議しますのは、奴にその機会を与えようということなんです。水夫たちに午後の上陸を許してやろうじやありませんか。もし彼等がみんな行けば、私たちはこの船を操縦して戦いましょう。もし彼等が一人も行かなければ、その時は、私たちは船室ケビンを守るのです。神が正しき者を護つて下

さいますように。もし何人かが行けば、よろしいですか、シルヴァーは奴らをまた小羊のようにおとなしくして船へつれて来ますよ。」

そういうことに決定された。弾丸を籠めたピストルが確実な味方の者全部に配られた。ハンターと、ジョイスと、レッドルースとは秘密を打明けられたが、それを聞いても、私たちの予期していたよりも驚きもしなかったし元気も盛んだった。それから、船長は甲板へ行つて船員に言い渡した。

「諸君、」と彼は言つた。「今日は暑くて、みんな疲れていて元気がない。一度上陸しても別にさしつかえはあるまい、——ボートもまだ揚げてないことだし。君たちはあの快艇ギグに乗つて、何人

でも好きなだけ午後中上陸してもよろしい。日没ひのいりの半時間前に砲うを撃うつて知らせる。」

その愚かな奴らは陸へ上るや否や宝に蹴躪けつまずいて向むこうずね脛ねをへし折るくらいに思っていたに違いない。というのは、彼等はみんなたちまち仏頂面を直して、万歳を叫んだからで、その声は遠くの山に反響して、鳥がもう一度碇泊所の周りに飛び立つてががああ鳴き騒いだ。

船長は彼等の邪魔になつてゐるようなへまなことはしなかった。彼は、上陸隊を取纏めることはシルヴァーに任せて、すぐに身を隠した。彼がそうしたのはよかつたと思ふ。もし船長が甲板にいたなら、もはや現在の事態を知つていないような風をしてい

ることさえ出来なかつたろう。事態は白昼のように明かだったので。シルヴァーは船長で、有勢な叛徒の船員を部下に有しているのだ。実直な水夫というのは——そして私は間もなく船中にそういう者たちがいるという証拠を知ることになったのであるが——ごく愚鈍な連中だったに違いない。いや、もっと正確に言えば、ほんとうのところはこうではなかつたろうかと思う。すなわち、発頭人どもの示す手本によつてすべての船員が不平を抱くようになったので、ただ、或る者はその程度がひどく、或る者はそれが少かつたのだ。そして、少数の者は、大体善良な連中なので、それ以上になりもしなければさせられもしなかつたのであろう。ぶらぶらしていてずるけることと、船を奪つて罪もない多くの人を

殺すこととは、まったく別のことなのである。

とにかく、やがて上陸隊が編成された。六人のものが船に留ま^{とど}ることになり、シルヴァーをも含めた残りの十三人が乗り込み始めた。

その時のことだった、私たちの生命を救うによほど与^{あずか}つて力があったあの向う見ずな考えの最初のものが、私の頭に思い浮んだのは。シルヴァーが六人を残してゆくとなれば、味方が船を占領してそれを操縦して戦うことが出来ないことは明かであった。また、たった六人だけ残されるのだから、船室の連中が現在のところ私の助力を必要としないことも同じく明かだった。私は上陸しようと思いついたのだ。で、すぐさま舷側を滑り下りて、

近い方のボートの艇首座に身を丸くしてちぢこまった。と、ほとんど同時にそのボートは押し出された。

だれも私に目を留める者がなく、ただ舳へさきの漕手が「お前かい、ジム？ 頭を低くしているよ。」と言っただけだった。しかし、シルヴァーは、もう一艘のボートから、目ざとくこつちを見て、それが私かどうかを大声で尋ねた。で、その瞬間から私は自分のしたことを後悔し始めた。

船員たちは渚まで競漕したが、私の乗っていたボートは、幾分先に出発していた上に、軽くもあり漕手もよかったので、もう一艘のボートを遥かに抜いて進み、舳が岸辺の樹木の間突き込むと、私は一本の枝を掴んでぶら下って、一番近くの茂みの中へ躍

り込んだ。その時にはシルヴァーやその他の者はまだ百ヤードも後にいた。

「ジム、ジム！」とシルヴァーが大声で呼んでいるのが聞えた。

しかしもちろん私はそれには少しも気を留めなかった。跳んだり、屈^{かが}んだり、押し分けたりしながら、真正面へとまっすぐにひた走りに走り、とうとうその上走れなくなった。

第十四章 第一撃

私はのつぽのジョンをすつぽかしてやったのがひどく嬉しかったので、愉快的気持になって、自分の今いる奇妙な土地を多少の

興味をもつて見　　し始めた。

私は、柳や、蒲^{がま}や、変てこな見慣れない沼沢性の樹木などが一面に生い茂っている沼のような地域を横切つて来て、その時は、波のように起伏している広い砂原の端のところに出ていた。その砂原は長さ約一マイルあり、松の樹が少しと、大きくなつたのは檜に似ているが、葉が柳のように青白い、曲りくねつた樹木がたくさん、点々と散在していた。この空地の向側には、例の山の一つが立っていて、二つの奇怪な峨^が々^がたる峯をぎらぎらと太陽に輝かせていた。

私は今初めて探検の喜びを感じた。この島は無人島であつた。船の仲間は後にして来たし、行手には口の利けない獣と鳥の他^{ほか}に

は何一つ生物いきものがいなかった。私は樹々の間をここかしこと歩きた。あちこちに私の知らぬ花の咲いた植物があつた。あちこちに蛇が見えたが、その中の一匹は岩棚から鎌首をあげて、独楽こまのるような音を立てながら私を睨んでいた。それが有毒な敵で、その音こそあの有名なながら蛇の音だとは、私は少しも思つてもみなかった。

それから、あの櫟のような樹——鮮色櫟あるいは常緑櫟という名だということを後になつて聞いた——の長く続いた茂みのところへやつて来た。その樹は黒くろいちご莓いちごのように砂に沿うて低く生えていて、大枝は妙にねじれ、葉は藁屋根のようにこんもりしていた。この茂みは一つの砂丘の頂から下へ延びていて、下へゆくに

つれて拡がりもし高くもなり、蘆の生い茂った広い湿地の縁まで達していた。その湿地を近い方の小川が滲み込みながら進み、碇泊所へ流れ込んでいた。沼は強烈な太陽の光の中に湯氣を立てていて遠眼鏡山スパイグラスの輪廓はもやもやとして震えて見えた。

突然、蒲の間がざわざわし始めた。野鴨が一羽ぐわあと鳴いて飛び立ち、続いてまた一羽また一羽と、間もなく沼の全表面の上には鳥の大群が空中に啼き叫びながら輪を描いて飛びつた。私はすぐに、船の仲間のだれかが湿地の縁に沿うて近づいて来たのに違いないと判断した。果して私の思った通りだった。間もなく、ずっと遠くに低い人声ひとごえが聞え、なおも耳を傾けていると、それがだんだん大きく近くなつて来た。

それを聞くと私は非常に怖こわくなつて、一番近くの鮮色櫥のこんもりしている下へ這い込んで、耳をすましながら、小鼠のように黙つて、そこにしゃがんでいた。

別の声が返事をした。すると初めの声が、それはシルヴァーの声だということが私にはその時わかったが、また話し始めて、永い間滔とうとう々としやべり続け、ただ時々別の声が出すだけだった。その音調から察すれば、彼等は熱心に、またほとんど烈しいくらいに、話し合っているに違ひなかった。しかし、はつきりした言葉は一つも私の耳に入らなかつた。

とうとうその話し手たちは立ち止つたらしかつた。そして多分坐つたようであつた。というのは、彼等がそれ以上近づいて来な

くなつたばかりではなく、鳥の群もだんだん静かになりかけ、再び沼地の自分たちの場所に下り始めたからである。

そして今私は自分の仕事を等閑なおざりにしていることに気がついて来た。無鉄砲にもあの兇漢どもと一緒に上陸したからには、いくら何でも自分の出来ることは彼等の相談を窃ぬすみ聞きすることだ、そして自分の明白な義務は、都合よく低く這っている樹々の下に隠れて出来るだけ近くへ忍び寄ることだ、と思い始めたのだ。

話し手のいる方角は、彼等の声の響だけではなく、数羽の鳥がまだその闖入者ちんにゆうしゃたちの頭上に驚いて舞っている様子でも、かなり精確にわかった。

四つん這いになって這いながら、私は彼等の方へそろそろと、

しかし脇目もふらずに進んで行つた。とうとう、木の葉の隙間へ頭を上げると、沼のそばに、樹木が密に生えている小さな緑の谷がはつきりと見下されて、そこにのつぽのジョン・シルヴァーともう一人の船員とが向い合つて話しながら立っていた。

太陽が彼等を全身照していた。シルヴァーは帽子をそばの地面の上に投げ出していて、彼の暑気でてらてらしている、大きな、すべすべした、色白の顔は、哀願するように相手の男の顔に向けられていた。

「兄^{きょうでえ}弟、」と彼は言っていた。「これもお前^{めえ}を尊敬してるかのことだぜ、——尊敬だぞ、違^{ちが}えねえぜ！　もしお前が好きでなけりやあ、己がこんなとこまで来てお前にわざわざ言つて聞か

せてやると思うか？　もうすっかりきまつてることだ、——今更
お前がどうにもこうにも出来やしねえ。己がこう言つてるのもお
前の首をつなぐためなんだ。で、もしあの乱暴な奴らのだれかが
このことを知ったら、己はどうなるか、トム、——え、おい、ど
うなると思う？」

「シルヴァー、」と相手の男が言った。——そして私には、彼が
顔を真赤にしているばかりではなく、鴉のようにしゃが鳴れた声を出し、
またその声がぴんと張った索のように震えているのがわかった。

——「シルヴァー、」と彼は言った。「お前は年寄だ。そして正
直者だ。ともかくそういう評判を取つてゐるんだ。それにまた、た
くさんの貧乏な水夫たちの持つていねえほどの金かねも持つてゐる。

それから胆つ玉もある、確かにな。それなのに、お前はあの馬鹿どもの仲間にひきこまれようって言うのかい？ そんなお前じゃねえ！ 己はそんなことをするくれえなら片手をなくしたつていい。それあ神様が己を照覧していらつしやるくれえ確かにだ。もし己が自分の義務に背いたら——」

と、その時突然、彼の言葉は或る叫び声で遮られた。私は実直な船員を一人見つけたのであつたが、——さて、今、ちょうどそれと同時に、もう一人の実直な船員の知らせがわかつて来たのである。沼のずっと遠くで、突然、怒つた叫び声のような音声が起こつたかと思うと、それに続いて別の声がし、それから恐しい長く引いた悲鳴が一声聞えた。遠眼鏡山の岩は幾度となくその悲鳴を

反響した。沼の鳥の群はことごとく一斉にぶうんと羽音を立てて再び飛び立ち、天を暗くした。そして、永い間その死のをめき声
がなお私の頭の中で鳴り響いていた後に、ようやく寂寞が再び
あたりを領し、ただ、また降りて来る鳥のさわさわという羽音と、
遠くの大浪のどどうつと響いて来る音とが、午後の懶^{ものう}さを擾^{みだ}して
いるだけだった。

トムはその声を聞くと拍車をかけられた馬のように跳び上った。
が、シルヴァーは眼を瞬きもしなかった。彼は軽く柵杖に凭^{もた}れな
がら、じつとその場所に立っていて、今にも跳びかかろうとする
蛇のように相手の男を見守っていた。

「ジョン！」と水夫は片手を差し伸ばしながら言った。

「手を触るな！」とシルヴァーは一ヤードほど跳び退きながら叫んだ。それは熟練した体操家のような速さと確かさと私には思われた。

「厭なら触らねえよ、ジョン・シルヴァー。」と一方の者が言った。「お前に己をこわがらせるのは、良心が咎めるからだぞ。だが、一体、あてえの声は何だったい？」

「あれか？」とシルヴァーが、ずっと微笑はしていたが、しかし前よりはもっと用心深くしながら、答えた。彼の眼は大きな顔の中でほんのピンの先ほども小さくなっていたが、しかし硝子の破片のように閃いていた。「あれか？　おお、あれあアランだろうと思うな。」

それを聞くと可哀そうなトムは勇士のようにかつと怒った。

「アランだと！」と彼は叫んだ。「では、まことの船乗としてあ

の男の魂を安らかならしめ給え！　で、ジョン・シルヴァー、お

前は永^{なが}えこと己の仲間だったが、これからはもう仲間じゃねえぞ。

己は犬みてえにみじめな死に方をしようとも、義務をしながら死ぬつもりだ。お前たちはアランを殺したんだろう？　殺せるなら、

己も殺せ。だが己はお前たちなんぞ物^{コック}ともしねえぞ。」

そう言うと、その勇敢な男は料理番^{コック}にくるりと背を向けて、海岸の方へ歩き出した。しかし彼は遠くまでは行かれぬ運命だった。一声叫びながら、ジョンは一本の木の枝を掴むと、手早く棒杖を腋の下から外して、その奇怪な飛道具を空気を切ってぶうんと投

げつけた。それは、尖頭を先にして、可哀そうなトムの背中の真中のちようど両肩の間に、恐しい勢でぶつつかった。彼は虚空を掴み、ううんと呻いて、倒れた。

彼がひどく怪我をしたかさほどでもなかったかは、だれにもわからなかった。その音から判断すれば、恐らく、彼の背中は即座に打ち碎かれたのであろう。それに彼には恢復するだけの時間も与えられなかった。シルヴァーは、片足はなく柶杖もなくとも、猿のように敏捷で、次の瞬間にはトムの上に跨って、その抵抗も出来ない体からだに二度もナイフを柄つかのところまで突き刺したのだ。彼がそうして突き刺している時に息を切らしてはあはあいつているのが、私の隠れている場所からも聞えた。

私は気が遠くなるということはほんとうはどんなことであるか知らないが、それからしばらくの間は見えるものごとくが自分の前から渦巻く靄もやの中をぐるぐる　　って行ったことは知っている。シルヴァーも、鳥も、高い遠眼鏡山の山頂も、私の眼の前で倒になってくるくるくると　　って行き、耳の中では、あらゆる種類の鐘が鳴り響き、遠くの声がわあっと叫ぶのが聞えた。

私が再び正気に返った時には、かの極悪人は気を落着けていて、杖杖を腕の下にし、帽子をかぶっていた。そのすぐ前には、トムが芝生の上にじっと動かずに横っていた。けれどもその殺人者は彼のことを少しも気にかけないで、その間血塗れのナイフを一把の草で拭いていた。その他のものは何の変化もなく、太陽は、湯

氣立っている沼や、山の高い尖頂に、依然として無慈悲に輝いて、私は、自分の眼の前で殺人が実際に行われて、一人の人間の生命がつい一瞬前に無残に絶たれたのだということを、ほとんど信ずる気にはなれないのであった。

しかしその時ジョンは手をポケットの中に入れて、呼子を取り出し、いろいろの調子の音で吹くと、それが暑い空気の中を遠くまで響きわたった。私には、無論、その合図の意味はわからなかった。が、それを聞くとたちまちに私の恐怖が目覚めて来た。もつとたくさん人がやって来るのだろう。私は発見されるかも知れない。彼等はすでに実直な人々を二人まで殺しているのだ。トムとアランとの後に、私が次にやられるのではなからうか？

すぐさま私は逃げ出すことにして、出来るだけ速くこつそりと、森のもつと開けた部分へと、再び這い戻りかけた。そうしている、あの老海賊とその仲間たちとの間に互に呼び交している声が聞え、危険を知らせるその声が私の足を早めさせた。茂みを出るや否や、私は、人殺しどもから離れられさえすれば逃げる方向などにはほとんど構わずに、それまでに走ったことのないほどひた走りに走った。そして走っている間に、恐怖はいよいよ募つて来て、しまいには狂気じみたものになった。

実際、だれでも私より以上に助かる見込のなくなった者はあるだろうか？ 合図の砲の鳴る時が来ても、どうして私は、人殺しの罪惡を犯したばかりのあの悪鬼どもにまじって、ボートのとこ

ろまで下りて行かれようか？ 私を真先に見つけた奴が嶋しぎの首でもひねるように私をひねり殺しはしないだろうか？ 私が姿を見せないそのことが彼等には私が彼等を恐れていることの、従って私が彼等のやったことを知っていることの証拠と思われはしないだろうか？ もうどうしたって駄目だ、と私は思った。さようなら、ヒスパニオーラ号よ。さようなら、大地主さんや、先生や、船長さん！ 私には、餓死するか、謀叛人どもの手にかかつて殺されるかの他には、何も残されてはいなかった。

この間もずっと、前に言ったように、私はなおも走り続けている、少しも気がつかずに、あの二つの峯のある小山の麓に近づいて、島の中でも、鮮色檜がもつと疎まばらに生えていて、恰好かつこうも大き

さももつと森林樹らしく見える部分へ入り込んでいた。その樹々にまじつて、或るものは五十フィート、或るものは七十フィート近くの高さのある、数本の松の樹がちらほら生えていた。空気もまた、下の沼のほとりよりは爽かな香がした。

そしてここでまた、新たな驚きが、私に、胸をどきんとしながら立往生させたのであつた。

第十五章 島の男

山はこのあたりでは嶮^{けわ}しくて石だらけだったが、その山腹から礫^{こいし}がばらばらと離れて、樹の間をがらがらと音を立てて跳びなが

ら落ちて来た。私の眼が本能的にその方向へ向くと、一つの姿が非常な速さで一本の松の樹の幹の後へ跳び込んだのが見えた。それが何であつたか、熊か、人間か、猿か、私にはまるでわからなかつた。どす黒くて、毛でむしやむしやしているようだった。それ以上はわからなかつた。しかしこの新しい怪物の出現は私を立ち止らせた。

私は今や両側とも断たれたようなものであつた。背後にはあの人殺しどもがいる。前にはこの得^{えたい}体の知れぬものが潜^{ひそ}んでいる。そこで直ちに私は自分の知らぬ危険よりはむしろ自分の知っている危険の方を取ることにした。シルヴァーだつてこの森の怪物に比べればそれほど恐しくないので、私は急に踵を

返して、肩越しに油断なく振り返りながら、ボートの方角へと引返しかけた。

と、たちまちその怪物が再び姿を現し、大きく迂回して、私の行手を遮りかけた。私はともかく疲れていたが、よし朝起きた時のように元気があつたにせよ、そういうような相手と速さを競うことは自分には到底無駄だということがわかった。幹から幹へとその怪物は鹿のように跳び移り、二本の脚で人間のようには走つてはいたが、走る時にはほとんど身を二つに折り曲げて屈んでいて、私のそれまでに見たどの人間とも似ていなかった。でもそれは人間だった。それはもはや疑うことが出来なくなった。

私はふと以前に聞いたことのある食人種の話の思い出した。私

はもう少しのことで救いを呼ぼうとした。けれども、いかに野蛮人ではあつてもそれが人間だったという事実だけでも、幾らか私を安心させ、それに比例してシルヴァーの恐しさが甦つて来た。それで、私は立ち止つて、何か逃げる方法はないかと思案した。そうして考えていると、自分がピストルを持つていたことがぱつと頭に思い浮んだ。自分が素手^{すで}ではないことを思い出すや否や、勇氣が再び心の中に燃え上つた。そして私はその島の男にきつぱりと顔を向け、彼の方へつかつかと歩いて行つた。

彼はこの時には他の樹の幹の後に隠れていた。が、私をよく見守つていたに違いない。という訳は、私が彼のいる方角へ動き出すや否や、また姿を現して、私に逢うために一歩踏み出したから

である。それから、躊躇したり、あとしざりしたり、再び前へ出たりしたが、その挙句、私のびつくりしまごついたことには、ペタンと跪いて、組み合した両手を哀顔するようにして差し出した。それを見ると私はもう一度立ち止った。

「君はだれだい？」と私は尋ねた。

「ベン・ガンだよ。」と彼は答えた。その声は嗄しゃれていてぎごちなくて、錆びた錠前のようだった。「俺わしは可哀かええそうなベン・ガンだよ。この三年間も人間と口を利いたことがねえんだ。」

私にはその時、この男が自分と同じく白人で、その目鼻立ちは人好きのするくらいでさえあることが、わかった。彼の皮膚は、むき出しになっているところはどこも、日に焦やけていた。唇まで

が黒くなっていた。そして碧い眼はそうなどす黒い顔の中でまったく際立っていた。私のそれまでに見たり空想したりして来たあらゆる乞食の中で、彼はぼろぼろの着物を着ている点では大將だった。彼は古びた船の帆布と古びた船布とで拵えた檻褌着物を着ていた。そしてこの異様な補綴細工は、真鍮のボタンの、木片だの、タールまみれの括帆索の紐輪だのという、実に種々様々な不調和な留具ですっかりくつつけてあった。腰には真鍮のびじよ金のついた古びた革帯を巻いていたが、それが彼の服装全体の中で唯一の確かなものだった。

「三年間もだつて！」と私は叫んだ。「じゃあ君は難破したのかい？」

「いいや、そうじゃねえよ、兄弟きょうでえ。」と彼は言った。――

「置去りにされたんさ。」

この置去りと言う言葉は私も前に聞いたことがあつて、それが海賊仲間にはごくありふれた一種の怖しい刑罰で、反則者に僅かばかりの火薬と弾丸とを持たせ、どこか遠くの人のない島に上陸させて、置いて来ることだ、ということを知っていた。

「三年前に置去りにされてね、」と彼は言い続けた。「それからこつちは、山羊と、苺いちごと、牡蠣かきで命を繋いで来たんだ。どこにいても人間つてものはね、人間てものはどうにかやってゆけるものだねえ。だが、兄弟、俺は人間の食物くいものがほしくつてたまんねえのさ。お前めえさんはひよつとしてチーズを一片きれ持ち合していやしね

えかね、え？ 持たねえって？ やれやれ、俺あ幾晩も幾晩も永なが

え夜ようさりチーズの夢をみたよ、——大てえげえ概あぶ、炙あぶった奴さ。——

そしてまた目が覚めてみると、やっぱりここにいるのさ。」

「もしいつか僕がまた船へ乗れたら、君にチーズをどっさりあげるよ。」と私が言った。

この間中、彼は、私のジャケットの地質に触つてみたり、私の手を撫でたり、私の長靴を眺めたり、概して、彼の話している合間に、同じ人間仲間のいることに子供のような喜びを示したのであった。けれども、私の最後の言葉を聞くと、彼はぎっくりとしたようにこすく顔を振り上げた。

「もしいつかまた船に乗れたら、ってお前さんは言ったね？」と

彼は私の言葉を繰返して言った。「ふうん、すると、だれがお前さんの邪魔をするのかい？」

「君じゃあないことだけは確かさ。」と私は答えてやった。

「そりやそうだよ。」と彼は叫んだ。「ところでお前さんは——お前さんは何ていう名だね、兄弟？」

「ジムだよ。」と私は言つてやった。

「ジム、ジム。」と彼はまったく喜んでいるらしく言つた。「じや、ねえ、ジム、俺はね、お前さんが聞くと恥しがるくれえ乱暴な渡世をして来た男だよ。まあ、例えばさ、お前さんはこの俺に信心^{ぶけ}深え^{おふくろ}母親があつたとは思うめえ、——この俺を見てね？」

と彼は尋ねた。

「いや、なあに、格別そうでもないがねえ。」と私は答えた。

「ああ、そうかね。」と彼は言つた。「とにかく、俺にやあそんな母親があつたのさ、——素敵に信心深え母親がな。それに俺も行儀のいい信心探え子供だつたよ。教義問答なんか、とても聞き取れねえくれえ早口に、ぺらぺら言えたもんだぜ。それがこういう有様になつたのだよ、ジム。そしてこれも墓石の上で投銭あないち戯（註五五）をやつたのが始まりさ！それが始まりだつたが、それからだんだん深入りしたんだ。俺の母親は俺にそうなるつて言つてたよ。何もかもすっかり言いあてたのさ、母親はな。信心深え女ひとだつたなあ！だが、俺がこんなところに置かれることになつたなあ、神様の思召しだつたよ。俺あこの淋しい島でそんなこと

をすっかり考えて来たんで、今じやまた信心深え男に返^{けえ}つてるんだ。もうラムなんか決してあんなにたくさん飲みやしねえ。もつとも、初めてありつけた時にやあ、もちろん、縁起にほんのちよつとくれえはやるがね。俺あ真人間にならなくちやあならんし、その見越しもちやんとついてるんだ。それにね、ジム、——とあたり中を見　しながら、耳語くらいに声を低めて、「俺は金持なんだぜ。」

私は、その時、この男はこんな寂しいところに独りぼっちでいたために可哀そうに気が変になつているのだと思つた。そして、その氣持がきつと私の顔に現れたのだらうと思う。というのは、彼は躍起となつてその言葉を繰返したから。――

「金持だぜ！ 金持だつてえんだよ！ で、お前さんにいい話を
してあげよう。俺はお前さんを立派な男にしてあげるぜ、ジム。
ああ、ジム、お前さんは自分の運勢を有難く思うようになるよ、
きつと。何しろ、^{なん}お前さんは俺を一番先にめつけてくれた人だか
らなあ！」

そして、こう言つた時、突然彼の顔に不機嫌な影がさし、彼は
片手に掴んでいる私の手を強く握ると、私の眼の前に^{おど}嚇すように
人差指を挙げた。

「ところで、ジム、ほんとのことを言っておくれよ。あれあフリ
ントの船じゃねえのかい？」と尋ねた。

この言葉を聞くと、私にはうまい考えが思い浮んだ。私は味方

を一人見つけたと思いかけ、すぐに彼に答えてやった。

「フリントの船じゃないよ。それにフリントはもう死んじやったが、君が訊^きくから、ほんとのことを言つてあげるんだが、——あの船にはフリントの子分が何人か乗っているんだ。私たち残りの者はそれで困つてるんだよ。」

「一本——脚の——男はいねえかね？」と彼は喘ぐように言つた。「シルヴァーかい？」と私は尋ねた。

「ああ、シルヴァーだ！　そういう名前^{なめえ}だったよ。」と彼が言つた。

「あの男は料理^{コック}番なんだ。そしてまた張本人なんだよ。」

彼はまだ私の手頸を持っていたが、これを聞くとそれをぎゅつ

と握り締めた。

「もしお前がのつぽのジョンの使に來たんなら、己^{おれ}あ豚みてえにやられるんだ。それあ己にやわかつてる。だがお前はどこにいると思う？」と彼は言つた。

私は直ちに心をきめて、彼に、返事として、私たちの航海の一部始終や、私たちが今どんな苦境に陥つてゐるかということをし話してやつた。彼は非常に熱心な興味をもつて聞いていたが、話し終えると、私の頭を軽く叩いた。

「お前さんはいい子だ、ジム。」と彼が言つた。「で、お前さん方はみんな困つた羽目になつてゐるんだね？　よし、じゃあ、ベン・ガン^{がた}を信用しなせえ、——ベン・ガンはそれにやあ^{あつれ}お誂え向

きの男だよ。ところで「その大地主さんて人は人を助けるのに太^{ふと}つ腹^{ばら}になれそうな人だとお前さんは思うかね？——お前さんの話だと、その人も困った羽目になつてるといふことだが。」

私は大地主さんはこの上なく心の大きい人だと言つてやった。

「そうかい。だがね、」とベン・ガンは答えた。「俺は門番にし^{しきせ}て貰^{もら}つたり、仕着^{しきせ}をして貰^{もら}つたり、そんなやうなことをして貰^{もら}え^{もれ}てえ、つて言うつもりじゃねえんだぜ。そんなこたあ俺の目当じやねえんだよ、ジム。俺の言うつもりなのは、大地主さんが、もう或る人間のものも同様な金の中から、大枚、まあ千ポンドぐれえ、分けて下さりそうかい？　といふことなのさ。」

「それあきつとして下さると思うよ。」と私は言つた。「ほんと

は、みんなが分前を貰うことになってるんだから。」

「それから国へ帰る船賃は要らないのかい！」と彼は非常にずるい顔付をしながら言い足した。

「知れたことさ。」と私は叫んだ。「大地主さんは紳士だもの。それにまた、あいつらを厄介払いしてしまえば、君にも船を国へ帰す手伝いをして貰わなきゃならないしね。」

「ああ、それあそうだな。」と彼は言つた。そして非常に安堵したような様子だった。

「じゃあ、お前さんにいい話をしてあげるとしよう。」と彼は話し続けた。「それだけ言うことにするぜ。俺はね、フリントがあの宝を埋めた時にやあ、あの人の船にいたんだ。あの人は六人の

者と一緒さ、——六人とも丈夫な水夫だった。あの連中は一週間近くも陸にいたし、俺らは海^{ウオルラス}象号に乗って岸に寄ったり離れたりしてたんだ。或る日のこと、合図があつて、フリントが一人で小さなボートに乗って帰^{けえ}つて来た。頭を青い肩^{スカーフ}巾で包んでね。お陽^ひさんが昇りかけてた時で、あの人の顔は恐しく真蒼に見えたね。だけど、あの人だけで、いいかね、六人はみんな死んだのだ、——死んで埋められたんだぜ。どうしてあの人にそんなことがやれたのか、俺らの船の者一人も合点^{がてん}がいかなかったな。何にしてもともかく、闘い、殺害、不意の死（註五六）だったのさ、——あの人^{クォーターマスター}が六人を相手にしてな。ビリー・ボーンズは副船長だったし、のつぽのジョンは按針手だった。その二人が宝はどこにある

のかつて訊いたんだよ。するとあの人は言った。『ああ、手前^{てめえ}たちあしたけりや上陸してもええぜ、そしてここに残るがいいや。』とね。『だが、この船の方は、もつと獲物を探しに荒し　　るんだぞ、畜生！』そう言ったものさ。

ところで、俺は三年前に別の船に乗っててね、この島を見たんだ。で、言ったのさ、『おい、みんな、ここにやフリントの宝があるんだ。上陸してめつけようじゃねえか。』とね。船長^{せんちよ}はそれによ気が進まなかったが、仲間の奴らはみんな賛成して、上陸した。十二日もみんなで宝を探し　　り、毎日毎日奴らは俺^{あぐた}態^{めえ}をつき、とうとう或る朝みんなが船へ行っちまった。『お前はな、ベンジャミン・ガン、』って奴らは言うんだ。『ここに鉄

砲を置いとくぜ、それから鋤と、鶴^{つるはし}嘴とをな。』とね。『お前はここに残ってるがいいや。そしてフリントの金をめつけ出して自分のものにしな。』って奴らは言うのさ。

でね、ジム、もう三年間俺はここにいるのさ。そしてその日から此方つてももの、人間の食物は一口も食わねえんだよ。だがねえ、おい、俺を見ておくれ。俺は平水夫みてえに見えるかい？ 見えねえだろ。また、そうじゃなかったんだからな。」

そう言うと、彼は瞬きをして、私をきゅつと抓^{つか}った。

「その大地主さんて人に言っておくれよ、ジム。」——と彼は話し続けた。「あの男はそうじゃなかったんです、——とそう言うんだぜ。三年が間あの男はこの島の人間になっっていました、昼も

夜も、天氣のよい日も雨の日も。そして時々はお祈りのことも考えてたようでした（と言うんだよ）。それから時々は、年とった母親がまだ生きてるなら、その母親のことも考えてたようでした（とね）。だけどガンは大抵（とこうだよ）——あの男は大抵別の事に夢中になってました。そう言うってからお前さんは大地主さんを一つつねるんだぜ、こんな工合にな。」

と言つて彼は非常に親しげな風にまた私を抓つた。

「それからな、」と彼は続けた。——「それから、行つてこう言うんだよ。——ガンは善人でござえます（とな）。そして、あの男も元はやつぱりその仲間でしたが、あんな分限紳士よりは、生れつきの紳士の方を、とつても——いいかい、とつてもだよ——

信用しています、とね。」

「うん、君の言ったことは僕には一言もわから^{こと}ないねえ。」と私は言^{こと}った。「だが、そんなことはどうだっていい。どうして僕が船へ帰れるかね？」

「ああ、そりやあ困^こったこ^こつたね、確かに。」と彼が言^{こと}った。

「よしよし、俺のボートがあるよ。俺がこの二本の手で拵^こえた奴^せさ。白い岩の下に隠してある。まさかの時にやあ、暗くな^こつてからあれを使^{こと}つてみてもいいよ。おやつ！」と彼は急に呶^ど鳴^なり出^でした。「あれあ何だね？」

ちようどその時、日が沈むまでにはまだ一二時間はあつたのに、雷のような砲声^とが起^おつて島中が鳴^なり響^{ひび}いたのである。

「戦^{いくさ}を始めたんだよ！」と私は叫んだ。「僕について来給え。」

そして私は碇泊所の方へ、怖^{こわ}さも何もすつかり忘れて、走り出した。すると、山羊の皮を着た島に置去りにされた男は、私のそばにくつついて、身軽く楽々と駆けた。

「左、左、」と彼が言った。「左手へ左手へと行くんだよ、ジム君！ その木の下へ入^{へえ}るんだ！ そこが俺が初めて山羊を殺した処さ。今じゃあ山羊の奴らはこんなとこまで下りて来やしねえ。ベンジャミン・ガンが怖^{こえ}えんで、みんなあの山の上へ逃げちまつたよ。ああ！ そこにはばかがある。」——墓場というつもりだったに違いない。「塚があるだろ？ 俺は時々ここへ来てお祈りをするんさ。多分今日^{きょう}あたりは日曜だろうと思った時にね。それ

あなるほど礼拝堂じゃねえさ。だけど、この方がよっぽど有難^{ありがて}えような気がしたよ。で、お前さんは言うんだぜ、ベン・ガンは手不足で困りやした、ってね。——牧師さまはいらっしゃらねえし、聖書や旗でせえねえんですから、とね。」

私が走ってゆく間に彼はそのようにしやべり続けていたが、別に返事を期待するのでもなく、また私も何の返事もしなかった。

大砲の音の次に、かなり間をおいてから、小銃の一斉射撃が聞えた。

それが止んでまたひっそりとし、それから、私は、前方四分の一マイルとないところに、^{ユニオンジャック}英国国旗が森の上の空中に翻っているのを見た。

第四篇 柵壁

第十六章 医師が続けた物語

どうして船を棄てたか

あの二艘のボートがヒスパニオーラ号から岸へ行つたのは、一時半——海語で言うところと三点鐘（註五七）——頃であつた。船長と、大地主と、私とは、船室ケビンでいろいろと相談をしていた。一陣の微

風でもあつたなら、吾々は船に残っている六人の謀叛人を襲い、錨索を放つて、沖へ出たであらう。しかし風はなかつたし、その上、どうにも仕方がなくなつたことには、ハンターが降りて来て、ジム・ホーキンスがいつの間にかボートへ入り込んで皆と一緒に上陸してしまつたと知らせてくれた。

吾々はジム・ホーキンスを疑う気は少しも起らなかつたが、彼が無事でいられるかと非常に心配になつた。ああいう気の荒くなつてゐる連中と一緒に رفتたのでは、吾々が再びあの子を見られるかどうか見込は五分五分のように思われた。吾々は甲板へ駆け上つた。^{チャン}瀝青が板の接目^{つぎめ}で泡立っていた。その場所に漂う氣持の悪い悪臭が私の胸を悪くさせた。もし熱病や赤痢を嗅げる処があ

るとするなら、あの厭な碇泊所こそ正にそれであつた。例の大人の悪党は前甲板の帆の下でぶつぶつ言いながら坐つていた。岸には河口のすぐ近くにあの二艘の快艇ギッゲが繋いであつて、両方ともに一人ずつ残つて坐つていた。その中の一人は「リリバリアロー（註五八）」を口笛で吹いていた。

何もせずに待つてゐることはたまらなかつた。それで、ハンターと私が情報を求めに小形端艇ジョリボートに乗つて上陸しようということになった。

前の快艇はその漕手らの右の方に曲つていたが、ハンターと私とは、海図にある柵壁の方向へと、真直まっすぐに漕いで行つた。ボートの番をするのに残された二人の者は、吾々の現れて来たのにあ

わて出したようだった。「リリバリアロー」もびたりと止んだ。そして兩人がどうしたらいいかと相談しているのが見えた。もし彼等がシルヴァーのところへ知らせに行つたなら、すべては違つた成行になつたかも知れなかつた。が、彼等は何か命令されていたのであろう、元のところに静かに坐つて、また「リリバリアロー」をやり出した。

海岸にはちよつと出張つた処があつて、私はそこを彼等と吾々との間にするように舟を進めた。そういう訳で、吾々は上陸しない先にもう快艇が見えなくなつていた。岸に着くと私は舟から跳び出し、暑さを避けるのに大きな絹のハンケチを帽子の下に入れ、安全のためにちゃんと火薬を填めた一對のピストルを持って、ほ

とんど走るようにして進んだ。

百ヤードと行かないうちに、柵壁に着いた。

それはこういう風になっていた。清水の泉が一つの円い丘のほとんど頂上のところに湧き出ていた。さて、この丘の上に、その泉をも取り入れて、堅牢な丸太小屋が造つてあり、危急の場合には四十人くらいの人数を収容出来たし、四方とも壁に小銃射撃が出来るように銃眼を穿つてあつた。小屋の周り中は樹木を伐り払つて広い空地にしてあり、その上にまた、高さ六フィートの※あ囲くいがこいをめぐらしてあつた。この※あ囲には開き戸もなければ明あいている箇所もなく、非常に堅固なので、時間や勢力をかけずには引き倒すことが出来ないし、相当間隔を置いてあるので、包囲者は身を

隠すことも出来なかつた。この丸太小屋の中にいる人々の方は、あらゆる点で包囲者に対して有利であつた。静かに隠れていて、敵を鷗嶋しやこのように射撃することが出来るのだ。ただ食糧があつてよく見張りをしていさえすればよかつた。まったくの奇襲を受けるのでない限りは、一聯隊の敵に対してもその場所を守ることが出来たかも知れなかつた。

私に特に気に入つたのは、泉であつた。吾々はヒスパニオーラ号の船室に十分よい場所を占めていて、武器と弾薬も、食べる物も、種々の上等の酒も豊富にあつたけれども、一つだけ手拔りがあつた。——水がなかつたのである。私がそのことを考えている時、断末魔の人間の悲鳴が島中に響きわたつた。私は非業の死は

これが初めてではない。——かつてカムバランド公爵（註五九）閣下に仕えていたことがあり、フォンテノイ（註六〇）では自分も負傷したことがある。——が、この時は心臓がどきんとした。「ジム・ホーキンズがやられた。」と真先に思ったのである。

昔軍人だったということとは有難いことであるが、しかし医者であるということはなおさらである。もう一刻もぐずぐずしてはいられない。そこで私は直ちに決心をし、時を移さず海岸へ引返して、小形端艇に跳び乗った。

好運にもハンターは上手な漕手だった。吾々のボートは水を切つて進み、間もなく横附けになったので、私はスクーナー船に上つて行つた。

みんなは、当然のことながら、すっかりどぎまぎしていた。地主は敷布シーツのように蒼白な顔をして坐っていて、自分がみんなをこんな災難に陥れたことを考えていた。善良な人だ！ 六人の前甲板の水夫の中の一人も大地主と同じくらいの顔色をしていた。「こんなことには初めての男が一人いますよ。」とスモレット船長は、その男の方へ頭を動かしながら、言った。「彼はああれの悲鳴を聞いた時には、今少しで気絶しそうでしたよ、先生。ちよつと舵を動かしてやれば、あの男は我々の味方になりましょう。」私は自分の計画を船長に話した。そしてそれを実行する細かい手筈てはずを二人で決定した。

吾々は、レッドルース老人に装弾した銃を三四挺と身を護るた

めの敷蒲団マットレスを一枚与えて、船室と前甲板下水夫部屋フオークスルとの間の廊下に立たせた。ハンターはボートを船尾窓の下に　し、ジョイスと私とはそのボートに火薬の罐や、銃や、堅かたパンの囊や、豚肉の小樽や、コニヤツクの樽や、私には何より大事な薬箱などを積み込み始めた。

その間に、大地主と船長とは甲板に留まりとど、船長は舵手コックスンに声をかけた。船に残っている者の中の頭かしらだ立った男なのである。

「ハンズ君、」と彼は言った。「ここに我々二人は銘々一對ずつのピストルを持っている。もし君ら六人の中のだれでもちよつとでも信号めいたことをすれば、その者は命いのちをなくするんだぞ。」
 彼等は大層びつくりした。そして、ちよつと相談してから、一

人残らず船首の昇降口を転ころげ込んで下りて行つた。疑いもなく、吾々を背後から不意打しようと思つたのであろう。ところが、円材の出ている廊下にレッドルースが彼等を待ち構えているのを見ると、彼等は直ちに方向を転じて、一人の頭が再び甲板にひよいと出た。

「降りろ、畜生！」と船長が叫んだ。

するとその頭はまたひよいとひっこんでしまった。そして、しばらくは、その六人のごく意気地のない水夫どもは何の音も立てなかつた。

この時分までには、吾々は、手当り次第の物を抛り込んで、小形端艇に積めるだけ積み込んでしまった。ジョイスと私とは船尾

窓から抜け出して、再び岸へ向って進み、オールの動く限り速く一所懸命に漕いだ。

こうして二度もやって来たので、岸にいる見張人はかなり驚いた。「リリバリアロー」はまた止んだ。そして、吾々がちょうど例の小さな岬の蔭に彼等を見失おうとする時に、彼等の一人がひらりと岸へ跳び移って姿を消した。私は計画を変えて彼等のボートを破壊してやろうかとも思ったが、シルヴァーやその他の者どもがすぐ近くにいるかも知れないし、余り慾張り過ぎてはあるいはすべてが失敗に終るかも知れないと思つて、思い止ま^{とど}つた。

吾々は間もなく前と同じ場所に上陸し、丸太小屋に必要品を入れにかかった。最初は三人ともどっさり荷物を背負つて行つて、

それを防柵の上から投げ込んだ。それから、ジョイスを残して、その番をさせ——無論一人ではあるが、銃を半ダースも持たせておいた——ハンターと私とは小形端艇に引返して、もう一度荷物を背負った。こうして二人は息をつく間もなく進み、とうとう全部の積荷を運んでしまうと、二人の召使は丸太小屋の中に自分たちの位置を占め、私は全力を出してヒスパニオーラ号へ漕ぎ戻った。

吾々が二回もボートに荷を積み込もうとしたことはずいぶん大胆らしく思われるが、ほんとうはそれほどでもなかった。彼等は無論人数では優っていたが、吾々は武器で優っていた。上陸している連中は一人も銃を持っていないので、彼等がピストルの射撃

出来る距離以内に来ないうちに、吾々は少くとも六人はやつつけ
ることが出来るつもりだった。

大地主は船尾の窓のところで私を待っていた。さっきの気の遠
くなったような様子はすっかりなくなっていた。彼は繫艇索を掴
んでそれを結びつけ、それから吾々二人は命がけでボートに荷を
積み込み始めた。積荷は豚肉と火薬と堅パンで、それに、大地主
と私とレッドルースと船長とに銘々ただ銃が二挺ずつと彎刀カトラスが
一本ずつだった。残りの武器と火薬とは二尋半の水の中へ投げ込
んだ。それで、そのぴかぴかした鋼鉄の刃物などがずっと下に綺
麗な砂の底で太陽に輝いているのが見えた。

この時分には潮が退ひき始めていたので、船は錨の周りをぐるぐ

る動いていた。例の二艘の快艇の方角で微かにおういと呼ぶ声が聞えた。ジョイスとハンターとはそれとはずっと東の方にいるので、二人のことはそれで安心出来たけれども、その声は吾々の一行に早く出かけなければならぬことを警告した。

レッドルースは廊下の彼の場所を引揚げて、ボートの中へ跳び下りた。そこで吾々はスモレット船長に便利なようにとボートを船の船尾張出部カウンターのところへ した。

「おい、お前ら、」と船長が言った。「私の言うことが聞えるか？」

水夫部屋からは何の返事もなかった。

「お前にだ、エーブラハム・グレー、——お前に私は口を利いて

いるのだぞ。」

それでも答がない。

「グレー、」とスモレット氏は少し声高に再び言い始めた。「私はこの船を立退く^{たちの}ところだ。で、お前に船長について来いと命令する。お前が心^{しんそこ}底は善人だということは私は知っている。また、恐らく、お前たちみんなの中の一人だつて悪党ぶっているほどの悪党じゃあないのだ。私はここに時計を手を持っている。私のところへ来るのにお前に三十秒だけ余裕を与えてやる。」

しばらく間があつた。

「さあ、お前、」と船長が言葉を続けた。「そんなに永くぐずぐずしていちやいかん。私は一秒一秒自分の命もここにいられる方^か

たがた
々の命も危険に曝^{さら}しているのだ。」

突然格闘が始まり、打合いの音がしたかと思うと、片頬にナイフの傷を受けたエーブラハム・グレーが躍り出て来て、口笛で呼ばれた犬のように、船長のところへ走って来た。

「来ましたよ、船長。」と彼は言った。

そして次の瞬間には、彼と船長とは吾々のボートに跳び下り、吾々はボートを押し出して漕ぎ出した。

吾々は本船からはすっかり離れた。が、まだ上陸して吾々の柵壁の中にいるのではないのだ。

第十七章 医師が続けた物語

ジヨリボート
小形端艇の最後の航行

この五度目の航行は今までの時とはまるで違っていた。第一に、吾々の乗り込んでいた薬壺のような小さいボートは非常に積み込み過ぎていた。大人が五人で、その中の三人——トウリローニート、レッドルースと、船長——は丈が六フィート以上あり、これだけでももうそのボートの運ぶことになっているよりも以上だった。それに加えて、火薬と豚肉とパン囊とがあつたのだ。艫^{とも}では舷^{げん}側上部まで水に触れていた。何度か舟は水をかぶり、私のズ

ボンと上衣の裾とは、百ヤードと行かないうちに、すっかりびしょびしょに濡れてしまった。

船長は吾々を釣合よく坐らせたので、ボートは前よりは幾らか平らになった。けれどもやはり、吾々は息をするのさえ気がかりだった。

第二に、潮がその時は退いていて、——さざなみ漣の立っている強い潮

流が内湾を西の方へ流れ、それから吾々がその朝入って来た海峡を南の方へ外海の方へと流れていた。その漣でさえ積み込み渦ぎた吾々の舟には危険であつたが、最も悪いことは、舟がほんとうの針路コースから押し流されて、例の岬の蔭の吾々の正当な上陸所から遠ざかっていることだった。もし潮流のままに任せていたなら、

舟はあの快艇ギッゲのそばに着いて、そこへは海賊どもがいつ現れるかも知れなかった。

「柵壁の方へボートの先を向けておけないんですがね。」と私は船長に言った。私が舵を操っていて、船長とレッドルースとの二人の新手あらてがオールを漕いでいたのだ。「舟は潮しおに流され通しです。もう少し強く漕げませんか？」

「そうするとボートがひっくり返ってしまいます。」と船長が言った。「どうか、あなたは舟を風上へ向けて下さらなければいけません、——潮に勝って進めるのが見えるまで風上へ向けて下さい。」

私はその通りにやってみたが、潮は絶えずボートを西の方へ押

し流すので、とうとう舳へさきを真東に、すなわち吾々の行くべき方向とちようど直角くらいに、向けるようになってしまった。

「この分ではとても岸に着けませんな。」と私が言った。

「これが我々の執れる唯一の針路コースだとすれば、こうする他ほかはありませんね。」と船長が答えた。

「我々は潮に逆さつて漕いでいなければなりません。おわかりの通り、」と彼は言い続けた。「もしあの上陸所の風下へ流されたら最後、どこで岸に着けるかわかったものじゃありません。おまけに奴らの快艇ギツゲに襲われるかも知れないのです。しかし、こうして進んでおれば潮もだんだん弱くなるにきまっているし、そうすれば岸伝いにすぐに漕ぎ戻れますよ。」

「潮はもう弱つて来ましたよ。」と艇首座に坐っていたグレーが言つた。「舟をちつとは緩めてもいいでしょう。」

「有無う、君。」と私はまるでこれまで何もなかったかのように言つた。吾々はみんな彼を味方の一人として遇することに心の中できめていたからである。

突然船長がまた口を開いたが、その声が少し變つてゐるようになり私は思つた。

「あ、大砲！」と彼は言つた。

「私もそのことは考えていました。」と私は言つた。船長がきつと堡塁を砲撃されることを考えているのだと思つたからである。

「奴らはとても大砲を陸に揚げることは出来ません。よしんばそ

れが出来たにしても、あの森の中をひっぱり上げることは決して出来やしませんよ。」

「^{とも}艦の方を御覧なさい、先生。」と船長が答えた。

吾々は九ポンド砲のことをすっかり忘れていたのだ。そして、怖しいことには、五人の悪漢がその砲の周りで忙しく立ち働いて、砲身の被^{ジャケット}筒と言っている、航海中はそれに被せてあつたあの丈夫な防水布の覆いを取除けているのだつた。それだけではなかった。同時に私の心にぱっと思ひ浮んだのは、その砲の砲弾と火薬とを残して来たことで、斧を一振りすればそれがそっくり船にいる悪者どもの手に入るのであつた。

「イズレールはフリントの砲手でしたよ。」とグレーが^{しゃが}嗔れ声で

言った。

どんな危険を冒しても、吾々はボートの舳へさきをまつすぐに上陸地に向けた。この時分には吾々は、吾々のやらなくてはならぬ穏かな漕ぎ方でさえ舵が利くだけの速力が得られるくらいに、潮流からずっと離れていたのも、私は舟を目的地の方へしつかりと向けておくことが出来た。しかし、非常に困ったことには、私が今執っている針路のために、吾々の舟はヒスパニオーラ号に艫ともを向ける代りに舳側ふなばたを向けて、納屋の大扉のような射外すことのない大標的になつてゐるのだつた。

私には、あのブランディー面づらの悪党のイズレール・ハンズが甲板の上に砲弾を一つどしんと抛り出したのが、見えただけでは

なく、聞えもした。

「だれが一番射撃のうまい人です？」と船長が尋ねた。

「トゥリローエーさんがずぬけています。」と私が言った。

「トゥリローニーさん、あいつらの中の一人を狙い撃ちして下さいませんか？　なるべくならハンズの奴を。」と船長が言った。

トゥリローニーは鋼鉄のように冷静だった。彼は自分の鉄砲の点火薬を調べてみた。

「もしもし、」と船長が叫んだ。「その鉄砲は静かにやって下さい。でないとボートがひっくり返りますから。トゥリローニーさんが狙いをつけられる時にはボートの釣合を取るように全員用意。」

大地主が鉄砲を肩に上げると、漕手は手を止め、みんなは平衡を保つために反対の側に凭れ^{もた}かかり、すべてが実にうまくいつて舟が一滴の水もかぶらなかつたくらいであつた。

この時分には悪漢どもは大砲を旋軸の上で　してしまつていて、ハNZは杖^{こみや}を持つて砲口のところにおり、従つて最も弾丸に身を曝している訳だつた。けれども、吾々は運が悪かつた。というのは、ちようどトゥリローニーが発砲した時にハNZは身を屈め、弾丸は彼の頭上をびゅつと掠めたからで、倒れたのは他の四人の中の一人であつた。

その男のあげた悲鳴に反響する如く^{ごと}声をあげたのは、船にいる仲間どもだけではなかつた。岸からも大勢の声が起つた。で、そ

の方向を眺めると、上陸している方の海賊どもが樹立の間からぞろぞろと出て来て、あわててボートの中へ跳び込むのが見えた。

「こちらへあの快艇ギツグがやって来ますよ。」と私が言った。

「では、力漕だ。」と船長が叫んだ。「もう舟が沈みはしないかと構っちゃおられません。もし岸に着けなけりやあ、おしまいです。」

「一艘だけに乗り込んでいる。」と私は言い足した。「もう一艘の方の奴らは岸を　　って我々の行手を断つつもりらしい。」

「奴らには走るのがつらいでしょうよ。」と船長が答えた。「何しろ、陸へ上った船乗ですからね。私の気になるのは奴らじゃありません。砲弾です。まるで絨毯の上の球たまころがしだ！　だれが

やったつてやり損ねるはずがありやしません。大地主さん、火縄が見えたら言つて下さい。オールで舟を停めますから。」

この間にも、舟はそのような積み込み過ぎたボートとしてはかなり速く前進していたし、進んでゆく間に水もほとんどかぶらなかつた。もう岸に迫つていて、三四十本も漕げば浜に乗り上げたらう。というのは、ひきしお退潮のために、簇生している樹々の下に、狭い砂地が帯のようにすでに現れていたからである。快艇はもはや恐れるには及ばなかつた。例の小さな岬のためにそれはもう吾々のところからは見えなくなっていた。あれほどひどく吾々を手間取らせた退潮は、今度はその償いをして、吾々の攻手せめてを手間取らせていた。ただ一つの危険は大砲だつた。

「出来さえすれあ、停つて、もう一人狙い撃ちしてやりたいんだがな。」と船長が言つた。

しかし、彼等がどんなことがあるうと発砲を遅らせないでおくつもりでいることは明かであつた。さっきの倒れた男が死んではいなくて、這つて行こうとしているのが私にも見えたのに、彼等はその仲間の方を見ようとさえしなかつた。

「用意！」と大地主が叫んだ。

「停れ！」と船長は反響のように速く叫んだ。

そして船長とレッドルースとは舟の艫ともがそつくり水の中へ入つたくらいに力を入れてぐつと逆漕バックした。その刹那せつな、砲声が轟然と起つた。これがジムの聞いた第一の砲声であつたのだ。大地主の

射撃の音は彼のところでは聞えなかったのだから。その弾丸がどこを通ったかは、吾々の中の一人も正確にはわからなかった。が、それはきつと吾々の頭上を飛んで行つたのであつて、吾々の災難はその煽り風のせいもあつたかも知れない、と私は思う。

ともかく、ボートは、三フィートの水の中へ、ごく静かに艫の方から沈んで行つて、船長と私とは向い合いながら突つ立つた。他の三人は真逆さまに落ちて、ずぶ濡れになりぶくぶくと泡を立てながら起き上つて来た。

ここまでは大した損害はなかった。一人も命は落さなかったし、吾々は無事に岸まで徒渉することが出来た。しかし、吾々の荷物とはみんな水の底に沈み、その上困つたことには、五挺の鉄砲の中

の二挺しか役に立たなくなつたのであつた。私のは、私は一種の本能で膝から素早くひつ掴んで頭の上に差し上げた。船長の方は、弾薬帯で肩に背負つていて、賢い人らしく弾機装置の方を上にしていた。他の三挺はボートと一緒に沈んだのである。

さらに吾々の懸念を増したことには、岸沿いの森の中に人声ひとこゑがすでに近づいて来るのが聞えた。そして、吾々には、この半ば跛になつたような有様で柵壁へ行く道を断たれる危険があるだけではなく、ハンターとジョイスとが六七人の敵の者に攻撃されたなら、しっかりと踏み止まるだけの分別や気転があるかどうかという憂慮もあつた。ハンターはしっかりした男だつた。それは吾々にはわかつていた。がジョイスの方が怪しかった。——従僕と

しては、また人の衣服にブラシをかけるには、面白い、丁寧な男であつたが、軍人としてはまったく適していないのだ。

こんなことを考えながら、吾々は、小形端艇と、吾々の火薬と食糧品との大半とを後に残して、出来るだけ速く岸まで徒渉した。

第十八章 医師が続けた物語

第一日の戦闘の終り

吾々は、今吾々と柵壁との間にある細長い森林地を突っ切つて、

一所懸命に前進した。すると一歩一歩と進む毎に海賊どもの声だんだん近くにがやがや言っているのが聞えて来た。間もなく、彼等の走るあしおと蹠音や、彼等が藪を押し分けてゆく時の枝のぽきぽき折れる音までも、聞えるようになった。

私はこれでは本気で一合戦やらなければなるまいということがわかりかけて来たので、自分の点火薬を調べた。

「船長、」と私は言つた。「トゥリローニ君は射撃の名人です。あなたの鉄砲をやつて下さい。あの人の役には立たんですから。」

二人は鉄砲を取換え、トゥリローニは、この騒動の始まり以来のように黙々として冷静に、ちよつと立ち止つて、どこもみな

役に立つようになっていたかを確認めた。同時に、私は、グレーが何も武器を持っていないのに気がついて、自分の彎刀カトラスを渡してやった。彼が手に唾し、眉を顰しかめて、その刀身をびゅうびゅうと空気を切つて振り　すのを見ると、吾々みんなは元氣が出て来た。彼の体からだのどの線を見ても、この新しい味方が一廉かじの役に立つ人間だということは、明かだった。

さらに四十歩ほど進むと、森の縁へ来て、前面に柵壁が見えた。吾々はその囲柵の南側の真中あたりに行き着いた。すると、ほとんど同時に、七人の謀叛人ボースンが——水夫長のジョーブ・アングダンを先頭にして——その南西の隅のところにどつと一斉に現れて来た。

彼等はびっくりしたように立ち止った。そして彼等が氣を取直さないうちに、大地主と私だけではなく、丸太小屋からハンターとジョイスまでが、火蓋を切る暇があつた。この四人の射撃は幾らかばらばらな一斉射撃となつたが、しかしその役目は果した。敵の一人は實際倒れ、残りの奴らはすぐさまくると背を向けて樹立の中へ跳び込んだ。

弾丸を籠め直してから、吾々は倒れた敵を介抱してやろうと防柵の外側について下りて行つた。その男はまったく死んでいた。

——心臓を射貫かれたのだ。

吾々がこの成功を喜びかけていたちょうどその瞬間、ピストルが叢林の中であんと鳴り、一発の弾丸が私の耳を掠めてぴゅっ

と飛び、可哀そうにトム・レッドルースがよろよろして地面へばったり倒れた。大地主も私も二人とも撃ち返した。が、何も狙うものがなかったのだから、恐らく火薬を浪費しただけであつたろう。それから吾々はまた弾丸を籠めると、可哀そうなトムに注意を向けた。

船長とグレーとがすでに彼の傷を調べていたが、私は一目でもう駄目だと見て取った。

吾々が敏捷に一斉射撃を返したので、謀叛人どもはもう一度潰走したのだらうと思う。吾々はその上もう妨害を受けずに、その可哀そうな年寄の猟揚番人を持ち揚げて柵壁を越し、血を出しながら呻いているのを丸太小屋の中へ運び込んだ。

可哀そうなこの老人は、吾々が難儀なことになったまったくの始まりから、今こうして丸太小屋の中に横らされて死んでゆこうとしている時に至るまで、一言の驚きや、不平や、恐れ of 言葉も、承諾の言葉さえも、口に出したことがなかった。彼はトウロイ人の如く勇敢にあの船の廊下の敷蒲団マットレスの蔭で敵に備えていた。彼はいかなる命令にも黙々として、頑固に、よく従った。彼は吾々の仲間の中の最年長者で、吾々よりも二十歳も年長だった。そして今、死んでゆこうとしているのは、このむつつりした、年寄の、勤勉な召使であつたのだ。

大地主は彼のそばにどかりと膝をついて、子供のように泣きながら、彼の手に接吻した。

「お医者さま、わっしは行くのでござえますか？」と彼は尋ねた。
「トムや、」と私は言った。「お前はほんとうの故郷へ行くのだよ。」

「俺は先に鉄砲で奴らに一発喰らわしてやりたかった。」と彼が答えた。

「トム、」と大地主が言った。「私を赦ゆるすと言ってくれないか？」
「そんな勿体もってえねえことが、わっしからあんたさまに言えますか、旦那さま？」というのがその返事であつた。「だが、それでようござえます、アーメン！」

しばらくの間黙っていた後、彼はだれかが祈祷を上げてくれた方がよいと思うと言つた。「それが慣例しきたりですからね。」と言訳

するように言い足した。それから間もなく、その上一言も言わずに、死んでしまった。

それまでの間に、船長は、胸やポケットのあたりが非常に膨らんでいるのは前から私も気づいていたが、そこからさまざまな品物をたくさん出した。——英国の国旗や、聖書や、一卷きの丈夫そうな綱や、ペンや、インクや、航海日誌や、何ポンドかの煙草などであった。彼は囲柵の中に伐り倒して枝を切り去った相当長い樅の木が一本あるのを見つけて、ハンターに手伝って貰って、それを、丸太小屋の隅の樹幹が交叉して角をなしている処に立てた。それから、屋根に攀^よじ登って、自分の手で国旗を結びつけて掲げた。

それをしてしまうと船長は大いに安堵したようだった。彼は再び丸太小屋へ入って来て、他には何事もないかのように、さっきの品物を数え始めた。しかし彼はそれにも拘らずトムの臨終には目を離さなかった。そして、息を引取るや否や、別の国旗を持つて来て、それを恭しく死体の上にかけた。

「そんなにお歎きなさるな。」と彼は大地主の手を握りながら言つた。

「この人のことはこれですつかりいいのです。船長と主人とに対する義務を果しながら斃^{たお}れた船員には何も心配はありません。これは教会で言うのとは違うかも知れません。が、それが事実です。」

それから彼は私を脇へひっぱって行つた。

「リヴジーさん、」と彼が言つた。「あなたと大地主さんとは何週間たつたら件^{ともふね}船が来ると思つてお出でですか？」

私は、それは週ではなくて月できめてあるのであつて、もし吾々が八月の末までに帰らなかつたら、ブランドリーが吾々を探しに伴船を出すことになっているが、それよりも早くもなければ遅くもない、と彼に言つた。「ですから御自分で計算してみて下さい。」と私は言つた。

「ははあ、なるほど、」と船長は頭を掻きながら答えた。「とすると、どんなに神様の有難い思召しを蒙っていることを酌量してみましても、我々はかなり詰^{つめびら}開き（註六一）になっていると申

さなければなりませんな。」

「それはどういう意味ですか？」と私は尋ねた。

「我々があの二度目の積荷をなくしたのは残念です。私の言うのはそのことですよ。」と船長が答えた。「火薬と弾丸とは、まあ足りましょう。しかし食糧が不足なんです。非常に不足で、——リヴジーさん、恐らくあの余分の口が減って我々に好都合なくらい、それくらいに不足なんです。」

そう言つて彼は旗の下の死体を指した。

ちょうどその時、どおんという轟然たる音とびゅうつと唸る音を立てて、一発の砲弾が丸太小屋の屋根の上を飛び去つて、ずつと遠くの森の中に落ちた。

「ほほう！」と船長が言った。「どんどん撃て撃て！ お前らはもう火薬があんまりないぜ。」

二度目に撃った時には、狙いは前よりはよくて、弾丸は柵壁の内側に落下して、ぱつと砂煙を立てたが、しかしそれ以上に何の損害も与えなかった。

「船長、」と大地主が言った。「この小屋は船からちつとも見えないはずです。奴らの狙っているのは国旗に違いない。あれを卸した方がよありませんか？」

「私の旗を引下すのですって！」と船長が叫んだ。「いいえ、私は下しません。」そして彼がその言葉を言うや否や、吾々は皆彼に賛成したと思う。なぜなら、それは単に剛毅な、海員らしい、

正常な感情であつたばかりではない。その上にそれは立派な策略でもあつて、敵に吾々が彼等の砲撃を輕蔑していることを示したからである。

その夕刻中彼等はずっと大砲を撃ち続けた。次々に来る弾丸は、飛び越して行つたり、届かなかつたり、圀柵の中で砂を蹴上げた。りした。しかし、彼等は高く発射しなければならなかつたので、弾丸は威力を失つて落ち、柔かい砂の中に埋ってしまった。弾丸の跳ね返る恐れは少しもなかつた。そして、一弾が丸太小屋の屋根を突き抜けて跳び込み、さらに床を突き抜けて行つたけれども、吾々は間もなくそういう荒遊びに慣れてしまつて、クリケツトくらいにしか氣にかけなくなつた。

「こうなるとよいことが一つありますな。」と船長が言った。

「前の森にはだれもいそうにもないことです。潮はよほど退いて
いるから、さっきの荷物は水から出ているだろう。豚肉を取りに
行こうという志願者。」

グレーとハンターとが真先に進み出た者であつた。十分に武装
して二人は柵壁の外へそつと出た。が、その派遣が無益であるこ
とがわかつた。謀叛人どもは吾々の思つたよりも大胆であつた。
それとも彼等はイズレールの砲術に案外信頼していたのだ。とい
うのは、四五人の奴らが頻りに吾々の荷物を運び去つて、それを
持つて一艘の快艇ギッゲのところまで徒渉していたからである。その快
艇はすぐそばにあつて、潮流に押し流されないようにするために

オールを漕いだりしていた。シルヴァーは艇尾座にいて指揮していた。そして彼等は皆、今は、彼等自身のどこか秘密の武器庫から持ち出した銃を一挺ずつ持っていたのであった。

船長は腰を下して航海日誌を書き出した。その記入の初めの方はこうである。――

「船長アレグザンダー・スモレット、船医デーヴィッド・リヴジー、二等船匠手エーブラハム・グレー、船主ジョン・トウリロ―ニー、船主の従僕、非海員ジョン・ハンター及びリチャード・ジョイス――以上は船の乗員中の忠実なる者として残れる者の全部なり――は、切詰めたる定量にて十日間の糧食を携えて、本日上陸し、宝島の丸太小屋に英国国旗を掲ぐ。船主の従僕、非海員

トマス・レッドルース、叛徒に射殺さる。船室給仕ジエームズ・ホーキンス——」

そして、ちょうど同時に、私は可哀そうなジム・ホーキンスの運命がどうなつたろうかと思つていたところであつた。

すると陸の方からおういと呼ぶ声がした。

「だれかが俺^{わし}らを呼んでおります。」と見張りに立っていたハンターが言つた。

「先生！ 大地主さん！ 船長さん！ おうい、ハンター、君かい？」という叫び声がした。

それで私が戸口のところまで走つてゆくと、ちょうど、ジム・ホーキンスが無事で達者で柵壁を攀^よじ越えてやつて来るのが見え

たのであつた。

第十九章 ジム・ホーキンスが再び始めた物語

柵壁内の屯営

ベン・ガンは旗を見るや否や立ち停り、私の腕を掴んでひき止め、腰を下した。

「おい、」と彼が言った。「あすこにお前^{めえ}さんの仲間がいるぜ、確かに。」

「あれあどうも謀叛人らしいよ。」と私は答えた。

「そんなことがあるもんか！」と彼は叫んだ。「なあに、分限紳士でなけりやだれ一人船をつけやしねえこんな処ところだもの、シルヴァーなら海賊旗ジョリー・ロジャー（註六二）を立てるだろうよ。それにやあ間違まちがえなしさ。いいや、ありやお前さんの仲間だ。それに、さつき戦争があつたろう。でお前さんの仲間が勝つたんだと思うねえ。それでここへ上陸してあの古い柵の中に入へつてゐるのさ。あの柵は何年も何年も前にフリントが拵こせえたものだ。ああ、あの人はまったく大將てえしやうらしい人だったよ、あのフリントはな！ ラムの他ほかにやあ、あの人になうものは何にもなかったんだ。怖こええ者なんて一人だつてなかったんだぜ。シルヴァーだけは別だがね。――

シルヴァーはそれつくれえ気の利いた奴だったよ。」

「なるほど、」と私は言つた。「じゃそうかも知れない。そんならそれでいい。それなら僕は一層急いで行つて味方と一緒ににならずにちや。」

「いやいや、兄^{きょうでえ}弟、」とベンが答えた。「そうはゆかねえ。

お前はいい子だ。違^{ちが}えねえよ。だが、何と言つても、まだほんの子供だよ。ところで、ベン・ガンとなるとなかなか抜目はねえ。

ラムに酔つてたつてそこへは行かねえぜ、お前さんの行こうとしてる処へはな、——ラムに酔つてたつて行かねえとも、俺^{わし}がその生れつきの紳士つて人に逢つて、その人から名誉にかけての約束てえ奴を聞くまではな。でお前さんは俺の言つた言葉を忘れはし

ねえだろな。『とつても（とこう言うんだぜ）、とつても信用しています。』とね、——それからあの人をつねるんだよ。』

そして彼は前と同じような巧みな様子で三度目に私を抓つかった。

「それからベン・ガンに用のある時にや、どこへ行きやあ会えるか知ってるね、ジム。今日お前さんきょうと会ったあすこだぜ。それか

ら、会いに来る人は手に何か白い物を持って来るんだよ。そして一人だけで来なきやいけねえ。おお！ それからお前さんはこう言つてほしいね。『ベン・ガンにやあ自分の仔細があります。』
つて言うんだぜ。」

「なるほど、」と私は言った。「わかったようだよ。君には何か言い出したい話があつて、大地主さんか先生に逢いたいのだね。」

それから、君は僕と会ったあすこへ行けばいるんだね。それだけかい？」

「それからいつ頃？　っていうことだな。」と彼は言い足した。

「そうさな、正午頃ひるから六点鐘頃までだ。」

「よろしい。」と私は言った。「じゃあ僕はもう行ってもいいかい？」

「お前さんは忘れやしねえだろな？」と彼は心配そうに尋ねた。

「とつても、ということと、仔細がある、ということ、言うんだぜ。仔細がある。これが大事なことなんだよ。男と男の話としてね。よし、さあ、」——とやはり私を掴まえながら——「もう行ってもいいだろうよ、ジム。それからね、ジム、もしお前さん

がシルヴァーに逢つても、ベン・ガンを売るようなことはしめえな？ 拷問にかけられたつてしやべりやしめえな？ 大丈夫だね。それから、もしあの海賊どもが浜で野営するならばだ、ジム、朝にはきつと人死ひとじにがあるだろうぜ。」

この時に轟然たる音が彼の言葉を遮り、一発の砲弾が樹立を突き裂いて、私たち二人が話していた処から百ヤードと離れていない砂地の中へ落下した。次の瞬間には二人とも別々の方向へ逃げ出していた。

それから後のたつぷり一時間は、砲撃が頻りに島を震わせて、砲弾が絶えず森に落ちた。私はその恐しい弾丸に始終追われて、あるいは追われているような気がしたのであるが、隠れ場所から

隠れ場所へと逃げ　　った。しかし、砲撃がそろそろ終りかける頃には、弾丸が一番多く落ちる柵壁の方へはまだ行く勇氣はなかったけれども、再び幾らか元氣が出かけていた。そして、東へ　　り路をしてから、岸辺の樹立の間をそろそろと下りて行つた。

太陽はちようど沈んだばかりで、海^{うみ}風^{かぜ}は森の樹をざわざわと鳴らして吹きまくり、また碇泊所の灰色の水面を波立たせていた。潮も遠くまで退いていて、広々とした砂地が現れていた。空氣は、日中の暑さの後に、冷えて来て、私のジャケツを通して身に滲み込んだ。

ヒスパニオーラ号はやはり前に投錨した処にいた。けれども、果して、海^{ジョリー・ロジャー}賊旗——海賊の黒い旗——をその斜^ピ桁^ー上^ク外端に

ひらひらと翻していた。私が見ている時にもまだ、また赤く砲火が閃き轟然たる砲声がして、大きな反響を起し、もう一発の砲弾が空中をびゅうつと飛んで行つた。それが最後の砲撃だつた。

しばらくの間私は横つて、攻撃の後の騒ぎを見ていた。柵壁の近くの渚では、水夫たちが斧で何かを叩き壊していた。後でわかつたが、例のジヨリボート小形端艇であつた。彼方の、川口の近くには、樹立の間に焚火が盛んに燃えていて、その地点と本船との間を一艘の快艇ギツゲが絶えず行つたり来たりしており、前にはあんなに不機嫌だつた水夫たちは、オールを漕ぎながら子供のように喚いていた。しかし、その声にはラムを飲んだらしい調子があつた。

とうとう、私はもう柵壁の方へ戻れるだろうと思つた。私は低

い砂の出洲ですをかなりずっと下っていた。この出洲は碇泊所を東で抱え、半潮（註六三）の時には骸スケリトン骨島と連っているのである。そして今、私は立ち上ると、出洲をもう少し下ったところに、低い灌木の間から、かなり高い、色が妙に白っぽい岩が一つだけ立っているのが目に入った。私は、これがベン・ガンの話したあの白い岩かも知れない、いつかボートが要いることになるかも知れないが、それを捜す処はわかった訳だ、と思いついた。

それから森の中を　　って行って、柵壁の裏手、すなわち海岸向きの側へ再び着き、間もなく味方の人たちに大いに歓迎された。

私は間もなく自分の一部始終の話をしてしまつて、あたりを見し始めた。その丸太小屋は角材にしない丸木のままの松の幹で

造つてあつた、——屋根も、壁も、床も。^{ゆか}床は数箇処砂地の面から一フートないし一フート半も高くなつていた。戸口のところにポーチがあり、そのポーチの下に、例の小さな泉が、幾らか奇妙な性質の人工の溜池——というのは、船の大きな鉄釜の底を抜いて、船長の言葉で言えば「船荷を満載した時の水準線まで」砂の中に埋めたものなのであるが——の中へ湧き出ていた。

小屋の骨組の他にはほとんど何も残されてはいなかった。が、一つの隅に、炉床の代りに敷いてある板石と、火を入れる古い錆びた鉄の籠とがあつた。

円い丘の傾斜面と柵壁の内側全部とは、この小屋を建てるために樹木をすっかり伐り払つてあつた。その切株で見ると、ずいぶ

ん立派な喬木の林が伐り倒されたことがわかった。土は大抵、その樹木を取除けた後に、雨に流しやられたり、風の吹き寄せた砂に埋められたりしていた。ただあの釜から流れ下っている小川のところだけでは、苔や、何かの羊歯しだや、地を這っている小さな灌木などが、こんもり生い茂っていて、砂地の中にまだ緑色をしていた。柵壁のすぐ近くの周りに——防禦のためには近過ぎると皆は言ったが——森林がまだ高く密に繁っており、陸の側は皆縦だが、海の方は鮮色櫟がよほどまじっていた。

前に言ったあの寒い夕風は、この粗末な建物のありとあらゆる隙間からぴゅうぴゅう吹き込んで来て、細かい砂の雨を絶間なしに床ゆかに撒き散らした。私たちの眼の中にも砂、齒の間にも砂、夕

食の中にも砂があり、あの釜の底の泉の中にも、まさしく、煮えかかった粥のように、砂が踊っていた。この小屋の煙突というのは、屋根に開^あいている一つの四角な穴であつた。だから、外へ出てゆく煙はほんの僅かで、残りは小屋の中に渦巻いて、私たちに絶えず咳をさせたり涙を出させたりした。

これにかてて加えて、新たに味方になつたグレーは、謀叛人の中から跳び出して来る時に受けた傷のために、顔に繃帯をしていたし、可哀そうなトム・レッドルース爺さんは、まだ埋葬されずに、硬くなつて、^{ユーニヨン・ジャック}英国国旗に蔽われたまま、壁に沿うて横つていたのであつた。

もし私たちが何もせずに坐りこんでいさせられたならば、私た

ちは皆きつと意氣銷沈してしまつたことだろう。しかし、スモレット船長は決してそんなことをするような人ではなかつた。全員が彼の前に呼び集められ、彼は私たちを当直の組に分けた。医師と、グレーと、私とが一组、大地主さんと、ハンターと、ジョイスとが他の一组になつた。私たちみんなは疲れていたけれども、二人は薪を取りにやられるし、他の二人はレッドルースの墓を掘りにかからされるし、医師は料理番コックに指命されるし、私は戸口のところに歩哨に立たされた。そして船長自身は一人一人のところへ　つて、私たちを励ましたり、どこでも必要などころでは手を貸したりした。

折々、医師は戸口のところへやって来て、少し外気を吸つたり、

けむくてたまらぬ眼を休ませたりした。そうして来る度に、私にちよつと言葉をかけた。

「あのスモレットという人は私よりは偉い人間だよ。そして私がこう言う時にはなかなかのことだぜ、ジム。」と彼は一度は言つた。

また或る時は彼はやつて来てからしばらくの間黙っていた。それから頭をかしげて、私をじつと眺めた。

「そのベン・ガンというのはしっかりした男かね？」と彼が尋ねた。

「私にはわかりません。」と私は言った。「正気な男かどうかもよくわからないんです。」

「正気かどうかという疑いがあるくらいなら、その男は正気だよ。」と先生が答えた。「無人島に三年もただ爪を咬んで暮していた人間というものはね、ジム、君や私と同様に正気に見えるというはずがないのだ。そんなことは人間の性質としてはないことだよ。その男がほしがっていると君の言ったのはチーズだったかね？」

「ええ、チーズです。」と私は答えた。

「じゃあ、ジム、」と彼は言った。「食物にやかましいとどんないいことになるか見て御覧。君は私の嗅煙草かぎたばこ入れを見たことがあるだろうね？　で君は私が嗅煙草を取り出すのは一度も見たことがないだろう。その訳はこうだ、あの嗅煙草入れの中にはパル

マ・チーズ（註六四）が入れてあるのさ、——イタリーで出来たチーズで、すこぶる滋養のある奴だ。そこで、あれをベン・ガンにくれてやるとしよう！」

夕食を食べる前に私たちはトム爺さんを砂の中に埋葬して、帽子を脱いだまま風に吹かれて暫くの間その周りに立っていた。薪はずいぶんたくさん取って来てあつたが、船長の氣に入るほどではなかった。彼は頭を振って、私たちに「明日はもつと元氣を出して取って来なくっちゃいけません。」と言った。それから、みんなが豚肉を食べ、一人一人がかなり強いブランデーを一杯ずつ飲んでしまうと、三人の頭株は一隅に集って、これから先のことを相談した。

三人はどうしたらいいか途方に暮れている様子だった。糧食がごく乏しいので、救助の来るずっと前に私たちは飢餓に迫られて降服するより他しようがなかったからである。しかし、私たちの最上の望みは、海賊どもをどしどし殺して、彼等が旗を曳き下して降参するか、ヒスパニオーラ号に乗って逃げ出すまでやつつけることだ、ということに決定した。彼等はすでに最初の十九人から十五人に減っていたし、その他に二人が負傷しているし、少くとも一人——あの大砲のそばで撃たれた男——は、よし死んでいないにしても、重傷を負うていた。私たちは彼等にずどんとやってやる度毎に、自分たち自身の命を落さずに、極度の注意をしてやらなければならぬ訳だった。そして、この他に、私たちには

二つの有力な味方があった。——ラムと風土とである。

ラムについて言えば、私たちは約半マイルも離れていたのに、彼等が夜遅くまで喚いたり歌ったりしているのが聞えるくらいであつた。また風土の方について言えば、彼等は沼地に野営していて、医薬の用意もないので、一週間とたたぬうちに半分の者は病気に罹つて寝込むだろう、と先生はその仮髪かつらを賭けて断言した。

「そういう訳で、」と彼は言い足した。「もし我々がみんな先に撃ち倒されなければ、あいつらは喜んであのスクーナー船でこそ逃げて行ってしまうでしょうよ。奴らのほしいのはいつでも船で、船さえあればまた海賊を始められるんですからな。」

「私はまた船をなくしたのは今度が初めてで。」とスモレット船

長が言つた。

諸君も想像される通り、私はへとへとに疲れていた。そして、何遍も何遍も寝返りうつまでは寝つかれなかったが、寝ついてしまうと、丸太のようにぐっすりと眠つた。

他の人たちがとつくに起きていて、もう朝食をすませて、薪の山を前日の一倍半ばかりもたくさんにした頃に、私はどさくさする物音と人の声とで目を覚めた。

「休戦旗だ！」とだれかが言うのが私に聞えた。それから、すぐに、驚いたような叫び声と共に、「シルヴァーが自分で来たぞ！」と聞えた。

それを聞くと、私は跳ね起きて、眼を擦りながら、壁の銃眼の

ところへ走って行った。

第二十章 シルヴァーの使命

果して、柵壁のすぐ外側に二人の男がいて、一人は白い布片を振っており、もう一人はまさしくシルヴァーで、そのそばに落着き払って立っていた。

まだごく早くて、私が戸外で感じた一番寒い朝だったように思う。寒気は骨の髄までも滲み徹った。空は晴れわたって頭上には一片の雲もなく、樹々の頂は太陽に照されて薔薇色に輝いていた。しかしシルヴァーが彼の副官と共に立っている処では、すべてが

まだ影の中にあつて、彼等は、夜の間に沼沢地から這い上つた低い白い靄もやに、深く膝のところにも浸されていた。この寒氣と靄とを合せて考えると、この島の有難くない処であることがわかつた。それは、明かに、湿氣のひどい、熱病に罹り易い、不健康な場所であつた。

「諸君、屋内なかにいるんだ。」と船長が言つた。「九分九厘までこれは策略ですから。」

それから彼はかの海賊に声をかけた。

「だれだ？ 止れ。でないと撃つぞ。」

「休戦旗ですぞ。」とシルヴァーが叫んだ。

船長はポーチにいて、用心深く騙だまし撃うちをやられても中あたらぬと

ころにいるようにしていた。彼は振り向いて私たちに言った。――

――

「先生の組は見張りに就^つけ。リヴジー先生はどうか北側にいて下さい。ジムは東側。グレーは西。非番の組、全員銃に装填せよ。

諸君、元気よく、注意深く。」

それから再び彼は謀叛人たちの方へ振り向いた。

「で、そんな休戦旗を持って来て何の用があるんだ？」と彼は呶^ど鳴^なった。

今度は、返事をしたのはもう一人の男だった。

「シルヴァー船^{せんちよ}長が話を纏めにお出でなすつたんで。」とその

男が叫んだ。

「シルヴァー船長だせんちよと！ そんな人は知らんな。だれのことだい？」と船長は大声で言つた。そして独り言のようにこう言い足すのが私たちに聞えた。「船長だつて？ おやおや、驚いたな。えらい御出世だ！」

のつぽのジョンは自分で答えた。

「わつしのことでさあ。あんたが脱走なすつてから、この若え奴わけらがわつしを船長せんちよに選んだのでさ。」——と「脱走」という言葉に特に力を入れた。「わつしらは、もし折合いせえつくものなら、喜んで降参しますよ、ぐずぐず言わずにすぐさまね。わつしの聞かして貰もれえてえのは、スモレット船長、わつしをこの柵の外へ無事に出させて、鉄砲を撃たねえ前に弾丸たまの届かねえとこへゆ

くまで一分ほど待ってくれる、てえあんたの約束ですよ。」

「おい、」とスモレット船長が言った。「己おれは貴様に口を利きたいとはちつとも思つちやおらん。もし貴様の方で己に口が利きたいなら、来たつていい。それだけのことさ。不信義なことをするとなれあ、それは貴様の方だろうよ。そんなことをすれあ有難い目に遭うぜ。」

「それで十分ですよ、船長。」とのつぽのジョンは機嫌よく叫んだ。「あんたから一言約束ことの言葉を聞けば十分ですよ。わっしは紳士つてものを知ってますからなあ、間違えなくね。」

休戦旗を持っている男がシルヴァーを制止しようとするのが見えた。また、船長の返事がいかにも横柄なのを聞けば、これは不

思議ではなかった。しかし、シルヴァーは声を立ててその男を笑い、そんなにびくびくするなんて馬鹿げているよとでもいうように、その男の背中をぽんと叩いた。それから柵壁まで進んで、杖をその上から投げ込み、片脚を上げると、非常に勢よく上手に柵を乗り越して無事に内側へひらりと下りた。

白状するが、私はこういう有様にすっかり気を取られてしまつて、歩哨の役目などはちつともやりはしなかった。実際、私も自分の東側の銃眼を離れて、船長の背後までこっそり行つていたのである。船長はその時は^{しきい}鬨の上に腰を掛けて、膝の上に^{ひじ}肱をつき、両手で頭を支えながら、砂の中の古い鉄の釜からぶくぶくと湧いている水をじつと見ていた。彼は「いぎ、乙女^{おとめ}よ、若人^{わこうど}」

よ。（註六五）」と口笛を吹いていた。

シルヴァーは丘を登つて来るのに恐しく骨を折つた。傾斜は嶮^{けわ}しいし、木の切株はたくさんあるし、砂地は柔かいと来ているので、柶杖を持った彼は方向を換えようとしている帆船のように体が自由に利かないのであつた。しかし彼は黙々として男らしくそれをやり通し、とうとう船長の前まで来て、見事な態度で船長に挨拶した。彼は晴着を着飾っていた。真鍮のボタンのたくさんついている素敵に大きな青色の上衣は膝まで垂れており、綺麗なモールで飾つた帽子は阿弥陀に頭にのっかつていた。

「おお、来たな。」と船長は顔を上げながら言つた。「坐つたがよからう。」

「内へ入れてくれねえんですかい、船長？」とのつぽのジョンは不平を言った。「ほんとに、えらく寒い朝だから、外の砂の上に坐るなんてつれえですねえ。」

「そうさなあ、シルヴァー、」と船長が言った。「もし貴様が正直にさえしていたなら、今頃は船の炊事室に坐つていられたんだろうがな。それは自業自得さ。お前は、己の船の料理番コックであるか、——それなら立派な待遇を受けるんだが、——それとも、くだらん謀叛人で海賊のシルヴァー船長であるかだ。その方なら絞首しめくびになるがいいや！」

「ようがす、ようがす、船長。」と船の料理番コックは、命ぜられた通り砂地に腰を下しながら、答えた。「あんたは後でまたわつしに

手を貸して立たしてくれなくちやならんでしようからな。それだけのことでさ。これあなかなか気持ちのいい立派な処とこにお出ですなあ。やあ、ジムがいるね！ お早う、ジム。先生、御機嫌よう。これはこれは、皆さん方がたは言わば仕合せな一家族みてえに御一緒にお出ででござえますな。」

「おい、何か言うことがあるなら、言った方がいいぜ。」と船長が言つた。

「御もつともで、スモレット船長。」とシルヴァーが答えた。

「いかにも、義務は義務ですからね。じゃあ、申しますがね、昨ゆうべ晩のあれはあんた方はうめえことをおやんなすつたもんですなあ。確かに、うめえことでしたよ。それあわつしも隠しやしません。」

あんた方の中にや木挺をずいぶ器用に使う人がいるんですね。
で、隠しやしませんか、そりやあわつしの手下ん中にやびくつ
た奴もいましたよ。——いや、みんながびくつしたかも知れねえ。
そういうわつしだってびくつしたかも知れねえ。そのためにわつ
しがこうして折合いをつけにやって来たんかも知れませんか。だ
がね、いいですかい、船長、二度とああはゆきませんぜ、畜生！
わつしらの方も歩哨を立てますし、ラムもちったあ控えること
にしますからな。あんた方はわつしらがみんなほろ酔い加減だつ
たと思ってるかも知れねえ。だが、わつしは確かに素面しつぷでしたぜ。
ただえらく疲れてただけでさ。わつしがもうちよつとだけ早く目
が覚めせえしたら、その場であんた方を掴めえたんですがねえ。

掴めえましたとも。わっしがあの男んとこへ行つて見た時にや、あの男はまだ死んでやしませんでしたからね、まだね。」

「それで？」とスモレット船長はこの上なく冷静に言つた。

シルヴァーの言つたことはすべて船長には謎のようでまるでわからなかったが、船長はそんな口振りは少しも示さなかった。私はと言えば、薄々わかりかけて来た。ベン・ガンが最後に言つた言葉が頭に思い浮んだのだ。私は、海賊どもがみんな焚火の周りに酔つ払つて寝ている間にあのベン・ガンが奴らを見舞つたのだらうと思ひ始め、私たちの相手にする敵がたつた十四人になったと数えて喜んだ。

「それで、こういう訳ですよ。」とシルヴァーが言つた。「わっ

しらはあの宝がほしいし、またどうあつても手に入れるつもりだ、——それがわつしの方の目的ですよ！ あんた方はむしろただ命いのちが助かりたいんでしょう。それがあんたの方の目的でさあね。あんたは海図を持っていなさるね？」

「それはそうかも知れん。」と船長が返事した。

「おお、なあに、持ってなさるよ。それあわつしにやわかつてま
すさ。」とのつぽのジョンが答えた。「そんなに人に素気そっけなくな
さるこたありませんや。そんなことをしたって何の役にも立た
ねえんですから。そいつあ間違えつこなしでさ。わつしの言いて
えのは、わつしらはあんたの海図がほしいってことだ。でねえ、
あんた方に害をしようってつもりはちつともねえんでさあ——わ

っしはね。」

「それは駄目だぜ、おい。」と船長が口を挿んだ。「貴様らがやろうとしていたことは己たちにはちゃんとわかっているし、己たちの方は平気だ。なぜって、貴様らはもうそれが出来ないんだからな。」

そして船長は泰然と彼を眺め、パイプに煙草を詰め出した。

「もしエーブ・グレーの奴が——」とシルヴァーが急に呶鳴り出した。

「止めろ！」とスモレットさんが大声で言った。「グレーは己に何も言わなかったし、己もあの男に何も尋ねはしなかった。それに、己はむしろ貴様もあの男もこの島全体も海の中から地獄へ吹

き飛ばしてやりたいくらいなんだ。おい、これでそのことについて
ちや貴様には己の心がわかったはずだ。」

こうちよつと呶鳴りつけられたのでシルヴァーは冷静になった
ようだった。彼はそれまではだんだんいらだつて来ていたのだが、
今は気を落着けた。

「いや、これはどうも、」と彼が言った。「多分、あつしは、紳
士って方々がその時の場合によつてどんなことを適当と考^{かんげ}えるか
考えねえかつてことの区別をつけなかつたんでしよう。で、船長、
あんたはパイプをやるうとしていなさる様子だから、わつしも遠
慮なくやりますぜ。」そう言つて彼はパイプに煙草を填めて、そ
れに火をつけた。そして、その二人の人はしばらくの間は煙草を

吹かしながら無言で坐り、互に顔を見合ったり、また煙草を止めたり、また前へ屈んで唾を吐いたりしていた。その二人の様子を見ているのは芝居のように面白かった。

「ところで、こういう話ですよ。」とシルヴァーがまた始めた。

「宝を手に入れられる海図をわっしらに渡して貰え^{もれ}ましょう。それから、可哀^{かええ}そうな水夫らを撃ち殺したり、寝てる間に頭に孔を

あけたりするのは、やめて貰えましょう。そうして下さりや、どっちでもお好きな方^{ほう}にしてあげますぜ。宝を積み込みせえすりや、わっしらと一緒に船に乗んなさるか。それなら、あっしが名誉にかけてきつとあんた方をどつかへ無事に上陸させてあげましょう。それともまた、もし、わっしの手下の中にや乱暴な奴もいて、こ

き使われた怨みを持つてゐるんで、一緒に船に乗るのがお氣が進まねえなら、ここに残つたつてようがすぜ。それなら、あんた方と食物を一人一人に分けましよう。そして、これもきつと、船を見かけ次第それに信号して、あんた方を迎えにここへ来させてあげますよ。どっちでもね。どうです、訳のわかつた話でしょう。これよりいいことつて望めやしませんぜ。しませんともさ。それからね、——と声を張り上げて——「この丸太小屋ん中にいるみんなの人に、わっしの言つたことをよく考えて貰えてえんだ。一人に言つてゐることは、みんなに言つてゐることなんだから。」

スモレット船長は坐つていたところから立ち上つて、パイプの灰を左手の掌にはたき出した。

「それだけか？」と彼は尋ねた。

「一言も残さずすつかりだ、畜生！」とジョンは答えた。「^{こと}これを厭だというなら、あんた方はわしの見納め^{みおさ}で、後は鉄砲丸^{だま}をお見舞^{みめえ}するだけだ。」

「至極結構。」と船長が言った。「今度は己の言うことを聞かしてやる。もし貴様らが武器を持たずに一人一人やつて来るなら、己は、貴様らみんな鉄械^{かせ}をかけた上で、イギリスへつれて帰って公平な裁判にかけてやるということを、約束してやろう。もしやつて来ないというなら、このアレグザンダー・スモレットは陛下の旗を掲げているのだ、きつと貴様らみんなを魚^{さかな}の餌食にしてくれるぞ。貴様らは宝を見つけないことが出来ない。貴様らは船

を動かすことも出来ない、——貴様らの中には船を動かせそうな奴が一人だっていないよ。貴様らは我々と戦うことも出来ない、——そら、グレーは貴様らの仲間の六人の中から抜け出て来たんだぜ。お前さんの船は動きが取れなくなっていますよ、シルヴァーさん。お前さん方は危い風下の海岸にいるようなものなんだ、すぐにわかるだろうがね。己はここに立って貴様にそれだけ言うてやる。これが貴様が己から聞く最後の親切な言葉だぞ。この次己が貴様に逢った時には、必ず、貴様の背中に一発撃ち込んでやるんだからな。おい、小僧、歩くんだ。とつとと出て行け、どうか、ずんずん、駆足でな。」

シルヴァーの顔はみもの観物だった。激怒のために眼玉は跳び山しそ

うだった。彼はパイプから火を振り出した。

「手を貸して立たしてくれ！」と彼は叫んだ。

「己は厭だ。」と船長が答えた。

「だれか手を貸して立たしてくれねえか？」と彼は喚いた。

私たちは一人も動かなかった。彼は、非常に口ぎたない呪いの言葉をがなり立てながら、砂地を這って行つて、ポーチに掴まると、ようやく再び立ち上つて柵杖をあてた。それから泉の中へペつと唾を吐いた。

「そら！　これが己の手前^{てめえ}たちに思っていることだ。」と彼は呶^ど鳴^なつた。「一時間とたたねえうちに、この古ぼけた丸太小屋にラム樽みてえに穴をあけてくれるぞ。笑つとけ、畜生、笑つときや

がれ！ 一時間とたたねえうちに、手前らは笑う反対に泣面はんでえ なきづらをかくんだ。死ぬ奴は運のいい奴だぞ。」

そして、恐しい罵り言葉を吐いて彼は躓つまずきながら立去り、砂地をやつとのことで下つて、四遍か五遍しくじった後に、休戦旗を持った男に助けられて柵壁を越すと、瞬く間に樹立の中へ姿を消してしまった。

第二十一章 攻撃

シルヴァアの姿が見えなくなるや否や、それまでその姿をじつと見送っていた船長は、小屋の内部の方へ振り向くと、グレーの

他には私たちが一人も自分の持場にいないのを見た。私たちが船長の立腹したのを見たのは、この時が初めてであった。

「部署に就^つけ！」と彼は呶^ど鳴^なった。それから、私たちがみんなそこそと自分の場所に戻ると、「グレー、」と船長は言った。

「君の名は航海日誌に記^ししておく。君は海員らしく自分の義務を守ったのだ。トゥリローニーさん、あなたには驚きましたな。先生、あなたは兵役に就^ついておられたことがあつたと思います。がな！もしフォンテノイでもそういう風に服務しておられたのでしたら、寢床に入っておられた方がよかつたでしょうよ。」

医師の組は皆銘々の銃眼のところに戻り、残りの者は頻りに予備の銃に装填したが、だれも彼も顔を赤くし、小言で耳が痛がつ

たのは、諸君も信じられることだろう。

船長はしばらくの間無言のままで見っていた。それから口を開いた。

「諸君、」と彼は言った。「私はシルヴァーに罵詈の一斉射撃を浴^{あび}せてやりました。わざと猛烈にやつつけたのです。で、奴の言ったように、一時間とたたないうちに、我々は攻め込まれました。う。我々が人数で劣っていることは、私が申すまでもありませんが、しかし我々は隠れて戦うのです。そしてもうちょっと前なら、我々は紀律をもって戦うのだと言えたでしょう。諸君にその気さえあれば、奴らを打ち負かすことが出来るということは、私は少しも疑いません。」

それから彼は各自の持場を巡回し、すべて異状のないのを確かめた。

小屋の二つの短い側の東側と両側とには、銃眼が二つしかなかった。ポーチのある南側にも、また二つあり、北側には、五つあった。銃は私たち七人に対してちょうど二十挺あった。薪は四つの山に——テーブルとでも言ったように——積み上げてあつて、各の側の真中あたりに一つずつあり、この各のテーブルの上には、弾薬と四挺の装填した銃とがいつでも防禦者の手に取れるように置いてあつた。小屋の真中には、彎刀カトラスが並べてあつた。

「火を抛り出しなさい。」と船長が言った。「寒くなくなつたし、眼に煙けむを入れてはなりませんから。」

鉄製の火籠をそっくりトウリローニーさんが持ち出して、燃えさしは砂の中に突っ込んで消された。

「ホーキンスは朝飯がまだだあさめしな。ホーキンス、勝手に取って、自分の持場へ帰って食べなさい。」とスモレット船長が続けて言った。「さあ、早くするんだ。すまないうちにまた食べたくなるだろうよ。ハンター、全員にブランデーを配れ。」

そして、それが配られている間に、船長は心の中で防禦の計画をすっかり立てた。

「先生、あなたは戸口を引受けて下さい。」と彼は再び言い始めた。「気をつけて、体を出さないことです。内にいて、ポーチから撃つて下さい。ハンター、東側を守ってくれ、そこだ。ジョイ

ス、君はな、西側に立つんだ。トウリローニーさん、あなたは一番射撃の上手な人です、——あなたとグレーとは、銃眼の五つある、この長い北側を引受けて下さい。危険のあるのはそこですか。もし奴らがそこまで上つて来て、こっちの窓から我々に向つて撃ち込むようになっては、すこぶる面白からん形勢になりますよ。ホーキンス、君と私とは射撃にはあまり役にたたんから、そばに立つて弾丸籠めたまごをして手伝いをするでしょう。」

船長の言つたように、寒気はもう過ぎていた。太陽は小屋の周りをぐるりと取巻いた樹立の上まで昇るとすぐ、開拓地へ強く照りつけて、靄もやをたちまちに飲み干してしまった。間もなく砂地は焼け、丸太小屋の丸太の樹脂やにが融け出した。ジャケツも上衣も脱

ぎ棄て、シャツは胸をはだけ、袖を肩までもまくり上げて、私たちは、銘々が自分の持場で、暑気と不安とで熱に浮かされたようになつて立つていた。

一時間たった。

「畜生め！」と船長が言つた。「こいつあどうも赤道無風帯みに退屈だな。グレー、口笛を吹いて風を呼んでくれ。（註六六）」

ちようどその瞬間に攻撃の最初の知らせがあつた。

「お尋ねいたしますが、」とジョイスが言つた。「だれかが見えませんでしたら、撃つんですか？」

「そう言つたじゃないか！」と船長は叫んだ。

「有難うございます。」とジョイスはやはり穏かな慇懃な調子で答えた。

その後しばらくは何事もなかった。が、今の話で私たちみんなは気をひきしめて、耳も眼も緊張させていた。——銃手は銃を両手で構え、船長は口を堅く結び、顔を顰^{しか}めて、小屋の真中に突っ立った。

そうして数秒たつと、突然ジョイスが銃を手早く上げて発砲した。その銃声が消え去るか去らないに、外からはそれに応じてばらばらな一斉射撃が起り、囲柵のあらゆる側から引続いて一弾また一弾と飛んで来た。数発の弾丸が丸太小屋に中^{あた}つたが、一発も内へは入らなかった。そして、煙が消え去った時には、柵壁も、

その周りの森も、前と同じようにひっそりとしてだれもいなかった。枝一本揺れないし、銃身がぴかりと閃いて敵のいることを示しもしなかった。

「君の狙った奴に中ったか？」と船長が尋ねた。

「いいえ。」とジョイスは答えた。「中らなかつたと思います。」

「それでもほんとのことを言うのはまだしも結構。」とスモレッツト船長が呟いた。「ホーキンス、この人の鉄砲に弾丸^{たま}を籠めてやりなさい。先生、あなたの側には何発ほど来ましたか？」

「はつきりとわかっています。」とリヴジー先生が言った。「この側には三発発砲して来ました。ぴかりと光るのが三つ見えたのです、——二つはくつついて、——一つはずつと西の方で。」

「三発と！」と船長は繰返して言った。「それから、トウリローニーさん、あなたの側は何発でしたか？」

しかしこれはそう容易には答えられなかった。北からはたくさん来たのだ。——大地主さんの計算では七発、グレーの言うところによれば、八発か九発だった。東と西とからは、たった一発ずつしか発砲されなかった。だから、攻撃は北側から開始されるので、他の三方では見せかけの敵対行為に煩わされるだけだ、ということは明かだった。しかしスモレット船長は彼の手配を少しも変えなかった。彼の主張するところでは、もし謀叛人どもが柵壁を越えるのに成功すれば、どれでも護りのない銃眼を占領して、私たちをこの砦とりでの中で鼠のように射殺してしまうだろう、という

のであつた。

それにまた、私たちには考えている余裕も大してなかった。不意に、わあつと喊声をあげながら、一群の海賊が北側の森から躍り出して、柵壁へとまっすぐに走つて来た。同時に、銃火がもう一度森から開かれて、一発のライフル銃の弾丸がひゅうつと戸口から飛んで来て、医師の銃をめちやめちやに壊してしまった。

突撃隊は猿のように柵の上に群つた。大地主さんとグレーとは続けざまに発砲した。三人の奴が倒れた。一人は前へ倒れて囲柵の中へ落ち、二人は後へ倒れて外側に落ちた。しかしこの中で、一人は明かに負傷したよりもびっくりして倒れたのであつた。なぜなら、彼はたちまち再び立ち上つて、すぐに樹立の中へ姿を消

してしまつたから。

二人が斃^{たお}れ、一人が逃げ、四人がうまく私たちの防禦陣地の内へ足を入れた。同時に、森の蔭からは、七八人の者が、いずれも明かに数挺ずつの銃を持っているらしく、丸太小屋めがけて、中りはしないが猛烈な射撃を続けた。

ちんにゆう
闖入

入して来た四人の者は小屋に向つてまっすぐに突進し、

走りながら喚き声をあげた。すると樹立の中にいる連中もわあつと喚き返して彼等を声援した。こちらからは数発撃つた。しかし、射手があせていたので、一発も効果はなかったらしい。瞬く間に、四人の海賊は丘を攀^よじ登つて私たちに迫つて来た。

ボースン
水夫長のジョーブ・アンダスンの頭が中央の銃眼のところのに

ゆつと現れた。

「奴らをやつつけろ、みんな、——みんな！」と彼は雷のような声で呶鳴^{どな}った。

同時に、もう一人の海賊はハンターの銃口を掴み、それを彼の手から振り取り、銃眼からひったくつて、猛烈な一撃を喰わしたので、ハンターは可哀そうに氣絶して床^{ゆか}の上に倒れた。その間に、もう一人の奴は無事に小屋をぐるりと　　つて、不意に戸口に現れ、彎刀で医師に打ってかかった。

私たちの位置はすっかり反対になった。もうちよつと前には、私たちは掩護物の蔭から身を曝している敵を射撃していたのだが、今では、曝露されていて一撃も返すことの出来ないのは私たちの

方となった。

丸太小屋は煙で一杯になった。私たちが割合に無事だったのはそのためであつた。叫び声とどたばたする音、ピストルを発射する閃光と轟音、一声の高い呻き声などが、私の耳の中に鳴り響いた。

「出るんだ、諸君、出るんだ。外で戦うんだ！　カトラス 彎刀を取れ！」

と船長が叫んだ。

私は例の薪の山から一本の彎刀を素早くひっ掴んだ。と同時にだれかが別のをひっ掴んで、私の指の関節をさつと切つたが、私はそれをほとんど感じなかった。私は戸口を跳び出して明るい日光の中に出た。だれかがすぐ背後から来たが、だれだかわからな

かった。真正面には、医師が自分の攻撃者を追つて丘を下つていったが、ちょうど私の視線が先生に落ちた時に、先生は刀を打ち下し、その海賊は顔に大きな斬傷を受けて、仰向に^{もが}跪きながら倒れた。

「小屋を　　れ、諸君！　小屋を　　れ！」と船長が叫んだ。そして、この騒ぎの中でさえ、私は船長の声に変つたところがあるのに気がついた。

機械的に私は命令に従い、東の方へ振り向き、彎刀を振りかざしながら、小屋の角を走り曲つた。すると次の瞬間にはア ند スンとぼったり顔を合せた。彼は大きな声で喚いて、短剣を頭上高く振り上げ、それが月光にきらりと光つた。私は恐しいと思う暇

もなかったが、今にも一撃が下されようとする途端に、たちまち一方の脇へ跳び退き、柔かい砂の中に足を踏み外して、斜面を真逆さまに転げ落ちた。

私が最初戸口から跳び出した時には、他の謀叛人どもも、私たちをやつつけてしまおうと、すでに防柵に攀よじ登っていたのである。赤い寝ナイトキャップ帽をかぶつて、口に彎刀を啣くわえた一人の男などは、もう上まで登ってしまつて、片脚をこちらへ跨いでいたのだつた。ところで、その間はごくしばらくだったので、私が再び立ち上った時にはすべての者が元と同じ姿勢で、赤い寝帽をかぶつた奴はやはり半分跨ぎかけたままだし、もう一人の奴はやはり柵壁の上に頭だけを出していた。しかし、この僅かな間に、戦はも

う終つて、勝利は味方のものとなつた。

グレーが私のすぐ背後からついて来て、大男の水夫長が打ち損じたのをやり直す暇もないうちに、水夫長を斬り倒してしまつたのだ。もう一人の奴は、小屋の中へ発砲しようとしていた刹那に銃眼のところで撃たれて、今は断末魔の苦悶をやりながら横つていて、手にしているピストルからはまだ煙が出ていた。第三人目の奴は、私の見たように、先生が一撃でやつつけたのだ。防柵を攀^よじ登つてやつて来た四人の中で、たった一人だけが殺されずに残つた訳で、その男は、戦場に彎刀を残して、殺されはしまいかと恐れながら今再び柵を攀じ出ようとしているところだつた。

「撃て、——小屋から撃て！」と先生が叫んだ。「おい、君ら、

隠れ場へ戻るんだ。」

しかしこの言葉は顧みられず、一発も撃たれなかったので、ち闖ちやうしや入者にゆうしやの一人だけ生き残った奴は逃げおおせて、他の連中と一緒に森の中へ姿を消してしまった。三秒もたつと、倒れている五人の他には攻撃隊は影もなかった。四人は防柵の内側に、一人はその外側に倒れていた。

先生と、グレーと、私とは、大急ぎで小屋の方へ走り戻った。生き残った奴らは間もなく自分たちの銃の置いてある処へ戻るだろうし、いつ射撃を再び始めるかも知れなかった。

小屋の中はこの時分には幾らか煙が少くなっていた。そして私たちは勝利を得るために払った価格を一目で見て取ったのである。

ハンターは自分の銃眼のそばに昏倒して横つていたし、ジョイスは自分の場所で頭を射貫かれて、二度と動けない有様になっていた。そして、小屋のちようど真中には、大地主さんが船長を支えていて、二人とも同じくらい蒼ざめていた。

「船長が負傷した。」とトウリローニーさんが言った。

「奴らは逃げましたか？」とスモレットさんが尋ねた。

「逃げられる奴だけはみんな、確かに。」と先生が答えた。「だが、どうしてももう逃げられない奴が五人います。」

「五人ですって！」と船長が叫んだ。「ふうむ、それあい。こちの三人に対して五人やられたんなら、今じゃ我々は九人に対する四人ですな。それなら初めより歩ぶがよくなった訳ですよ。あ

の時は我々は十九人に対する七人でした。またはそう思っていたのですが、あれではどうもやりきれませんからねえ。」★

★謀叛人は間もなく総計僅か八人になったのである。というのは、スクーナー船の船上でトゥリローニーさんに撃たれた男が、負傷したその晩に死んだからだ。しかし、このことは、もちろん、忠実な側の方には後になるまでは知られなかったのである。

第五篇 私の海の冒険

第二十二章 どうして海の冒険を始めたか

謀叛人どもは引返しては来なかった、——森の中から発砲さえして来なかった。彼等は、船長の言うのによれば、「その日の食糧だけは貰って」しまったのである。それで私たちはその場所を自分たちだけのものに出来たし、負傷者の傷を調べたり食事をつたりする平穏な時間もあった。大地主さんと私とは、危険を構わずに、屋外で料理をした。そして屋外にいてさえ、医師が手

当をしている負傷者の高い呻き声が聞えて来るのが怖くて、自分たちのしていることがほとんどわからないくらいであった。

戦闘で倒れた八人の中で、たった三人だけがまだ息^{いき}があり、――それは、銃眼のところで撃たれた海賊の一人と、ハンターと、スモレット船長とである。そしてこの中の初めの二人は死んでいても同様だった。実際、謀叛人の方は、先生の外科手術を受けているうちに死んだし、ハンターは、私たちが出来るだけのことはしたが、一度も意識を恢復しなかった。彼はその日中^{じゅう}死生の間をさまよい、私の家^{うち}で卒中の発作に罹ったあの老海賊のように荒い息遣いをしていた。しかし、彼の胸の骨はあの一撃で打ち砕かれていたし、頭蓋骨は倒れた時に挫けていて、その夜のうちに、何

の徴候もなく声も立てずに、彼は神の許へ行ってしまった。

船長とは言えば、彼の傷はいかにも重くはあつたが、しかし危険なものではなかった。どの器官にも致命傷は負つていなかった。ア ندア スンの弾丸が——というのは最初に船長を射撃したのはジョーブの奴だったからであるが——けんこうこつ肩胛骨を折つて肺に触れていたが、ひどいことはなかった。第二弾はふくらみ脹脛の筋肉を少し切り裂いて引違えただけだった。彼はきつと恢復するが、しかしその間、これから数週間は、歩いて腕を動かしてもいけないし、出来る時には口を利くことさえよくない、と先生が言った。

私自身の偶然に受けた指関節の切傷は、ほんの蚤の喰つたくらいのものだった。リヴジー先生はそれにこうやく膏薬を貼つて、おまけ

に私の耳をひっぱった。

食事の後に、大地主さんと先生とは船長のそばにしばらく坐つて相談をした。そして思う存分にしゃべり合つてしまうと、それは正午を少し過ぎた頃であつたが、先生は自分の帽子とピストルとを取り上げ、彎刀カトラスを佩おび、例の海図をポケットに入れ、銃を肩にかけて、北側の防柵を乗り越え、さつさと樹立の中へ入つて行つた。

グレーと私とは、上官たちの相談しているのが聞えないようにと、丸太小屋のずっと端の方に一諸に坐つていたが、グレーは、医師が出て行つたのにまったく呆氣あつけに取られて、パイプを口から取り出したまま、それをまた口に啣くわえるのもすっかり忘れたほど

だった。

「おやおや、」と彼は言った。「一体全体、リヴジー先生は氣でも違つたんかい？」

「なあに、そんなことはないさ。」と私が言つた。「氣が違ふといふことになれあ、この僕たちの中では先生が一番おしまいだよ。僕はそう思うさ。」

「じゃあ、きょうでえ兄弟」

「とグレーが言つた。「先生は氣が違つていねえんかも知れねえ。だが、あの人の方が氣が変になっているのでねえとするとだ、いいかい、このわつしの方が変なのだな。」

「僕はこう思うよ、」と私が答えた。「先生には何か思いつきがあるんだとね。そしてもし僕の思う通りなら、先生は今ベン・ガ

ンに会いにいらしたんだよ。」

後で明白になったことだが、私の思った通りだった。しかし、とかくするうちに、小屋の中は息苦しいまでに暑く、防柵の内側の狭い砂地は真昼の太陽に照りつけられて燃え立つようだったのだ、私の頭にはまた一つの考えが浮び始めた。それは決してさほど正しい考えではなかった。私に思い浮び始めたというのは、先生を羨むことなのであった。先生は森のひいやりとする樹蔭を歩きながら、周りに鳥の啼くのを聞いたり、松の樹の心地よい香を嗅いだりしているのに、私は、暑さで融けた樹脂やにのくつついた衣服を着て、焙あぶられるような思いをしながら坐っていて、自分の周りには血がたくさん流れているし、あたり中に死体がごろごろ横

っているのです、それを見てみると、この場所がつくづく厭になり、その厭だという気持はほとんどここが恐しいというくらいに強いものだった。

私が丸太小屋を洗い落したり、それから食後の食器を洗って始末している間中、この厭だという気持と羨ましいという気持はますます強くなる一方で、とうとうしまいには、自分がパン囊のそばにいて、その時だれも私を見ていないのを幸いに、逃げ出す用意の手始めに、上衣の両方のポケットに堅^{かた}パンを一杯詰め込んだ。私は馬鹿だった、と言われても仕方がない。確かに私は馬鹿な大胆過ぎることをやろうとしていたのだ。しかし、自分の出来るだけの用心をしてそれをやる決心だった。それだけの堅パンがあ

れば、どんなことが起つたにしても、少くとも、次の日のよほど遅くまではひもじい思いをすることはなかったらう。

次に私が身につけたものは一対のピストルであつた。そして角製火薬筒と弾丸とはすでに持っていたので、武器はこれで十分だと思つた。

私が頭に描いた計画はと言えば、それはそれだけとしては悪い計画ではなかった。碇泊所を東で外海と分つている例の砂の出洲ですを下つて行つて、昨夕目についたあの白い岩を見つけ出して、ベン・ガンがボートを隠しておいたのがそこかどうかをつきとめようというのだ。これは確かにやる価値のあることだと私は今も信じている。しかし私は圀柵から出ることは許されまいと思ひこん

でいたので、私の唯一の方法は、だれも気をつけていない時に何とも言わずに無断でこっそり抜け出ることであつた。これは、計画そのものをまで悪いものにするくらいな、悪いやり方であつた。しかし私はほんの子供だつたし、ぜひやろうと決心していたのだ。さて、とうとう素晴らしい機会を見つけることになつた。大地主さんとグレーとは頻りに船長に繃帯を巻く手伝いをしていた。だれも見ている者がなかつた。私は跳び出して柵壁を越え樹立の茂みの中へ駆け込み、私のいないことが気づかれないうちに、もう仲間の人たちの呼び声の聞えないところまで行つていた。

これが私の二度目の愚かな行いで、小屋を護るのに健康な人をたった二人だけ残して出たのだから、一度目のあの冒険とは遙か

に悪かったのだ。しかし、これも、一度目の時のように、私たちにみんなを救うことの助けになったのである。

私は島の東海岸をさしてまっすぐに進んで行つた。碇泊所から決して目を留められないようにするために、出洲の外海に面した側を下つて行くことにしていたからである。まだ暖かくて日が照つてはいたけれども、もう午後も大分遅くなつていた。喬木の森を縫うようにしてどんどん歩いて行くと、ずっと前の方から間断なく雷のように轟いている寄^{よせ}波^{なみ}の音が聞えたばかりではなく、樹の葉のざあざあ鳴る音や大枝の擦れ合う音までが聞えて来たので、海^{うみ}風^{かぜ}がいつもよりも強く海岸に吹きつけていることがわかつた。間もなく、冷い風が私の体^{からだ}にあたつて来た。そしてさらに

数歩行くと、森の縁の開けたところへ出て、見渡すと、海は水平線までも青々として日に照され、寄波は磯に沿うてのたうち白波を立てているのだった。

私は宝島の周囲では海が静かだったのを一度も見たことがない。太陽が頭上に輝きわたり、空気はそよとも動かず、海面は波立たずに青々としていようと、こういう大浪はいつも外海に面した海岸にはどこでも打ち寄せて、昼も夜も雷のように轟きわたっているのだった。それで私にはこの島では浪の音の聞えない処が一箇所でもあろうとはほとんど信じられない。

私は大喜びで寄波のそばをずっと歩いて行き、とうとう、もう十分に南の方まで来たと思って、何かのこんもり茂った灌木に身

を隠して、用心しながら出洲の背へ這い上った。

私の背後は海で、前面は碇泊所であつた。海風は、いつになく烈しく吹いたためにいつもよりも早く吹き尽してしまつたとしてもいう風に、すでに止んでいた。その後には、南南東からの弱い変り易い微風が吹いて、大きな層をなした霧を運んで来た。そして碇泊所は、^{スケリトン}骸骨島の風蔭で、初めて私たちが入つて来た時のように静かで鉛のようにどんよりしていた。ヒスパニオーラ号は、その滑かな一面の鏡のような水面に、檣冠から吃水線までくつきりと映っていて、^{ジョリー・ロジャー}海賊旗が斜桁^{ピク}上外端にぶら下つていた。その舷側には一艘の快艇^{ギグ}が横附けになつていて、シルヴァーがその艇尾座におり、——彼は私にはいつでも見分けがついた、——

—それから、二人の男が本船の船尾の舷牆に凭もたれていたが、その中の一人は赤い帽子をかぶっていた。——まさしく、数時間前に防柵に馬乗りになっているのを私が見たあの悪漢だ。見たところでは彼等はしゃべったり笑ったりしているようだった。もつとも、その距離——一マイル以上——では、無論、言っていることは私には一語も聞き取れなかったが。と、突然、実に怖い、この世のものとは思えぬ叫び声がして、最初は私はひどくびっくりしたが、すぐフrint船長の声を思い出し、その鳥が飼主の手頸とまに棲すまっているのがその鮮かな羽毛の色でそれと見分けられるような気さえした。

それから間もなくその端艇は本船を離れて岸に向って漕いでゆ

き、赤い帽子をかぶった男とその仲間の男とは船室ケビンの昇降口から下へ降りて行つた。

ちょうどその時に太陽は遠眼鏡山スパイグラスの背後に沈んで、霧がずんずん集つて来るので、いよいよ本式に暗くなりかけて来た。私は、もしその夜ボートを見つけるのなら、一刻もぐずぐずしてはいられないと気がついた。

例の白い岩は、矮林の上に十分見えてはいたが、まだ八分の一マイルばかり出洲を下ったあたりにあつて、矮木の間を時々四つん這いになって這いながらそれに近づくまでには、かなりの時間がかかった。そのごつごつした岩の面に私が手をかけた時には、ほとんど夜になっていた。岩のすぐ下手に、緑の芝地のごく小さ

な凹地^{くぼち}があつて、それが、土手と、その辺にすこぶるたくさん生えている膝くらいまでの高さのこんもりした下生^{したばえ}とで隠されていた。そして、この凹^{へこ}みの真中に、果して、山羊の皮で作った小さなテントがあつた。ちょうどイギリスでジプシー人が持ち　　つてゐるようなテントだつた。

凹地の中へ降りて、そのテントの端を上げてみると、ベン・ガンのボートがあつた。――まさしく紛れもない手製のものだつた。強靱な木を不器用な一方に偏つた枠組にして、それに、毛の方を内側にした山羊の皮を張つたものである。これは私にさえ極めて小さいので、大きな大人を乗せて浮ぶことが出来ようとは私にはほとんど想像出来ないくらいであつた。出来るだけ低く取附けた

こしかけぱり
腰掛梁が一つと、舳へさきに足架あしかけのようなものと、推進用のダブル・

パッドル

櫂こ（註六七）が一本とあつた。

私はその当時は古代のブリトン人が造つたような革舟コラクル（註六

八）をまだ見ていなかったが、その後になつて見たことがある。

それで、ベン・ガンのボートが一番はつきり説明するには、かつて人間の造つた最初の最もまずい革舟のようなものだと言えбайいと思う。しかし、それは革舟のあの大きな便益は確かに持っていた。すなわち、極めて軽くて持ち運び易いのである。

さて、もうボートを見つけてしまったのだから「私も今度だけは隠れ遊びもたんのうしたろうと思われるだろう。けれども、それまでの間に、私は別の考えを思いつき、それがとてもやりたく

なっていたので、たといスモレット船長にさえ逆つてでもそれを実行したろうと思う。それは、夜陰に乗じてそつと海へ乗り出し、ヒスパニオーラ号の錨索を切つて、どこでも流れ着く処へ船を坐礁させようというのであつた。私は、謀叛人どもが、その朝撃退されてからは、錨を揚げて海へ出て行くことを何よりも望んでいるものと、すっかりきめこんでいた。で、それを邪魔してやるのは面白いことだろうと思つた。そして、あのように番人どもに一艘のボートも残しておかないのだから、それはほとんど危険なしに出来そうだと考えたのである。

私は真暗まっくらになるのを待つために腰を下して坐り、堅パンをたらふく食べた。その夜は私の目論もくろみには方に一つという詭え向き

の夜だった。霧はその時は空をすっかり蔽うていた。昼の名残の光がだんだん淡くなつてまつたく消えてしまふと、真の暗闇が宝島を包んだ。そして、とうとう、私が革舟を担いで、夕食を食べたその凹地から躓きながら手探りして出た時には、その碇泊所全体で目に見える箇所はたった二つしかなかった。

一つは、岸の大きな焚火で、そのそばに敗北した海賊どもが湿地で酒宴を開いていた。もう一つは、暗闇の中のほんの朦朧たる明りで、碇泊している船の位置を示しているものだった。船は退潮につれてぐると　　——船首が今私の方へ向いて

おり、——船中の唯一の灯は船室にあつたのだ。それで、私に見えたのは、船尾の窓から流れ出る強い光線が霧に反映しているも

のに過ぎなかつたのである。

退潮はすでにしばらく続いていたので、私は長い一帯のじくじくした砂地を徒渉しなければならなかつた。そこでは何回もくるぶし踝の上までもずぶずぶと沈んだ。それからやと退ひいていつている水の縁のところまで来たので、少し水の中へ入って行つて、多少力を出して機敏に革舟を竜骨キールのところを下にして水面に浮べた。

第二十三章 退ひきしお潮が流れる

この革コラクル舟は——それを使わない前から十分わかつていたが——私くらいの背や重さの人間にはごく安全なボートで、荒海でも

ふわふわと浮くし敏捷に動いた。しかし、操縦するにはこの上もなくひねくれた偏屈な舟だった。どうやってみても、いつも風下へばかり流れるし、ぐるぐるぐるぐるのがそいつの一番得意の手だった。ベン・ガンでさえあの舟が「その癖がわかるまでは扱いにくい」奴だったということを認めている。

無論、私にはその癖がわかっていなかった。その舟は私の行かねばならぬ方角以外のあらゆる方向へぐるぐる　　った。大抵の時は横向になっていたの、潮しおがなかったなら私は到底船に着けなかったろうと思う。幸運にも、私がどう櫂を漕いでいても、潮は舟を絶えず押し流していた。そしてちようど行手にヒスパニオーラ号があつて、ほとんどそれに会い損うはずがなかった。

初めは船は私の前に何か暗闇よりもっと黒いものの汚点のようにぼうつと見えていたが、それからその円材や船体が形をなして見え始めたかと思うと、次の瞬間には、というように思われたのであるが（なぜなら、先へ進むにつれて、ひきしお退潮の流れがだんだん疾くなつて来ていたから）、私はもう船の錨索のそばに来ていたので、すぐにそれを掴まえた。

錨索は弓の弦つるのようにぴんと張っていた。——船はそれほど強く錨をひっぱっていたのだ。船体の周りでは、真黒な闇の中で、漣さざなみを立てた潮流が小さな山川のように泡立ちさざめいていた。私の船用大形ガナイフリでぶつとりと切つてやれば、ヒスパニオーラ号はぶんぶん帆を唸らせながら潮流と共に流れ下るだろう。

ここまでではよかった。しかし次に私の思い浮べたのは、ぴんと張っている錨索を急に切るというのは、蹴る馬のような危険なものだということだった。もしヒスパニオーラ号を錨から切り離すような無鉄砲なことをしようものなら、九分九厘まで、私と革舟とはまるつきり空中へ叩き飛ばされるだろう。

それで私はそのことはすっかり思い止ま^{とど}まった。そして、もし幸運が再び私に特別に恩恵を与えてくれなかったなら、私は自分の計画を放棄しなければならなかったろう。けれども、南東南から吹き始めていた弱い微風は、日が暮れてからは、次第に南西風に変っていた。ちょうど私が考えこんでいる間に、一陣の風が起つて、ヒスパニオーラ号に吹きつけ、船を潮流の中へ無理に押し上

げた。そのために、非常に嬉しかったことには、錨索が私の手の中で弛んだのが感じられ、それを掴んでいた手がちよつとの間水の下へ入った。

そこで私は決心して、大形ナイフを取り出し、齒でそれを開いて、索の股を一つ一つと切り、とうとう船は二つの股で揺れ動いているだけになった。それから私はじつとして、もう一度風が吹いて来て索の緊張が緩んだらこの残りの股を切断しようと待っていた。

この間中、船室ケビンから高い声が聞えていた。が、実を言えば、私は他の考えにすっかり気を取られていたので、それにはほとんど耳を籍かさずにいた。けれども、もう他にすることがなくなつたの

で、もつとそれに注意し始めた。

一方の声は、以前フrintの砲手だったという舵手コクスンのイズレ

ール・ハNZの声だと私にはわかった。もう一方は、もちろん、

例の寝帽ナイトキャップをかぶった男だった。二人とも明かに酒に酔って

いたが、それでもまだ飲み続けていた。という訳は、私が耳を傾

けている間にさえ、その中の一人が、酔っ払った叫び声をあげな

がら、船尾の窓を開けて何かを抛り出したが、それを私は空饅あきびん

だろうと判断したからである。しかし彼等は酩酊しているだけで

はなかった。猛烈に怒っていることは明かだった。罵り言葉が霰

のように飛び、時々はきつと殴り合いになるに違いないと思うほ

どの唳鳴りどな声がした。けれどもその度に喧嘩けんかは次第にやんで、声

はしばらくの間ぶつぶつと低くなり、やがてまた次の喧嘩が始まり、それも何事もなく次第にすんでゆくという風だった。

岸の方には、岸辺の樹立を通して野^{キャンプ}営の大きな焚火があかあかと燃えているのが見えた。だれかがのろい単調な古びた水夫の唄を歌っていて、一節の終り毎に声を下げて震わし、歌い手に根気がなくなつて止^やめるより他^{ほか}にはまるで終りがないように思われた。私はその唄を航海中に一度ならず聞いたことがあつて、こういう文句を覚えこんだ。――

「七十五人で船出をしたが、
生き残つたはただ一人^{ひとり}。」

そして、これは、その朝あれほど無残にも死傷者を出した連中にとつては、幾らか陰惨にも適切過ぎる唄だと、私は思った。しかし、実際、私の見たところから考えると、こういう海賊たちは皆、彼等が船を走らせる海と同じように無神経なものだったのだ。

やがて風が吹いて来た。スクーナー船は闇の中で斜に動いて近づいて来た。私は錨索がもう一度弛んだのを感じたので、ぐっと力をこめて残りの縄をぷつぷつと切った。

風は革舟にはほんの僅かしか作用を及ぼさなかったもので、私はもう少しでヒスパニオーラ号の船首にぶつつけられようとした。同時にそのスクーナー船は後端を中心にして潮流を横切ってゆつ

くりと　　つて両端が今までと反対の位置になりかけた。

私は今にも革舟が顛覆するかと思つたので、死物狂いになつて努力した。そして革舟を直接に押し離すことが出来ないとわかつたので、今度は船尾の方へまっすぐに押し進んで行つた。ついに私はその危険な隣人から免れた。そして最後に革舟をぐつと推進させたちようどその時に、私の手がふと船尾の船牆を越えて水中に垂れ下つている一本の軽い索にあたつた。と、即座に私はそれを掴んだ。

どうしてそんなことをしたのか自分でもほとんどわからない。初めはただ本能だつたのだ。が、一度それを手に握つて、それがしっかりしているのがわかると、好奇心がむらむらつと湧き起つ

て来て、船室の窓からちよつと覗いてやろうと決心した。

私はその索を手繰^{たぐ}つて引き寄せ、もう十分近づいたと思つた頃に、非常な危険を冒して自分の半身ほど立ち上り、そうして船室の天井と室内の一部とを見渡した。

この時分には、スクーナー船とそれの小さな伴^{とも}船とはかなり速く水を分けてすうつと流れていた。實際、私たちはすでに野営の焚火と平行になるところまでも来ていた。船は絶えず水沫を跳ばしながら無数の漣を押し切つて進み、ざあざあ大きな音を立てていた。それで、窓^{まど} 闕^{しきい}の上へ眼をやるまでは、私はなぜあの番人どもが一向驚かないのか合点がゆかなかつたのだ。だが、一目見ると十分だった。また、そのぐらぐらしている小舟からは、

一目だけしか見られなかった。その一目で、ハンズと彼の仲間の男とが絡み合つて猛烈な組打をやっており、互に相手の喉のどくび頸をひつ掴んでいるのが見えたのである。

私は再び腰掛梁にどかんと腰を下した。ちようどよい時だった。すんでのことに舟から水中へ落ちるところであつた。しばらくの間は、私には、煙つたランプの下で一緒にゆらいでいたあの狂暴な真赤になつた二つの顔の他には、何一つも見えなかつた。それで私は眼を閉じて、もう一度眼を闇に慣らそうとした。

例の果しのない唄もとうとう終つて、野營の焚火を囲んでいる人数の減つた仲間全体は、私のたびたび聞いたあの合唱をやり出していた。――

「死人箱しびとのはこにやあ十五人――

よいこらさあ、それからラムが一ひと鑊びんと！

残りの奴は酒と悪魔が片附けた――

よいこらさあ、それからラムが一鑊と！」

ちようど私が、酒と悪魔とが正にその瞬間にヒスパニオーラ号の船室でどんなに活躍しているかを考えていた時に、急に革舟がぐつと傾いたのに驚かされた。同時にそれはぐらぐらとして、それから針路を変えたように思われた。速力はその間に異様に増していた。

私は直ちに眼を開^あけた。周り中には一面に漣があり、鋭いざあざあいう音を立てて泡立ち、微かに燐光を発していた。私の舟は依然としてヒスパニオーラ号の船^{ふなあと}跡の数ヤードのところをぐるぐる　　つていたが、そのヒスパニオーラ号までも針路がよろよろしているようであつたし、その円材が夜の闇の中で少し揺れ動いているのが見えた。いや、もつと見つめていると、その船もやはり南の方へ方向を転じているのが確かにわかつた。

私は肩越しに振り返つて見た。すると心臓がどきんとして肋骨にぶつかったような気がした。自分の真^{まうしろ}後に、野営の焚火の光があつたのである。潮流は直角に曲つていて、それと共に高いスクーナー船と小さな踊っているような革舟とをぐるりと押し流し

て来たのだ。だんだん速くなり、だんだん烈しく泡立ち、だんだん高い音を立てながら、潮は瀬戸を通って外海へとぐるぐる　　りながら進んでゆく。

突然、私の前にあるスクーナー船は激しく針路を逸して、多分二十度も曲った。するとほとんど同時に船中で叫び声がり、続いて別の叫び声が出た。船室昇降梯子をどこかと歩く足音が聞えた。それで、あの二人の酔漢もとうとう喧嘩けんかを中止して自分たちが災難に遭っていることに気がついたのだということがわかった。

私はそのみすばらしい小舟の底にぺったりと寝そべって、自分の魂を神にひたすらに委ねていた。海峡の終るところで、私たち

はきつと荒波の碎けている沙洲にぶつつかるに違いなく、そこで私のすべての心労も迅速に終つてしまふだろうと思つた。そして私は死ぬことは多分堪えられたろうが、近づいて来る運命を傍観しているのは堪えられなかつた。

絶えず大浪にあちこちと押しやられ、時々は飛び散る飛沫しぶきに濡れ、今度水の中に突き込まれたら死ぬだろうと絶間なく思いながら、そうして私は何時間も横つていたに違いない。次第に疲れが増して来た。こういう恐怖の中でさえ、私の心は痺しびれたようになり、折々は無感覚になつた。遂にはとうとう眠つてしまい、波に揺られる革舟の中で、私は横になつて故郷と懐しい「ベンボーアドミラル・ベンボー」とを夢にみた。

第二十四章 コラクル 革舟の巡航

目が覚めた時はもうすっかり夜が明け放れていて、私は宝島の南西端のところに漂うているのだった。太陽は昇っていたが、大きな山容の遠眼鏡山スパイグラーズの背後にあつて私にはまだ見えなかった。その山はこっち側では恐しい断崖をなしてほとんど海へ下つていた。ホールボーリン岬と後ミズンマスト 檣山とが私のすぐ近くにあつた。山は禿山で暗い色をしており、岬は四五十フィートの高さの断崖になつていて、その縁には落へりちて来た岩石がたくさんごろごろしていた。私は海の方へ四分の一マイルも出ていないので、漕ぎ寄せ

て上陸しようというのが最初に考えたことだった。

その考えは間もなく断念した。ごろごろしている岩石の間には砕け波が噴き上って轟いていた。高い反響が次から次へと起り、ひどい飛沫が飛び散っていた。それで、私は、近よったところで、荒磯に打ちつけられて死ぬか、でなければ、突き出た険岩を攀よじ登ろうとして徒らに体力を使い尽すだけだとわかった。

それだけではなかった。巨大なぬらぬらした怪物——いわば、非常な大きさの蝸かたつむり牛の柔かいようなもの——が、岩石の平たくなつた上と一緒に這ったり、ざぶんと高い水音を立てて海の中へ落ち込んだりしているのが、見えたのである。そういうものが五六十匹も群っていて、その吠える声は岩々にこだましていた。

私はその後になって、それが海驢あしかというものであり、全然害をしないものであることを知った。

しかし、磯が險難で寄波が高く荒立っている上に、この動物のかつこう恰好を見ては、私がその上陸所が厭になるのには十二分であった。そういう危難に向ふくらいなら、むしろ海上で餓死する方がよいと思った。

とかくするうちに、もっとよい機会と思われるものが前に現れた。ホールボーリン岬の北に、陸がずっと続いていて、潮が低いので、長く延びた黄ろい砂地を露あらわしていた。その北には、もう一つ、別の岬——例の海図にはケープ・オヴ・ザ・ウッツ森の岬と記されているもの——があつて、高い緑の松の樹で蔽われ、その樹が海の縁へりま

でも生えていた。

私は、シルヴァーが宝島の西海岸全体に沿うて北の方へと流れている潮流があると言ったのを思い出した。そして、自分の位置から考えて、自分がすでにその潮流に乗っていると知ったので、ホールボーリン岬を後にして、それよりは都合がよさそうに見える森の岬に上陸を企てるために体力を使わずに貯えておくことにしよう、と考えたのである。

海には大きな滑かなうねりなめらがあつた。風は南からむらなくそよそよと吹いていたので、風と潮流とには喰違いがなく、大浪はぐうつと高まってはまた碎けずに下つて行つた。

もしそうでなかったなら、私はとつくに命を失っていたに違い

ない。ところが、そういう訳だったから、私の小さな軽いボートが易々^{やすやす}と安全に波に乗ってゆく有様は驚くべきものだった。私が舟の底にじつと横っていて、ただ片眼だけを舟縁の上へやっていると、幾度も、大きな青い波の頂上が私のすぐ上にぐうつと高く上るのが見えた。それでも革舟^{コラクル}はただちよつと跳ね上って、弾機仕掛^{ばね}のように踊り、鳥のように軽々^{かるがる}と向側の波窪へ降りてゆくのであった。

少したつと私はずいぶん大胆になり出して、自分の櫂を漕ぐ手を並^{ため}を試してみようと起き上った。しかし、重さの安排が少し変わっただけでも、革舟の動作には甚しい変化が生ずるのだった。そして私が動くか動かないに、ボートは、今までの穏かな踊るような

運動は直ちにやめて、眩暈めまいがするほどの峻けわしい水の斜面をまつすぐに走り下つて、次の波の横腹へぱつと水みづ煙けむりをあげながら舳へさきを深く突つ込んだ。

私はびしょ濡れになつて度胆を抜かれ、すぐさま元の位置に返つた。すると革舟は再び落着いたようで、私を前のようにふわふわと大浪の間を運んでくれた。この舟には手出しをしてはならぬということとは明かだった。で、自分にはこの舟の針路を左右することは毫も出来ないのだから、この分では、私には陸へ着けるとんな望みが残こされているだろうか？

私は非常に怖こわくなつて来たが、それでも心を乱さずにいた。先ず第一に、十分に用心して体を動かしながら、自分の航海帽で少

しずつ革舟の湊あか（註六九）をかい出した。それから、もう一度眼を舟縁の上へやりながら、どうしてこの舟がこんなに静かに大狼を滑り抜けてゆくのかということを研究しにかかった。

すると、どの波も、海岸や船の甲板から見えるような、大きな、滑かな、つやつやした山ではなくて、まさしく、陸上の山脈のように嶺や平坦な処や谷間がたくさんあるものだ、ということがわかった。革舟は、なすがままにさせておくと、くるくる　りながら、その低い処をいわば縫うようにしてゆき、波の峻けわしい斜面や高いすぐ崩れ落ちる頂上を避けてゆくのであった。

「ははん、なあるほど、」と私は思った。「僕がこうして寝ていて、釣合を失わずにいなければならないことは確かだ。しかしま

た、櫂を舟縁に置いて、時々平らな処で陸の方へ一推し二推しやれることも確かだぞ。」こう思うが早いか実行した。私は両^{りようひ}脇^{わき}で体を支えて実に苦しい姿勢をしながら寝て、折々一二本弱いのに漕いでは舳^{へさき}を岸の方へ向けた。

これはすこぶるくたびれもするし、まだるっこくもある仕事ではあったが、それでも私は確かに進んでいるのが目に見えた。そして、森の岬に近づいて来た時には、その岬にはきつと着き損うに違いないことはわかったけれども、それでも数百ヤード東の方へ来ていた。実際、私は岸に迫っていた。涼しげな緑の梢が一緒に風に揺れ動いているのが見え、次の岬には間違いなく着けるにきまつていると思った。

その時に、非常に困ったことには、私は咽喉^{のど}の渇きに苦しめられかけて来た。太陽が頭上からかんかん照りつける、それを波が千倍にも反射する、海水が私にかかつて乾き、唇までも塩で硬^{こわ}ばる、こういうことが一緒になつて咽喉は焼けつき頭がずきずき痛み出した。で、そんなに間近に樹立が見えたと、私はそこが恋しくてたまらなかつた。しかし潮流は間もなく岬を通り越して私を流して行つた。そして次の海の視界が展開した時に、私は或るものを見て、それが私の考えの性質を変えたのであつた。

ちやうど私の正面に、半マイルと離れていないところに、私は帆を揚げて走っているヒスパニオーラ号を見たのだ。もちろん、私は捕虜にされるものと思つた。けれども、水の無いのにひどく

苦しめられていたので、そう考えると嬉しいのか悲しいのかほとんどわからなかった。そして、それがどちらとも判断がつかないうちに、私はすっかり驚いて、ただ眼を丸くして訝るより他にしようがなかった。

ヒスパニオーラ号はメーンスル大檣帆と二つの斜檣帆とを張っていて、その美しい真白な帆布は雪か銀のように太陽に輝いていた。私が最初にその船を見た時には、すべての帆が風を受けて膨らんでいて、北西へ針路を向けていた。それで私は船に乗っている人たちは島をぐるりと　　って碇泊所へ戻って行こうとしているのだろうと思った。ところが、やがて船がだんだんと西の方へ転回しかけたので、彼等が私を認めて、追っかけて来ようと船首を　　してい

るのだと考えた。しかし、とうとう、船は真正面に風上へ向き、すっかり逆帆を喰って、帆を風に震わせながら、しばらくはそこに立往生した。

「へまな奴らだな。」と私は言った。「あいつらはまだやつぱり梟のように酔っ払っているのに違いない。そして、スモレット船長ならどんなに彼等を叱りとばして追い使つたろうと思った。

とかくするうちに、スクーナー船は次第に風下へ向い、再び別の針路を執って、一分くらいの間疾く帆走したかと思うと、もう一度ちように風上に向って停った。こういうことを再三再四繰返した。あちこちへ、上ったり下ったり、北へ、南へ、東へ、西へと、ヒスパニオーラ号は急に突き進み、その度毎に初めにやった

ように止つて、帆布をものうげにぱたぱたさせるのだつた。だれも舵を扱っていないのだということが私にはもう明かになつて来た。そして、もしそうとすれば、あの連中はどこにいるのだろうか？ 彼等は正体もなく酔いつぶれているか、それとも船を見棄ててしまったのだろうか、多分、もし私が船に乗り込めるならば、船を船長に返せるかも知れない、と私は考えた。

潮流は革舟とスクーナー船とを同じ速度で南の方へ（註七〇）押し流していた。スクーナー船の方の帆走はずいぶん気儘で間歇的で、ずいぶん永い間動きが取れなくなつてうろうろしていることがあつたので、潮流とは遅くはならないにしても、確かに少しも速くはなかつた。もし私が起き上つて櫂を漕ぎさえしたなら、

きつとその船に追いつけると思った。この計画はちよつと冒険のようなところがあつて私の興味を湧き起し、船首の昇降梯子のそばに水樽があることを思うと私の勇氣は二倍になった。

起き上ると、ほとんどすぐにまたぱつと水煙のお見舞を受けた。が今度は自分の目的をやり通すことにした。そして出来るだけの力を揮い用心をして、舵を操られていないヒスパニオーラ号を追つて漕ぎ出した。一度ひどく波をかぶつたので、心臓を鳥のようにどきどきさせながら、漕ぐのを止めて^{あか}湊をかい出さねばならなかった。けれども次第に慣れて来て、ただ時々^{へさき}舳をぶつつけたり顔に白波をぶつかけられたりするだけで、波の間を革舟を進めて行つた。

私は今や急速にスクーナー船に近づいていた。舵柄がばたんばたん^と動く度にそれについている真鍮がぴかぴか光るのまでが見えた。それでも一人の姿も甲板には見えなかった。船は見棄てられたのだと想像しない訳にはゆかなかった。もしそうでなければ、あの連中は下で酔って寝ているのだ。それなら多分私は彼等を当^あ木で塞^{てぎ}いでしまつて、船を自分の思うままに出来るかも知れない。しばらくの間は船は私には何より困ることをしていた。——じつとしてゐることだ。船は正南へ向い、無論、始終針路がぐらぐらした。風下へ向く度毎に帆は幾分膨らみ、そうするとすぐにまた風の方へ向くのだ。これが私には何より困ることだと言う訳は、船は、帆布が大砲のようにばたばた鳴り、滑^{せみ}車が甲板の上で転^{ころ}が

つてがらがら音を立て、そういうどうにも出来ないような様子に見えながら、それでもなお、潮流の速さのためだけではなくて、当然にも大きいものである風圧を全部受けるために、やはり私から向うへ走り続けていたからである。

しかし、ついに、いよいよ機会が来た。風がしばらくの間落ちてごく弱くなり、潮流が次第にヒスパニオーラ号を　して、船は中央を舳^{へさき}にしてゆつくりと回転し、ついには船尾を私に向けた。船室の窓はやはり開^あけっ放しになっており、テーブルの上に懸っているランプは昼になってもまだやはりともれていた。大檣帆は旗旗のようにだらりと垂れた。潮流がなかったなら船はちつとも動かなかつたのだ。

それまでしばらくの間は私は船と遠ざかつてさえた。が、こうなつて来ると、努力を二倍にして、もう一度船に追いつこうとし始めた。

もう船から百ヤードとないところまで来た時に、突然また風が吹いて来た。船は左舷に風を受け、身を屈めて燕のようにすつと波を掠めながら再び動き出した。

私は最初は絶望しかけたが、すぐにそれは喜びに変わった。船は
つて私ふなばた舷側を向け、——なおも　　つて、私との距離を半分、

それから三分の二、それから四分の三と縮めて来た。竜骨前端部の下で波が白く泡立っているのが見えた。革舟の中の私の低い位置からは、船は非常に高いものに見えた。

それから、不意に、私はわかつて来た。それまでは考える余裕が――身を動かして自分を救う余裕がほとんどなかったのだ。私
が一つのうねり波の頂にいる時に、スクーナー船が次のうねり波
を越えて下つて来た。第一斜檣ボースブリットが私の頭上にあつた。私は跳び
立って、革舟を水の下へ強く蹴つて飛び上つた。片手で第二斜檣ジブブーム
を掴み、片足は支索と転桁索との間にひっかけた。そしてそこに
しがみついて喘いでいる時に、鈍い物音がして、スクーナー船が
革舟にぶつつかつてそれを打ち壊して、私が戻る処もなしにヒス
パニオーラ号に残されたのだということがわかつた。

第二十五章

海賊ジョリー・ロジャー旗を引下す

私が第一斜檣ボースプリットの上につかるかのつからないに、第三斜檣フライイング。

帆ジブが大砲のような音を立てて煽られ、今までと反対の舷に風を受けてることになった。そうして反対になったためにスクーナー船は竜骨キールのところまでも震えた。だが、他の帆はやはり風を受けて膨らんでいたのもので、次の瞬間にはその斜檣帆ジブは再び煽り返されて、だらりとぶら下った。

このために私はもう少しのことと海の中へはね飛ばされるところだった。それで、もう一刻もぐずぐずせずに、第一斜檣を這ってゆき、甲板の上へ頭を先にして転がり下りた。

私は最上前甲板の風下の側にいたので、やはり風を受けて膨ら

んでいる大檣帆メインスルのために、後甲板の或る部分には見えなかった。だれ一人も見当らなかった。あの謀叛以来一度も洗ったことのない甲板の板には、たくさんの足跡がついていた。そして、頸のところを叩き割られた空あきびん罎が一本、排水孔の中を生きているもののようにあちこちと転がっていた。

突然ヒスパニオーラ号は真正面に風上に向った。私の背後の斜檣帆はばたばたと大きな音を立てた。舵はどんとぶつつかった。船全体が気持の悪いほど動き震え、同時に大檣帆の下桁が船の内側に揺れ動き、帆が滑車のところで唸って、私に風下の後甲板が見えるようにした。

二人の番人は、なるほど、そこにいた。赤帽の男は、木挺のよ

うに硬ばって、仰向に倒れ、両腕を十字架のように伸ばして、開いた唇の間から歯を見せていた。イズレール・ハンズは、舷牆に倚りかかっている、頤を胸につけ、両手は前へ投げて甲板に投げ出し、顔は、日に焦^やけた表皮の下が、脂蠟燭のように蒼白かった。

しばらくの間は船は悍馬のように跳びはねたり横へ動いたりし、帆は今左舷に風を受けて膨らんだかと思うと、次には右舷からの風で膨らみ、帆の下桁があちこちと、るので、そのため檣^{マスト}がぎいぎいと高い音を立てた。それにまた、時々、舷牆を越えてぱあつと水煙が飛んで来たり、船首をうねり波に猛烈にぶつつけたりした。今はもう海の底へ沈んでしまった、あの手製の一方に偏った革^{コラクル}舟よりも、この艤装した大きな船の方がずっとひどく揺

れるのだった。

スクーナー船が跳び上る度に、赤帽の男はあちこちと滑り動いた。しかし、——見ていて物凄いことには、——彼の姿勢も、齒を露わしたにやにや笑いの表情も、そういう手荒い取扱いを受け、少しも変らないのであった。また、船が跳び上る度に、ハズの方はだんだんに一層からだ体を沈めて甲板へずり下ってゆくように、両脚は絶えず前へ滑り出し、体全体が船尾の方へ傾いてゆくので、その顔は、だんだんと私に見えないようになり、とうとう、片耳と、一方の頬髯の擦り切れた捲毛だけしか、見えなくなってしまうた。

同時に、私は、二人とも周りに、甲板の板にどす黒い血のは

ねかった痕を認めたので、彼等が酔った怒りにまかせて互に殺し合つたのに違いないと思ひかけて来た。

私がこうして眺めて不審に思っている間に、静かな瞬間、船がじつとしている時に、イズレール・ハンズは少し向き直つて、低い呻き声を出しながら、身を振つて私の最初に見た時の位置に戻つた。その呻き声は苦痛と死ぬほどの衰弱とを語つていて、呻く時の顎をだらりと開けた様子は私の心に哀れを催させた。しかし、林檎樽で窃み^{ぬす}聞きした話を思い出すと、憐みの情はすっかりなくなつた。

私は船尾の方へ歩いて行つて、大^{メインマスト}檣のところまで行つた。

「来たよ、ハンズさん。」と私は皮肉に言つた。

彼は大儀そうに眼玉を　　した。が、余りにひどく弱っていて驚きを言い現すことも出来なかった。出来たのは一言「ことブランディーを。」と言うことだけだった。

これはもうぐずぐずしてはならぬと私は思った。で、また甲板を横切つて突然傾いた帆の下桁をくぐり抜けながら、船尾へ走つて行つて、船室昇降口の階段を下つて船室ケビンへ入つた。

そこはほとんど想像も出来ないほどの乱雑な有様になっていた。錠を下した箇所はどこも皆、海図を捜すのに打ち壊して開けてあった。床には泥がべたべたついていて、悪党どもが野営キャンプの周りの沼地を歩いて来た後に、ここに坐つて酒を飲んだり相談をしたりのしたのだ。一面に真白に塗つて、鋤金めつきで玉縁にしてある隔壁に

は、きたない手の痕がついていた。何ダースというたくさんの空^あ饅^{きびん}が、船の揺れ動くのにつれて、隅で一緒にがちやがちや音を立てていた。先生の医書が一冊テーブルの上に開いてあつて、その紙が半分ほども引きちぎつてあつた。煙草の火をつけるのに使ったのだらうと思う。こういう有様の真中に、ランプはまだやはり薄暗い焦茶色のくすぼつた光を投げていた。

私は穴蔵へ入つて行つた。樽はみんななくなつていたし、饅^{びん}の方は実に驚くほど多数が飲み干したり投げ棄てたりしてあつた。確かに、謀叛が始まつて以来、彼等は一人でもかつて素面^{しらふ}でいられるはずがなかつたのだ。

私はそこここと捜し　　って、ブランデーが幾らか残っている

罎を一本見つけたので、ハンズにやることにした。それから自分には、堅パンと、漬けた果物を幾つかと、乾葡萄の大きな房を一つと、チーズを一片見つけ出した。これだけのものを持って甲板へ出て行き、自分の分は舵手コクスンの手には決して届かない、舵の頭の蔭のところに置き、前部の水樽のところまで行つて、水をぐうつと十分に飲んで、それから、ようやく、ハンズにブランデーをやった。

彼はその罎を口から離すまでには一ジル（註七一）は飲んだに違いない。

「ああ、うまかつたな、畜生。こいつがほしかつたんだ！」と彼が言つた。

私はすでに自分の場所に腰を下して食べ始めていた。

「大分怪我したかい？」と私が尋ねた。

彼はぶうぶう言い出した。というよりも、むしろ、吠えたと言った方がいいかも知れない。

「もしあの医者が船にいたら、己^{おれ}あすぐに癒ったろうがな。だが己にやあ運がねえんだ、この通りにな。が、これあ己だけのことさ。そこにいる間拔めはすっかりくたばってやがるぜ、其奴^{そやつ}は。」と彼は言い足して、赤い帽子をかぶった男を指した。「奴はどのみち船乗じゃなかったんだ。ところでお前^{めえ}はどっから来たんだい？」

「うむ、僕はこの船を占領しに来たんだよ、ハンズ君。だから、

追つて何とかお達しがあるまでは、君は僕を船長と思つていてくれ給え。」と私は言つた。

彼は**ずいぶん** にがにが 苦々しい顔をして私を見たが、何とも言わなかつた。幾分か顔の色がよくなつては来たが、まだやはり体の工合がひどく悪いように見え、船ががたんがたん動く度に、やはり向うへのめり、ずり下つていた。

「それはそうと、ハンス君、」と私は言い続けた。「僕はあんな旗を揚げておくことは出来ないよ。だから、失礼だけれど、あれを引下すぜ。あんなものよりはない方がましだ。」

そして、私は、再び帆の下桁をくぐり抜けながら、はたづな 旗索のところへ走つて行き、彼等のいまましい黒い旗を下して、それを

海の中へ抛り投げた。

「国王陛下万歳！」と私は帽子を打ち振りながら言った。「そしてシルヴァー船長はもうおはらい箱だ！」

ハNZは、その間もずっと頤を胸につけながら、鋭くずるそうに私を見つめていた。

「己の考^{かんげ}えじゃあ、」と彼はとうとう言い出した。——「己の考えじゃあな、ホーキNZ船^{せんちよ}長、お前だつて幾らか岸に着きてえんだろ、なあ。で、相談をするとうじやねえか。」

「ああ、よからう、喜んで相談に乗るよ、ハNZ君。言つてみ給え。」と私は言った。そしてまたむしやむしやと食べ出した。

「この男はな、」と彼は、死骸を力なく頤で示しながら、言い始

めた。——「オブライエンって名で、——げびたアイルランド人さ、——この男と己とが、船を戻すつもりで、船に帆を張ったのさ。ところがだ、奴はもう死んじやった、奴はよ、——^{あか}湊みてえに死んじやった。で、だれが一体この船を走らせるかね。己の考えるとこじや、己がお前に教えてやらなきやあ、お前はそんなことの出来る人間じゃねえ。そこでだ、いいかな、おい、お前は己に食物だの飲物だの、それから傷のところを縛る古い肩巾スカーフかハンケチだのを持って来てくれるんだ。いいかい。そうすりや、己はお前に船の動かし方を教えてやろう。それなら何もかも五分五分だろうと思うがな。」

「僕も一つ言いたいことがあるんだがね。」と私が言った。「僕

はキット船長の碇泊所へは戻らない。北浦へ入って行つて、あすこで船をそうつと浜に乗り上げるつもりなんだ。」

「なるほど、そりやそうだろ。」と彼は叫んだ。「なあに、己だつてそんなにひでえ阿呆でもねえ、つまりはな。わかつてるよ。わからねえものかい？ 己は自分の賽を投げてみてだ、負けたんさ。そして勝つてるのはお前なんだ。北浦だと？ まあ、仕方がねえや。ねえとも！ お前の手伝いをしてこの船を仕置渡止場までも してやろうよ、畜生！ してやるとも。」

さて、この言葉には幾分条理の通つたところがあるように、私には思われた。それで、私たちは即座に相談を纏めた。三分もたつうちに、私はヒスパニオーラ号を追風で易々と宝島の岸に沿う

て走らせていて、心の中には、正午前に北の岬を　　つて、さらに高潮になる前に北浦まで間切つて（註七二）行き、高潮になった時に船を安全に浜に乗り上げて、潮が退ひいて上陸出来るようになるまで待とう、という楽しい希望を抱いていた。

それから私は舵柄を括りつけて、下へ降り、自分の衣類箱のところへ行つて、母に貰つた柔かい絹のハンケチを取つて来た。そのハンケチで、私も手伝つて、ハNZは腿に受けた血の出ている大きな突つききず傷を繃帯し、そして、少しばかり食べ、ブランデーをまた一口二口飲むと、彼は目に見えて元気づき、前よりはまっすぐにも坐り、大きな声ではつきりも口を利き、すべての点で別人になったように見えた。

風は素晴らしく私たちに役立ってくれた。船は追風を受けて鳥のようにすすつと走り、島の岸は閃くように過ぎ去り、眺望は一分毎に変つて行つた。間もなく高台を通り過ぎ、矮生の松が疎にちらほらと生えている低い砂地のそばをどんどん進み、やがてそこもまた通り越して、島の北の端をなしている岩山の角を　　つてしまつた。

私は自分の新しい司令者たる地位に大いに得意だつたし、日照つてゐる晴れわたつた天候とこのように刻々に違つてゆく海岸の展望とで愉快だつた。今はもう水もうまい食物もたつぷりあるし、柵壁を脱走したことでこれまでひどく私を責めていた良心も、自分がこの大きな獲物を手に入れたために静められた。だから、

甲板のあちこちと私の後を追うて嘲弄するように見ている舵手の眼と、彼の顔に絶えず浮んでいる変な微笑さえなかったなら、私にはその上望むものは何一つなかったろうと思う。その微笑は、何か苦痛と衰弱とのようなものを含む微笑——^{やつ}寔れた老人の微笑だった。が、その他に、私の働いているのを狡猾にじろじろじろと見守っている彼の表情には、ちよつぴり嘲弄のようなものが、どこか陰險なところが、あつたのだ。

第二十六章 イズレール・ハンズ

風は、望み通りに吹いてくれて、今度は西風に変った。それで

私たちはそれだけ易々と島の北東の角（註七三）から北浦の入口まで帆走することが出来た。ただ、投錨することは出来ないし、潮がもつと十分に満ちて来るまでは船を浜に乗り上げる訳にはゆかなかつたので、私たちは無聊に苦しんだ。舵手コクスンは停船の仕方を私に教えてくれた。私はずいぶん何度もやつてみてようやくうまくいった。それから二人とも黙つたまま坐つて、また食事をした。

「船長せんちよ、」と彼はやがて、前と同じあの不愉快な微笑を浮べながら、言い出した。「ここに己の船仲間のオブライエンがいるがねえ。お前こいつを船から抛ほうり出してくれちゃどうだい。己は大て概えげえはものを気にする男じゃねえし、こいつをばらしたことなん

ぞ何とも思つてやしねえ。だが、こうしておいても別に飾りにもなるめえと思うが、え、どうだね？」

「僕はそんなに力がないし、それにそういう仕事は嫌いだ。その男がそこにくろがつていたつて、僕あ構わないよ。」と私が言つた。

「この船は縁起の悪い船さ、——このヒスパニオーラ号はね、ジム。」と彼は眼をしばたたきながら話し続けた。「このヒスパニオーラ号じゃずいぶたくさん人が殺されたよ、——お前や己がブルストルで乗り込んでからこつち、可哀^{かええ}そうに死んじやつた水夫はとてもたくさんものだ。己あこんな不運な目にや遭つたことがねえ。ねえとも。それに、このオブライエンの奴もいるが、——

—こいつも死んでる。そうだらな？　ところで、己あ学問がねえが、お前は読み書きも勘定も出来る子だ。で、ぶちまけて言うが、お前は、死んだ人間つてものは死んでそれっきりのものと思うか、それとも、また生き返^{けえ}つて来るものと思うかね？」

「人間の体は殺すことが出来るがね、ハンズ君、魂は殺せないものだよ。君だつてそんなことぐらいはちゃんと知つてるはずだ。」と私が答えた。「そこにいるオブライエンは今じや別の世界にいるんだ。そしてそこから多分僕たちを見ているだろうよ。」

「ああ！」と彼は言つた。「やれやれ、そいつあいけねえ、——そいじや人を殺すなんて暇潰しみてえなもんだなあ。だが、己のこれまでの経験じやあ、魂なんてものは大^{てえ}したもんじやねえ。己

は魂つて奴を相手に一か八かやってみてやろうよ、ジム。ところで、お前はもう存分にしゃべったんだから、一つ頼みがあるんだ。お前、あの船室^{ケビン}へ降りて行って、己にあれを——ええと、あのう——えい、畜生！ 名が思い出せねえぞ」うん、そうそう、お前、葡萄酒を——^{ひとびん}罎、持って来てくんねえか、ジム。このブランディ——は己にや強過ぎて頭へ来るんでね。」

ところで、舵手のこうして口籠ったのはちよつと不自然に思われた。それに、ブランディよりも葡萄酒の方がよいと言うのに至つては、私は全然ほんとうにしなかった。話全体が口実なのだ。彼は私に甲板から去らせたものだ。——それだけは明かだった。けれども、どういう目的でそうするのか、私にはどうしても想像

がつかなかった。彼の眼は決して私の眼と会わなかった。

その眼は、空を見上げたり、死んでいるオブライエンをちらりと見たり、あちこちと、上へ下へと、絶えずきよろきよろしていた。その間も始終、彼は微笑し、ひどく気が咎めて極^{きま}りの悪いような様子で舌をべろべろ出しているので、彼が何かを企^{たく}らんでい
るのだということは小さな子供にでもわかったろう。しかし、私は、自分の有利な点がどこにあるかもわかっていたし、こんなひどく愚鈍な奴には自分の疑念を最後まで容易に隠しておくことが出来るとわかっていたので、すぐに返事をしてやった。

「葡萄酒かい？」と私は言った。「その方がずっといいとも。白がいいか、それとも赤がいいかれ？」

「そうさな、己にやどつちだつて同じだよ、兄弟^{きょうでえ}。」と彼は

答えた。「強くつて、たつぷりありせえすりや、そんなこたあ構うもんか。」

「よしよし。」と私は答えた。「ポート葡萄酒を持つて来てあげよう、ハンズ君。だが、探さなくちやならんだろうよ。」

そう言つて、私は出来るだけ大きな音を立てて船室昇降階段を駆け降りると、靴を脱いで、円材の出ている廊下をそつと走つて行き、前甲板^{フオークスル}下水夫部屋の梯子を上つて、船首の昇降口から頭をひよいと出した。私がそんなところにいようとは彼が思いもやらぬということは私にはわかつていた。しかしそれでも私は出来る限りの用心をした。すると、確かに、私の最悪の疑いがまつたく

ほんとうであるということがわかったのであった。

彼は両手と両膝とで自分のいた場所から体を上げていた。そして、動く度に脚がかなりぴりぴり痛むようではあったが、——呻き声を抑え隠すのが私に聞き取れたから、——それでも、かなりの速さで甲板を横切つて身を曳きずつて行つた。半分ほどのうちに彼は左舷の排水孔のところへ行つて、一卷きの綱の中から、柄までも血塗れになつてゐる長いナイフ、というよりもむしろ短剣を取り出した。下顎を突き出しながら、ちよつとの間それを見て、^{きつさき}切先を手にあてて試^{ため}してから、ジャケツの懷の中へ急いで隠すと、また元の場所へ戻つて舷牆^{もた}に凭れかかった。

これだけわかれば十分だった。イズレールは動き　　ることが出

来る。彼は今では武器を持っている。で、もし私を遠ざけるために彼がさつきあれほど骨折ったのなら、私を殺すつもりなのだということは明かだった。その後に彼がどうするつもりなのかということは、——北浦からあの湿地の間にある野^{キャンプ}営までまっすぐに島を横切って這って行こうとするつもりなのか、それとも、大砲を発射して、自分の方の仲間の者が先に助けに来てくれるのを頼みにするつもりなのかということ、無論私にはわからないことだった。

しかしながら、私は彼を一つの点で信頼することが出来ると確信した。というのは、その点で私たちの利害が一致していたからだ。それはこのスクーター船の処置ということである。私たちは

二人とも、船をどこかの避難所へ十分安全に乗り上げさせて、時機の来た時には、なるべく骨も折らず危険もなしに再び海へ出られるようにしておきたい、と望んでいるのだ。それで、それをやつてしまふまでは自分の命は確かに助けておかれるだろうと私は考えた。

このように心の中でいろいろと考えている間も、私は体を遊ばせてはいなかった。そつと船室へ戻つて、また靴を穿き、手当り次第に葡萄酒の罎びんを一本掴むと、それを申訳の理由に持つて、再び甲板に出て行つた。

ハンズは私が降りて行つた時のようにしていて、すつかり体を丸めて、光にも堪えられないほど衰弱しているとでもいった風に

眼^{まぶた}瞼を伏せていた。しかし、私が来ると顔を上げ、よく慣れた手付で鑊の頸を叩き折り、「運がいいように！」という彼の氣に入りの乾杯の言葉を言いながら、ぐうつと飲んだ。それからしばらくはじつとしていたが、今度は嚙煙草を一本ひっぱり出して、私に一片切ってくれと頼んだ。

「そいつを一片^{きれ}切ってくんねえ。己はナイフを持っていねえから。よし持ってたつて、切るだけの力もねえ。ああ、ジム、ジム、己あやり損ったようだよ！ 一片切ってくれ。それがどうやらこの世の嚙^{おき}み納めらしいよ、兄弟。己あもう墓場へ行くんだ、きつとな。」

「よし、」と私が言った。「煙草を切つてあげよう。だが、もし

僕が君で、自分がそんなに工合が悪いと思ったら、キリスト教徒らしくお祈りをするがねえ。」

「なぜだい？」と彼は言った。「え、なぜだか言ってくれよ。」

「なぜだつて？」と私は叫んだ。「君はつい今しがた死人のことを僕に尋ねたじゃないか。君は自分の信用を破ったんだ。君は罪を犯したり偽り^{いつわ}を言ったり人の血を流したりして暮して来たんだ。今だつて君の殺した人間が君の足許にころがつている。それなのに君はなぜって訊^きくんだね！ 神様のお慈悲をお願いするためだよ、ハンズ君、そのためさ。」

私は、彼が血塗れの短剣をポケットの中に隠していて、それで私を殺してしまおうと企^くらんでいることを思うと、思わず少し熱

して話した。彼の方は、葡萄酒をぐつと飲むと、ひどく真面目く
さつて口を利き出した。

「三十年も己は方々の海をわたり　　つて、その間にやいい目にも
悪い目にも遭えば、もつといい目にももつと悪い目にも遭つたし、
いい天気にも悪い天気にも遭つたし、食物がなくなつたこともあ
れば、斬り合いをやつたこともあるし、その他^{ほか}いろんな目に遭つ
たよ。ところでね、実際のところ、己あいい事をしていい目に遭
つたつてこたあまだ一度だつてねえ。先に打つてかかる奴が己あ
好きだ。死人^{しびと}は咬みつかねえ。これが己^{かんげ}の考えといつたところさ、
——アーメン、まあそれでいいや。時にねえ、おい、」と彼は、
急に口調を変えて、言い足した。「こんな馬鹿^{ばなし}つ話はこれつくれ

えでたくさんだ。潮がもうずいぶんさして来たぜ。さあ、ホーキ
ンズ船長、己の指図する通りにやるんだ。そうすりや船はすぐに
走り出して片附いちまおうぜ。」

すっかりで二マイル足らず船を走らせればよかったのだ。けれ
どもここの航行はなかなか面倒だった。この北の碇泊所の入口は
狭くて浅い上に、東と西とに陸があるので、スクーナー船を入れ
るにはよほどうまく操縦しなければならなかった。が、私は上手
な機敏な助手だったと思うし、ハンズは優れた水先案内人^{パイロット}だつた
と信ずる。というのは、船は、見るも気持のよいくらい正確に手
際よく、代る代る針路を変えて、岸を掠めながら、ひらりひらり
と身を交すようにして入って行ったからである。

岬を通り過ぎるや否や、陸地が私たちのぐるりに迫つて来た。

北浦の岸は南の碇泊所の岸と同様に樹木がこんもりと生い茂つていた。が湾内はもつと狭くて長く、広い河口のようで、實際またそうなのであつた。私たちの真正面の、南の瑞に、もうぼろぼろに腐朽してしまつて見る影もない船が一艘見えた。もとは三本檣マストの大きな船であつたのだが、ずいぶん永い間雨風あめかぜに曝されていたので、ぽたぽた水を滴らしている海藻が大きな蜘蛛の巣のように周囲にぶら下つていたし、甲板には海岸に生える灌木が根をおろしていて、今ちようど花が一杯咲き乱れていた。それは実に傷いたましい光景であつたが、しかしまたこの碇泊所が穏かなところであることを私たちに示していた。

「おい、あそこを見ろよ。」とハNZが言った。「船を乗り上げるにや持つて来いの処ところがあらあ。細かな平たい砂地で、ちつとの風もねえし、ぐるりにやあずつと樹があるし、あの古船ふるぶねの上はや庭みてえに花が咲いてるぜ。」

「で、乗り上げたら、また船を出すにはどうするんだろう？」と私は尋ねた。

「なあに、それあこうさ。」と彼が答えた。「干潮ひきしおの時に綱を持つてあつちの向側の岸へ行くんだ。あのでつけえ松の樹のどれか一つにその綱をぐるりと巻く。それからそいつを持つて帰けえつて揚錨いかりまき絞盤に巻いて、潮を待つてるんだ。満潮みちしおになったら、みんなでその綱をひっぱれば、船はひとりで出るみてえにすうつと出

るよ。さあさあ、坊や、用意するんだ。船着場が近いのに、船足が速過ぎるぞ。少し面舵、——そうだ、——ようそろ（註七四）
、——面舵、——少し取舵、——ようそろ、——ようそろ！」
そんな風に彼は命令を下すと、私は息もつかずにそれに従った。そのうちに、突然、彼は「さあ、おい、開け！」と叫んだ。そこで私は舵輪をぐつと風上に操った。するとヒスパニオーラ号は急速にぐるりと　　って、低い樹の茂った岸に船首を向けて走り続けた。

こういう操縦に興奮していたために、それまでは私が絶えずいぶん油断なく舵手を警戒していたのが、幾分お留守になっていた。その時でさえ、私は、船が水底に触れるのを今か今かと待ち

ながら、やはり非常に面白がっていたので、自分の頭上に懸っている危難をすっかり忘れてしまい、右舷の舷牆の上から首を伸ばしながら、船首の前に広く拡がっている漣を見つめていたのである。それで、急に何だか不安になって、頭を振り向けなかったなら、私はひとたまりもなく殺されてしまったことであろう。恐らく、靴か何かのきしむ音が聞えたのか、彼の影の動くのが眼尻で見えたのかも知れない。それとも、恐らく、猫のような本能のためであつたかも知れない。が、とにかく、私が振り返った時には、果して、ハンズが、右手に例の短剣を握って、私の方へすでに半分も近づいていたのであつた。

私たちは眼と眼とがぶつかった時には二人とも大きな声を立て

て叫んだに違いない。しかし、私の声は恐怖の金切声であつたが、彼のは突つかかつて来る牡牛のような憤怒の唸り声だつた。それと同じ瞬間に彼は前へ躍りかかり、私は船首の方へ横さまに跳んだ。その時に、私は掴んでいた舵柄を放すと、それが風下の方へ烈しく跳ねた。このために私は命が助かったのだと思う。という訳は、その舵柄がハンズの胸にあたつて、彼はしばらくの間ぴたりと止つたからである。

彼が立直れないうちに、私は彼に追いつめられていた隅っこから無事に出て、甲板中をあちこち逃げ　　れるようになった。^{メイン}大

^{マスト}檣のすぐ前で立ち止つて、ポケットからピストルをひき出すと、彼がもう向を変えてまっすぐに私をまた追つて来ていたけれども、

冷静に狙いを定めて、引金を引いた。撃鉄はかちつと落ちたが、火花も出なければ音もなかった。点火薬が海水のために役に立たなくなっていたのだ。私は自分の不注意がいまいしかった。

なぜもつとずっと前に自分の唯一の武器に火薬を入れ換え弾丸を籠め換えておかなかったのか？ それをしておいたなら、今のように、この屠殺者の前に逃げ　　ってばかりいる羊のような目に遭わなかったらうに？

彼は負傷してはいたが、素速く動くことは驚くべきほどで、彼の^{しつが}白髪雑りの髪の毛は顔に振りかかり、その顔は焦心と憤怒とで英国商船旗のように真赤だった。私は自分のもう一挺の方のピストルを試してみる暇もなかったし、また、実際、役に立たないに

きまっていると思ったので、試してみようという気持ちも大しかなかった。ただ、一つのことだけは私にははつきりわかつていた。私はただ彼の前から逃げるだけではない。そんなことをしていれば、彼は、ちよつと前に私をもう少しで船尾へ追い込もうとしたように、じきにまた船首へ追い込んでしまうだろう。そうして掴まったが最後、あの九インチか十インチもある血塗れの短剣でぐざりとやられて、それがこの世の最後となるだろう。私は、かなりの大きさの大櫓に掌をあてて、全神経を張りつめて待っていた。

私が逃げ　　るつもりだということを見て取ると、彼も立ち止まった。そしてしばらくの間は、彼の方は剣で打ってかかる真似をし、

私の方はまたそれに対応する動作をしていた。それはまるで私が故郷の黒丘^{ブラック・ヒル}入江の岩のあたりでよくやったような遊び事であつた。だが前には、勿論、今のように胸をひどくどきどきさせてやったことは一度もなかった。それでも、やはり、それは子供の遊び事だつた。そして、私はこんな腿に負傷をしている大分年とつた水夫なんぞに負けるものかと思つた。実際、私は大いに元気が出かかつていたので、この事件の結末がどうなるかということとを二三ちらちらつと考えてみる事が出来た。そして、自分がこれを永びかせることが出来るということは確かにわかつたが、また、結局逃げおおせてしまう見込がないということもわかつた。さて、こういう有様になつているうちに、突然ヒスパニオーラ

号は乗り上げて、ぐらぐらとし、ちよつとの間砂地に攔坐したか
と思うと、どつと左舷へ傾いて、甲板が四十五度の角度になり、
一桶ほどの水が排水孔の中へはね込み、甲板と舷牆との間に水溜
りのようになつて溜つた。

私たちは二人ともその途端にひっくり返り、二人ともほとんど
一緒になつて排水孔の中へ転がり込んだ。死んでいる赤帽の男も、
両腕をやはり拡げたまま、硬ばつて私たちの後から転げて来た。

私たちは實際ごく近くなつていて、私の頭が舵手の脚にごつんと
ぶつつかつて私の齒が音を立てたくらいであつた。そうして打ち
あつたけれども、再び立ち上つたのは私の方が先であつた。

なぜなら、ハンズは死体と絡み合っていたからである。このよ

うに船が急に傾いたために甲板は走り　　る場所ではなくなつてし

まった。私は何か新たな逃げる方法を見つけなければならなかつた。それもすぐ見つけなければならなかつた。敵は私に触れんばかりのところにいるからだ。とつさに私は後ミズンマストの横静索（註七五）に跳びついて、索を手繰りながらずんずんと攀よじ登り、檣頭横桁に腰を下すまでは息もつかなくかつた。

私はそうして機敏にやったために助かつたのだ。私が上へ逃げ上つてゐる時に、短剣が私の下半フートとないところに突き刺さつたのである。そして、イズレール・ハンズが口をぽかんと開け顔を私の方へ振り上げながら突つ立っている有様は、まったく驚きと失望との彫像のようだつた。

私はちよつと暇が出来たので、時を移さず自分のピストルの点火薬を換え、それから、一挺がいつでも使えるようになる、念に念を入れるために、もう一挺の方の弾薬を取り出して、それも初めから新たに装填し直しにかかった。

私がこういう事を始めたのでハンズはびっくり仰天した。彼には形勢が彼の方に悪くなっていることがわかりかけた。そして、どうしようかと明かに躊躇した後、彼もまた横静索に大儀そうに掴まって、短剣を齒で啣^{くわ}えながら、ゆっくりと苦しうに登り始めた。負傷した足をひきずり上げるには、非常に時間もかかり、幾度も呻き声を出さねばならなかった。それで、彼が三分の一より上へさほど上らないうちに、私は悠々と自分の準備をすませて

しまった。それから、どちらの手にもピストルを持って、彼に話しかけた。

「ハンス君、」と私は言った。「もう一步でも上つてみ給え。君の脳天を撃ち抜くよ！ 死人は咬みつかないはずだね。」と言いつ足して、私はくつくつと笑った。

彼はすぐさま止った。その顔がぴりぴり動いているので、何かを考えようとしているのだということが、私にはわかった。ところがその考え方がいかにものろのろしていて骨折っているのです、私は、今の安全な立場にいて、声を立てて笑った。とうとう、彼は三度唾を嚙みこんでから、口を利き出したが、顔にはやはり極度に困りきった同じ表情を浮べていた。口を利くために口から短

剣を取らねばならなかったが、しかしその他には彼は少しも動かず^ずにいた。

「ジム、」と彼は言った。「己たちあどうも料簡^{りようけん}がいけねえようだ、お前も己もな。で、仲直りしなけりやなるめえ。船があらんなよろけせえしなけれあ、己はお前をつかめえたんだがな。だが己にやあ運がねえんだ、まったくよ。己は降参しなくちやならねえようだ。船長をしたこともある人間が、お前みてえな小僧つ子に降参するなあ、辛^{つれ}えこったよ。なあ、ジム。」私は彼の言葉^{ことば}を面白がつて聞きとれ、微笑し続けて、飼場の雄鶏のように得意になつていた。と、はつと思う間に、彼の右手が肩の後へ行つた。何か^{なにか}が空気を切つて矢のようにぴゅうと飛んで来た。私は

打たれた感じがしたかと思うと次には烈しい痛みを感じ、肩のところを櫓に突き刺された。その瞬間の怖しい痛みと驚きとで——それは自分の意思でしたのだとは私はほとんど言えないし、意識した狙いはなしにやったのだと確信するが——私のピストルが二挺とも発射して、二挺とも私の手から離れた。落ちたのはそのピストルだけではなかった。息の詰ったような叫び声と共に、舵手は横静索を掴んでいる手を放して、頭を先にして海の中へ落ち込んだのである。

第二十七章 「八銀貨」

船が傾いているために、^{マスト}檣はずっと遠く水の上へ突き出ていて、

檣頭横桁の私の棲^{とまりぎ}木の下には、湾の水面の他に何もなかった。

ハNZはさほど上まで上つていなかったもので、従つて私よりは船の近くにおいて、私と舷牆との間に落ちた。彼は一度だけ白波と血との石^{シヤボン}鹼泡のようになつた水面へ浮び上つたが、それからまた沈んで、それっきり浮き上らなかつた。水が静まると、船の舷側の影の、綺麗な、ぴかぴかする砂の上に、彼が体をちぢこめて横つてゐるのが見えた。一二尾の魚が彼の体の前をすいすいと通つて行つた。時々、水が震えると、彼が起き上ろうとでもするやうに少し動いたように見えた。しかし、それでも、彼は撃たれた上に溺れたのだから、すっかり死んでゐるのだ。私を殺そうとした

その場所で魚の餌食になることになったのだ。

そのことがはつきりすると、私は急に気持が悪くなり、気が遠くなり、恐しくなり出して来た。熱い血が背中と胸とにたらたと流れていた。短剣が私の肩を檣に突き刺している箇所は、熱した鉄のように焼けつくように思われた。だが、私を苦しめたのは、こういう実際の痛みはさほどでもなかった。それなら自分には声も立てずに我慢が出来るように思われたからだ。私を悩ませたのは、檣頭横桁からあの静かな緑色をした水の中の舵コクスン手の死体のそばへ落ちはしまいかという、心に抱いている恐怖であった。

私は爪がずきずきするまで両手でしがみつき、危険を見まいとでもするように眼を閉じた。すると次第に心が落着いて来て、動

悸もいつもの速さに静まり、再び我に返った。

最初に思ったのは短剣を抜き取ろうということだった。が、余りに強く突き刺さっていたのか、それとも怖くて出来なかったのか、とにかく私は烈しく身震いをして止めてしまった。ところが、まったく奇態なことには、そうして身震いしたためにその事が出来てしまった。ナイフは、事実、もう少しのことであつたく外れるところだったのだ。それは皮膚をほんのちよつとだけ刺していたので、身震いするとそこが裂き取れたのである。もつとも、血は前よりは盛んに流れ出たが、私は再び自分の自由になり、ただ上衣とシャツとを襦に打ちつけられているだけとなつた。

この上衣とシャツとは急に体をぐいと動かして切り取り、それ

から右舷の横静索を伝って再び甲板に戻った。私は心弱くなっていたので、イズレールがついさつきそこから落ちた、水の上へ差し懸っている左舷の横静索を、再び伝って降りる気にはどうしてもなれなかったのだ。

私は船室へ下りて行って、自分の傷に出来るだけのことをした。その傷はずいぶん痛んだし、まだどんどん出血していた。しかし深い傷でもなければ危険な傷でもなく、また腕を動かしてもひどく苦痛だということもなかった。それから私はあたりを見　し、船が今では或る意味で自分のものだったから、その船の最後の乗客をも船から掃い出してやろうと思ひ立った。――例の死人の才ブライエンである。

彼は、前に言ったように舷牆に突き当って、そこで、氣味の悪い不^ぶ恰^{かつ}好^{こう}な人形のようにころがっていた。なるほど人間の大きさはしているが、人間らしい色や人間らしい綺麗さとは何と違っていることだろう！ その場所にいてくれたので、私は容易に彼を始末することが出来た。それに、私は悲惨な冒険に慣れたために死人に対する恐怖がほとんどすっかりなくなっていたので、糠^{ぬか}の囊か何かのように彼の腰を掴んで、ぐつと一度持ち上げると、船の外へ投げ落した。彼はどぶんと音を立てて水の中へ沈んで行った。赤い帽子は取れて、水面に浮んだ。そしてはねかった水が静まると、彼とイズレールとが並んで横っているのが見えて、二人とも水が揺れるにつれてゆらゆらしていた。オブライエンは、

まだごく若い男なのに、頭がひどく禿げていた。その禿頭を、彼は自分を殺した人間の膝にのつけて横つていた。そして敏捷に動く魚がその二人の上をあちこちと泳いでいた。

私は今では船にただ一人となつた。潮はつい今変つたばかりであつた。太陽はやがて沈もうとしていて、すでに西岸の松の樹の影がちやうど碇泊所のあたりに射^さしかけて、甲板の上に模様をなして落ちていた。夕風が吹き起つていて、それは東にある峯の二つある山のためによほど受け止められてはいたけれども、それでも索具は静かに少し歌うように鳴り出していたし、垂れていた、帆はあちこちとばたばたし出していた。

私は船が危険になつたのがわかりかけた。で、斜^ジ檣^ブ帆を急いで

下して甲板へばたばた落した。が大檣帆メインスルの方はそれよりは厄介だった。もちろん、スクーナー船が傾いた時に、帆の下桁が舷外へぐらりと　　って、帆桁帽と一二フィートの帆布とが水の中へ入ってさえた。このためになおさら危険だと私は思った。それでも、非常に強く張りつめているので手を出すのが恐いような気もした。とうとう、私はナイフを取り出して揚索を切った。すると斜桁ピーク上外端が直ちにぼったりと落ちて、弛んだ帆布の大きな腹部が水の上に拡がって浮いた。そして、どうひっぽってみても下さげなわ索は動かすことが出来なかったの「私に出来たのはそれだけだった。それ以上のことでは、ヒスパニオーラ号は、私自身と同様、運に頼るより他はなかった。

この時分には碇泊所全体はすっかり影になつてしまつていたが、——落陽の最後の光線が、森の隙間から射して来て、あの破船を覆うている花に、宝石のようにきらきらと輝いたのを、私は今も忘れられない。もう寒くなりかけて来た。潮は急速に外海の方へ流れて行つていて、スクーナー船はますます傾いて船梁が垂直になるほどになつた。

私は船首の方へ這つて行つて下を覗いた。よほど浅いようだったので、まさかの時の用心にあの切れている錨索に両手で掴まつて、そうつと船の外へ体を下して行つた。水は私の腰までもなかつた。砂は固くて、漣の痕が一面についていた。それで、大檣帆を湾の水面に広く曳きずつて、傾いているヒスパニオーラ号を後

に残して、私は大元気で岸まで徒渉した。ほとんど同時に太陽はまったく沈み、風は揺れ動いている松林の間で薄暮の中を低くひゅうひゅうと鳴っていた。

ともかく、とうとう、私は海から上ったし、また空手^{からて}で戻つて来たのでもなかった。あそこに、ヒスパニオーラ号が、とうとう海賊どもの手からすっかり離れて、いつでも味方の人々を乗せて再び海に出られるようになっていたのだ。私は何よりも柵壁へ帰りついて自分の手柄話をしたくてたまらなかった。あるいは私は自分のやった隠れ遊びについてちよつとぐらい叱られるかも知れない。がヒスパニオーラ号を取戻したことはそういう文句をすっかり決着させてしまうだけの答になるのだ。そして私はスモレッツ

ト船長でも私がただ暇潰しをしていたのではないと言ってくれるだろうと思った。

そんなことを思いながら、素敵な元気で、丸太小屋の味方の人たちの方へ戻りかけた。ふと、キツド船長の碇泊所へ注いでいる川の中の一番東にあるのが自分の左手にある二つ峯の山から流れ出ていることを思い出したので、川幅が狭い間に流れを渡っておいこうと思つて、その方向へ進路を曲げた。森はかなり開けていて、低い方の山嘴に沿うて行くと、やがてその山の角を　　つてしまい、それから間もなくその川を脛の半ばまで水に入つて涉つた。

涉つてしまうと、私があの置き去り人のベン・ガンに出会つた処の近くへ来た。それで眼を四方へ配りながら、一層用心して歩い

た。もうほとんど薄暗くなっていて、私が二つの峯の間の割目が開けている処まで来ると、一条のゆらゆらした火の光が空に映えているのに気がついた。そこにはあの島の男が盛んに火を燃して夕食の料理をしているのだろう、と私は考えた。しかし、どうして彼がそんなに不注意に自分の居所を示しているのかと、心の中で不審に思った。というのは、あの光が私に見えるくらいだから、海岸の沼地に野営しているシルヴァーの眼に入らない訳がなかったからである。

だんだんと夜はますます暗くなって来た。私はただ自分の目指す方向へめちやくちやに進んで行くだけだった。私の背後の二つ峯の山も、右手の遠眼鏡山も、だんだんと微かにぼんやりして来

た。星も稀で光が薄かった。私は、自分のさまよい歩いている低地で、絶えず藪の中で躓^{つまず}いたり砂の凹穴の中へ転がり込んだりした。

急に何だかあたりが明るくなった。見上げると、淡い微かな月光が遠眼鏡山の頂上に射していた。それから間もなく、何か幅の広い銀色のものが樹々の後^{うしろ}に下へ低く動いてゆくのが見え、月が昇ったことがわかった。

これを助けにして、残りの道^{みちのり}程を急いで進み、時には歩いたり、時には走ったりして、気をあせりながら柵壁へ近づいて行つた。それでも、柵壁の前にある森の中へ入りかかった時には、さすがに歩みを弛めて少しは気をつけて進むだけの用心はした。誤

って自分の味方の人に撃ち倒されては、私の冒険も情ない結末となってしまうからだ。

月はだんだんと高く昇った。その光は森の幾分開けた箇所を通してここかしこに広く注ぎ始めた。ところが、私の真正面に、それとは違った色の光が樹立の間に見えて来た。それは赤い熱そうな光で、時々少し暗くなり、——ちようど、くすぶっている篝火の余燼のようであつた。

どうしても私にはそれが何なのかわからなかつた。

とうとう私は開拓地の縁のところまで下つて来た。その西端はすでに月光を浴びていた。その他の処は、丸太小屋も、まだ黒い影の中にあつて、長い銀色の光線で市松模様になっていた。小

屋の両側には、大きな焚火が燃え尽きて明るい余燼となっていて、赤い強い反射光を放ち、柔かな淡い月光とひどく対照していた。

ひとかげ
人影一つも動かず、風の音の他には物音一つしなかった。

私は、心の中で非常に不審に思いながら、また恐らく少しは怖くも思いながら、立ち止った。大きな火を焚くということは味方の習慣ではなかった。実際、私たちは、船長の命令で、薪には幾分けちなくらいであったのだ。それで、自分のいない間に何か悪いことになったのではないかと気がかりになり出した。

私は絶えず影にいるようにして東側をこつそりと　　つてゆき、闇の一番濃い、都合のよい処で、防柵を越えた。

念に念を入れて、私は四つん這いになり、何の音も立てずに小

屋の隅の方へそろそろと進んだ。もつと近づくと、私の心は急に大いに気楽になった。^{いびき} 鼾の声というものは本来は気持のよいものではないし、他の場合には私はそれに苦情を言ったことも段々あったが、この時だけは、味方の人たちが眠りながら一緒に大きく安らかに鼾をかいているのを聞くと、音楽を聞くような気がした。海上で当直夜番の叫ぶ声、あの美しい「変りなあし。」という声でも、これ以上に心強く私の耳に響いたことはなかった。

その間にも、一つのことだけは疑いがなかった。あの人たちの夜番の仕方が非常に悪いということである。もし今こうして忍び寄って来ているのがシルヴァーと彼の一味の者であつたなら、一人だつて夜明^{よあけ}の光を見られまい。それというのも船長が負傷して

いるからのことだ、と私は思った。そして、こうして当番に就く者も少いほどの危険な状態に皆を残して出て来たことに対して、私はまた烈しく自分を責めた。

この時分には私は戸口のところまで行つて立ち上つていた。内はただ真暗なので、眼では何一つ見分けることが出来なかった。音の方は、一樣な単調な鼾の声と、時々、私にはどうしてもわからぬ、ばたばたしたり、こつこつしたりする、小さな音とが聞えた。

両腕を前へ差し出ししながら私は落着いて入つて行つた。私は自分の場所に寝ていて、朝になって皆が私を見て驚く顔を見てやろう。（そう思って、私は声を立てずに含み笑いをした。）

私の足が何か蹴ると動くものにぶつかった。——それは眠っている人の脚だった。その男は寝返りをうって唸ったが、目は覺さなかった。

と、その時、突然、闇の中から鋭い声があった。

「八銀貨！　八銀貨！　八銀貨！　八銀貨！　八銀貨！」と小さなひきうす碓臼の　　る音のように切間もなく変化もなしに続けた。

シルヴァーの緑色の鸚鵡おうむのプリント船長だ！　こつこつと木の皮をつついてゐるのが聞えたのは、その鳥だったのだ。どの人間よりもよく夜番をして、こうしてそのうるさい繰返し文句で私の来たことを知らせたのは、その鳥だったのだ。

私は氣を取直すだけの暇もなかった。鸚鵡の鋭い速い声で、眠

つていた人々は目を覚して跳び起きた。そして、力強い罵り言葉と共に、シルヴァーの声が叫んだ。――

「だれだ？」

私は振り向いて逃げようとしたが、一人の人に猛烈にぶつつかって跳ね返り、また走り出すと今度は別の男の腕の中へ跳び込んでしまった。その男は私を掴んでしつかりと抱きすくめた。

「^{たいまつ}松明を持って来い、デイツク。」私がそうして確実に捕えられた時にシルヴァーが言った。

すると、一人の男が丸太小屋から出て行って、やがて火のついている^{やけぎ}焼木を持って戻って来た。

第六篇 シルヴァー船長

第二十八章 敵の宿営で

松明^{たいまつ}の赤い光が丸太小屋の内部をぱつと照すと、私の懸念していた中でも一番悪いことが起っているのがわかった。海賊どもが小屋も食糧も占領していた。前のように、コニヤツクの樽もあれば、豚肉やパンもあった。そして、私の恐怖を十倍にも増したことはない、捕虜の影もなかった。私は味方の人たちが皆殺されてしまったのだと判断するより他^{ほか}はなかった。そして、自分もそこ

にいて皆と一緒に死ななかつたことを思うと、非常に心苦しかった。

そこにはみんな海賊が六人いた。他の奴らは生き残ってはいなかつたのだ。六人の中の五人までは立っていて、酔って寝入ったばかりのところを不意に起されたので、赤い腫れぼったい顔をしていた。六人目の者は肱^{ひじ}をついて体^{からだ}を起しているだけだった。彼は死人のように蒼い顔をしていて、頭に巻いている血のにじんだ繃帯は、彼が近頃負傷したのであって、しかもつい先頃手当をしたのだということを語っていた。私は、あの大攻撃の時に撃たれて森の中へ逃げ戻った男がいたことを思い出し、こいつがその男だということを疑わなかつた。

鸚鵡おうむはのっぽのジョンの肩にとまって、羽毛を嘴で整えていた。

ジョン自身も、私のいつも見慣れているよりは幾らか蒼ざめていたし、もつといかつい顔をしていると、私は思った。彼はまだ、例の談判にやって来た時の上等な広幅羅紗の一着を着ていたが、それは、泥土でよごれたり、森の鋭い茨で裂けたりして、ひどく傷いたんでいた。

「ふん、そうか、」と彼は言った。「こいつあジム・ホーキンスだな、畜生！　ちよいとお立寄り、つてどこかね、え？　よしよし、まあ、友達らしく扱ってやろう。」

そう言うとは彼はブランデーの樽に腰を下して、パイプに煙草を填つつめ始めた。

「その松明^{たいまつ}を貸してくれ、ディック。」と彼は言い、それから、煙草に火を十分つけてしまうと、「ああ、それでいいよ。」と言
い足した。「その火を薪の山の中へ突っ込んでくれろ。それから、
お前^{めえ}たち、紳士方^{がた}、坐ったらどうだい！——ホーキンス君のた
めに立つてなくなつていいんだぜ。ホーキンス君はお前たちをゆ
るして下さるだろうよ。そいつあ間違^{まちが}えつこなしさ。ところで、
ジム、——と煙草を止めて、——「お前^{めえ}がここへやつて来たな
あこのジョン爺^{じい}もまつたくもって嬉しいが驚いたよ。お前がはし
つこい奴だつてこたあ己^{おれ}が初めてお前を見た時からわかつてるさ。
だが、これあどうも己にやまるで合点がいかねえぞ、まつたくな
。」

以上の言葉に対しては、十分想像されるであろうように、私は何の返事もしなかった。彼等は私に壁を背にして立たせてゐた。私は、臆せずにシルヴァーの顔を見ながら、そこに立っていた。表面はずいぶん大胆そうにしていたつもりであるが、心の中には暗澹たる絶望を抱いていた。シルヴァーは大いに落着いてパイプを一二服吹かし、それからまたしやべり続けた。

「ところで、なあ、ジム、お前がここへ来たからにやあ、ちつとばかり言つて聞かせることがあるんだ。己あいつもお前が好きだった、お前がな。元気な小僧だし、己の若くつていい男だった時に生写^{いきうつ}しだからよ。いつも己はお前が仲間に入^へつてくれて、紳士で死んで貰^もえてえもんだと思つてた。ところが、なあ大^{てえ}将^{しょう}

今度はお前はとうもそうしなくっちゃならねえ。なるほどスモレ
ット船長^{せんちよ}は立派な海員^{けいん}だ。それあ己もいつだつて白状するさ。
だが紀律^{きび}が厳し過ぎらあ。『義務は義務だ。』^{やつこ}って奴さんはよく
言う。またそれにやあ違え^{ちが}ねえ。お前もうあの船長に近よらねえ
ようにしろよ。あの医者だつてお前にやひどく怒つてるぜ、――
『恩知らずの腕白者』^{ばんぱく}つて言つてたんだ。で、手つ取り早え^{ばえ}とこ
を言つちまえば、まずこうだ。お前は自分の組の方へは帰れ^{けえ}ねえ。
あいつらはお前に帰つて貰えたかあねえんだからね。そこで、お
前が一人つきりでまた一つの組を起すとなると、こいつあどうも
淋しかろうて。で、そうするんでなけりや、お前はシルヴァー船
長の組に入らなきやなるめえな。」

ここまではよかった。とすると、味方の人たちはまだ生きて
るのだ。私は、船室ケビンの人たちが私の脱走を怒っているというシル
ヴァーの言葉の真実であることを幾分か信じたけれども、自分の
聞いたことのために、悲しむよりは、むしろほっとした。

「お前が己たちに掴まつてゐることは己は何も言わねえ。」と
シルヴァーが言い続けた。「ほんとにはそうなんだがね、間違えな
しにな。己あ万事相談づくでやる人間だ。嚇おどしていいことになつ
たつてこたあ己あ一度も知らねえ。もしお前が働いてくれる気な
らだ、なあ、こっちへつくがいい。もし厭ならばだ、ジム、そう
さ、自由に厭だつて返事するんだ。——自由で結構さ、兄弟きやうでえ。で、
どんな海員だつてこれより公平なことが言える者がいるなら、お

目にかかりてえや！」

「それじゃあ、僕は返事をしなきゃいけないのかい？」と私はひどく震えた声で尋ねた。彼のこの鼻であしらうような話の全体にわたって、私は自分に迫りかかっている死の威嚇を感じさせられ、頬はほてり心臓は胸の中で苦しいほど動悸うった。

「なあ、おい、」とシルヴァーは言った。「だれもお前に無理強いはしねえ。篤とくと考かんえろよ。己たちあ一人だってお前をせき立てはしねえつもりだ、兄弟。お前と一緒にいると愉快で時のたつのがわからねえくれえだからなあ。」

「ではね、」と私は少し大胆になって言った。「もし僕がどちらかにきめなきやならないんなら、僕は、ほんとうのことや、あん

た方^{がた}がどうしてここにいいのか、僕の方の人たちがどこにいいのかつてことを、知らして貰う権利がある訳だねえ。」

「ほんとのとこだと！」と海賊の一人が太い唸り声で私の言葉を繰返して言った。「ふん、そいつがわかった奴は仕合せ者だろうて！」

「おい、お前に話しかけられるまではお前は黙つて控えてるがいんだ。」とシルヴァーはその男に向つて荒々しく呶^ど鳴^なつた。それから、元の優しい口調で、私に答えた。「昨日^{きのう}の朝のことだ、ホーキンス君、折半直（註七六）に、リヴジーさんが休戦旗を持つてやつて来たんさ。『シルヴァー船長、お前は裏切られたんだ。船は行つちまつたぞ。』つてお医者と言うのだ。そうさな、多分

己たちは酒を飲んで、盃を　　す景氣づけに唄でも歌っていたんだ

ろう。そうじゃねえとは言わねえ。ともかくだれ一人気をつけて

いた者はなかったんだ。で、外を見ると、驚いたな！　あの古ふるぶ

船ねはいねえんさ。あの時のみんなみてえなぽかんと間まぬけづら拔面を

した阿呆どもは見たことがねえな。いや、この己が中でも一番ぽ

かんとしてたつて言つても、間違えなしさ。『ところで、相談を

しようじゃないか。』つてお医者言うんだ。己たちは相談をし

た。あの人と己とな。それで、己たちはここにいることになった

つて訳さ。食物も、ブランデーも、丸太小屋も、お前たちが気

を利かして切つといてくれた薪も、まあ言わばこの結構な舟を櫓ク

頭ロスツリース横桁ケルソンから内竜骨までそつくり、貰つたんだ。あの人たちの方

は、てくてく出て行つた。どこにいるのか己にやわからねえ。」

彼は再び静かにパイプを吸つた。

「それから、」と彼は話し続けた。「お前がその頭に、お前もその条約の中へ入つてゐるんだと思ひこむといけねえから、一歩おしめえに聞いた言葉を聞かしてやろう。『あんた方は何人^{がた}で立退^{たちひ}くんですかい?』と己が言つたんだ。すると、『四人だ。』つてあの人は言うのさ。——『四人で、その中一人^{うち}は負傷してる。あの子供は、どこにいるのか俺^{わし}は知らん、畜生。またどこにしようと大して構わん。俺らはあいつにやほとほと閉口した。』こうあの人は言つてたぜ。」

「それだけかい?」と私が尋ねた。

「そうさ、お前に聞かさんけりやならんことはこれだけだよ、坊や。」とシルヴァーが答えた。

「と今度は僕がどちらかきめなきやならないんだね？」

「で今度はお前がどっちかきめなきやならねえんだ。違えねえ。」とシルヴァーが言った。

「じや言おう。」と私は言った。「僕は、自分がこれから先どんなことを覚悟しなけりやならないかよくわからないような馬鹿じやない。どんな悪いことになるうと、僕は気にかかけやしないんだ。君たちと一緒になつてから此^{このかた}方、ずいぶんたくさん人の死ぬのを見て来たからね。だが一つ二つ君たちに言うことがある。」とここまで言つて来た時分には私はすっかり興奮していた。「まず

第一にはこういうことだ。君たちは今悪い有様になっている。船はなくなる、宝は手に入らない、人数は減る。君たちの仕事はすっかり駄目になっちまった。そこで、だれがそうしたのか知りたければ言うが、——それは僕だったんだよ！　僕は、島が見えたあの晩に林檎樽の中にいて、ジョン、君と、それから、デイツク・ジョンソン、君と、それから、今はもう海の底にいるハンズとが話しているのを聞いて、一時間とたたないうちに君たちの言ったことを一語も残さずみんな知らせたんだ。それから、スクーナ―船はと言うと、あれの錨索を切ったのも僕なら、君たちがあの船に乗せておいた人たちを殺したのも僕、あの船を君たちの中の一人だって二度ともう見られない処へ隠したのも僕だよ。勝って

笑えるのは僕の方なんだ。僕はこの事件では初手から上手に出て
いるんだ。僕はもう君たちが蠅ほども怖こわかあない。さあ、僕を殺
すとも生かすとも、好きなようにしてくれ給え。だが一つのこと
だけ言っておこう。もうこれつきりだ。もし君たちが僕の命を助
けてくれるなら、すんだことはすんだことにして、君らが海賊を
したために裁判にかけられる時にや、僕は出来るだけのことをし
て君たちを救つてあげよう。どちらかきめるのは君たちの方だ。
他人ひとを殺して君たち自身に何にもならぬことをするか、それとも、
僕を生かしておいて、君たちが絞首しめくびになるのを助かる証人を残
しておくかだ。」

私はここで言葉を止めた。というのは、実際、私は息が切れた

し、それに、驚いたことには、そこにいる者が一人も身動きもしないで、みんなが羊のようにただ私を見つめて坐っていたからである。そして彼等がまだじつと見つめている間に、私は再び口を切った。――

「それからね、シルヴァーさん、あんたはここにいる中で一番偉い人だと思うが、もし僕が殺されるようなことになったら、あんたはどうか先生に僕の死に方を知らせてあげて下さい。」

「心に留めておこう。」とシルヴァーは言ったが、非常に奇妙な口調だったので、彼が私の頼みを嘲笑あざわらっているのか、それとも私の勇氣に感心していたのか、私にはどうしてもいずれとも判断しかねた。

「まだ一つ言い添えることがある。」と例のマホガニー色の顔をした年寄の船乗——モーガンという名の——私がブリストルの埠頭にあったのつぽのジョンの居酒屋で見たことのあるあの男——が叫んだ。「ブラック・ドッグ黒犬を知つてたのもこいつだつたぞ。」

「そうさ、それからな、」と船の料理番コックは言い足した。「もう一つ言い添えることもあるぜ、畜生！ ビリー・ボーンズから海図をかつぱらつたのもやつぱりこの子供だつたよ。たびたび己たちはこのジム・ホーキンスのためにしくじつたんだ！」

「じゃあこうしてくれるぞ！」とモーガンは罵り言葉と共に言つた。

そして彼は、二十歳の若者のような勢でナイフを抜いて、跳び

立った。

「止めろ！」とシルヴァーが叫んだ。「お前は何だ、トム・モー

ガン？ 多分お前は船長のつもりだったんだろう、大方な。馬鹿

めが。だが己がよく教えてやろう！ 己に逆え^{さから}ば、お前はこの三

十年前^{めえ}からたくさんの奴がお前の前に遭ったような目に遭うんだ

ぞ。——帆船の端にぶら下げられた奴もいやがるんだ、畜生！

それから船の外へ抛^{ほう}り出された奴もいる。みんな魚の餌食になっ

たものさ。己に面と向って反^{はんてえ}対した奴で、その後でいい目に遭

った奴は、一人だっていねえんだぜ、トム・モーガン。そいつあ

間違えっこなしだぞ。」

モーガンはじっとしてしまった。しかし他の連中からぶつぶつ

噎^{しやが}れ声の不平が起った。

「トムの方に道理があるよ。」と一人が言った。

「己はずいぶん永^{なが}え間一人にいじめられるのを我慢して来たんだ。この上またお前^{めえ}にいじめられてたまるもんか、ジョン・シルヴァー。」と別の者が言い足した。

「手前^{てめえ}ら紳士たちの中でだれかこの己と議論か喧嘩^{けんか}できまりをつけてえって奴がいるのか？」とシルヴァーは、まだ火のついてい
るパイプを右手に持ったまま、樽の上の坐り場所からぐつと前へ
身を屈めながら、奴鳴った。「どうしようつてのか言ってみろ。」

手前^{おし}らあ唾^つじやあるめえ。してえ奴にやさせてやる。己も永^とえ年
月過^{しつき}して来て、今になって大馬鹿野郎めに己の面^{つらさき}先で生意氣

な真似をさせておくとするか？ 手前たちだつてやり方は心得てるんだ。みんな自分じや分限紳士のつもりなんだからな。さあ、いつだつて向つて来い。やれる奴は彎刀カトラスを手に取れ。そうすりや、己は、梶杖かせづえをついちやいるが、このパイプが空にならねえうちに、其奴の臟腑そやつがどんな色をしているか見てやろう。」

だれも動かなかつた。だれも答えなかつた。

「それがお前たちのやり方だ、そうだろ？」と彼はパイプを口へ戻しながら言い足した。「そうさ、お前たちやどのみち見掛ばかりの奴らだ。相手にするほどの値打もねえ、手前らはな。多分手前たちだつて自分の国の言葉はわかるだろう。己は選ばれてここの船長になつてゐるんだぞ。己はずんと一番偉え人間だからこそこ

こで船長になつてゐるんだぞ。手前らにや分限紳士らしく勝負する気はねえんだ。それなら、畜生、己の言うことをきいてりやいいんさ、まったくよ！　ところで、己はこの子供が好きなんだ。こないだ子供は見たことがねえ。この子はこの小屋ん中にいる手前ら鼠野郎を二人一緒にしたよりも以上の人間だ。で、己の言うのはこうだ。この子に手をかける奴は己が相手になつてやる、――これが己の言うことだ。違えねえぞ。」

この後は永い合間があつた。私は壁を背にしてまっすぐに立つていて、心臓はまだ大鎚のように烈しく動悸うっていたが、しかし今では一条の希望の光が胸の中に射^さし込んで来た。シルヴァーは壁に凭^{もた}れかかつて、腕を組み、パイプを口の隅に啣^{くわ}えて、まる

で教会にでもいるように落着いていた。それでも、眼は絶えずこつそりときよろきよろし、不従服な部下を眼尻で見ていた。彼等の方はと言うと、だんだんに丸太小屋の遠くの方の端へ寄り合つてゆき、彼等のひそひそと囁く低い声が流れのように私の耳に絶間なしに聞えて来た。一人一人彼等はこつちを見上げ、そして松^{いまつ}明の赤い光がちよつとの間彼等の興奮した顔を照すのだった。しかし彼等が眼を向けるのは私の方ではなく、シルヴァーの方へだった。

「手前らはたんと言うことがあると見えるな。」とシルヴァーは言つて、空中へぺつと唾を吐き跳ばした。「大声で言つて己に聞かせるか、でなきや止め^やちまえ。」

「失礼だがね、」と彼等の中の一人が答えた。「お前さん^{めえ}は規則によつちやずいぶんずぼらだが、多分他の規則^{ほか}は守つてくれるんだろうな。ここにゐる船員は不服があるんだ。ここにゐる船員はこけおどかしはちつとも有難かねえんだ。ここにゐる船員は他の船員と同じに自分たちの権利があるんだ、遠慮のねえとこを言えばね。で、お前さんの^{こせ}掬えた規則で、己たちは一緒に話し合つてもいいだろうと己は思うんだ。今んとこはお前さんを船長と認めるから、お前さんの許しを願う訳さ。だが己は自分の権利を要求して、会議を開きに外へ出ますぜ。」

こう言つて、いやに丁寧な水夫式の敬礼をして、のつぽの、面相の悪い、黄ろい眼をした、三十五くらいのその男は、戸口の方

へすまして歩いて行つて、小屋の外へ出てしまった。すると残りの連中も順々にそれに倣^{なら}つた。一人一人が出てゆく時に敬礼をし、一人一人が何とか言訳を添えた。「規則に従つてね。」と一人は言つた。「水夫部屋会議で。」とモーガンは言つた。そんな風に何とか言つて皆が出て行き、後にはシルヴァーと私とだけが松明と共に残された。

船の料理番は直ちにパイプを口から取つた。

「さて、ねえおい、ジム・ホーキンス。」と彼はしつかりした囁き声で言つた。その声はやつと聞き取れるくらいのものでつた。

「君はもう少しで殺されるかも知れんところだ。いや、もつとずつと悪いことにや、拷問されるかも知れんところだ。奴らは己を

へえせき
排斥しようとしてゐるからな。だが、いいかね、己はどんなこと

があつても君に味方してやる。己にやそういうつもりはなかつたんだ。そうだ、君があんなにばすばすとしやべるまではなかつたんさ。己は、あんな大金てえきんを手に入れ損そこねるし、おまけに首を絞しめられるとなつたんで、やけっぱちになりかかつていた。だが己にや君が頼りになる男だつてことがわかつたんだ。己は自分にこう言つたのさ。ジョン、お前はホーキンスに味方しろ。そうすりやホーキンスはお前に味方してくれるだろう。お前はあの子の最後のカルタ札だし、それから、ジョン、あの子はお前の最後のカルタ札だつてこたあ違えねえんだぞ！ 持ちつ持たれつだ。お前が自分の証人を救えば、あの子はお前の首を救ってくれるだろう

よ！ とね。」

私はぼんやりとわかりかけて来た。

「君は何もかも駄目になったと言うんだね？」と私は尋ねた。

「うん、まったく、そうなんだ！」と彼は答えた。「船はなくなる、首もなくなる、——そういった有様さ。一度は己もあの湾を捜してみたんだよ、ジム・ホーキンス。だがスクーナー船なんてまるで見えやしねえ。——で、己も強情者だが、へこたれてしまったよ。あの会議を開いてる奴らはね、まったくの馬鹿野郎の臆病者さ。己は君の命をあいづらから救ってあげるよ、——出来る限りはだ。だがね、いいかい、ジム、——その代りにだ、——君はのつぽのジョンがぶらんこになるのを救ってくれるんだぜ。」

私は当惑した。彼の求めていることはそれほど望みのないことと思われたのだ。——何しろ、彼は永年の海賊で、初めから終りまで張本人なんだから。

「僕に出来ることは、してあげるよ。」と私は言った。

「じゃこれで話がきまった！」とのつぽのジョンが叫んだ。「君は元気よく言ってくれた。で、有^{ありがて}難え！ 己に助かる見込が一つ出来た訳だ。」

彼は、薪の中に立てかけてある松明のところまでびよこびよこ跳んで行って、パイプに新しく火をつけた。

「己の言うことをよく聞いてくれ、ジム。」と彼は元のところへ戻りながら言った。「己は分別のある人間だよ、そうともさ。己

は今じや大地主の側についてるんだ。君があゝの船をどこかへ無事に　　したつてことは己にやわかつてる。どんな風にしてやったか、そいつあわからねえが、とにかくあれは無事なんだ。ハンスとオブライエンは丸めこまれたんだろうと思う。あいつらはどっちとも己は大して信用してゐなかつたよ。ところでよく聞いてくれ。己は何も訊か^きねえし、他の奴らにも訊かせはしねえ。勝負のついた時を己は知^てっている。知^てつてるとも。それから頼りになるしつかりした若者を知^わっている。ああ、君は若^わえし、——君と己と一緒になれあたんといふことが出来るかも知れねえなあ！」

彼は樽から錫の小杯にコニヤツクを注いだ。

「兄弟、飲まねえか？」と彼が尋ねた。そして私が断ると、「じ

やあ、自分だけで一口やるぜ、ジム。」と言った。「己は一杯ぺえやらなきやならねえんだ。面倒な事を控えてるんでね。面倒な事つて言えば、あのお医者はどうして己に海図をくれたんだろうな、ジム？」

私の顔はありありと不審の色を浮べたので、彼はその上尋ねる必要のないのを見て取った。

「ああ、そうさ、でもくれたんだよ。」と彼は言った。「あれにやきつと何か訳があるぜ、——あれにやあ確かに何か訳がな、ジム、——いいにしろ悪いにしろ。」

そして彼はまたそのブランデーを一口飲んで、最も悪い事を予期している人のように、大きな薄色の頭を振った。

第二十九章 再び黒丸

海賊どもの会議はしばらく続いていたが、やがて一人の者が小屋へ入って来て、私の眼には何となく皮肉に見える、さつきと同じ例の敬礼をまたやってから、ちよつとの間松^{たいまつ}明を貸して貰いたいと頼んだ。シルヴァーは簡単に承諾した。するとその使者は再び出て行き、後には私たちが暗^{くらやみ}闇の中に残された。

「そうら、そろそろ騒ぎが起つて来るぜ、ジム。」とシルヴァーが言つた。彼は、この時分には、すっかり親しい打解けた口調になつていた。

私は一番近くの銃眼のところへ行つて、外を見た。例の大きな焚火の余燼はもうほとんど燃え尽きて、今ではごく弱くぼんやりと光っているのです。私にはあの密謀者たちが松明をほしがった訳がわかった。柵壁までの傾斜面を半分くらい下ったところで、彼等は一団になつて集つていた。一人が松明を持っていた。もう一人が皆の真中に膝をついていたが、その手に持っている開いたナイフの刀身が、月光と松明の光とで違った色に輝くのが見えた。その他の者は身を前へ屈めて、膝をついている男のしていることを見ているようだった。その男が手にナイフと共に一冊の書物を持っているのを私はどうにか見分けることが出来た。そして、どうしてそんな不似合なものが彼等の手に入ったのだらうとまだ訝

つていると、その時膝をついていた者がまた立ち上つて、一同が小屋の方へ一緒に歩き出した。

「やつて来るよ。」と私は言つた。そして自分の元の場所へ戻つた。彼等を見ていたのを見つけられては自分の沽券こけんにかかわるよ
うな気がしたからである。

「よしよし、奴らを来させろ、なあ、——奴らを来させろだ。」
とシルヴァーは陽気に言つた。

「己にやまだ最後の手段があるからな。」

戸が開いて、五人の男が、入ったばかりのところにごたごたとかたまって立つたが、その中の一人を前へ押し出した。その男が一足一足と踏み出す毎にためらいながら、それでも握つた右の手

を前へ差し出しながら、のろのろと進んで来るのを見るのは、他の場合だったらずいぶんとおかしかったろう。

「おい、こら、さっさとやって来い。」とシルヴァーが呶鳴^{どな}った。「取って喰おうたあ言やしねえ。そいつを手渡ししろ、間拔め。己あ規則は知ってるよ、そうともさ。総代をやつつけるようなことはしねえや。」

この言葉で勇気がついて、その海賊は前よりは速く進み出て、シルヴァーに手から手へ何かを渡すと、もつと一層敏捷に仲間たちのところへ再び戻って行つた。

料理番は渡されたものを眺めた。

「黒丸^{くろまる}だな！　そうだろと思つてた。」と彼は言つた。「手前

らはどっからこの紙を取って来たんだ？　おやおや、こりやどうだい！　なあ、おい、これあ縁起がよくねえぞ！　手前たちは監督からこれを切るなんて馬鹿な真似をしたんだな。どの馬鹿が聖書を切ったんだ？」

「ああ、そら見ろ！」とモーガンが言った。――「そうら見ろ。おいらの言わねえこつちやあねえ。そんなことをしていいことになるはずがねえって、おいらが言ったんだ。」

「ふうむ、手前たちは仲間で相談してきめたんだな。」とシルヴァーが言い続けた。「じゃ手前らはみんなぶらんこ往生することになると思うな。どの阿呆の間拔めが聖書なんぞを持ってたんだ？」

「デイツクだよ。」と一人が言った。

「デイツクだと？　じゃあデイツクはお祈りをするがいいや。」
とシルヴァーが言った。「奴の好運もこれまでだ、デイツクのな。
そいつあ間違えっこなしだぜ。」

しかしこの時例の黄ろい眼をしたのっぽの男が口を出した。

「おしやべりは止めろ、ジョン・シルヴァー。ここに^やいる船員は、
規則通りにみんなで会議を開いて、お前に黒丸をつきつけたんだ。
お前も、規則通りに、そいつを裏返して、そこに書^けえてあること
を見てくんねえ。それからしやべるがいいさ。」

「有難うよ、ジョージ。」と料理番が答えた。「お前はいつも仕
事はてきぱきしてるし、規則は十分心得てるし、ジョージ、己あ

お前を見るなあ好きだよ。さてと、とにかく、こりや何だな？

ははあ！ 『免職』と、——なあるほど、そうだな？ なかなか

うまく書いてあるわい、確かに。刷った物みてえだ、まったく

さ。ジョージ、お前の手蹟てかい？ まあ、お前はすっかりここに

いる船員の中での頭かしらになつてゐるんだな。お前は次にや船長せんちよにな

れるぜ、きつとだよ。すまねえが、ちよいとその松明たいまつをも一度

取つてくんねえか？ このパイプが消えたんだ。」

「さあ、おい、」とジョージが言った。「ここにいる船員を馬鹿にするのもいい加減にしねえ。お前はおどけてるつもりなんだろう。がお前はもう駄目だよ。その樽から下りて来て、投票するがよからうて。」

「手前は規則を知ってるって言つたように思うがな。」とシルヴァーは輕蔑したように答えた。「ともかく、手前が知らねえにしろ、己は知ってるんだ。だから己はここにいる、——己はまだ手前たちの船長だぞ、いいか、——手前たちが自分の苦情を言つて、己がそれに答えてやるまではだ。それまでの間は、手前らの黒丸は堅^{かた}パン一つほどの値打もねえんだ。それがすんでから、考えるでしょう。」

「おお、」とジョージが答えた。「お前はちつとも心配^{しんぺえ}するこたねえや。己たちや間違^{まちが}つたこたあしねえよ、己たちはな。第一、お前は今度の仕事をやり損^{そこ}ねた。——いくらお前がずうずうしい男だつて、これにやそうじゃねえとは言えめえ。第二に、お前は

敵をこの罾から何にもならねえのに逃がしちまった。なぜ奴らは出て行きたがつたか？ そりや己あ知らねえ。だが奴らがそうしたがつてたこたあ確かだ。第三、お前は、己たちが奴らの出かけるところをやつつけようとするのを、させなかった。おお、己たちあお前の腹の底を見抜いてるんだよ、ジョン・シルヴァー。お前は奴らに内通したがつてるんだ。それがお前の不都合なとこだ。それから、第四は、この小僧のことだ。」

「それだけか？」とシルヴァーが平然と答えた。

「これだけあれあたくさんさ。」とジョージが言い返した。「お前のへまのために己たちあみんなぶらんこになって天日てんぴに曝さらされるだろうよ。」

「よし、じゃあ、いいか。その四箇条に返答してやろう。一つ一つ返答してやる。己が今度の仕事をやり損ねたと？ ふむ、ところで、手前たちはみんな、己のやりたかったことを知ってるはずだ。それから、もしその通りになってたら、己たちあ明日といわず今晚にもヒスパニオーラ号に乗り込んで、一人残らず生きていて、元気で、うめえ乾葡萄入りのプディングをたらふく食べ、宝を船艙に一杯積み込んだ、ってことも知ってるはずだ、畜生！ そんなら、だれがその己の邪魔をしたんだ？ だれがこの正式の船長の己をせき立てて早まらせたんだ？ だれが己たちの上陸した日に己にあの黒丸をつきつけて、この舞踏ダンスを始めたんだ？

ああ、面白おもしろえ舞踏だよ、——違えねえや、——ロンドンの仕

置波止場でぶら下げられて縄の先でやる踊りみてえさ、まったくな。だが、だれがこんなことをやったんだ？　そうさ、それあア　ンダスンと、それからハンズと、それから手前、ジョージ・メリーだぞ！　そして手前はそれのおせっかいな奴らの中で一人だけ生き残ってる奴なんだ。それなのに、生意氣千万にも己に代って船長になろうとするなんて、——己たちみんなをこんな目に遭わせた手前がだ！　こん畜生め！　こんな大べらぼうな話って聞いたこたあねえ。」

シルヴァーはちよつと言葉を切ったが、私は、ジョージとその仲間の者たちの顔で、以上の言葉が無駄ではなかったのを見て取ることが出来た。

「それが第一条の答だ。」と被告のシルヴァーが呶鳴つて、額から流れる汗を拭うた。小屋が震えるほど猛烈にしゃべっていたからである。「やれやれ、ほんとに、手前たちと話していると厭なつちまうぜ。手前たちや物の弁えわきめもなけりや物覚えも悪いと来てるんだからな。手前たちの母親おふくろは何だつて手前らを海へなんぞ出したのか己にやあわからねえ。海だと！ 分限紳士だと！ 仕立屋が手前たちに相応の商しょうべえ売だろうよ（註七七）。」

「さあ、続ける、ジョン。」とモーガンが言つた。「残りのもさつさと言え。」

「ああ、残りのか！」とジョンが答えた。「ありやあなかなか立派なものだな、そうじゃねえか？ 手前たちは今度の仕事はやり

損ねたと言う。ああ！ もしどのくれえひどくやり損ねてるか手前たちにわかりやあ、きつと、手前たちやびつくりするぜ！ 己たちやもうすぐ絞首しめくびになりそうなとこなんだぞ。それを考えただけでも己は頸こわが硬こわばるくれえだ。多分、手前らも見たことがあるだろう、鎖で絞しめ殺されて、鳥がその周りに集つてゐる奴らを。

潮しおで流されてゆくのを船乗が指してるんだ。『あれあだれだい？』

つて一人が言う。『あれかい！ ああ、あれあジョン・シルヴァ

ーさ。己あ被奴あいつをよく知つてたよ。』と別の奴が言う。それから

上手　しをして次淨標ブイの方へ船を走らせていると、その鎖がちやがちや鳴るのが聞える、つて訳さ。まあ、それが己たちのゆきつくところだ、己たちみんなのな。これもこいつと、ハンズと、

アundasンと、その他手前たちいまいましい馬鹿野郎どものお蔭
なんだ。それから、第四条の、その小僧のことが聞きてえんなら
だ、畜生！ 言ってくれるが、其奴は人質じゃねえか？ 人質を
なくしちまおうってえのか？ いいや、いけねえ。其奴は己たち
の最後の頼みになるんだ、きつとだ。その小僧を殺すって？ 己
あ厭だよ、兄弟！ それから、第三条か？ ああ、そうだ、第三
条にや言うことがうんとある。大方、手前たちはほんとの大学出
の医者が毎日診^みに来てくれるのを有難えとも思わねえんだろな？
——ジョン、頭を打ち割られたお前も、——ジョージ・メリー、
まだ六時間とたたねえ前に瘡^{おこり}をやつて、今の今だつてレモンの皮
みてえな色の眼をしているお前もさ。それから、大方、手前たち

は伴船ともぶねのやって来るのも知らねえんだろ、多分な？　だが、来るんだぞ。それもそんなに永えこつちやねえ。で、そうなつて来ると人質があつて喜ぶのはだれだかわかるだろ。それから、第二条の、己がなぜ取引をしたかつてことならだ、——へん、手前らがそれをして貰えたくつて己んどこへ膝へをついて這えつくばつてやって来たんだ、——膝しをについてな、やって来たんじやねえか。それつくれえ手前たちや萎しをれてたんだ。——それにまた、己がそれをしなかったら、手前らは飢うえじに死してたろうて。——だが、そんなこたあどうだつていい！　こいつを見ろ、——そうすりや訳がわからあ！」

そう言つて彼は床ゆかの上に一枚の紙を投げ出したが、私にはすぐ

にそれが何だかわかった。——まさしく、私があの船長の衣類箱の底で油布に包んであるのを見つけた、三つの赤い十字記号のついている、黄ろい紙の海図であつた。なぜ先生がそれを彼にやったのかということは、私には想像出来ないことだつた。

しかしそのことが私には合点のゆかぬことだつたとするなら、海図の現れたことは生き残つてゐる謀叛人どもには信じられぬことだつた。彼等は鼠に跳びかかる猫のようにそれに跳びかかった。海図は手から手へと渡され、一人が別の奴からひつた。そして、それを調べながら罵つたり呶鳴^{どな}つたり子供のように笑つたりしている有様は、彼等が黄金そのものをいじっているばかりではなく、さらにもう無事にそれを積んで海に出ているようだと、

思われるくらいであつた。

「そうだよ、」と一人が言つた。「こりや確かにフリントだ。J・Fと書いて、下に線を引いて、それに索結びみてえなものも書いてある。あの人はいつもこう書いてたよ。」

「こりやいいや。」とジョージが言つた。「だが己たちや船がねえから、どうしてあれを持って行くんだい？」

シルヴァーが突然跳び立って、片手を壁にあてて身を支え、

「手前に断つておくぞ、^{ことわ}ジョージ。」と呶鳴つた。「もう一言生^{こと}

意気な口を利こうものなら、己は手前をひっぱり出して勝負するんだぞ。どうしてだと？　へん、そんなことを己が知つてゐるものか？　手前からこそそれを己に教えてくれなきやならなかつたんだ、

——余計な差出口をして己のスクーナー船をなくしちまった手前とその他の奴らとがだ、この馬鹿野郎どもめが！　だが手前らは駄自さ。それが言えるもんか。手前らにや油虫ほどの智慧もねえんだ。だが、ジョージ・メリー、手前だつて丁寧な口だけは利けるんだし、また己がそうさせてやるぞ、いいか。」

「そいつあまず申分のないとこだ。」と老人のモーガンが言った。「申分がないだと！　己もそう思う。」と料理番が言った。「手前らは船をなくした。己は宝をめつけた。これじゃあだれが偉え人間だい？　で、もう己は辞職するぜ、畜生！　さあ、もう手前の好きな奴を選挙して船長にしろ。己はやめちまったんだ。」

「シルヴァーだ！」と皆が叫んだ。「いつまでも肉焼バーベキューき台だ！

肉焼き台が船長だ！」

「じゃそうきまつたんだな？」と料理番が叫んだ。「ジョージ、お前はどうかやらもう一度待たなきやならねえようだなあ、おい。己が怨み深え人間でねえのがお前にや仕合せだ。だがそいつあ己の流儀じゃなかったんだぞ。それから、兄弟、この黒丸はどうする？ もう大して役にも立つめえな？ デイックが自分の運をそこねて自分の聖書を駄目にした。まあそれつくれえのところさ。」

「この聖書は接吻して宣誓するにやまだ役に立つだろうね？」とデイックはぶつぶつ言った。彼は自分で呪いを招いたのに明かに不安を感じているのだった。

「少し切り取ってある聖書がかい！」とシルヴァーが嘲笑するよ

うに答えた。「駄目さ。そんなものは小唄本ほどの利目もねえや。」

「だって、そうかね？」とディックは嬉しそうに叫んだ。「まあ、でもね、持っててもいいだろうと思うねえ。」

「そら、ジム、——お前にや珍しいものだよ。」とシルヴァーが言つて、その紙を私にひよいと抛^{ほう}つてくれた。

それはクラウン貨幣（註七八）ほどの大きさの円い紙だった。一番終りの紙だったので、片側は白かった。もう一方の側にはヨハネ黙示録の一二節が見え、——その中でもこういう文句が私の心にぎくりとこたえた。「犬および殺人者は外に居るなり。（註七九）」その印刷している側は焼木の炭を塗つて黒くしてあつた

が、その炭がもう剥げかかって私の指を少しよごしていたのだ。白い側には同じく炭で「免職」という一語が書いてあった。私はその珍品を現在もそばに持っている。が、今では文字はすっかり消えて、拇指の爪でつけたようなかすり痕が一つ残っているだけである。

それがその夜の事件の結末であつた。その後間もなく、酒がみんなにぐると　されて、私たちは寝ることになった。そしてシルヴァーの復讐は、高々、ジョージ・メリーを歩哨に立たせて、もし誠実にやらないと殺してしまうぞと嚇したことだけだった。

私は永い間眼を閉じることが出来なかった。確かに私には考えることがたくさんあつたのである。その日の午後自分が殺した男

のことや、自分の非常に危険な立場のことや、とりわけ、シルヴァーの今やつて見せた素晴らしい芸当——片手では謀叛人どもをくつつけておき、もう一方の手では、出来るものでも出来ないものでもありとあらゆる手段によつて、和解をして自分のみじめな命を救おうと努める——のことなどについてである。そのシルヴァー自身は安らかに眠つて、高いいびき軒をかいていた。それでも、彼を取巻いている暗澹たる危難や、彼を待っている恥ずべき絞首台のことを考えると、彼が悪人ではあつても、私の胸は彼のために痛むのであつた。

第三十章 宣誓解放

森の縁から呼びかける、はつきりした、力強い声で、私は目を覚された。——實際、私たちみんなが目を覚されたのだ。歩哨でさえも、戸口の柱に凭もたれていたのを身を起して、睡氣ざましに体をゆすつているのが見えたから。——

「おうい、丸太小屋あ！」とその声は叫んだ。「医者が来たぞ。」まさしくそれは医師であつた。その声を聞くと私は嬉しかったが、それでもその嬉しさには夾まぎ雑物がないではなかつた。私は自分の不従順なこそそした行為を思い出してどぎまぎした。そして、その行為のために自分がどんなことになつたか——どんな連中の間にいてどんな危険に取巻かれているか——ということをして

思うと、面目なくて先生に顔が合さなかった。

夜がまだすっかり明けきつていなかったから、先生は暗い中に起きて来たのに相違ない。私が銃眼のところへ駆け寄つて外を見ると、先生は、この前一度シルヴァーが来た時のように、地を這っている靄もやに膝のところまでも包まれて立っているのが見えた。

「やあ、先生！ お早うござえまあす！」とシルヴァーは、すぐにすっかり目を覚して好人物らしいにこにこ顔をしながら、叫んだ。「ずいぶんとお早えはえんですねえ、まったく。諺にもあります通り、喰くい物ものにありつくのは早起きの鳥ですよ。（註八〇）おい、ジョージ、お前、体をゆすぶり起して、リヴジー先生が柵をお越しになる手伝いをしてあげろ。みんな工合がようござえますよ、

あんたの患者はね、——みんな工合がよくって元気でさあ。」

杵杖を肱ひじの下にあて、片手を丸太小屋の側壁につけて、丘の頂に立ちながら、彼はこうぺらぺらとしやべり続けたが、——声も、態度も、顔付も、まったく以前のジョンであつた。

「それに、あんたがまったくびつくりなさることがありますぜ。」と彼は言葉を続けた。「ここにやちつちやなお客がいますんで、

——ひっ！ ひっ！ 新規の賄附まかないの下宿人って訳でさ。達者でび

んぴんしてますよ。このジョンのすぐ横で、船荷の宰領（註八一）みてえに寝ましたよ、——夜っぴて、枕を並べてね。」

リヴジー先生はこの時分には柵壁を越えて料理番コックのかなり近くへ来ていた。それで先生がこう言う時の声の変っているのが私に

はわかった。――

「ジムじゃないか？」

「まさに間違えなくそのジムで。」とシルヴァーが言った。

先生は何も言わなかったが、ぴたりと止った。そして、また動き出すことが出来るようになったと思われるまでには、何秒かかった。

「よし、よし、」とやがて彼は言った。「義務第一で、遊びその後だ。お前だってそう言うだろうな、シルヴァー。まずお前のところのあの患者たちを診察するでしょう。」

それからすぐ医師は丸太小屋へ入って来て、私には怖い顔をして頷いて会釈し、病人の間で仕事にとりかかった。彼は、こうい

う不信義な悪魔どもの間では自分の生命が一本の髪の毛に懸っているようなものだということは知っていたには相違ないが、少しの懸念もしていないような様子をしていた。そして、まるで平静なイギリスの家庭を普通に往診してでもいるように、自分の患者たちにいろいろとしやべっていた。彼の態度は皆に反応したのだろうかと思う。というのは、彼等も医師に対して、何事も起らなかったかのように——彼がやはり船医であり、彼等がやはり忠実な平水夫であるかのように——振舞っていたから。

「お前は工合がよくなっているよ、なあ、おい。」と彼は頭に繃帯をした男に言った。「九死に一生を得た人間というのがいるなら、それはお前のことだ。お前の頭は鉄のように堅いに違いない

な。それからと、ジョージ、どんな様子だ？ ひどい顔色をしているな、確かに。ふうむ、お前の肝臓がな、でんぐり返っているんだぞ。お前はあの薬を飲んだか？ 皆の者、この男はあの薬を飲んだかね？」

「はいはい、旦那、確かにこいつは飲みましたよ。」とモーガンが答えた。

「うむ、私もこのように謀叛人の医者になっている以上は、というよりも監獄医になっている以上はと言った方がいいんだがね、」とリヴジー先生は非常に快活な調子で言った。「とにかく、ジョージ陛下と（陛下万歳！）絞首台とのために一人の命でもなくしないようにするというのは面目にかけて大切なことだからな。」

悪漢どもは互に顔を見合せたが、この手痛い言葉を黙って聞き流してしまった。

「デイツクは気分がよくねえんですが。」と一人が言った。

「よくないって？」と医師が答えた。「じゃあ、ここへ来なさい、デイツク、そして舌を見せて御覧。いや、これで気分がよかつたら不思議だろうて！ この男の舌を見てはフランス人だつて恐しがるよ。こいつも熱病さ。」

「ああ、それ見ろ、」とモーガンが言った。「聖書を裂いたからそんなことになつただ。」

「あんまり頓馬だからそんなことになつただ、——お前の言う真似をするかね。」と医師は言い返した。「あんまり頓馬で、よい

空気と毒氣との区別も知らず、乾燥した土地と疫病のあるいやな泥沼との区別も知らんからだよ。まあ、大抵は、——もちろんこれはただ私の考えだが、——そのマラリヤ熱をお前たちの体から取ってしまうまでには、お前たちはみんな恐しい目に遭わなければならんだろう。沼地に野営するなんて、どうしてそんなことをしたんだい？ シルヴァー、お前には私も驚いたよ。お前は、何もかもひつくるめて見たところ、他の多くの者ほど馬鹿じやないが、しかし、どうも健康の法則の觀念と来ちや初歩も持っていないようだな。」

医師は一人一人に藥を調合してやり、彼等はまったく笑止なほどへいこらしてその処方藥を飲んだが、その様子は人殺しをした

謀叛人や海賊というよりは貧民学校の生徒のようだった。それがすむと医師が言った。――「さあ、今日きょうはこれでいい。ところで今度はあの子供とちよつと話をしたいんだがねえ。」

そして彼は私の方へぞんざいに頭を振り動かした。

ジョージ・メリーは戸口のところにいて、苦にがい味のする薬を飲んだ後でぺっぺつと唾を吐いていたが、医師のそう言い出した言葉言葉を聞くなり真赤な顔をしてくると振り向き、「いけねえ！」と叫んで口ぎたなく罵った。

するとシルヴァーが平手でびしやりと樽を叩いた。

「黙れ！」と彼は呶どな鳴って、ほんとうに獅子のようにあたりを見た。した。「先生、――とそれから彼はいつもの調子で言葉を続けた。

「わっしは、あんたがこの子を可愛^{かええ}がつていなさることを知ってるんで、そのことを考えていたんでさあ。わっしらはみんなあなたの御親切をほんとに有難く思っていますし、御覧の通りにあなたを信用していて、藥を酒みてえに飲んでます。で、わっしはこうしたらみんなに都合がいいだろうと思うんですがねえ。ホーキンス、君は若^{わけ}え紳士として名誉にかけての約束って奴^{わし}を俺にしてくれねえか、——生れは貧乏だが、お前は若え紳士だからな、——逃げ出さねえという、名誉にかけての約束をしてくれねえかい？」

私はすぐにその誓約をした。

「では、先生、」とシルヴァーが言った。「あんたはあの柵の外

側へちよいと出て下せえ。そうして下さりや、あつしはこの子をこつち側までつれてゆきましよう。そうすれあ柵越しに話が出来るでしよう。じゃ、さようなら、先生。それから大地主さんとスモレット船長によろしく。」

これまではただシルヴァーの凄いい見幕だけで抑えつけられていた皆の不平は、医師が小屋を出てしまうとすぐに爆発した。シルヴァーは、敵味方に二股をかけているとか——自分だけで別に和解をしようとしているとか——仲間の者たちの利益を犠牲にするとか言つて、要するに、彼の正にやっている通りのそのことを、手厳しく非難された。今度は、それが実に明白であるように私にも思われたので、彼がどうして彼等の怒りを逸せ^{そら}られるか私には

想像がつかなかった。しかし、彼は残りの者どもと一緒にしたより二倍ものしたたか者であつた。それに昨晚の勝利は彼等の心を圧倒していた。彼は彼等に馬鹿だの間拔だのとあらゆる悪たれ口をたたき、私を医師と話させることは必要なのだと言い、例の海図を彼等の面^{つらさき}先に振り　してみせ、宝探しに行くことになつてゐるその日になつて条約を破るなんてことが出来るかと尋ねた。

「いいや、そんなことが出来るもんか！」と彼が叫んだ。「条約を破るのはその時が来てのことだ。それまでは、奴^{やつこ}さんの長靴にブランドイーを塗つて磨けと言われても、あの医者^{やつか}の奴をごまかしておくんだ。」

それから彼は火を焚きつけろと彼等に言いつけて、杵杖をつい

て、片手を私の肩にかけながら、傲然と外へ出た。得心させられたというよりは彼の口達者な弁舌に黙らされて、方々にばらばらになっている連中を後に残して。

「ゆつくりと、おい、ゆつくりと。」と彼が言った。「己たちが急ぐと見ようものなら、奴らはすぐにかかつて来るかも知れねえからな。」それで、ごくゆつくりと私たちは砂地を進んで、医師が柵壁の向側で私たちを待っている処の方へ行つた。そして、容易に話の出来る距離まで来るや否や、シルヴァーは立ち止つた。「このことも書き留めておいて下せえまし、先生。」と彼が言つた。「それから、この子があんに話しますでしようが、わつしはこの子の命を救つてやりましたし、そのために免職させられも

しました。それにや違えござえません。先生、人間がわっしのよ
うに危^{あぶ}えことまでやった時にや、——言わば命をそっくり投げ出
して向う見ずなことをやった時にや、——その人間に一言^{こと}くれえ
やさしい言葉をかけてやんなすっても、大方、さしつかえはねえ
とお考えでござえましような？ 今はわっしの命だけじゃなくつ
て——おまけにこの子の命にもかかわってるってことを、どうか
覚えておいて頂きてえんで。で、先生、後生ですから、わっしに
親切な言葉をかけて、ちつとでも望みが持てるようにしてやって
下せえ。」

シルヴァーは、一度ここへ出て来て仲間の方と丸太小屋とに背
中を向けると、人間が變つてしまった。頬までがこけたように思

われ、声が震えていた。これほど真面目な人間は一人もないくらいであつた。

「うむ、ジョン、お前は怖がつているんじゃないかね？」とりヴジー先生が尋ねた。

「先生、わっしは臆病者じゃありません。そうですよ、わっしはね、——そんなに臆病者じゃありませんとも！」と言って彼は指をぱちつと鳴らした。「わっしが臆病者ならそんなことは言やしませんや。だが正直に白状しますが、わっしは絞首台のことを思うとぞくぞくするんでさ。あんたは立派な正直な人だ。あんたみてえな立派な人は見たことがねえ！　で、あんたがわっしのした悪いこともお忘れにやならねえだろうが、わっしがどんないいこ

とをしたかつてこともお忘れにならねえ、つてこともわっしは知つてますよ。そこでと、わっしはあっちへ行つて——この通りにね——あんたとジムとを二人きりにしておきますぜ。で、このこともあつしの手柄として書きつけておいて下せえ。これだつてずいぶんと無理をしてやつてることですからね、そうですとも！」

そう言いながら彼は少し後へ戻つて、話し声の届かないところまで行き、そこで木の切株に腰を下して口笛を吹き始めた。そして、時々その座席の上でぐるりとつて、私と医師との方を見たり、部下の不従順な悪党どもの方を見たりした。その悪党どもは、焚火——それを彼等は頻りに再び焚きつけていた——と小屋との間の砂地を行ったり来たりして、小屋から豚肉とパンとを運び出

して朝食の用意をしていたのである。

「そうか、ジム、君はここにいたんだね。」と先生は悲しそうに言った。「自業自得でどうも仕方がない、ねえ、君。まったくのところ、私には君を責める気はない。が、親切であつても不親切であつても、これだけは言っておきたい。スモレット船長が丈夫だった時には、君は跳び出そうとはしなかった。そしてあの人が悪くなつて、どうにも出来ない時だったので、あれはどうもまったく卑怯なことだったのだよ！」

私はこの時には泣き出したことを白状しよう。「先生、」と私は言った。「勘忍して下さい。僕は十分自分を責めました。僕の命はどうせないものです。そして、もしシルヴァーが僕を庇^{かば}つて

くれなかつたら、僕は今時分は死んでいたでしょう。それで、先生、これを信じて下さい。僕は死ぬのはかまいません、——それが僕には当然なのでしょうから、——しかし僕の心配するのは拷問です。もしあいつらが僕を拷問するとなると——」

「ジム、」と先生が私の言葉を遮ったが、その声はすっかり変っていた。「ジム、私はそんなことをさせておけん。さあ、跳び越せ。逃げ出そう。」

「先生、僕は誓言したんです。」と私は言った。

「わかつてるよ、わかつてるよ。」と彼は叫んだ。「だが、ジム、今はそんなことは仕方がない非難も恥も、一切合財、私が引受けるよ、ねえ、君。だが君をここへ残しておくことは私には出

来ないんだ。さあ、跳べ！ 一跳びで外へ出られる。二人で^{かもし}羚

羊^かのように逃げ出そう。」

「いいえ。」と私は答えた。「あなたは御自分ならそんなことをなさらないということはよく御存じです。あなただつて、大地主さんだつて、船長さんだつてそうです。僕だつてそんなことはありません。シルヴァーは僕を信用したんです。僕は誓言したんですから、戻つて行きます。けれども、先生、まだ僕にはお話するところが残っていたんですよ。もしあいつらが僕を拷問するとなると、僕はひよつとして一言^{こと}くらい口を滑らしてあの船がどこにあるかということ言うかも知れません。といいますのは、僕は船を取戻したんです。一つには運がよかったのと、一つには冒険をやつ

たのことで。あれは、北浦の、南の浜の、高潮線のすぐ下のところにおいてあります。半潮の時にはきつと高く水を離れているでしょう。」

「船をね！」と先生がびっくりして言った。

私が大急ぎで自分の冒険のことを話すと、先生は無言のまま私の言うことをしまいまで聞いていた。

「どうもこれには宿命といったようなものがあるね。」と彼は私に話し終わると言った。「事毎に、私たちの命を救ってくれるのは君なのだ。それなのに、私たちが君に命をなくさせるようなことをすると君は思ふかい？ そんなことをしたら実にすまん訳だよ、君。君は奴らの陰謀を見つけた。君はベン・ガンを見つけた。

——あれは君がこれまでにした中で一番よい行いで、また、君がこれから九十まで生きようとも、あれ以上によいことは出来ないだろう。おお、そうそう、ベン・ガンのことを言えばだね！ あれあ実にいたずら者だよ。おい、シルヴァー！」と先生は大きな声で叫んだ。「シルヴァー！——^{こと}一事お前に忠告するがね、」と彼は料理番が再び近づいて来ると言葉を続けた。「あの宝を探しにゆくのはあんまり急がん方がいいぜ。」

「そうですね、先生、わっしは出来るだけのことはしますが、どうもそりやあむずかしいですね。」とシルヴァーが言った。

「失礼ですが、わっしはあの宝を捜すことで自分の命とその子の命を繋いでるだけなんですから。それにやあ違えありません。」

「じゃ、シルヴァー、」と医師は答えた。「もしそうなら、もう一步進んで言っておこう。宝を見つけた時には用心をしろよ。」

「先生、」とシルヴァーが言った。「男と男の話としちや、そりやあ何だか奥歯に物の挟まつてるような言い方ですね。あんたがどうしようとしていなさるのか、どうして丸太小屋を出なさったのか、どうしてあの海図をわっしに下さったのか、わっしにやわからねえ。わかるもんですかい？　それでも、わっしは眼をつぶって、望みの持てる言葉一つも聞かされずに、あんたの言いつけ通りにして来たんですぜ！　だが、いや、今のはひど過ぎる。もしあんたが思ってたなさることをきっぱりわっしに言ってお下さらねえんなら、ちよいとそう言ってお下せえ。そうすりやわっしだって

成行にまかせますから。」

「いやね、」と医師は考えこみながら言った。「私にはそれ以上言う権利がないのだ。それは私の秘密じゃないんだからなあ、シルヴァー。でなけりや、きつと、お前に話してやるんだが。しかし私は自分の言えるだけのことをお前に言うとしよう。一步だけ先へ出て言うのだ。でないと、船長に叱られるからねえ、きつと！ 第一に、私はお前にちつとばかり望みを持たせてやろう。シルヴァー、もし私たちが二人ともこの狼の罠から生きて出られたら、私は、偽誓だけはしないが、自分の全力を尽して、お前を救ってやろう。」

シルヴァーの顔は晴々とした。「先生、あんたがわっしの母^{おふく}」

親でも、きつと、それ以上のことは言えますまいよ。」と彼が叫んだ。

「まあ、それが私の第一の譲歩だ。」と医師は言い足した。「第二の**は**一つの忠告だ**が**な。その子を始終お前のすぐそばにおいて、もし助けの要る時**い**には、おういと大声で呼んでくれ。そしたら私はお前に加勢しに行つてやろう。私がでたらめを言っているかどうかは、それでお前にもわかるだろう。じゃ、さようなら、ジム。」

そしてリヴジー先生は柵越しに私と握手し、シルヴァーに頷いて会釈して、足早に森の中へ入つて行つた。

第三十一章 宝探し——フリントの指針

「ジム、」とシルヴァーは私たち二人だけになると言った。「もし己がお前の命を救ったんなら、お前は己の命を救ってくれたんだ。それは忘れねえよ。先生がお前に逃げろって合図したのを己は見ただ、——この眼尻でな、見たとも。それから、お前がいやですて言うのも見たぜ、聞くようにはつきりとね。ジム、これで己は君に一つ借りが出来たよ。あの攻撃がしくじってから此方己あ初めて望みが持てたんだ。それも君のお蔭さ。ところで、ジム、己たちはこれからあの宝探しに行かなくちゃならんのだがね、これも封緘命令で、行ってみるまではわからねえという奴でな、

己あ氣が進まねえんだ。で、お前と己とは、言わば互^{たげえ}に持ちつ持たれつで、しつかりくつついていなきやいけねえ。そしてどんなことがあるうと首が助かることにしようぜ。」

ちようどその時、一人の男が焚火のところから朝飯の支度が出来たぞと私たちを呼んだ。それで、私たちはやがて砂地のここかしこに坐つて堅パンとフライにした塩漬肉とを食べ始めた。彼等は牛を一頭丸焼するに適當なくらいの火を焚いてあつた。そしてそれが今非常にかつかと盛んに燃えているので、風上からようやくその火に近づけるだけで、その方からでも用心をしなければ近づけなかつた。それと同じ浪費的な氣持で、彼等は食べ切れる三倍もの肉を料理したようであつた。そして一人の奴は、訳もなく

げらげら笑いながら、残った分を焚火の中へ投げ込んだ。火は、
こういう珍しい燃料を抛り込まれて、ますます盛んにごうごう音
を立てて燃えた。私は今までにあんなに明日の^{あす}ことを氣にかけな
い人たちを見たことがない。その日暮しというのが彼等のやり方
を説明し得る唯一の言葉である。そして、彼等は小競合にはすこ
ぶる大胆ですぐにけりをつけてしまうけれども、食物を浪費した
り歩哨が眠ったりするのでは、とても永びく戦争などには全然不
適当だということが私にはわかった。

シルヴァーでさえ、肩の上にフrint船長をとまらせて、盛ん
に食べながら、彼等の思慮のなさに対して一言の非難もしなかつ
た。そして、彼がそれまでにこの時ほどの狡猾さを示したことは

一度もないと私は思ったので、そのことは私を一層驚かせたのだ。

「そうさ、兄弟、」と彼は言った。「肉焼バーベキューき台がいてこの頭でも

つてお前たちのために考えてやるてえのは、お前たちにや仕合せなことだぜ。己はほしかったものを手に入れたんだ、そうとも。

なるほど、奴らは確かに船を持っている。どこに持つてゐるのか、

己あまだ知らねえ。だが、己たちは宝を見つけさえすりや、方々

跳び　　つて探しあてゐるさ。そうなれあ、兄弟、ボートを持つてい

る己たちの方が勝ちだと思ふな。」

彼は、口一杯に熱い塩漬豚肉を頬張りながら、こんな風にしゃべり続けた。こうして彼は皆の希望と信頼とを回復した。同時に自分の希望と自信とをも取戻したのだらうと思う。

「この人質のことを言えばね、」と彼は話し続けた。「さっきの
が、この子のひどく好きな連中との話しじまいだろうと思うよ。
己はちよいといいことを聞いたが、それもこの子のお蔭だ。だが
それはもうすんでしまったとき。宝探しに行く時にや己はこの
子に綱をつけてつれて行くでしょう。なぜって、いいかい、何か
事の起つた場合の用心に、当分は、己たちはこの子を黄金みてえ
に大事^{でえじ}にしておくんだからな。船も宝も両方とも手に入^{へえ}つて、仲
間で陽気に海へ出るようになったら、その時にやあな、己たちは
ホーキンス君を説きつけて味方に誘うてよ、無論、いろいろ尽し
てくれたお礼に、分前もやるとしようよ。」

皆がこの時上機嫌だったのは不思議ではなかった。私はと言う

と、すっかりしよげていた。シルヴァーが今言つた計画が実行出来るようになれば、すでに二重に裏切者である彼は、それを採用するに躊躇しないだろう。彼はまだどちらの陣営にも足をかけていた。それで、彼が、私たちの側へついて精々絞首を辛うじて免れるよりは、海賊どもと一緒に富と自由とを得る方を択ぶだろうということには、少しの疑いもなかった。

いや、そればかりではなく、よし彼が余儀なくリヴジー先生との約束を守らねばならないようなことになつたとしても、その場合でさえ私たちの前にはどんなに危険があつたろう！ 彼の手下の者たちの疑念が確実なものとなつて、彼と私とが命がけで戦わなければならなくなつた時には、——彼は不具で、私は子供、——

―相手は五人の倔強で敏捷な水夫たちだから、――どんなことになるだろう！

こういう二重の懸念にかたて加えて、味方の人たちの振舞にもまだどうしても解けぬ謎があつた。柵壁から出て行つたことも説明がつかないし、海図を譲つたことも合点がゆかぬし、さらに一層わからないのは、先生がシルヴァーに「宝を見つけた時には用心をしろよ。」と最後に警告したことだつた。で、どんなに私が朝飯の味も碌々わからなかつたか、どんなに不安な心を抱いて海賊どもの後について宝を捜しに出発したかということは、諸君にも容易にわかるだろう。

だれか見る人がいたら、私たちはずいぶん珍妙な様子に見えた

ろう。みんなよごれた水夫服を着て、私を除く他はみんな十分に武装していた。シルヴァーは、腰に大きな彎刀カトラスを佩おび、四角い裾の上衣の一つ一つのポケットにピストルを一挺ずつ入れている他に、他に二挺の鉄砲を——一挺は前に一挺は後に——吊り下げていた。その上にも彼の奇妙な風体ふうていを完全にするために、フリント船長が彼の肩に棲つて意味もない船乗の言葉をいろいろでたらめにべちやべちやしやべり散らしていた。私は腰に綱を巻かれて、船の料理番コックの後に従順あについて行つた。彼はその綱の括りつけてない方の端を、時には空いている方の手で持ち、時には強い歯で啣くわえていた。どう見ても、私はまるで踊り熊という恰好かっこうでひっぱられているのであつた。

他の人々はいろいろな荷物を背負っていた。或る者は鶴つるはし嘴や

シヤヴェル——それがヒスパニオーラ号から彼等が陸へ持つて来た物の中で一番必要な物だったのだから——を持ち、また或る者は昼食の用意に豚肉やパンやブランデーを背負った。こういう食糧が皆もとは味方の貯蔵物であつたのを私は見て取った。それでシルヴァーが前晩言つた言葉のほんとうであることがわかつた。もし彼が医師と契約を取極めなかつたならば、彼と謀叛人たちとは、船に逃げられたのだから、ただ清水を飲み、狩猟をしてその獲物を食べて、命を繋ぐより他はなかつたに違いない。ところが、水はあまり彼等の口に合はないのだし、船乗というものは大抵射撃がうまくない。おまけに、食物がそんなに欠乏している時には、

火薬がどつさりあるということはありそうにもなかったのだ。

さて、このように支度して、私たち一同は——確かに日蔭に
なければならぬ例の頭を割った奴までも——出立し、一人一人と
ばらばらに浜の方へ行つて、あの二艘の快艇ギツゲのある処へ来た。こ
の快艇までが海賊どもの酔つて馬鹿騒ぎをした痕を留めていて、
一艘は腰掛梁こしかけばりが一つ壊れており、二艘とも泥だらけで湊あかもかい
出してなかった。安全のために二艘とも持つて行くことになった。
そこで、人数を二つに分けて、碇泊所の水面に乗り出した。

漕いでゆく間に、海図のことで多少議論が起つた。例の赤い十
字記号は、無論、指標としては余りに甚しく大き過ぎたし、それ
に、裏面の備考の文句も、次に掲げるように、幾分曖昧なところ

があつた。それは、読者も思い出されるであろうが、こう書いてあつたのである。――

「北北東より一ポイント北に位して、遠眼鏡の肩、高い木。

骸骨島東南東微東。

十フィート。」

だから、高い木が主な目標おもなのであつた。今、私たちの真正面では、碇泊所は二百フィートから三百フィートまでの高さの高原で画られていて、その北は遠眼鏡山スバイグラーズの傾斜した南の肩に接し、南の方へ向つてはまた隆起して、後ミズンマスト檣山マストと言われているごつこ

つした嶮^{けんそ}岨な高地になっていた。この高原の頂には異つた高さの松の樹がたくさん生えていた。ここかしこに、違つた種数の松の樹が附近の樹々よりも正味四五十フィートも高く聳えているので、その中のどれがフrint船長のさした「高い木」であるかということとは、その場所へ行つて、羅針儀の示度で定めるより他はないのであつた。

しかし、そういう訳ではあつたけれども、ボートに乗っている連中はだれも彼も、まだ半分も海を渡らない先から、もう自分の好きな木を択り出していた。のつぽのジョンだけは肩をすくめて（註八二）彼等にそこへ行くまで待つておれと言つた。

私たちは、シルヴァーの指図で、腕をあまり早く疲らせないよ

うにと、ゆつくりと漕いだ。そしてずいぶん長い間舟に乗ってから、第二の川——遠眼鏡山の森の割目を流れ下っている川——の口に上陸した。そこから、左へ曲つて、高原の方へ傾斜地を登り始めた。

初めのうちは、ねとねとした泥深い地面と、こんがらかっている沼地の植物とのために、進むのがなかなか捗らなかつた。けれども、だんだんと山は嶮^{けわ}しくなりかけ、足の下も石がちになって来て、樹木もその性質が変り、もつと間が開けて生えているようになつて来た。実際、私たちが今近づいているのは島でも非常に気持のよい処であつた。^{かおり}香の強い金雀花^{えにしだ}や、花の咲いている多くの灌木が、ほとんど草に取つて代つていた。緑色の肉豆蔻^{にくずく}の木の

茂みが、赤い幹をして広い影をつくっている松の樹と共に、ここかしこに散在していた。そして肉豆蔻の芳香は松の樹の香氣とまじっていた。その上に、空気は澄んでいてすがしく、強い日光の中では、このことは素晴しく爽快に感じられた。

一行は扇の形に広く拡がって、大声をあげたりあちこちに跳んだりして進んだ。その真中あたりに、他の者たちとは大分後れて、シルヴァーと私とがついてゆき、——私は例の綱に繋がれ、彼は滑り易い砂礫の上をひどくはあはあ喘ぎながら登っていた。実際、時々私は彼に手を貸してやらねばならなかった。でなければ彼は足を踏み外して山を転げ落ちたに違いない。

こうして半マイルばかり進んで、高原の頂上に近づいていた時

に、一番左の方にいた男が、おじけたように大声で喚き出した。続けざまに幾度も叫び声を立てたので、他の者もその男の方向へ走り出した。

「宝をめつけたはずあねえよ。」とモーガン爺が、右の方から私たちのそばを急いで通り過ぎながら、言った。「あれあずつとてつぺんにあるんだからな。」

実際、私たちもその場所へ行ってみると、それはまったく違つたものだつた。かなり大きな一本の松の樹の根もとに、緑の蔓草に絡まつて、その蔓草は小さい骨を幾分か持ち上げてさえたが、人間の骸骨が、衣服の屑片と共に、地面の上にあつたのである。だれも彼もちよつとの間はぞつとしたと私は思う。

「こいつは船乗だったんだぜ。」とジョージ・メリーが言った。彼は、他の者よりは大胆だったので、骸骨のずっと近くへ行つていて、衣服の檻^{ぼろ}樓を調べていたのだ。「ともかく、これあ船乗の服だ。」

「そうともさ、そりや多分そうだろうとも。」とシルヴァーが言つた。「こんな処^{ところ}に僧正さまめつかるめえからな。だが、この骸骨の寝方はどうだい？　これあ自然じやあねえな。」

実際、もう一度見直すと、その死体が自然の姿勢になっていると想像するのは不可能であるように思われた。多少乱れている（それは、多分、鳥がその死体を啄んだためになったのか、あるいはだんだんと遺骸を取巻いて来た蔓草が徐々に生い茂つたため

になったのであろう)のを別にすれば、その男は完全にまっすぐに横つていて、――両足は一つの方角を指し、両手は、水へ跳び込む人の手のように頭の上へ伸ばして、ちやうどその反対の方角を指しているのであつた。

「俺のぼけた馬鹿頭にも一つ考えついたことがあるよ。」とシルヴァーが言った。「ここに羅針儀がある。あすこに骸^{スケリトン}骨島のてつぺんが齒みてえに突き出てる。ちよいと方位を取つてみてくれろ、その骸骨の向いている方のな。」

それをやってみた。死体はまっすぐに島の方向を指していたし、羅針儀は正しく東南東微東を指示した。

「そうだろうと思つてた。」と料理番が叫んだ。「これあ指針だ

よ。この線をまっすぐに行くと北極星と結構なお宝があるって寸法さ。だが、畜生！ フリントのことを思うと身内がぞくぞくするぞ。これも奴さんの洒落に違えねえ。奴さんやつことあの六人の奴だけがここへ来て、奴さんが其奴らを一人残らず殺しちまった。それからこいつ一人だけをここへひっぱって来て、羅針儀に合せて寝かしたんだよ、あん畜生！ こいつあ骨が長えし、髪の毛が黄ろいな。そうだ、これあアラダイスだろう。お前はアラダイスを覚えてるだろ、トム・モーガン？」

「ああ、ああ、覚えてるよ。」とモーガンが答えた。「あいつあおいらに借金があつたんだよ、そうなんだ。それにここへ上陸する時にやおいらのナイフを持って行きやがったぜ。」

「ナイフって言やあ、どうして奴のナイフがここらにころがつていねえんだろな？」と別の男が言った。「フリントは水夫のポケットから物を抜き取るような人間じゃなかったし、鳥だつてあんなものは持つて行くめえがなあ。」

「違えねえ、そりやほんとだ！」とシルヴァーが叫んだ。

「ここにや何一つ残つてやしねえ。」とメリーがまだ骸骨の中を探りながら言った。「銅貨一枚なけりや煙草入れ一つもねえや。」

これあどうも当り前あためえじゃねえと思うな。」

「うん、確かに、そうだ。」とシルヴァーが同意した。「当り前でもなけりや、有難くもねえ、つてところさ。いやどうも驚くねえ！ 兄弟。だが、もしフリントが生きてたら、ここはお前たち

にも己にもよくねえ処だったろうぜ。あいつらも六人だったが、己たちも六人だ。そしてあいつらは今骸骨になつてゐるんだからな。
。」

「おいらはあの人の死んだのをこの眼で見たんだ。」とモーガンが言った。「ビリーの奴がおいらをつれて入つたんさ。^{へえ}すると、あの人はもう死んで眼の上に銅貨をのつけていたよ。」

「死んだとも、——そうさ、確かにあの人は死んじまったよ。」と繃帯をした奴が言った。「だが、もし幽霊つてものが出るとすりゃ、フリントの幽霊は出るだろうて。気の毒に、あの人はよくねえ死に方をしたからな、フリントは！」

「そうさ、その通りだったよ。」と別の者が言った。「あの人は

怒ったり、ラムを持って来いって呶鳴^{どな}ったり、また唄を歌ったりしていた。唄と言やあの人『十五人』ばつかしだったなあ、兄弟。で、ほんとのところを言や、己ああれからつてものはあの唄を聞くなあ好きじゃねえんだ。ありやあえらく暑い時で、窓が開^あけっ放しになってたんで、あの唄がとつてもはつきり聞えて来たよ。——でもその時にやもうあの人には死の網がかかつてたのさ。」

「おい、おい、」とシルヴァーが言った。「その話はもうよせよ。奴さんは死んじまったんだし、幽霊になって出て来もしねえよ。少くも昼のうちは出て来はしめえ。そいつは間違えっこなしだ。心配^{しんぺえ}は身の毒さ。さあ、ダブルーン金貨を探しに前進だ。」

私たちは出発するにはした。が、太陽がかんかん照ってぎらぎ

らする^{ひるま}昼間であつたにも拘らず、海賊どもはもう分れ分れになつて森の中を走つたり喚いたりせずに、互に並んで歩き、息をひそめて話した。あの死んだ海賊の恐しさが皆の心にしみこんでいたのだ。

第三十二章 宝探し——^こ樹の^ま間の声

一つには今の騒ぎで気が滅入つたのと、また一つにはシルヴァーや病気の連中を休息させるために、一行の者全体は、高地の頂上に達するとすぐ、腰を下した。

その高原は西の方へ幾らか傾斜していたので、私たちの休んだ

場所からは、どちら側にも広い展望が見渡せた。前には、樹々の梢の上に、寄^{よせ}波^{なみ}で縁取られている森の岬が見えた。背後には、碇泊所や骸^{スケリトン}骨島が見下せたばかりではなく、東の方に——例^{です}の出洲と東側の低地とをまったく越えて——渺茫たる外海までが見えた。私たちの真上には遠眼鏡山が聳え立って、一本松が点々と生えていたり、絶壁で黒くなっていたりした。聞える物音とては、島のぐるり中から響いて来る遠くの砕け波の音と、叢林の中で鳴く無数の虫の声だけであった。人影^{ひとかげ}一つなく、海上には帆^ほ影^{かげ}一つない。眺望の広大さまでがその寂寥^{しお}の感じを一入増した。

シルヴァーは、腰を下すと、彼の羅針儀で方位を取った。

「骸骨島から一直線のあたりには、『高い木』は三本ある。」と

彼は言った。「『遠眼鏡の肩』ってのは、あそこの少し低くなつた処とこのことだろうと思うな。もう金かねをめつけるなあ造作のねえ事さ。先に腹を拵とえてえような氣もするな。」

「おいらは腹が空すいてやしねえ。」とモーガンが唸うるように言つた。「フリントのことを思つたんで空かねえんだろう——と思うんだ。」

「ああ、でも、お前、お前はあの男の死んでるのを有難えと思え。」とシルヴァーが言つた。

「あの男は人相の悪い奴だったな。」と別の海賊が身震いしながら叫んだ。「おまけに、顔が青くつてね。」

「あれやあラムのためになつたんだよ。」とメリーが言い足した。

「青い！ うむ、青かったねえ。それあほんとの言葉だよ。」

あの骸骨を見つけてこんなことばかりを考えるようになってからは、彼等はだんだんと低い声で口を利くようになり、今ではほとんど囁き声くらいになっていたので、彼等の話し声は森の静寂をほとんど破らなかつた。と、突然、私たちの前面の樹立の真中から、力のない、高い、震え声で、^{ふし}節も文句もよく知っているあの唄を歌い始めるのが聞えて来た。――

「死人箱^{しびとのはこ}にやあ十五人――

よいこらさあ、それからラムが^{ひとびん}一罎と！」

この時の海賊どものようにひどくびつくりした人たちを私は一度も見ることがない。魔法をかけられたように六人の者は顔色を失ってしまった。跳び上る者もいたし、他の者にしがみつく者もいた。モーガンは地面にへたばった。

「ありやフリントだ、違え——！」とメリーが叫んだ。

その唄は始まった時のように突然止んだ。——だれかが歌い手の口に手をあてたかのように、歌の半ばで急に中絶した、とでもいう風であった。緑の梢の間から日光で輝いている澄んだ大気の中をずっと遠く流れて来たので、私にはその唄は軽やかに心地よく聞えた。だから他の連中がそんなに恐しがっているのは不思議であつた。

「おい、」とシルヴァーは、灰色になった唇で言葉を出そうと努めながら、言つた。「こいつあいけねえ。出かける用意をしろ。これあどうも変なこつた。己にはあの声はだれだかわからねえ。だが、あれあだれかが悪戯わるさをしてるんだ、——だれか正体のある人間がだ、それにや違えねえ。」

こう言っているうちに彼は勇氣を取戻し、それと共に顔色も幾分ついて来た。すでに他の者たちも彼の励ます言葉に耳を藉しかけて、少し正気に返っていたが、その時、また同じ声が聞え出した。——今度は唄ではなくて、微かな遠くからの呼び声で、それが遠眼鏡山の谷間にもつと微かにこだました。

「ダービー・マグロー、」とその声は哀哭する——それがその声

を最もよく言い現す言葉であつた——ように言つた。「ダービー・マグロー！　ダービー・マグロー！」と幾度も幾度も繰返し、それから少し声を高めて、ここには書かない罵り言葉と共に、
「ラムを船尾へ持つて来おい、ダービー！」と言つた。

海賊どもは地面に根が生えたように立ち竦み、眼玉が顔から跳び出そうであつた。その声が消えてしまつて永くたつても、彼等はなおも無言のまま恐しそうに前を見つめていた。

「もう確かだぜ！」と一人が喘ぐように言つた。「帰^{けえ}ろうよ。」

「あれああの人の死ぬ時の言葉だつた。」とモーガンが呻くように言つた。「あの人がこの世で一番おしめえに言つた言葉だ。」

ディックは自分の聖書を取り出して、ぺらぺらと祈禱した。彼

は、船乗になつて悪い仲間に入る前には、よい育ちであつたのだ。

それでも、シルヴァーは参らなかつた。齒をがちがち鳴らしているのが私には聞えたが、しかし彼はまだ降参していなかつた。

「この島にやダービーのことを聞いた奴はだれもいねえはずだ。

ここにゐる己たちの他^{ほか}には一人だつていねえはずだが。」と彼は

呟いた。それから、強いて元氣を出して、「兄弟、」と叫んだ。

「己はあの金を取りにここへ来たんだ。人間にだつて悪魔にだつて負けやしねえぞ。フrintが生きてる時だつて己は奴がちつとも怖^{こわ}かなかつたんだ。死んでるあいつなんか怖^{こえ}えもんか。ここか

ら四分の一マイルとねえ処に七十万ポンドつて金があるんだ。青^{つら}つ面をした大酒飲みの老いばれ海^{けえいん}員の——それも死んでる奴が

怖えつつて、そういう大金てえきんに尻けつを見せて逃げるなんて分限紳士が、どこの世界にあるけえ？」

しかし彼の手下の者たちが元気を盛り返す様子は一向になかった。実際、むしろ、彼の言葉が死者に対して不遜なのにますます恐しがるようだった。

「止やめろよ、ジョン！」とメリーが言った。「幽霊に逆うなよ。」

その他の者たちに至っては皆すっかり恐しがって返事をすることも出来なかった。彼等はそれだけの勇気があったならてんでに逃げ出したことであろう。だが恐怖のために彼等は互に寄り合い、ジョンの大胆さが自分たちを助けてくれるかのように、彼のすぐ近くにいた。彼の方は、自分の弱気をかなりに抑えつけていた。

「幽霊だと？ うむ、そうかも知れねえ。」と彼は言った。「だが、己には腑に落ちねえことが一つある。山彦^{やまびこ}がしたな。ところで、影のある幽霊なんてだれも見たことがねえ。とすればだ、幽霊に山彦なんかあつてどうするものかね？ そいつは変だろ、確かにな？」

この論拠は私には甚^{はなは}だ薄弱に思われた。しかし何が迷信家の心を動かすかわからぬもので、私の驚いたことには、ジョージ・メリーが大いに安堵した。

「うむ、そりやそうだな。」と彼が言った。「お前は利口だよ、ジョン、確かに。さあ、引返^{ひっけえ}すんだ、兄弟！ 己たちややり口が間違つてると思うよ。考えてみると、なるほど、あれあフリン

トの声みてえだった、やっぱり、あの人の声そっくりじやなかったぜ。あれあだれか他の奴の声に似てたな、——あれああのう

——

「ベン・ガンさ、きつと！」とシルヴァーがどな呶鳴った。

「うん、そうだ。」とモーガンが、膝をついていたのを跳び立ちながら、叫んだ。「ありやベン・ガンだよ！」

「それだってあんまり変りはねえだろ？」とディックが尋ねた。

「ベン・ガンだってここに生きていねえことは、フリントと同じだ。」

しかし年をとった方の海員たちはこの言葉を鼻であしらった。

「なあに、ベン・ガンなんかだれも気にかかけやしねえ。」とメリ

ーが叫んだ。「死んでいようが生きていようが、だれも気にか
やしねえや。」

彼等の元気が恢復し、顔色も普通になって来た様は、驚くべき
ほどであつた。間もなく彼等是一緒にしゃべり出し、時々話をや
めて聞耳を立てた。それつきり何の声も聞えて来なかつたので、
やがて皆は道具を肩に担つて再び出発した。メリーは、骸骨島か
ら一直線に皆を歩かせるために、シルヴァーの羅針儀を持つて先
に歩いて行つた。彼の言つたのはほんとうだつた。死んでいよう
が生きていようが、ベン・ガンのことなどだれも気にはしな
かつた。

デイツクだけはまだ例の聖書を手に持つて、歩きながら恐しそ

うにあたりを見　　していた。しかしだれも彼に同情する者はなく、シルヴァーなどは彼の用心を冷かしさえした。

「己あ言つたろう、」とシルヴァーが言つた。――「お前は聖書を駄目にしたんだつて己あ言つたろう。誓言をするだけの役にも立たなくなつたものを、幽霊が怖がるとでもお前は思つてるのか？　これっぽちの値打もねえぜ！」と彼は、柶杖でちよつと身を支えながら、太い指をぱちつと鳴らした。

しかしデッキは氣が楽になるはずもなかつた。實際、その若者が病氣に罹っているのが間もなく私にははつきりわかつた。暑氣と、疲労と、今の事の衝撃シヨックとで早められて、リヴジー先生の預言した熱病が、明かにずんずんとひどくなつていたのだ。

その頂上は、このあたりでは開けていて気持よく歩けた。前に言つたように高原は西の方へ傾斜しているので、私たちの進む途は少し下り坂になつていた。松の樹の大きいのが小さいのが広く離れて生えていたし「肉豆蔻や躑躅の叢の間でさえ、広く開けた空地が熱い日光に焼けていた。私たちは、島を突つ切つてほとんど北西に進んで行くと、一方では「遠眼鏡山の肩の下にますます近づき、また一方では、私が一度革コラクル舟の中で揺られて震えていたことのあるあの西側の灣がますます広く見渡せた。

そのうちに例の高い木の中の一歩初めの木のところへ着いたので、方位を取つてみると、その木ではないとわかつた。二番目の木もそうだった。三番目の木は一叢むらの下生したばえの上に二百フィート

近くも高く空中に聳え立っていた。巨人のような植物で、赤い幹は小屋ほどの大きさがあり、その周囲の広い樹蔭^{こかげ}では歩兵一箇中队でも演習が出来たろう。これは島の東の海からも西の海からも遠くから目につくし、海図に航海目標として書き入れられていたかも知れないくらいのものであった。

しかし今私の道^{みちづれ}連の者どもの心を動かしたのは、その木の大ききではなかった。それは、その拡がった樹蔭の下のだこかに七十万ポンドの黄金^{かね}が埋めてあるということであつたのだ。彼等が近づくにつれ、金のことを思う心はさつきまでの恐怖を呑みこんでしまった。彼等の眼はぎらぎらと燃えた。足は次第に速く軽くなつた。心は、彼等の一人一人を彼方で待っているあの幸運、一

生涯中贅沢と快樂とをさせてくれるあの財宝に、すっかり夢中になつていた。

シルヴァーは、ぶうぶう言いながら、柶杖についてぴよこぴよこ跳んで行つた。彼の鼻孔は脹れて震えていた。その熱したてらてらした顔に蠅がとまると彼は狂人のように罵つた。私に括りつけてある綱を荒々しくひっぱり、時々は恐しい顔付をして私の方を振り向いた。確かに彼は少しも自分の氣持を隠そうとはしなかつた。そして確かに私はその彼の氣持を印刷物のように読み取つた。こうして黄金のすぐ近くへ来ると、他のことはすべて忘れてしまつていたのだ。彼のした約束も医師から聞いた警告も二つとも過去の事だつたのだ。そして、彼が宝を手に入れ、夜陰に乘じ

てヒスパニオーラ号を見つけ出して乗り込み、この島にいる正直な人々を一人残らず叩き殺して、初めにもくろんでいた通りに、罪惡と財宝とを積み込んで出帆してしまいたいと思っているのだということとは、私には疑うことが出来なかった。

こういう懼れで心が乱れていたのも、宝探しの連中の速い歩調に後れずについて行くのは私には辛^{つら}かった。折々私は躓^{つまず}いた。シルヴァーが綱を荒々しくひっぱったり人殺しのような眼付で私を睨みつけたりしたのは、その時だったのだ。私たちより後れてしまつて、今では殿^{しんがり}となつているデイツクは、熱が上り続けているので、一人でべちやくちやと祈つたり罵つたりしていた。それもまた私のみじめさを増したが、その上、拳句の果に、私は、神を

も敬わぬあの青い顔をした海賊が——唄を歌ったり酒を持って来いと喚いたりしながらサヴァナで死んだという男が——かつてこの高原で手ずから六人の同類を殺したという惨劇のことを思つて、悩まされたのであつた。今はこのように平和なこの森も、その時は悲鳴で鳴り響いたに違いない、と私は思つた。そして、そう思つただけでさえ、その悲鳴がまだ鳴り響いているように思われてならなかつた。

私たちは今や茂みの縁に来た。

「ばんざあい、兄弟、みんな一緒に行くんだぜ！」とメリーが叫んだ。そして先頭にいる者が急に駆け出した。

と、突然、十ヤードと先へ行かないうちに、彼等が立ち止つた

のが私たちに見えた。低い叫び声が起った。シルヴァーは、魔に憑かれた者のように柶杖の足で土をはね跳ばしながら、歩む速さを二倍にした。そして次の瞬間には彼と私もぴたりと停った。

私たちの前には大きな掘った穴があつた。側面が落ち込んでいて、底に草が萌え出ているところからみると、ごく昨今に掘ったものではなかつた。この穴の中には、二つに折れた鶴^{つる}嘴^{はし}の柄^えと、幾つもの荷箱の板が散らかつていた。その板の一つに、海象号^{ウオルラス}という名——フリントの船の名——が、烙鉄で烙印を押してあるのを、私は見た。

すべてが疑う余地のないほど明白であつた。隠してあつた物は見つけられて奪われてしまったのだ。七十万ポンドはなくなつて

しまったのだ！

第三十三章 首魁の没落

この世の中にこれほどの顛倒は決してなかった。その六人の者は銘々まるでぶん殴られでもしたかのようだった。しかし、シルヴァーだけには、その打撃はほとんど直ちに過ぎ去った。それまでは彼は競馬馬のようにあの金のことばかりにひたすら心をはやらせていたのであった。ところが、それがたちまちにしてびたりと止められたのである。そして彼は少しもあわてず、気を取直し、他の者たちがまだ失望を自覚するだけの余裕がないうちに自分の

計画を立て変えてしまった。

「ジム、」と彼が囁いた。「これを持って、面倒の起った時の用意をしていてくれ。」

そして彼は二つの銃身のあるピストルを一挺私に渡してくれた。同時に彼は北の方へ静かに動き出して、数歩行つてその穴を私たち二人と他の五人との間にあるようにした。それから私を見て、「なかなか危いことになったぞ。」と言うかのように頷いてみせたが、実際、私もそうだと思った。彼の顔付は今はずっかり親しそうになっていた。こんな風に絶えず変るのに私も反感を起して、「君はまた寝返りうつたんだね。」と囁かずにはいられなかった。彼にはそれに答えるだけの余裕がなかった。海賊どもが、罵り

喚きながら、相次いで穴の中へ跳び降り始め、板を脇へ投げ出しながら、指で掘り始めたのである。モーガンが金貨を一枚見つけた。彼は罵り言葉を続けざまに吐きながらそれを差し上げた。それは二ギニー金貨で、十五秒ほどの間彼等の手から手へと渡されていた。

「二ギニーだぜ！」とメリーが、それをシルヴァーに振ってみせながら、呶鳴どなった。「これがお前の言う七十万ポンドけえ？ お前は商しょうべえ売のうめえ人間じゃあなかったかね？ お前は今まで

に何一つやり損ねたことのねえ男だと、この唐変木の間拔めが！」「ずんずん掘って見ろよ、手前てめえたち。」とシルヴァーは落着き払って横柄に言った。「豚胡桃ぶたぐるみでも出て来るだろうぜ」きつとな

。
」

「豚胡桃だと！」とメリーは金切声で繰返した。「兄^{きょうでえ}弟、あれを聞いたか？ うん、確かにあの男は何もかもみんな知ってたんだぞ。奴の面^{つら}を見る。ちゃんとあそこに書^けえてあるぜ。」

「へん、メリー。」とシルヴァーが言った。「また船長^{せんちよ}になるつもりか？ 手前は押^{おし}の強^{つえ}え野郎だよ、まったく。」

しかし今度はだれも皆全然メリーの味方をした。彼等は、恐しい眼付をして背後を振り向きながら、穴から這い上りかけた。ただ一つだけ私たちに都合のよさそうなことを私は認めた。彼等は皆シルヴァーと反対の側に上って行ったのである。

こうして、私たちは、一方に二人、もう一方に五人、穴を間に

して立つたが、だれ一人第一撃を始めるだけの勇氣を出す者はなかつた。シルヴァーは身動きもしなかつた。棒杖をついてまつすぐに立つたまま、彼等を見つめて、いつもの通りに自若としてゐるように見えた。確かに、彼は勇敢な男であつた。

とうとう、メリーは口を利いた方がよいと思つたらしかつた。

「兄弟、」と彼が言つた。「奴らはあすこに二人つきりだぞ。一

人は、己たちみんなをここまでつれて来て、己たちをこんなぶざまな目に遭わせやがつた、老いぼれの不具だ。かたわもう一人は、己が

心の臓を抉り出してくれようと思つてゐる餓鬼だ。えぐさあ、兄弟——」

彼は声を張り上げ片腕を振り上げて、明かに突撃の指揮をするつもりだつた。しかしちょうどその時、——ばあん！　ばあん！

ばあん！——と三発の小銃弾が茂みの中から飛んで来た。メリーは真逆さまに穴の中へ転がり落ちた。頭に繃帯をした男は独楽こまのようにくるくるつと　　つてから、横向にばったりと倒れて、その場で死んだが、まだびくびく動いていた。他の三人はくるりと向を変えて一所懸命に逃げ出した。

瞬きする間もないうちに、のつぽのジョンは跪もがいているメリーにピストルの二つの銃身から発射した。そしてメリーが断末魔の苦悶をやりながら彼の方に眼をぐるりと向けると、彼は、「ジョージ、己がお前を往生させてやったのだね。」と言った。

同時に、医師と、グレーと、ベン・ガンとが、肉豆蔻の木の間から、まだ煙の出ている銃を持って私たちのところへ跳んで来た。

「前へ！」と先生が叫んだ。「全速力だ、みんな。奴らとボートの間を断^たたなきやならん。」

それで私たちは非常な速さで駆け出して、時には胸のところまである藪の中も突き抜けて走って行った。

しかしシルヴァーだけは私たちに後れずについて来ようと一所懸命になっていたのだ。その男が胸の筋肉が張り裂けそうなくらいに杵杖について跳びながらやりおおせた業^{わざ}は、普通の健全な体の人間でもとても及ばぬ業であつた。これは先生もそう言つておられる。そういう訳で、私たちが傾斜面の頂上に着いた時には、彼はすでに私たちより三十ヤードくらいの後について、今にも息も止りそうになっていた。

「先生、」と彼は呼びかけた。「あすこを御覧なさい！ 急ぐ
こたありませんぜ！」

確かに、急ぐ必要はなかった。高原のもつと開けた処に、三人の生き残った者たちが、初めに駆け出したと同じ方向に、まっすぐ^{ミズンマスト}に後、檣山の方へ、まだ走っているのが見えた。私たちはすでに彼等とボートとの間にいるのだ。それで、私たち四人は腰を下して息をついたが、その間に、のつぽのジョンが、顔の汗を拭いながら、ゆっくり私たちに追いついて来た。

「どうも有難うございました、先生。」と彼が言った。「あんたは、わつしとホーキンスにとつちや、ちようどいい時に来て下せえましたようで。で、やっぱりお前^{めえ}なんだな、ベン・ガン！」と

言い足した。「うん、お前は確かに面白おもしろえ奴だよ。」

「俺わしはベン・ガンだよ、そうさ。」と島に置去りにされた男は、もじもじして鰻のように体をくねらせながら、答えた。「で、」と彼は大分永く間を置いてから言い足した。「変りはねえかい、シルヴァーさん？　まず達者だよ、有難う、つてとこだろう。」

「ベン、ベン、」とシルヴァーは呟いた。「お前に一杯喰べわされようとはな！」

医師は、謀叛人どもが逃げる時に棄てて行つた鶴嘴つるはしを一挺取りに、グレーを戻らせた。それから、ボートのある処まで私たちがぶらぶらと山を下つて行く間に、先生はそれまでに起つた事を手短に物語ってくれた。その話はシルヴァーが心から興味を持つ

たものであつた。そして薄馬鹿の置去り人^{びと}のベン・ガンが始めから終りまでその主人公なのであつた。

ベンは、島中を永い間ただ一人でさまようている間に、例の骸骨を見つけた。——その所持品を掠奪したのは彼であつたのだ。彼は宝を見つけた。そしてそれを掘り上げた（あの穴の中に折れていたのは彼の鶴嘴の柄であつた）。彼はその宝を背負つて、高い松の樹の根もとから、島の北東隅の二つ峯の山にある洞穴まで、うんざりするほど何度も何度も往復して運び、ヒスパニオーラ号の到着する二箇月前から、宝はそこに安全にしまつてあつたのである。

医師は、あの攻撃のあつた日の午後、この秘密をベン・ガン

から聞き出すと、また、その翌朝、碇泊所に船のいなくなったのを見ると、シルヴァーのところへ出かけて行つて、今ではもう無用のものになった例の海図を彼にやり、——ベン・ガンの洞穴にはガンが自分で塩漬にした山羊の肉が十分に貯えてあるので、シルヴァーに食糧もやり、——柵壁から二つ峯の山まで安全に移る機会を得るために何もかもやつてしまった。その山の方にいれば、マラリヤに罹る恐れもないし、金の番をすることも出来たからである。

「君について言えばね、ジム、」と先生が言った。「私はそうしたくはなかったんだ。だが私は、義務を守っている人たちにとつて一番いいと思ったことを、したのだよ。で、君がその人たちの

中の一人でなかったとすれば、それはだれの咎だとがったろうかね？」

その朝、海賊どもが先生のために怖い失望をすることになった。しているので私がその捲添えを喰うに違いないということに気がつく。先生は洞穴までずっと駆け通しで帰り、船長を護るのに大地主さんだけを残して、グレーと置き去り人をつれて出発し、あの松の樹のそばの近くにいられるようにと、島を対角線に突っ切って進んで行った。けれども、間もなく私たちの方の一行が先に進んでいることがわかったので、足の速いベン・ガンを前に走らせて、一人で彼の出来るだけのことをさせることにした。その時に、彼は昔の船友達の迷信を利用してやろうと思っていた。それが大いにうまく当たったので、グレーと医師もやって来て、宝探し

の連中の到着しないうちにすでに待伏せしていることが出来たのである。

「ああ、」とシルヴァーが言った。「ホーキンスをつれて来たのはわっしにや仕合せでした。さもなけりや、あんたはジョン爺じいをずたずたに切らせて、何とも思いなさらなかったでしょうよ、先生。」

「何とも思わなかったらうて。」とリヴジー先生は機嫌よく答えた。

そしてこの時分には私たちは快艇ギッゲのところへ着いていた。医師は鶴嘴つるはしでその中の一艘を打ち壊し、それから私たちみんなはもう一艘の方に乗り込んで、北浦をさして海路で　　って行こうと出

発した。

それは八九マイルの航行であつた。シルヴァーは、もうほとんど死にそうなくらいに疲れていたけれども、私たち他の者と同様にオールを取らされ、舟は間もなく穏かな海の上をずんずんと飛ぶように進んだ。間もなく私たちは海峡を通り抜けて、島の南東の角を狙つた。そこは四日前にヒスパニオーラ号を曳綱で曳いて入つた処である。

二つ峯の山のそばを通り過ぎる時に、ベン・ガンの洞穴の黒い入口と、そのそばに銃に凭もたれて立っている人の姿とが見えた。それは大地主さんだつた。私たちはハンケチを打ち振つて万歳を三唱したが、シルヴァーの声もだれにも劣らないほど熱誠にそれに

加わった。

さらに三マイル進み、ちょうど北浦の口を入ったところで、私たちの出会ったのは他^{ほか}ならぬ、ひとりで動いているヒスパニオーラ号だった。この前の満潮で浮き上ったのだ。そしてもし南の碇泊所のようにひどい風があつたり強い潮流があつたりしたならば、船はもう二度と見られないところへ流れて行つてしまつたか、あるいはどこかへ坐礁してどうにも出来なくなつてしまつていたろう。しかし実際は、大檣帆^{メインスル}が破損した以外には、悪くなつたところはほとんどなかった。それで、別の錨をつけて、それを一尋半の水の中へ落した。私たち一同は、ベン・ガンの宝^{たからぐら}蔵に一
番近い地点であるラム入江へと、再び漕いで った。それからグ

レーが一人だけで快艇を漕いでヒスパエオーラ号へ戻り、そこで番をしてその夜を過すことにした。

浜から洞穴の入口までは緩い傾斜をなして上っていた。その頂上で、大地主さんが私たちを出迎えた。私には彼は懇ろに親切にしてくれて、私の脱走したことについては、叱るにも褒めるにも一言も言わなかった。シルヴァーが丁寧なお辞儀をすると、少しむっと赤い顔をした。

「ジョン・シルヴァー、」と彼は言った。「お前は非常な悪党で詐欺師だ、——実に驚くべき詐欺師だよ。私はお前を告訴するなと言われている。だから、しないつもりだ。しかし死んだ人たちが磨石ひきうすのようにお前の頸くびにぶら下っているのだぞ（註八三）。」

「どうも有難うござえます、はい。」とのつぽのジョンは、またお辞儀をしながら、答えた。

「私に有難うなんてよくも言えたもんだ！」と大地主さんが叫んだ。「私としては自分の義務を非常に怠ることになるんだ。退いていろ。」

それから私たちはみんなは洞穴へ入った。そこは広い風通しのよい場所で小さな泉と清水の水溜りがあり、その上には羊歯しだが蔽いかかっていた。床は砂地ゆかであった。大きな焚火の前に、スモレッツト船長が寝ていた。そして、遠くの方の隅には、大きな山のような貨幣と、四辺形に積み上げられた黄金の棒とが、焚火の焰にただぼんやりとちらちら光っているのが見えた。それが、私たちが

手に入れようとして遙々やって来た、そしてまたヒスパニオーラ号からすでに十七人の生命を失わせた、フリントの宝なのであった。それを集めるために、どれだけ多くの血が流され悲しみが味われたか、どれだけの立派な船が海^{うなばら}原で船底に孔をあけて沈められたか、どれだけの勇敢な人々が眼隠しされて船側の板を歩かせられて海に落ちたか、どれだけの大砲の弾丸が撃たれたか、どれだけの恥辱と虚偽と残虐とが行われたか、恐らく、生きている人間でそれを語り得る者は一人もなかったろう。だが、それらの罪惡にそれぞれ^{あずか}与り、またそれぞれその報酬に与^{あずか}ろうと望んでその甲斐^{かい}のなかった人間が、その島にまだ三人いたのであった。

——シルヴァーと、年寄のモーガンと、ベン・ガンとだ。

「来給え、ジム。」と船長が言った。「君は君の縄張ではいい子供だよ、ジム。だが君と私とがもう一度一緒に航海に出ようとは私は思わんな。君は生れつきあまり人気者なので私には手に負えんよ。そこにいるのはお前だな、ジョン・シルヴァー？　おい、何しにここへ来たのだ？」

「わっしの義務をやりに戻って来ましたんで、はい。」とシルヴァーが答えた。

「ふむ！」と船長が言った。そしてそれっきり何も言わなかった。その夜私が味方の人たちに囲まれて食べた晚餐の何と楽しかったことか。また、ベン・ガンの塩漬の山羊の肉や、ヒスパニオーラ号から持って来た幾つかの珍味や一ひとびん罎への年経た葡萄酒で、そ

の食事の何とおいしかったことか。確かに、それ以上に楽しげな幸福な人々はまたとなかったに違いない。そして、そこにはシルヴァーもいて、ほとんど焚火の光の届かない後の方に坐っていたが、しかしうまそうに食べ、何でも用のある時にはすぐに前へ跳んで来るし、私たちの笑う時にはおとなしく声を立ててそれに加わりさえした。——まったく、航海に出かけて来た時と同じあの柔和な、慇懃な、従順な船員であつた。

第三十四章　それから結末

その翌朝、私たちは早くから働き始めた。この恐しくたくさん

の黄金を浜まで陸路で一マイル近く運搬し、そこからボートでヒスパニオーラ号まで三マイル運搬するのは、そのような小人数の働き手にはずいぶんの仕事であつたからである。まだ島をうろついている三人の奴は、大して私たちに面倒をかけなかつた。山の肩のところに歩哨を一人だけ立たせておけばいかに不意に襲つて来ても十分大丈夫だつたし、その上、彼等は戦闘にはもう十二分に懲々こりこりしていると私たちは思つたのだ。

だから作業はどしどし進められた。グレーとベン・ガンとはボートで往復し、彼等の行っている間にその他の者は浜に宝を積み上げた。綱の端にぶら下げた二本の金の棒は、大人一人に十分な荷で、——それを持つてのろのろと歩けるくらいのものだつた。

私は、運ぶのには大して役に立たないので、一日中洞穴の中にいて、せつせと金貨をパン囊の中に詰め込んでいた。

それは実に珍しい蒐集物^{コレクシヨン}だった。いろいろな貨幣のある点ではビリー・ボーンズの箱の中にあつた金^{かね}と同じであつたが、それよりはずっとたくさんでもありずっと種々雑多でもあつたので、私にはそれを種類分けするのがこの上もなく面白かつた。イギリスや、フランスや、スペインや、ポルトガルなどの貨幣があり、ジョージ金貨や、ルイ金貨もあれば、ダブルーン金貨、ダブル・ギニー金貨、モイドー金貨、セクイン金貨（註八四）もあり、過去百年間のヨーロッパのあらゆる国王の肖像を刻した貨幣があるかと思うと、糸の束か蜘蛛の巣のように見えるものを押刻した珍

奇な東洋の貨幣もあり、丸い貨幣に四角い貨幣、それから頸にか
けでもするかのように真中に孔を穿った貨幣まであつて、——世
界中のほとんどあらゆる種類の金^{かね}がこの蒐集物の中にあつたに違
いなしと思う。数はと言えば、確かに秋の木の葉^このようにあつた
ので、私の背中は屈んでいるために痛くなり、指はそれを折り分
けるのでずきずきしたくらいであつた。

次の日もまた次の日もこの作業が続いた。毎日夕方になると一
財産が船に積み込まれるのだが、しかし次の一財産が翌朝を待つ
ているのだつた。そして、この間中、私たちはあの三人の生き残
っている謀叛人の消息を少しも聞かなかつた。

とうとう、——三日目の晩だつたと思うが、——先生と私とが、

島の低地を見下せる山の肩のところをぶらぶら歩いていると、その時、下の真暗な闇の中から、叫んでいるようでもあり歌っているようでもある声が風に運ばれて来た。私たちの耳に届いたのはほんの少しで、その後はすぐ元の静寂に返った。

「可哀そうにな。あれあ謀叛人どもだよ！」と先生が言った。

「みんな酔っ払っててるんで。」とシルヴァーの声が私たちの背後からした。

シルヴァーは全然自由を許されていたと言ってもよく、また、毎日剣もほろろの扱いを受けていたにも拘らず、自分ではもう一度すっかり特権を与えられた親しい従者になったつもりでいるようだった。実際、彼がそういう馬鹿にされた待遇を实によく忍ん

で、絶えず飽くまでも慇懃にみんなに取入ろうと努めていたことは、非常なものであつた。それでも、だれも彼を犬以上にはあしらわなかつたと思う。そうでないのは、ベン・ガンか、私くらいのもので、ベン・ガンは昔のクオータマスター按針手をやはりひどく恐れていたのだし、私は事実彼に感謝すべきことがあつたのだ。もつとも、実際、私には他のだれよりも彼を悪く思つてもいい理由もあつたように思う。というのは、彼があの高原で新たな裏切りを企たくらんでいるのを見ていたからであるが。そういう次第で、医師が彼に答えたのはかなり素気なかつた。

「酔つ払っているかうわごと譫語を言っているかだ。」と先生が言つた。「仰しやる通りでござえますよ。」とシルヴァーが答えた。「そ

して、どっちだつてちつとも構やしません、あんたにもわつしにも。」

「お前は自分を慈悲深い人間だと言つてくれとは言うまいな。」と先生は冷笑しながら答えた。

「で、私の氣持を聞いたらお前は驚くかも知れんよ、シルヴァー君。だがもし彼等が確かに譫語を言っているものとわかればだ、——あの中の少くとも一人が熱病に罹っていることはまず確かなんだからな、——私はこの野營地から出て行つて、自分の体にはどんな危険を冒そうとも、自分の医術の助けをあの連中に藉^かしてやらねばならん。」

「失礼ですが、あんた、そりやあいけませんよ。」とシルヴァー

は言つた。「あんたの御大切ごてえせつな命がなくなりますからね。違えありませんぜ。あつしは今じゃすつかりあんたの側についてるんです。だから味方の人を減らせたかありません。あんたはもちろんのことです。あんたにや御恩を受けていますからね。だがあそこの下にいる奴らと来ちやあ、約束を守るような奴じゃござえません、——そうですね、守りてえと思つたつて守れねえ奴らでさあ。おまけに、あんたが約束を守るつてことも、奴らにや信じられねえんですから。」

「うん、そうだろう。」と先生が言つた。「お前は約束を守る人間だよ。それは私たちも知つてるさ。」

さて、それがその三人の海賊について私たちの得たほとんど最

後の消息であつた。ただ一度だけ私たちはずっと遠くで一発の銃声を聞き、彼等が猟をしているのだらうと推測した。会議が開かれて、彼等を島に棄てて行かねばならぬということにきまつた。

——これにはベン・ガンが非常に喜んだし、グレーが大いに賛成したということは、言っておかねばならない。私たちは、かなり多くの火薬と弾丸と、塩漬の山羊の肉の大部分と、数種の薬と、他の幾つかの必要品と、道具類と、衣類と、一枚の余分の帆と、一二尋の綱と、それから医師の特別の希望で煙草の立派な贈物とを、残しておいてやつた。

それがほとんどその島での私たちの最後の行為であつた。それ以前に、私たちは宝を船に積み込んでしまい、何かの難儀のあつ

た場合の用意にと十分の水と山羊の肉の残りとを運び入れておいたのだ。そしてついに、或る朝、私たちは、自分たちに思うままに出来るのはほとんどそれだけだったが、錨を揚げ、かつて船長が防柵で掲げてその下で戦ったあの国旗を翻しながら、北浦を出帆した。

間もなく私たちにわかったことだが、例の三人の奴は私たちの思ったよりも近くで私たちを見ていたに違いない。というのは、瀬戸を抜け出る時には、船は南の岬のごく近くを進まなければならなかったが、その岬の砂の出洲に彼等が三人とも一緒に跪いて、哀願するように両腕を挙げているのが見えたからである。彼等をそんなみじめな有様に残してゆくのは、私たちみんなに憐みの心

を起させたと思ふ。けれども私たちはまた暴動の起るような危険を冒すことは出来なかつたし、それに彼等を国へつれて歸つて絞首台に送るのは親切が却つて仇になるようなものであつたろう。医師は彼等に声をかけて、食糧品を残しておいてやったことと、それがどこにあるかということとを知らせてやった。しかし、彼等はやはり私たちの名を呼び続けて、後生ですからお慈悲にこんな処に残して行つて死なせないで下さいと哀訴していた。

とうとう、船がなおその針路を続けて、今では声の届かないところへずんずん進んでいるのを見ると、その中の一人——どの男だつたかわからない——がしゃが噎れた叫び声をあげながら跳び立つて、銃を肩にあてたかと思うと、一発ぶつ放した。その弾丸はシ

ルヴァーの頭上を越え大檣帆メインスルを貫いてぴゅうつと飛んで行つた。

その後は、私たちは舷檣の蔭に隠れていたが、その次に私が顔を出して見た時には彼等はもう出洲から姿を消してしまつていて、その出洲さえも次第に遠ざかつてほとんど見えなくなつていた。それが、とにかく、そのことの終りだつた。そして正午前には、私の何とも言えぬほど嬉しかつたことには、宝島の一番高い岩までが青い水平線の下に没してしまつた。

私たちは人員がひどく足りなかつたので、船中の者はだれも彼も働かなければならなかつた。——ただ船長だけは船尾に敷いた敷マットレス蒲団に横つて命令を下していた。よほど恢復してはいたけれども、まだ安静を要したからである。私たちはスペイン領アメリ

カ（註八五）にある一番近い港に船首を向けた。それは新手の^{あらうて}水夫がなしに帰航するという危険を冒すことは出来なかったからだ。ところが今はまだそれがなかったものだから、方向不定の風が吹いたり疾強風が二度も吹いて来たりして、そこへ着かないうちに私たちは皆へとへとに疲れてしまった。

ちようど日没の頃に、船は陸地に囲まれた実に美しい湾内に投錨した。するとすぐに、海岸から黒人やメキシコ・インド人や混^あ血人^{いのこ}などの一杯に乗っている小舟が周圍に漕ぎ寄せて来て、果物や野菜を売りつけたり、海の中へ小錢を投げて貰って潜って取らせてほしいと言ったりした。そんなにたくさんのにこにこした愛嬌のある顔（ことに黒人）や、熱帯の果物の香味や、とりわけ、

町にともれ始めた灯影は、あの島に滞在していた間の陰惨な血腥い、いろいろな事と対照して、まったく恍惚とさせるほどであった。先生と大地主さんとは、私をつれて、宵の口を陸で過そうと上陸した。ところが、そこで二人はイギリス軍艦の艦長に逢つて、その人と話しこみ、その人の軍艦へ一緒に行き、短く言えば、非常に愉快で時の移るのも忘れてしまったので、私たちがヒスパニオーラ号の舷側^{ふなばた}に帰つて来た時には夜がもう明けかかつていたのであつた。

ベン・ガンがただ一人で甲板にいたが、私たちが船に上るや否や、馬鹿に体を振りながら、私たちに白状をし始めた。シルヴァーが逃げたのだ。数時間前に彼が岸からやって来た小舟に乗つて

逃げ出すのを、その置去り人は見て見ぬ振りをしていたのであった。そして今、彼は、そうしたのはただ私たちの命を救^{いのち}いたかつたためで、もし「あの一本脚の男が船に残つてた」なら、私たちの命はきつとなくなつたらう、と断言した。しかし、それだけではなかつた。料理番^{コック}は空手^{からて}では行かなかつた。彼はだれも気づかない間に隔壁を切り抜いて、多分三四百ギニーくらい入っている貨幣の囊を一つ、これから先の放浪の用意にと、持つて行つたのである。

それくらいの安い金で彼を厄介払いしたことを皆は喜んだと私は思う。

さて、かいつまんで話せば、私たちはその港で数人の船員を雇

い入れて、無事に帰航を続け、ヒスパニオーラ号がブリストルに到着したのは、ちょうどブランドリーさんが伴船の準備をしようと考えかけていた時であつた。出帆した時に乗っていた人々で船と一緒に戻つて来たのは五人だけだつた。まさしく、「残りの奴は酒と悪魔が片附けた」のだ。もつとも、確かに、私たちは、あの悔賊どもの歌つた――

「七十五人で船出をしたが、
生き残つたはただ一人。^{ひとり}」

というその船ほどのひどい目には遭わなかつた訳であるが。

私たちは皆、その宝をたっぷり分けて貰って、銘々の性質に従って、利口にか愚かにか使った。スモレット船長は今では海上生活^やを止めている。グレーは自分の貰った金を貯蓄したばかりではなく、急に立身したいという望みを起して、自分の本職を勉強した。そして今では立派な全帆装船の副船長でその共同所有者の一人になっている。それに結婚もして、子供もある。ベン・ガンはと言うと、彼は千ポンド貰ったのであるが、それを三週間で使い果すか無くするかしてしまった。いや、もっと正確に言えば、十九日間でだ。なぜなら、二十日目にはまた金を貰いにやって来たのだから。それから、彼は、まさしく島で懸念していた通りに、門番にして貰った。今でもやはり生きていて、多少馬鹿にされて

はいるが、村の子供たちに非常に好かれていて、日曜日や聖徒祭日には教会での名うての唱歌者になつてある。

シルヴァーのことは、私たちはあれから消息を聞いたことがない。あの恐しい一本脚の船乗はとうとう私の生涯からすっかり消え失せてしまった。しかし、恐らく彼は黒人の細君にめぐり逢つて、多分まだその細君やフリント船長と一緒に安楽に暮していることだろう。そうであつてほしいものと思う。というのは、あの世では彼の安楽になれる見込はごく少いのだから。

銀の棒と武器（註八六）とは、私にはよくわからぬけれども、多分、フリントの埋めた処にまだあるのだろう。そして確かにそこにあるかどうかだろうが私の構つたことではない。牛と荷馬車

の綱とでひっぱられようとも、私はあの呪われた島へはもう二度と行かないつもりだ。そして今でも私のみる一番の悪夢は、あの島の岸にどどつと打ち寄せている波の音を聞く時か、または、「八銀貨！ 八銀貨！」というフリント船長の鋭い声が耳の中に鳴り響いて、寢床の中でがばと跳び起きる時なのである。

註

〔買うのを躊躇する人に〕

一 キングストンや、……………クーパー。——「キングストン」はウィリヤム・ヘンリー・ジャイルズ・キングストン（一八一四—一八八〇）。「勇者バランタイン」はロバート・マイケル・バランタイン（一八二五—一八九四）。共にイギリスの少年文学の作者である。

「森と波とのクーパー」はアメリカの小説家ジェームズ・フエニモー・クーパー（一七八九—一八五一）を

〔第一篇 老海賊〕

さす。未開拓時代のアメリカ大陸を描いた五部作、及び海洋文学をもつて有名であり、それらの作品は少年の読物としても喜ばれている。二行後の「それらの人や彼等の創造物」とは、これらの作家やその作中人物のことである。前節の「置き去り人」については、本文の第十五章に説明されている。

二 「ベンボー提督屋」。——ジョン・ベンボー（一六五

三—一七〇二）という十七世紀末のイギリスの有名な提督の名を屋号にし、その肖像を看板にしている宿屋

である。なお、この宿屋は居酒屋も兼ねているのである。

三 船員衣類箱。——船員が航海中に衣類その他の所持品

を入れる木製の箱。船の水夫部屋の舷側にぴったり嵌るように、普通は、側が少し傾斜して、底よりも蓋の方が小さくなっている。

四 弁髪が……。——往時の水夫は短い弁髪を下げていた。

五 「死人箱にやあ……。——西インドの海賊のことを歌った唄の最初の二行である。第二行は リフレーション 句になっ

っている。「死人箱」というのは西インド諸島中の

一つの小島の名。海賊船がその死人箱島に乗り上げた時に助かったのは僅か十五人の海賊とラム酒が少しとだけであつたという。それからこの唄句が出ているのであつて、唄句の方は唄の本筋には無関係なのである。第一行を水夫長が歌うと、第二行の唄句を水夫たちが合唱して、「よいこらさあ」の「さあ」に当るところで、力を合せて、錨を捲き揚げる絞盤の梃てこをぐいとし、次にまた水夫長が歌い、合唱がそれに続くのである。

六 駅通馬車。——宿駅と宿駅との間を定期に往復する乗合

馬車。鉄道が出来る前の主要な交通機関であつた。

七 ブリストル。——ブリストルはこの物語の時代にはイギ

リスでの第二の大きな海港であつた。

八 板歩かせ。——舷から海へ突き出した板を眼隠しして歩

かせ、海中へ陥つて溺死させることで、十七八世紀頃に海賊が彼等の捕虜を殺すために用いた方法である。

九 ドウライ・トーテューガズ。——メキシコ湾のフロリダ

半島の南方の海上にある一群の珊瑚礁。

一〇 スペイン海。——住時、南アメリカの北岸のカリブ海に面した地方一帯の海を漠然と指した名称。スペイン本国と当時のスペイン領アメリカとの航路に当り、昔盛んに海賊が出没した。

一一 両手を揉み絞る。——苦しみ、悲しみ、悶えの時などの身振り。

一二 髪粉。——この頃の紳士は仮髪かつらをつけていたので、その仮髪にふりかける粉のこと。

一三 彎刀。——この頃の船乗のよく持っていた、重い、彎曲した刀。

一四 ぶらんこ。——「ぶらんこ往生」、すなわち絞殺、絞刑のこと。

一五 刺 針を取って……。——昔の医術に、刺 と言つて、血管を刺して血を出す療法があつたのである。

一六 黒犬なんぞは……。——英語の「ブラック・ドッグ 黒 犬」と

いう語は「不機嫌」という意味でもあり、「黒犬を背負う」は「不機嫌である」、「機嫌が悪い」ということを意味する。その意味を使った洒落である。

一七 聖書に書いてある……………——新約全書使徒行伝第一

章第二十五節に「すでに、ユダは此つとめを離れて其住くべき処に往きたり。」とある。「聖書に書いてあるあの男」はこのイスカリオテのユダをさし、「往くべき処」は地獄のことである。

一八 サヴァナ。——北アメリカの大西洋岸にある港。今の合衆国のジョージア州にある。

一九 ダブルーン金貨や、……………——「ダブルーン金貨」

は往時のスペインの金貨。「ルイドール金貨」はルイ十三世時代に初めて鑄造されて大革命まで通用していたフランスの金貨。「ギニー金貨」は十七世紀後葉から十九世紀初葉まで流通していたイギリスの金貨。

「八銀貨」は表に8 R（ハレーアルの意味）の字を記してあるスペインの古銀貨である。この物語は冒頭に書いてあるように一七——年代のことであるから、当時はこれらの貨幣が流通していたのであるが、ギニー金貨以外は外国の貨幣であるから、勘定が出来ないのである。

二〇 ジョージ金貨。——当時流通していた聖ジョージの像を

刻したイギリスの貨幣。

二一 嗅塩。——婦人などに用うる鼻で嗅がせる氣附藥。

二二 黒髯。——本名エドワード・テイチ。スペイン海を荒し　　った残忍不敵な有名な海賊。

二三 トウリニダツド。——西インド諸島中の最南の島。スペイン海にある。

二四 スペイン港。——トウリニダツド島の首都。

二五 パーム礁島。——北アメリカのフロリダ半島の西海岸にある島。タムパ港を湾内に有するタムパ湾の入口にある。

二六 カラカス。——南アメリカのヴェネズエラの首府。

二七 とつくの昔に珊瑚に………。——人間が海に沈んで死

ぬと骨が珊瑚になると昔は考えられていたからである。

二八 島の地図。——巻頭の地図参照。なお、第三篇以後にお

いては物語の進行に従い必要に応じてこの地図を屢々参照のこと。

二九 一ポイント。——羅針盤の周囲の三十二分の一。すなわち直角の八分の一の角度。

〔第二篇 船の料理番〕

三〇 スクーター船。——縦帆式帆装の帆船。時には四檣または五檣のものもあるが、普通二檣あるいは三檣である。

帆が縦帆式であることは特に第五篇のために記憶され
ること。

三二 ホーク。——イギリスの有名な提督エドワード・ホーク

(一七〇五—一七八一)のこと。一七四七年と一七五
九年とにフランスの艦隊と戦つて破つたことがある。

三二 水夫らが揚錨絞盤の周りを………歩き　る。——すな

わち、絞盤を　して錨を捲き揚げ、出帆すること。

三三 悪しき者虐遇を息める処。——冥土のこと。旧約全書ヨ

ブ記第三章第十七節に「彼^{かしこ}処にては悪しき者虐遇を息

め、倦み憊れたる者安息^{やすみ}を得。」とある。

三四 杵杖。——跛者などが腋の下にあてて歩くに用うる丁字

形の杖。撞木杖。

三五 三孔滑車。——船で静索や支索を張ったりその他の目的に用いる締索を通す三箇の孔のあいている滑車。円くて、孔が三つついているので、顔を罵って三孔滑車かと言ったのであろう。因に、これらの船乗たちはその会話に頻りに海語を用いている。

三六 船底潜らせ。——長い索でたぐつて一舷から他舷へ、または船首から船尾へ、船底の水を潜り越させる刑罰のこと。往時イギリスやオランダの海軍で一種の懲罰として重罪人に科したものである。

三七 中央刑事裁判所。——ロンドンの往時の有名な裁判所。

三八 ボー街。——一七四九年に建てられたロンドンの有名な

警察裁判所のある街の名。

三九 一クオート。——一ガロンの四分の一。わが六合余。

四〇 封緘命令。——或る時期まで、または船艦などが或る地点に達するまでは、開封すべからざる命令。その時期またはその場所に到つて初めて開封して任務を知るのである。

四一 円材。——船では檣、桁、防材などをいう。

四二 肉焼き台。——大きな肉をのせて焙る鉄製の枠のこと。

料理室で使うものであるから、それを料理番のジョン・シルヴァーの綽名にしたのである。

四三 イングランド船長。——実在した有名な海賊、ネッド・

イングランドのこと。

四四 マダガスカルにも……。——マダガスカル島は往時

インド洋の海賊が根拠地とした島。マラバーはインド
南西の海岸、スリナムはオランダ領ギアナのこと、プ
ロヴィデンスはカリブ海にある島、ポートベローはパ
ナマ地峡の北岸にあった港、いずれも昔海賊に荒され
た土地であつた。

四五 ゴア。——インドの西海岸にあるポルトガルの植民地。

四六 頤を突き出す。——怒った時の態度。

四七 コーリー要塞。——アフリカの黄金海岸にあつたイギリ

スの要塞。

四八 ロバーツ。——海賊バーソロミュー・ロバーツのこと。

最後に軍艦と戦闘して死んだ。

四九 デーヴィス。——海賊ハウエル・デーヴィスのこと。大

胆無類の海賊だったが、部下の一人に殺された。前の
ロバーツはこの男の後継指揮者であつた。

五〇 何百ファージングの代りに何百ポンドと………。——

一ファージングは四分の一ペニーという小額であり、
一ポンドは二十シリング、一シリングは十二ペンスで
あるから、ポンドはファージングの約一千倍近くに当
るのである。

五一 「分限紳士」というのは……………。——海賊は、掏摸や

こそ泥や普通の強盜などを輕蔑して、自分たちを戯れに「分限紳士」と称していたのである。

五二 仕置波止場。——テムズ河のロンドンの披止場にあつた、

海賊どもが鎖で絞殺されて日に曝された仕置場。

五三 キッド船長。——有名な海賊ウィリヤム・キッド。彼は

後にボストンで捕えられてイギリスへ送られ、一七〇一年にロンドンの仕置波止場で絞殺された。

〔第三篇 私の海岸の冒険〕

五四 高潮線。——海浜に残る高潮すなわち満潮の跡。

五五 投錢戲。——小錢を投げて穴の中へ入ったものな取る子

供のやる賭戲。

五六 闘い、殺害、不意の死。——イギリス教会公定祈祷書の

中にある文句である。

〔第四篇 柵壁〕

五七 三点鐘。——船では、定刻を報ずるに、零時半に時鐘を一点打ち、二時に二点打ち、以下半時間毎に一点ずつ加えて打ち、八点に至ると、当直の交代時間となり、また一点に返るのである。故に、四時、八時、十二時が八点鐘の時刻であり、一時半は三点鐘である。

五八 「リリバリアロー」。——一六八六年頃に作られたアイ

ルランドの旧教徒を諷刺嘲笑した政治的歌謡。「リア

ロー、リアロー、リリ・バリアロー」云々という^{リフレ}疊

句があるのである。一六八八年の革命の勃発に与つ^{あずか}

て力があつたと言われ、革命の間及びその後にイング
ランド中で非常に流行し、軍隊や人民に盛んに歌われ
た。

五九 カムバランド公爵。——ジョージ二世の第三子、イギリ

スの將軍であるウイリヤム・オーガスタス（一七二一

——一七六五）。

六〇 フォンテノイ。——あるいはフォントノア。ベルギーの

村。ここで、一七四五年五月十一日、カムバランド公の率いたイギリス、オランダ、オーストリアの聯合軍五万が、フランス軍七万と戦って敗れた。両軍の死傷はすこぶる多大であつたと伝えられている。

六一 詰開き。——航海用語で、帆船が出来るだけ風上に向つて帆を揚げ、風の来る方に近く帆走し上ること。ここでは船長がその語を比喩的に用いたのである。

六二 海賊旗。——黒地に白く頭蓋骨と二つの交叉した大腿骨とを染め抜いた海賊の旗。

六三 半潮。——満潮と干潮との中間。

六四 パルマ・チーズ。——パルマはイタリー北部にある州で、

その地方で製するチーズは古くから有名であつた。

六五 「いぎ、乙女よ、若人よ。」——イギリスの昔の歌謡。

六六 口笛を吹いて風を呼ぶ。——風の時には口笛を吹けば風が吹き出すという船乗の迷信があつたのである。

〔第五篇 私の海の冒険〕

六七 両櫂。——訳語がないので仮にこう訳しておく。両端に水掻の扁平部がある櫂で、舟の左右両側で交々水を掻くのである。

六八 革舟。——木の骨組に獣皮を張つて造つた原始的な小舟。今日でもウェールズ、アイルランド、フランスなどの

河川湖水で漁夫が用いる。ごく軽くて背負つて遊ぶことが出来るのである。

六九 滄。——舟底のたまり水。

七〇 南の方へ。——これは原作者の誤りであろう。「北の方へ」でなければならぬ。

七一 一ジル。——一クオートの八分の一。わが約八勺。一合近くの量。

七二 間切る。——帆船が風上に向つて進む時の言葉で両舷を代る代る風にあてて風上に向つて電光形の航路で進行することをいう。この時は南風だから、北の岬を　　つてそこから北浦まで南の方へ帆走するには、間切らな

ければならないのである。

七三 北東の角。——この「北東」の語は妥当ではない。「北

西」の誤りであるかも知れない。でなければ「北の岬
の北東の角」の意味であろう。

七四 ようそろ。——船の向が現在のままでよしという意味を

舵手に伝へる命令の言葉。

七五 横静索。——檣を左右側方に支持するために檣頭から両

舷へ張つてある静索。

〔第六篇 シルヴァー船長〕

七六 折半直。——船では甲板当直は四時間交代であるが、午

後四時から八時までには折半されて二時間交代に行われる。その間を折半直という。朝には折半直はないのだから、この語は原作者の誤りであろう。

七七 仕立屋が手前たちに相応の商売。——イギリスでは「仕立屋は九人で男一人前」という諺もあつて、仕立屋が男らしからぬ商売として軽蔑されていたのである。

七八 クラウン貨幣。——王冠を刻した貨幣。銀貨で五シリングの価格であるから、相当大的なものである。直径一寸三分くらいもあつた。

七九 「犬および殺人者は外に居るなり」。——聖書の最後の頁にあるヨハネ黙示録第二十二章第十五節の中にある

句。

八〇 諺にもあります通り、食物にありつくのは……………。

——「早起きの鳥は虫を捕える」という諺があるのである。わが国の「早起き三文の得」の意味の諺。

八一 船荷の宰領。——商船の航海中船荷の上に乗^{うわのり}り添うて守

り送る人。上乗^{うわのり}とも言う。

八二 肩をすくめる。——輕蔑、冷淡、不快などの身振り。

八三 死んだ人たちが磨石のように……………。——新約全書マ

タイ伝第十八章第六節の中に「磨石をその頸に懸けられて海の深みに沈められん方……」云々とある句から言ったのである。

八四 ダブル・ギニー金貨、……………。——「ダブル・ギニー

金貨」は四十二シリングに当るイギリスの昔の金貨。

「モイドー金貨はポルトガルの往時の金貨。「セクイン金貨」は昔のヴェニス共和国の金貨。

八五 スペイン領アメリカ。——往時、中央アメリカ及び南アメリカには、現在の諸国の独立する以前に、広大なスペイン領があつた。現今でもそれらの地方ではスペイン語が行われている。

八六 銀の棒と武器と。——第六章「船長の書類」の中にある
地図の裏の文句参照。

青空文庫情報

底本：「宝島」岩波文庫、岩波書店

1935（昭和10）年10月30日初版第1刷発行

1956（昭和31）年6月30日第17刷発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「亦↓また、既に↓すでに、於いて↓おいて、於ける↓おける、甚だ↓はなはだ、以て↓もって、殆ど↓ほとんど、度々↓たびたび、漸く↓ようやく、極く↓ごく、傍↓そば、暫く↓しばらく、

直ぐ↓すぐ、真直↓まっすぐ、何故↓なぜ、殊に↓ことに、更に
↓さらに、尤も↓もつとも、勿論↓もちろん、益々↓ますます、
猶↓なお、早速↓さっそく、遂に↓ついに、此処彼処↓ここかし
こ、彼処↓あそこ、尚↓なお、所謂↓いわゆる、忽ち↓たちまち、
何処↓どこ、彼奴↓あいつ、何時↓いつ、苟も↓いやしくも、悉
く↓ことごとく、如何↓いか、尚更↓なおさら、筈↓はず、誰↓
だれ、頗る↓すこぶる、即ち↓すなわち、咄嗟↓とっさ、全く↓
まったく、著↓着、ハンズ↓ハンズ、乃至↓ないし、謂わば↓い
わば、彼方此方↓あちこち、此奴↓こいつ、駈↓駈、差支え↓さ
しつかえ」

※「燈」と「灯」の使い分けは、底本通りです。

※一部、ルビを補いました。

※入力に際しては、「宝島」新潮文庫（佐々木直次郎・稲沢秀夫
訳）を参考にしました。

入力：kompass

校正：伊藤時也

2009年8月12日作成

2012年2月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

宝島

宝島

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 スティーブンソン Stevenson Robert Louis

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>